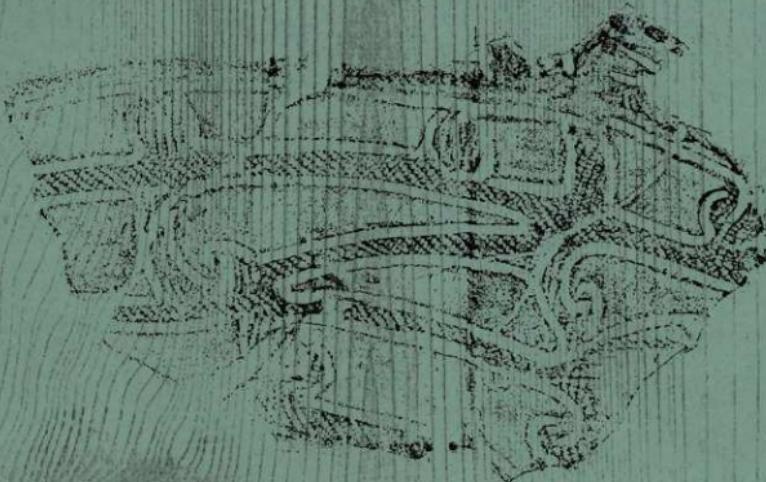


# 暮地遺跡

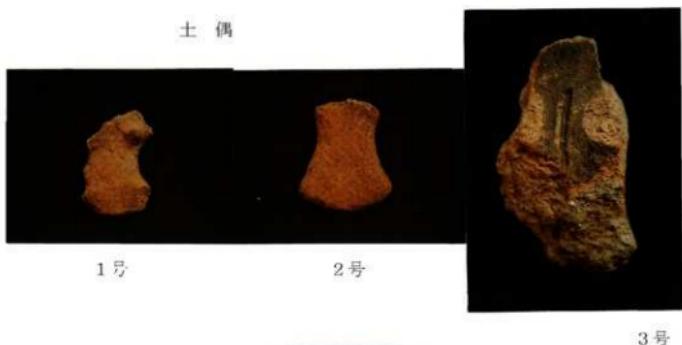


2004年3月

島根県

仁多町教育委員会

土偶



1号

2号

3号



磨消縄文の展開写真 1

(図VII-8 No.62)



磨消繩文の展開写真 2

(図VII-18 No.188)





(図VII-12 No.110)



磨消繩文の展開写真 2

(図VII-19 No.190)





図VII-8  
No.58



図VII-13  
No.119



図VII-14 No.139



図VII-8  
No.73



(目盛り = 1 cm)

赤彩土器の拡大撮影



土偶・耳飾り（拡大・部分）







2次調査区遺物出土状況



2号住居址(炭化木材)



#### ■赤青フィルター眼鏡の使い方■

まず、左目を赤、右目を青のフィルターを通して2色印刷を見ます。眼鏡と本は平行位置を保つようになります。

この本では、印刷インキ、フィルターともに自然光の下での鑑賞を想定して調整してあります。蛍光灯など青味の強い光源の下では十分な立体感が味わえないことがあります。



1号土偶

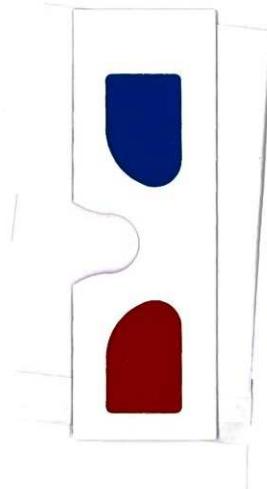
立体写真



2次調査区遺物出土状況



2号住居址(炭化木材)



#### ■赤青フィルター眼鏡の使い方■

まず、左目を赤、右目を青のフィルターを通して2色印刷を見ます。眼鏡と本は平行位置を保つようにすること。

この本では、印刷インキ、フィルターとともに自然光の下での鑑賞を想定して調整しております。蛍光灯など青味の強い光源の下では十分な立体感が味わえないことがあります。



1号土偶

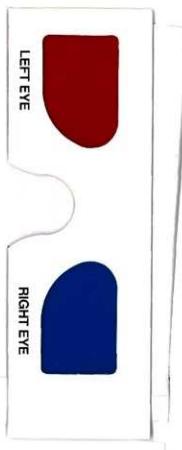
立体写真



2次調査区遺物出土状況



2号住居址(炭化木材)



■赤青フィルター眼鏡の使い方■  
まず、左目を赤、右目を青のフィルターを通して2色印刷を見ます。眼鏡と本は平行位置を保つようにすること。

この本では、印刷インキ、フィルターとともに自然光の下での鑑賞を想定して調整しております。蛍光灯など青味の強い光源の下では十分な立体感が味わえないことがあります。



1号土偶

立体写真

## 序 文

本書は、尾原ダム建設に伴い実施した墓地遺跡の発掘調査記録であります。

墓地遺跡は、昭和55年偶然に縄文時代後期の倒立埋甕2体が発見され、発掘調査により西日本でもまれな埋甕遺構として注目を浴びた場所であります。

今回の調査では川沿いの土器溜まりを中心に5万点にも及ぶ土器、石器類が出上しました。

特に、縄文後期の板状土偶が3体一括発見され、前半の林原遺跡の1体をあわせて町内出土数は県内最多の4体となり、貴重な発見がありました。また、弥生中期の堅穴住居2棟もあり、焼失の状況も確認できました。

このように、墓地遺跡は古來から斐伊川の度重なる洪水の影響を受けながらも長い時代にわたつて生活の場所としてかたちづくられていった遺跡と考えられます。土偶の出土や縄文・弥生土器が物語るように縄文時代から斐伊川流域では広域的交流が行なわれ、奥深い精神文化と信仰に根ざした豊かな生活がこの地奥出雲で花開いていたのではないかと想像されます。

終わりに、本調査にあたり国土交通省斐伊川神門川総合開発工事事務所、島根県埋蔵文化財調査センターをはじめ、関係各位の格別の御理解、御協力を賜りましたこと厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

仁多町教育委員会

教育長 ト 嶽 良 治

## 例　　言

1. 本書は仁多町教育委員会が、国上交通省斐伊川神戸川総合開発工事事務所の委託を受けて実施した、尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果報告である。

2. 本書で扱う遺跡は次の通りである。

仁多町大字三成30-1・31-1・33-1　　暮地遺跡

3. 調査体制は次の通りである。

平成13年度　現地調査

調査主体者　仁多町教育委員会　教育長　石飛　弘（前期）　ト藏良治（後期）

事務局　伊藤敏朗（教育課長）　植田一教（教育課長補佐）

平田昭憲（社会教育主事）

調査員　野津　旭　杉原清一　藤原友子

調査補助員　佐野木信義　藤原信幸　元山貴光　赤名卓大

調査指導　島根県教育庁文化財課　島根県埋蔵文化財調査センター

蓮岡法暉（県文化財審議委員）　山田康弘（鳥根大学法文学部助教授）

調査作業者　青戸延夫　安立一男　伊藤正樹　藤原厚子　山根知雄

社団法人中国建設弘済会（安部ヒサエ　後藤彰子　小村ちえ子）

長谷川トミコ　若月　功　若月亨一）

平成14年度～15年度　（遺物整理・報告書作成）

調査主体者　仁多町教育委員会　教育長　ト藏良治

事務局　14年度：伊藤敏朗（教育課長）　植田一教（教育課長補佐）

平田昭憲（社会教育主事）

15年度：植田一教（教育課長）　川西博司（主任主事）

平田昭憲（社会教育主事）

調査員　野津　旭　杉原清一　藤原友子

調査補助員　佐野木信義　藤原信幸　元山貴光

遺物整理　広野節子　藤原厚子

4. 年代測定は次の方々に依頼し、その結果は本書付録に収録した。（敬称を略す）

考古地磁気年代測定　時枝克安

<sup>14</sup>C年代測定　川野瑛子　柴田せつ子

（大阪府立大学先端科学研究所アイソトープ総合研究センター）

調査指導　島根県教育庁文化財課　島根県埋蔵文化財調査センター

5. 現地調査と報告書作成にあたっては下記の方々から助言と協力をいただいた。(敬称を略す)
- 西尾克己 目次謙一 深田 浩 柳浦俊一(島根県埋蔵文化財調査センター)  
内田工務店(有) 恵田清男 倉内 勝  
社団法人中國建設弘済会(現場担当 金山浩司 事務員 渡部久美子)
6. 揿図中の方位は、国土地図座標系の値を示したほかは、調査時の磁針で示した。なお調査時の磁針方位は西偏約 $7^{\circ}00'$ である。高さは標高で示した。
7. 遺物の実測は調査員と補助員が行い、浄書は藤原友・藤原信が担当した。写真撮影は野津・杉原がそれぞれ行った。遺物図と図版中の個体Noは同じである。
8. 執筆は野津・杉原で分担し、目次と文末に氏名を記した。編集は野津・杉原・藤原友が行つた。遺物図と図版中の個体Noは同じである。
9. 出土遺物や調査図・写真是仁多町教育委員会で保管している。
10. 昭和55年当該遺跡発見に関わる報文を再録し、本書の付録とした。



## 目 次

### 巻頭写真 1 ~ 6

序文	教育長	ト藏良治
例言		
I 調査に至る経緯と経過	(植田)	1
II 位置と環境	(杉原)	3
1. 位置   2. 立地と地形   3. 歴史的環境		
III 調査の概要	(野津)	7
1. 調査方法   2. 遺構・遺物		
IV 土層と堆積について	(杉原)	10
V 上層上中の遺物	(野津)	16
1. 上師器   2. 須恵器   3. 奈良・平安期の特殊遺物		
VI 弥生時代の遺構と遺物	(杉原)	20
1. 概要   2. 遺構   3. 出土遺物   4. 焼失住居の上層使用木材について 5. 小結   6. 1号・2号住居上層復元の試み		
VII 縄文時代の遺構と遺物	(杉原・野津)	35
1. 遺構   2. 土器   3. 石器   4. 特殊遺物   5. 小結		
VIII 考察	(杉原・野津)	114
1. 焼失住居についての検討   2. 縄文土器の“土器溜り”について 3. 土として縄文土器について   4. 縄文の特殊遺物について 5. 縄文遺跡の立地について		
IX むすび	(杉原・野津)	118
付編 I 暮地遺跡（焼失住居跡）より出土木炭の <sup>14</sup> C年代測定	川野瑛子・柴田せつ子	123
II 暮地遺跡 2号住居址の焼上の地磁気年代	時枝克安	126
III 焼失住居跡（SB-II）出土炭化木材の樹種判定	杉原清一	131
IV 土層標本の粒度分析	杉原清一	134
付録 当該遺跡発見に関する報文「仁多・暮地遺跡」（昭和55年）の再録		137

### 挿 図 目 次

区II - 1	調査区と埋葬出土地点	3	-14	"	(8)	.....	51
- 2	斐伊川中・上流域の遺跡(縄文・弥生)	4	15	"	(9)	.....	52
- 3	周辺の遺跡(縄文・弥生)	5	-16	"	(10)	.....	53
図III - 1	地形図	7	-17	縄文後期精製土器	(11)	.....	54
- 2	縄文土器 出土状況	8	図III-18	"	(12)	.....	55
- 3	弥生・土師器片 出土状況	8	-19	"	(13)	.....	56
図III - 4	須恵器片 出土状況	9	-20	"	(14)	.....	58
- 5	石器 出土状況	9	-21	"	(15)	.....	59
IV - 1	遺構略図と上層觀察ライン	10	-22	"	(16)	.....	59
2	上層図	11・12	23	"	(17)	.....	61
- 3	地形模式図	14	-24	"	(18)	.....	61
V - 1	土師質土器	16	-25	"	(19)	.....	62
2	須恵器	17	26	"	(20)	.....	64
3	奈良・平安期の特殊遺物	18	-27	"	(21)	.....	66
VI - 1	1・2号住居址 付近地形図	20	-28	縄文晩期土器	.....	.....	68
- 2	1号住居址 実測図	21	29	縄文粗製土器 (1)	.....	.....	70
- 3	2号住居址 検出状況	23	-30	"	(2)	.....	71
- 4	2号住居址 完掘	24	-31	"	(3)	.....	72
- 5	1号住居址 山上遺物	25	-32	"	(4)	.....	73
- 6	2号住居址 出土遺物	26	-33	"	(5)	.....	74
- 7	その他の弥生土器と石劍	28	-34	"	(6)	.....	75
VII - 1	土器満II遺物散布状況(1次・2次)	36	35	"	(貝殻条成)	.....	75
- 2	土器満II遺物散布状況(3次・4次)	37	36	縄文土器底部	(1)	.....	77
- 3	土器満III遺物散布状況(1次・2次)	38	-37	"	(2)	.....	78
- 4	土器満III遺物散布状況(3次・4次)	39	-38	"	(3)	.....	79
- 5	縄文中期土器(1)	41	39	石 器 (1)	.....	.....	100
- 6	" (2)	42	-40	"	(2)	.....	101
- 7	縄文後期精製土器(1)	44	41	"	(3) 石斧	.....	102
- 8	" (2)	45	-42	"	(4) 石鍬	.....	104
- 9	" (3)	46	-43	打欠き石鍬の分布	.....	.....	105
- 10	" (4)	47	-44	三方欠き石鍬の鋸くくり試案	.....	106	
11	" (5)	48	-45	石 器 (5) 口石・その他の石器	.....	107	
- 12	" (6)	49	-46	" (6) 石皿類	.....	109	
- 13	" (7)	50	-47	縄文時代の特殊遺物	.....	111	

### 表 目 次

表IV 1 上層分	13	表-6 繩文土器觀察表(底部)	95~98
表VII-1 繩文中期土器觀察表	81~82	-7 石器の概要	99
-2 繩文後期精製土器觀察表(中津系)	83~85	-8 石皿類觀察表	108
-3 "	(縄帶文系)	-9 土偶觀察表	110
-4 繩文晚期土器觀察表	90	-10 土器様式一覧表	112
-5 繩文後・晚期土器觀察表	91~94		

### 図 版 目 次

PL 1 調査前全景と土層		PL20 VII-19 繩文後期精製土器	(13)
2 2次調査×		21 -20 "	(14)
3 1号住居址		21 -21 "	(15)
4 2号住居址		22 -22 "	(16)
5 遺物の出土状況		23 -23 "	(17)
6 3次調査×		23 -24 "	(18)
7 作業風景		23 -25 "	(19)
8 復元の試み		24 -26 "	(20)
9 V-1 上飾質土器		25 -27 "	(21)
-2 須恵器		26 -28 繩文晚期土器	
10 -3 奈良・平安期の特殊遺物		27 -29 繩文後・晚期粗製土器 (1)	
11 VI-5 1号住居址 出土遺物		27 -30 "	(2)
-6 2号住居址 出土遺物		28 -31 "	(3)
12 VI-7 その他の弥生遺物と石劍		28 -32 "	(4)
13 VII-5 繩文中期土器 (1)		29 -33 "	(5)
14 -6 " (2)		29 -34 "	(6)
15 -7 繩文後期精製土器 (1)		30 -35 "	(貝殻条痕)
16 8 "	(2)	31 -36 繩文土器底部 (1)	
-9 "	(3)	32 -37 "	(2)
17 -10 "	(4)	33 -38 "	(3)
-11 "	(5)	34 -39 石器 (1)	
18 -12 "	(6)	34 -40 石器 (2)	
-13 "	(7)	35 -41 石器 (3)	
-14 "	(8)	35 -42 石器 (4)	
19 -15 "	(9)	36 -43 石器 (5)	
-16 "	(10)	36 -46 石器 (6)	
20 -17 "	(11)	37 -47 繩文の特殊遺物	
-18 "	(12)		

# I 調査に至る経緯と経過

## 1. いきさつと経過

暮地遺跡は昭和55年に縄文時代後期の埋甕2体が発見され、国道314号沿い山側区域は周知の遺跡として文化財保護地となっていた。このたびの尾原ダム建設に伴う河川改修工事として同遺跡の国道を挟む河岸部分も埋藏文化財の調査確認の対象となり、県において事前調査が行なわれ縄文期から中世にかけての散布地との性格が示された。

こうしたことから仁多町教育委員会は、平成13年度に当該調査区域3,000m<sup>2</sup>の発掘調査を実施することになり、調査地を3分割し西側から調査を始めることとした。

5月7日から現地調査を開始したが、第1次調査区の発掘調査を進める中、川岸に近い箇所において縄文時代後期・晩期の破損した大量の遺物が土器溜まりの状態で発見された。このようにまとまって遺物が発見されたことは本町においてめずらしく8月9日現地説明会を開催した。また、さらなる調査において弥生時代の住居跡が確認され、12月8日二回目の現地説明会を開催した。現地調査は12月21日をもって終了した。

年を越え平成14年早々、取り上げた5万点に及ぶ上器片や石器類の整理に取りかかった。整理作業中、さらに大型の土偶と思われる破片が1点見つかって合計3点となった。また前年に林原遺跡から土偶が出上したこともあり、調査指導会を開催し確認、検討を行なった。

一遺跡からの土偶3体の同時出土は県内初例であり、そのうち1体はこれまでの県内出土十土偶の中で最大級と考えられることなどから2月4日共同記者発表を行なった。

平成14~15年度は、円満寺遺跡の現地発掘調査が予定される中、暮地遺跡の報告書を作成するために厳しい時間調整が予想されたが、精力的な作業により膨大な上器片の整理・復元、資料まとめを行い、地道な作業から多くの新たな発見と成果を報告書に盛り込むことが出来た。

以下経過を列記する。

平成13年4月3日	作業計画打ち合わせ 現地地下見
4月4日	今年度調査区 地形測量(～5日)
5月7日	第一次調査区 調査開始 発掘調査の通知
5月16日	第一次調査区 完掘
5月17日	第二次調査区 重機による表土除去(～23日)
5月28日	第二次調査区 調査開始
8月6日	調査指導会 池淵俊一(島根県教育委員会文化財課) 西尾克己(島根県埋蔵文化財調査センター)
8月9日	現地説明会(午後5時30分～)70名参加

10月 4日	第二次調査区 作業終了
10月 5日	第三次調査区 重機による表土除去(～18日)
10月 15日	第三次調査区 調査開始
12月 8日	現地説明会(午前10時～)30名参加
12月 10日	調査指導会 池淵俊一(島根県教育委員会文化財課) 山田康弘(島根大学法文学部助教授) 是田 敦(島根県埋蔵文化財調査センター)
12月 21日	現地調査終了 弥生住居址 地磁気年代測定 時枝克安(島根大学理工学部教授) 調査指導検討会 年間随時
平成14年 1月 7日	調査成果の整理を始める
1月 28日	調査指導会 山田康弘(島根大学法文学部助教授) 蓮岡法暉(島根県文化財保護審議会委員)
2月 4日	調査区内出土上偶について 共同記者発表
3月 15日	県埋文センター専門研修にて「幕地遺跡の概要」発表(野津調査員)
4月 1日～	整理(内業)調査、報告書作成に取りかかる
6月 14日	調査概報作成 取扱協議
6月 19日	遺跡の取扱いについて(回答)
	調査指導検討会 年間随時
平成15年 4月 1日～	整理(内業)調査、報告書作成継続
平成16年 3月	調査報告書発刊

(横田)

## II 位置と環境

### 1. 位置

墓地遺跡は島根県仁多郡仁多町大字三成の墓地地区に所在し、国士座標第III系のX = -87.950 km、Y = +75.350 km地点が遺跡のほぼ中心に当る。そしてこれは北緯  $35^{\circ} 12' 16''$  東経  $132^{\circ} 39' 40''$  に相当する。

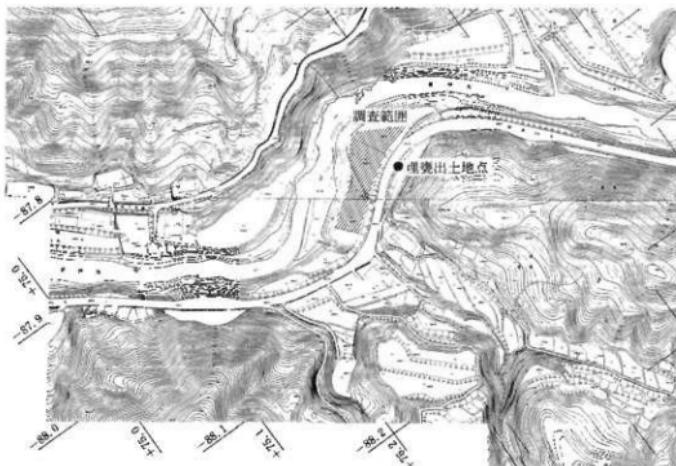


図 II-1 調査区と埋葬出土地点

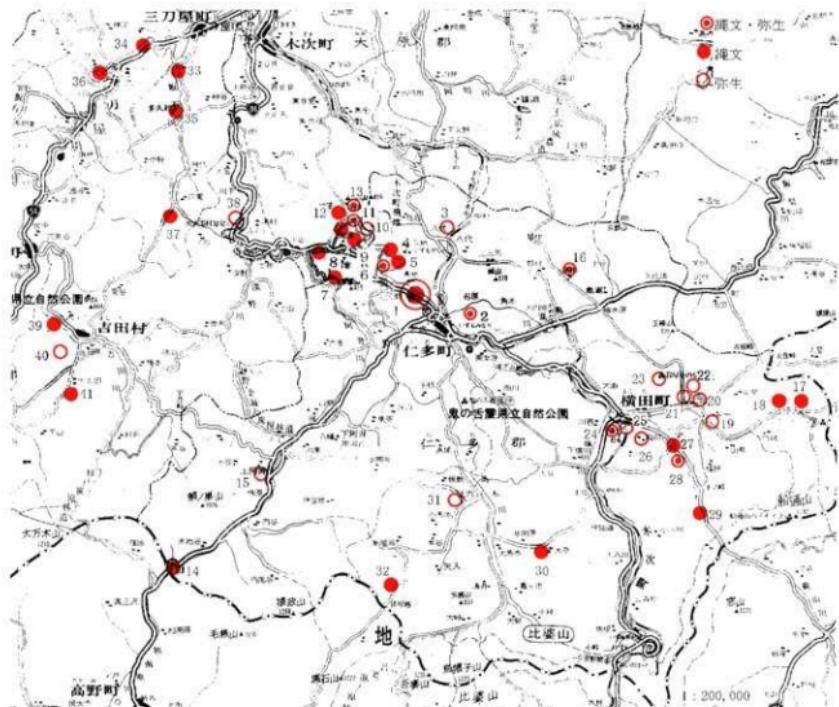
### 2. 立地と地形（図 II-1）

西に向って蛇行しながら流れ下る斐伊川本流の南側河岸に立地していて標高200mである。南方後背は花崗岩質の山塊で、北に向って張り出す尾根が迫り、川を挟んだ北正面は花崗閃綠岩質の独立山（標高349m）の急な山腹となっていて、斐伊川は交差に狭隘な谷地形の両岸を削りながら強く折曲した流れとなっているところである。遺跡はこの流れの平常水位までの落差が約5mで流れの瀬うらに張り出す河段台地で、面積約3000m<sup>2</sup>の水田である。南側には約4m高く尾根端を通る国道314号線が川に沿って通っている。

### 3. 歴史的環境（図 II-2・3）

仁多町・墓地遺跡は斐伊川の川辺にあって縄文・弥生の遺跡である。中国山地奥深くを源とする斐伊川は出雲地方のほぼ中央を北流して出雲市に至り沖積平野を形成している。

この流れの中へ上流域にあたる雲南地方の縄文～弥生時代遺跡を概観すると次のようである。

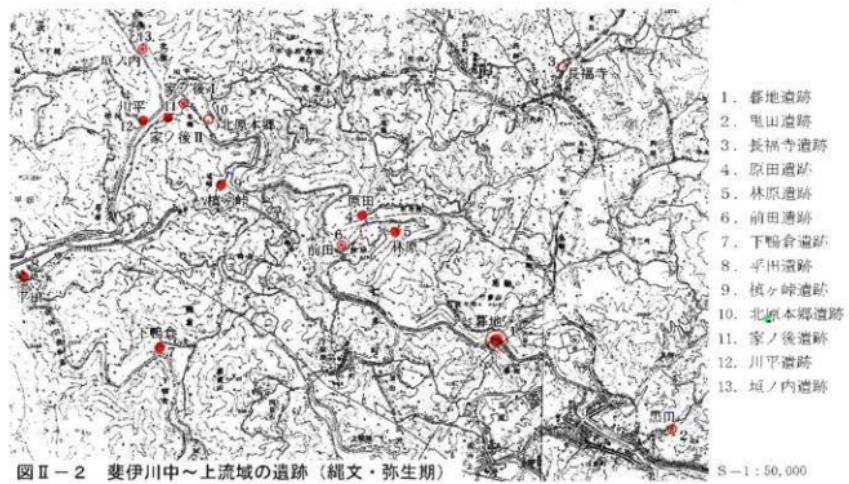


- |          |            |            |            |           |           |
|----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|
| 1. 藤地遺跡  | 8. 平田遺跡    | 15. 上阿井遺跡  | 22. 和田山遺跡  | 29. 竜ノ駒遺跡 | 36. 桐原遺跡  |
| 2. 里田遺跡  | 9. 横ヶ峠遺跡   | 16. 宮ノ前遺跡  | 23. 岩屋寺遺跡  | 30. 曲谷遺跡  | 37. 六重遺跡  |
| 3. 長福寺遺跡 | 10. 北原本郷遺跡 | 17. 小万丈遺跡  | 24. 国竹遺跡   | 31. 竹ヶ鼻遺跡 | 38. 川子遺跡  |
| 4. 原田遺跡  | 11. 家ノ後遺跡  | 18. 竹崎井西遺跡 | 25. 日焼井遺跡  | 32. 大鉢穴遺跡 | 39. 大原遺跡  |
| 5. 林原遺跡  | 12. 川平遺跡   | 19. 鬼神社遺跡  | 26. 横川高校遺跡 | 33. 谷内遺跡  | 40. 志谷遺跡  |
| 6. 前田遺跡  | 13. 坪ノ内遺跡  | 20. 代山遺跡   | 27. 下大仙子遺跡 | 34. 宮内遺跡  | 41. 宮ノ奥遺跡 |
| 7. 下鴨倉遺跡 | 14. 王貴遺跡   | 21. 和田遺跡   | 28. 稲ヶ谷遺跡  | 35. 宮田遺跡  |           |

図 II-2 妻伊川中～上流域の遺跡（縄文・弥生期）

先ず、縄文遺跡についてみると県境近く船通山の麓にあたる横田町竹崎地を中心早期押型文土器片が、古く小万才遺跡以来ヒエガ谷・下大仙子などで点々と採取されていたが、国竹遺跡の調査で住居跡に伴って黄島式を主とする土器片が多量に検出された。これらは山越しで日野川流域のそれとの関係が予想される。

このような状況は神戸川上流の額原町八神地においてもみられるところである。そして近年に至り仁多郡境に近い本次町北原地内でも若干の粗粒押型文土器片が検出された。下鴨倉遺跡で



は遺構は明確ではないが、前期の土器として九州の轟式や曾畠式などが検出されている。

中期土器は山陰の里木式や船元式が下鴨倉遺跡や平田遺跡において以前から知られているが、その拡がりは未だ明らかではない。

後期に入るとその分布はほぼ全域に急拡大する。特に三刀屋町宮田遺跡・頓原町五明田遺跡等とともにこの暮地遺跡などでは縁帶文系土器の集中がみられ、そして宮田と暮地では全く同様な倒立併置埋甕がある。そのほか頓原町角井や吉田村大原・三刀屋町六重・仁多町下鴨倉などでは石棒や線刻穂など祭祀に関わる非日常的具も検出採取されている。また近年、頓原町五明田遺跡・下山遺跡や仁多町林原遺跡では土偶が、木次町楓ヶ峠遺跡では朱塗りの土製耳栓が出土するなど後期縄文時代の精神文化を語る資料が続々と発見されつつある。

晩期に入るとその遺跡と遺物の出土量は急減して低標高地帯の川沿いにわずかに見られるだけとなるようだ。

このように縄文中期以前は概して奥山間～分水嶺付近に分布し、山越しの移入経路が想われるが、後期に入ると主として川沿いに拠点的な遺跡を中心とする拡がりが認められる。しかし晩期に至ると中流域あたりに残るが、奥山間部ではその姿を消してゆくようだ。

弥生時代に入ると、前期に属する遺跡は奥山間地方では希薄となり、専ら海岸部地方に偏って分布する。やがて中期には横田盆地に集中的な分布が知られており、代山遺跡・国竹遺跡や代山地区各所で認められ、圓線文を特徴としている。ここは山越しでの備中からの分銅型土製品もある。銅劍・銅鐸などもわずかながら搬入されたものと思われ、古くから知られる横田八幡宮の銅劍や竹ヶ鼻の石劍があり、斐伊川中流域の木次は“伝木次銅鐸”的出土地と推定されている。こ

のほか神戸川流域では近年調査された頃原町五明田遺跡ほかでは、特に山越しでの備後の塙町様式が指摘された。

後期から古墳時代へかけては川沿いに拓かれた水田地帯の所々において遺跡が拡がり、比高のやや高い台地上などに位置して、複合口縁（二重口縁）を特徴とする山陰の様式である。そして上師器へと推移してゆく。横田盆地の縁辺や仁多町から本次町への斐伊川本流及び支流の河岸丘陵上などがそれである。これらの地点はその後“郷”の中心や拠点となってゆくところでもある。

当該遺跡の近くでは数年前までは遺跡の存在があまり知られていないかったが、この度の尾原ダム建設計画によって川沿いに多くの地点が判明し、漸次調査が進行しつつある。横ヶ峰では朱塗りの耳鉢が、林原の試掘で上偶が発見され、平田では弥生期の鉄器加工が、家ノ後では弥生中期を中心とする集落址が検出され、原田では近世の河川変動を含む縄文期以降各期の遺物が検出されつつある。そしてこの付近についてはさらに今後の展開が予想されている。

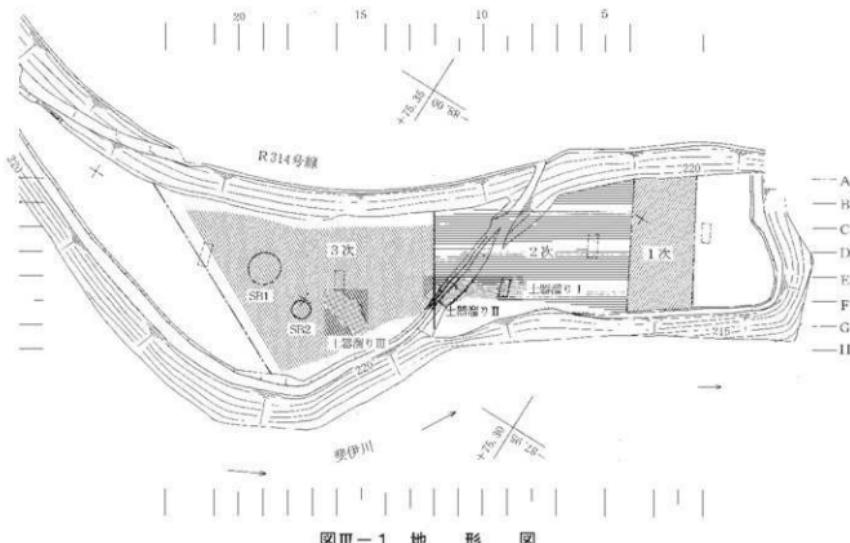
（杉原）

### III 調査の概要

先年島根県埋蔵文化財調査センターの行ったトレンチ調査により要発掘調査地とされたこの地は、西に向かって蛇行しながら流れ下る斐伊川本流の南側河岸で、尾原ダム建設に伴う河川改修にかかる約3000m<sup>2</sup>を調査対象地としたところである。

#### 1. 調査方法（図III-1）

- 1) 調査区に5mメッシュを組み、川に沿う方向を数字で、川に直交する方向をアルファベットで表記する。以後、区の名称は区の南西杭をもってその区の名称とする。
- 2) 調査区全域を貫くように川に沿う方向でトレンチ（Dライン）をいれ、土層を確認した。
- 3) 作業工程、排土処理を勘案し、西から1～3区を第1次調査区、4～11区を第2次調査区、12～21区を第3次調査区とし、漸次、発掘調査を進めた。



図III-1 地形図

#### 2. 遺構・遺物

- 1) 第1次調査区では流入土中に須恵器・土師器等の細片が少量含まれていた。
- 2) 第2次調査区では縄文時代後期を中心とする土器窯（8E～12E区）2箇所を検出。
- 3) 第3次調査区では同じく縄文時代後期を中心とする土器窯（14F・14G・15E・15F・16E・16F区）と弥生時代中期の住居址2棟（SB-1～18D・18E・19D・19E区、SB-2～17F区）

を検出した。うち1棟(SB-2)は焼失住居であった。

4) 遺物の内訳は、縄文土器片45786点 七個3体

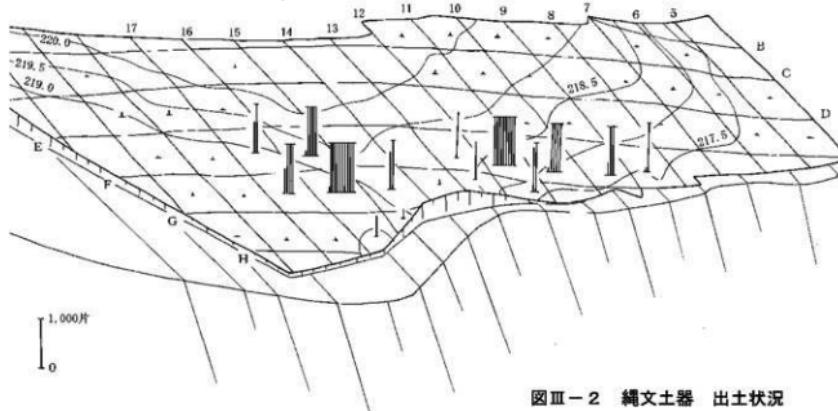
弥生土器片832点

土師質土器片3578点 七馬1体

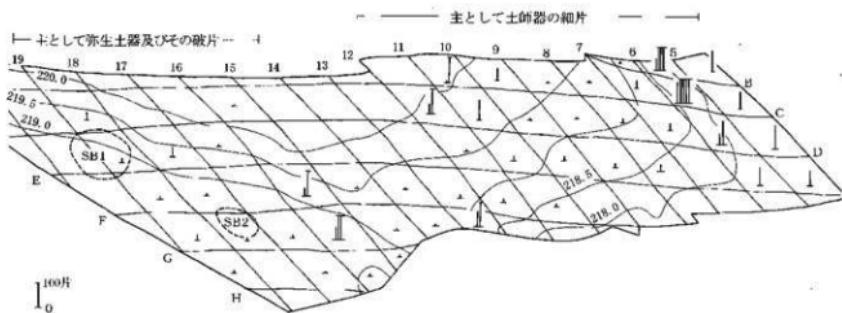
須恵器片199点

石器931点

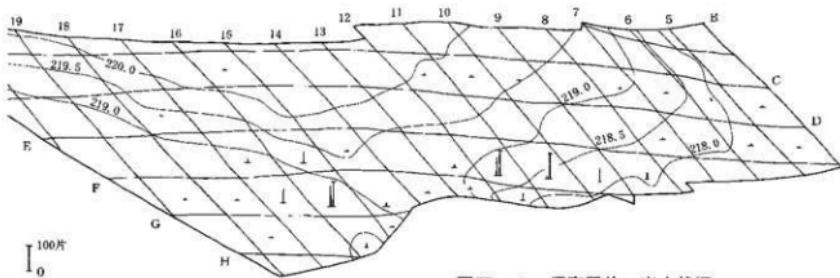
次の図はこれらの出土状況を示したものである(図III-2~5)。



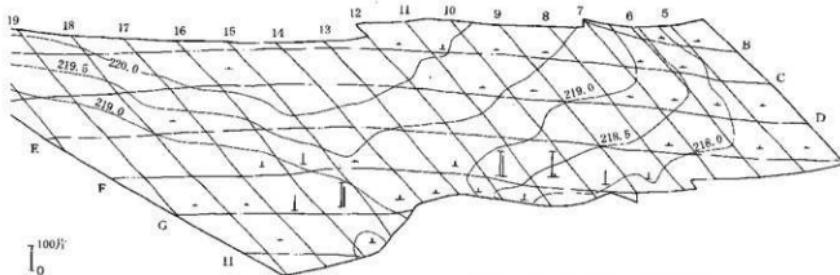
図III-2 縄文土器 出土状況



図III-3 弥生・土師器片 出土状況



図III-4 須恵器片 出土状況



図III-5 石礫器 出土状況

表III-1 農地遺跡出土遺物集計表

縄文土器				弥生土器				上質土器				須恵器				石器			
中期	後期	磨消縄帶文	不明・その他	晚期	粗製	不明・その他	分類不能	上質	土器	須恵器	石錐	石斧類	磨・打石器	剥片石器	石錐	その他			
274	588	286	106	43342	1190					527	18	20	17	214	135				
磨消縄帶文																			
832																			
665																			
3578																			
199																			
565																			
51991																			
931																			

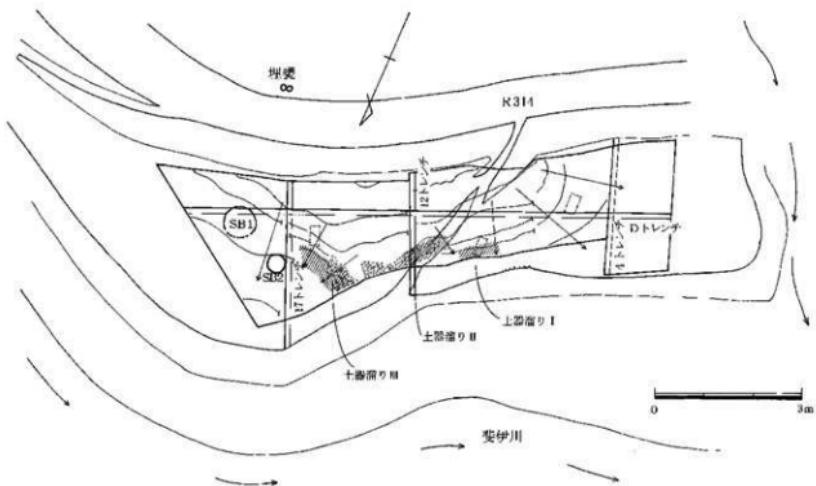
調査区全域2650m<sup>2</sup>を平板測量し、発掘面積は2350m<sup>2</sup>であった。

詳細については各章で記述する。

(野津)

## IV 土層と堆積について (図IV-1~3)

土層については調査範囲を横断方向に4・12・17の各ラインと縦断方向のDラインの横断を相互照合しながら現行水田表面から第1層～第11層に区分した。



図IV-1 遺構略図と土層観察ライン

調査区の地層は、ほぼ中央南側（山手）が最も高く、東側上流部は北の斐伊川本流方向に緩やかに下降しているが、西側下流方向（下手）は草地の谷川が合流するところにあたる西～北西方向へ扇形に下降する層序となっている。

このように傾斜が一様でないため、高い位置では流亡状況が、上手や下手では川寄りには堆積の様相がみられる。このため標準的土層断面図として4・12・17ライン及びDラインを示し、これによって各土層の概要を記す。

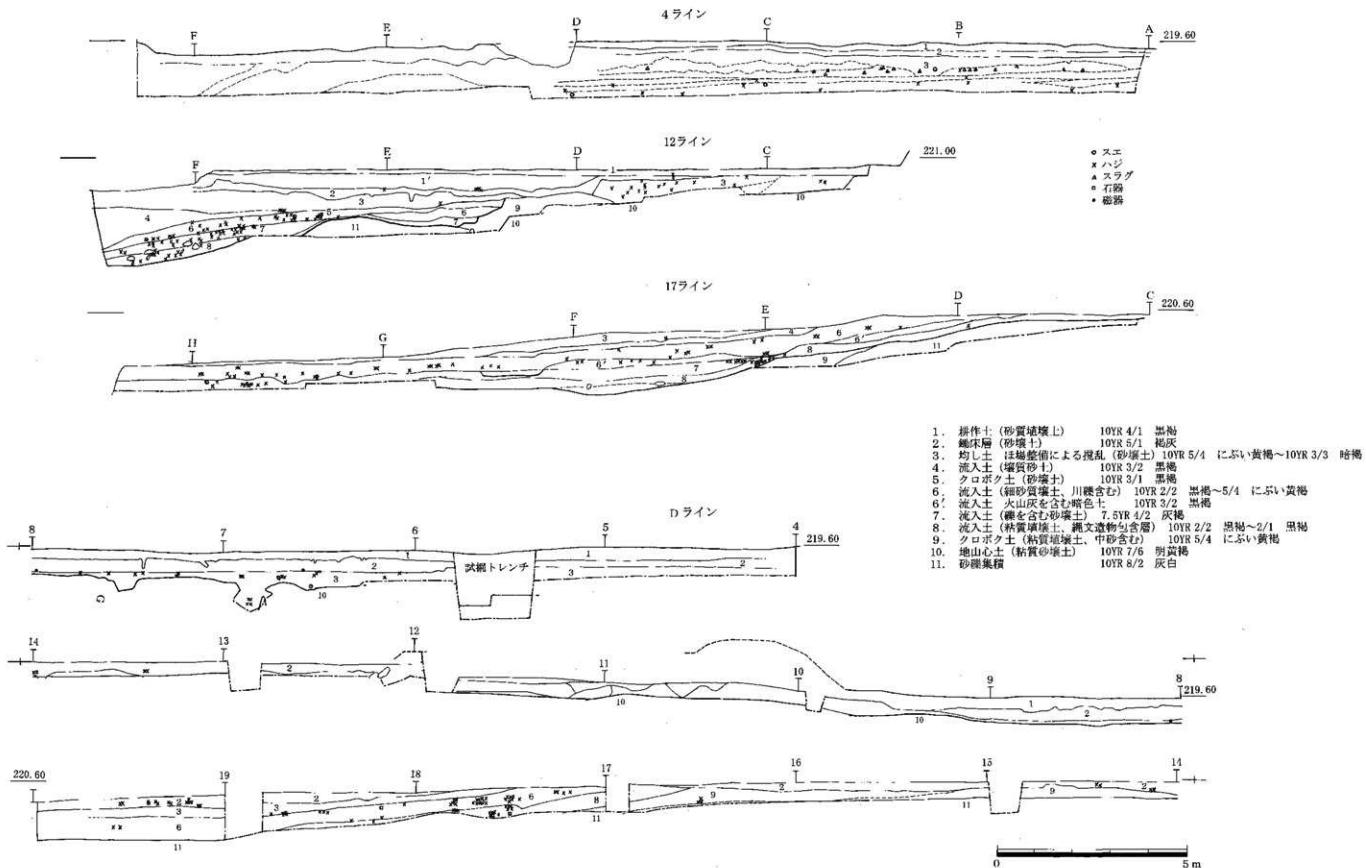
また標本採取した土壤については別途に粒度分析を行って参考とした。<sup>\*</sup>

第1層：現行水田耕作上で黒褐色の砂質埴壠土である。

第2層：耕作土直下で鍬床部を含む耕作基盤土層である。ほ場整備工事により搅乱均平された灰褐色の砂壠土である。

第3層：第2層に近い土であるが、酸化鉄の沈着部があり、やや褐色味がかかる。旧水田の耕地基盤にあたるもので、ほ場整備工事の際掘削し残った部分にあたる。土性は同様に砂壠土である。

第4層：ところどころ川砂（真砂土）が葉状に挿まれた赤褐～灰褐色の細粒の壤質砂土で、水



図IV-2 土層図

により移動堆積したもの。川の方向へ緩やかに傾斜している。

第5層：中ばから下手にかけて山手寄りにみられるクロボク状黒褐～暗褐色の砂壌土で、川方向に下降して消える上層である。あまり厚くはないがこの層中には古墳時代以降の遺物が若干混入している。

第6層：第5層に続く下手に、川寄りに漸次厚くなる黒褐～灰色の細砂質壌土でまれに拳人の川疊を含む。層間に薄い流入砂層を挟むところがある。流水によって運積したもので、第5層と同様の遺物を若干包含している。また第6'層は中央部あたりでは櫛群の高まりに達して止まる砂土で、第6層に準ずるものである。

第6"層：上手川寄りの湾入地形にのみ見られるもので、a・b・cの三層から成る。

a：第6層の下面にはほぼ近い暗色土であるが遺物の混入は無い。顕微鏡下に火山ガラスを認む。

b：灰白～淡灰色で、レンズ状や塊形の火山灰がほぼ水平に層をなして二次堆積を思わせる。顕微鏡下では細かい火山ガラスが著しい。

c：ややクロボク質暗色土であるが、上の火山灰の浸透が大きく、その境は起伏して不明

### 土層区分

七層No.	地上観察	上性	4ライン			16ライン	17-16.5 ライン
			12ライン	16ライン	17-16.5 ライン		
1	黒褐 現水田耕作土	砂質壌土上	○	○		↑	↑
2	灰褐 現水田耕作土	砂壌土	○	○			排土
3	褐灰酸化色 旧水田下層B層	砂壌土上	○	○	↑	↑	↑
4	真砂上サンドイッチ状流入砂土 にぶい赤褐土～灰褐	壌質砂土	○	○		○	
5	暗褐 砂壌土 (川寄りに遺物包含)	砂壌土	○	○		↓	×
6	黒褐～灰 粗砂混り (川手寄りに遺物あり)	砂壌土上	○	○	○	○	
6'	黄白 粗～細砂質①の櫛群で止る	(砂土)	×	○	○	○	
6" a	クロボク質 火山ガラス混入		×	×	×	○	
6" b	白色やや粘質 火山灰土 (流入堆積か)		×	×	×	○	
6" c	ややクロボク質 bの浸透あり		×	×	×	○	
7	黒褐 雜を含み 8との境不明瞭 (遺物有)	砂壌土	○	○	○	○	
8	黑色粘質 (クロボク上) (遺物多量包含)	壌質土	○	○	○	○	
9	黑色粘質 砂粒を含む (山手にのみ存在)	砂質壌土	○	(△)	(○)		
10	明黃褐 粘質 地山上 (山手にのみ存在)	砂壌土	○	(○)	(×)		
11	大～中円錐集積 (川手に突出して存在)	(疊)	○	○	○		

( ) 断面図なし

瞭である。

- 第7層：黒褐～暗褐色の礫を含む砂壤土で川寄りに厚く、第6層からの浸透による暗色化が著しい土層である。次の第8層との層境は不明瞭なところが多い。層下半には川寄りに縄文遺物を含む。
- 第8層：クロボク質に富む黒色粘質の埴壌土で、全般にわたり川寄りに厚く、部分的に集中して縄文遺物を多く含む。
- 第9層：クロボク質で中砂を含む粘性的砂質壌土である。山手にのみ存在する。
- 第10層：明黄褐色粘質の砂壌土で、中央付近の山手にのみ認められる。
- 第11層：下底面は確認出来なかったが河川による砂礫集積で、特に調査区中央部分で川に向って大きく張り出している。



図IV-3 地形断面模式図

以上の土層観察から、この度の調査範囲について土層序の成り立ちを概ね次のようにみることができよう。

最下底は少なくとも縄文時代よりかなり以前に斐伊川の本流が南側に張り出す尾根の先端を大きく削って崩壊崖をつくり、その裾を西に流下していく巨岩累々の河床の時代があった。

その後流路は次第に北へ移動蛇行し、尾根端の崖下は低い河岸台地状となり、明黄褐色の厚い粘質土層（もしかして大山に起因するローム層か）—第11層—が積もり、縄文時代に入ると温暖化によりその上の植生がクロボク土（第9層の由来する土層）として発達した。その後も流路の変動があり自然堤防が成立したとみられる。

このクロボク土の上に縄文の生活が営まれたが、やがて本流の人泡瀬によって冠水し浸蝕され、その後背湿地に第8、第7層が堆積した。

弥生前期ごろか、近い上流部から灰白色火山灰土塊が大量に流入して、湾入形の低地部分に堆積（第6～6”層）したことによって、地形はより水平面に近い平坦地となり、ここにささやかな弥生中期の住居が営まれた。しかしこれもあり時間差なく河水の及ぶところとなって生活面が洗い流された。この上にも極く近いあたりからと思われる流下土、或は流入土が積り（第5層）主として奈良時代の遺物を若干含有している。

この上は中世以降水田として拓かれた<sup>\*</sup>地表土層（第4層）で、これより上方は均平されて現在の農耕上（第2、第1層）となっている。

（杉原）

註

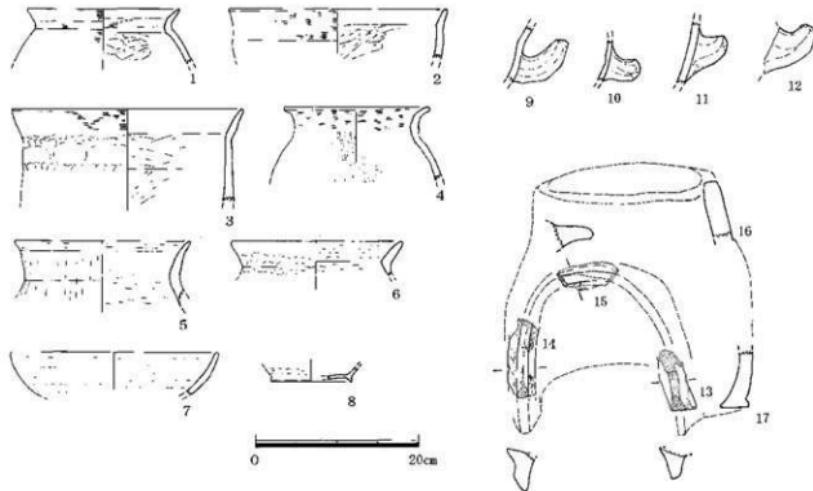
※ 『下二成村御検地帳写』 寛文十二年 倉内 勝氏 所蔵史料

## V 上層土中の遺物

図V-1～3は調査区内で遺物包含層（第6層上部）より上層から出土した遺物を一括して採りあげたものである。

### 1. 土師器（図V-1）

1～6は甕である。1は外面が風化しているが僅かにハケ目痕、指頂圧痕が認められ、内面は頸部以上は横ナデ、以下はケズリである。胎土は緻密であるが中には5mm径ほどの砂粒も見られる。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色～浅黄橙を呈す。外面には煤の付着が認められる。2は頸部で僅かな縫れしか持たずやや浅い器であるような印象を受ける。外面はナデ調整で内面頸部以下はケズリ放しである。胎土は長石・石英等を多く含みやや粗であるが、よく焼き締まり、にぶい橙色を呈す。3は口径28.2cmを測り、胴部から直立気味ではあるが僅かに2箇所でアクセントをもち、端部で外傾し短くおさめる。外面はナデ調整、内面頸部以下はケズリ後ナデしている。よく焼き締まるが胎土は3～4mm程の大粒の砂粒が目立つ。色調は浅黄橙～にぶい橙色を呈す。4は口径17.6cmを測り、縫れた頸部が直立気味に立ち上がりさらに端部で短く外反する。外面頸部以下は縦位にハケ目調整、内面頸部以下はケズリで胴部過半まではナデ消す。その他の箇所はナデ調整である。胎土はやや粗いがよく焼き締まり、橙色を呈す。5は口径21.0cmを測り、頸部で屈曲して外傾した器体が端部でさらに外傾し短く丸くおさめる。外面は風化のため調整は判りづ



図V-1 土師質土器

らいが縦方向にハケメ調整痕が微かに認められる。内面頸部以上はヨコナデ、以下はケズリ放しである。胎土はやや粗く中には4mm径ほどの砂粒も見られる。6は体部で4mm程の薄作りで、頸部で「く」の字に屈曲し、外傾し端部で丸くおさめるものである。外面は粘土紐積み上げ痕を隠す程度の粗いナデ調整、内面頸部以上はナデ調整、以下はケズリ後ナデである。胎土は砂粒を多く含み粗く、橙色を呈す。

7は口径25.0cmを測る壺身で内面は丁寧なナデ、外面も同様だが下部からはケズリ調整である。胎土は密で良く焼き締まり橙色を呈す。

8は高台を有する壺型の器であろうか、底径10.0cm、器壁は薄く4mmほどで、底部は貼り付け高台、内外面ともナデ調整であるが内面は特に丁寧に仕上げる。その内面は滲炭させた所謂「内黒土器」と呼ばれるものである。

9～12は瓶、あるいは甕の把手である。短く水平方向につくもの(10)、短く斜方向につくもの(11)、水平方向に伸び、短く上方に屈曲するもの(12)、やや細めで大きく上方に屈曲するものの(9)がある。

13～17は甕の破片である。この5片はすべてが同一個体というわけではないがイメージしやすいように一つの甕想像図に当てはめた。13～15は甕の底部で16は口縁端、17は底部であり、13・17は接地部分である。

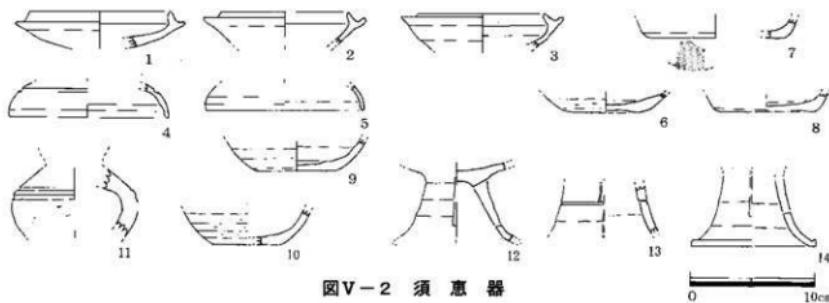
いずれの土器も口唇部などを見るとしっかりと作られている。8は平安期に入るものであろうが、その他は奈良期以降のものとしか言えない。これらは七輪質土器である。

## 2. 須恵器(図V-2)

1～3は蓋環の身で口径が10.3～11.0cmを測り、かえりは短く調整はいずれも回転ナデであるが1は下端部付近にはケズリ痕が見られる。

4・5は壺蓋で口径はそれぞれ12.8、13.7cmを測る。4は天井部との界線が明瞭で口唇部内面の段は僅かに認められる程度である。5は内面の段も外面の界線も見られない。

6～10は底部片である。6・9・10は外面はケズリ、内面は回転ナデである。いずれも壺型土



図V-2 須 惠 器

器の底部かと思われる。10は縁であるかもしれない。7の底面は回転糸切り痕が明瞭である。8は全面回転ナデ調整で底部中央付近は3mm程の器壁である。色調は他の須恵器と比べ赤みを帯びている、酸化焰焼成の須恵器である。

11は縁である。器壁は1.2cmを測る。破片のため孔は確認できないが、孔にかかる部位には2本の凹線が巡る。内面と外面の凹線までは回転ナデ、以下はケズリ調整である。

12～14は高壺の脚部である。いずれも器体が弱い透しの部分で破損している。12は内外面とも回転ナデ調整を行ない、13は透しの下方に僅かな段をもつ。14の端部はハの字に外反しながら開き、脚端では短く上方に折り返しあさめる。

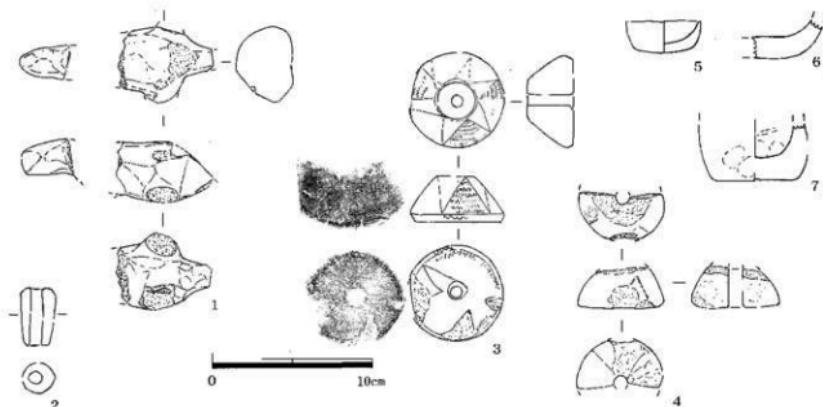
時期的には明確な判断材料が乏しいしかないが大谷編年4～5期（TK209～TK217併行）であろう。

### 3. 奈良・平安期の特殊遺物（図V-3）

1は土馬である。頭部と胴部～臀部にかけての破片で、鞍などをつけない土師質の裸馬である。表面は風化していて判りづらいが顔の表現等はなされておらず、土馬の姿勢についても四肢を欠くため不明であるが背はほぼ水平、もしくは頭部に向けてやや上がるものであろう。出土状況について記すと平面位置は土器溜りIの上層の流入土中から胴部が、やや下手から頭部が出土している。

2は土錐で長さ3.5cm、幅2.1cm、孔径0.7cmを測る。焼成が弱いためか表面は風化が進んでいる。

3・4は紡錘車で3は重量64g、直径6.0cm、高さ2.9cmを測る。表面は擦れていますが側面には



図V-3 奈良、平安期の特殊遺物

六つの鋸歯文が施され、底面にも鋸歯文の痕跡が見られる。4もほぼ同様の法量であるが、表面は風化のため、摩滅している。

5～7は手捏土器で5はミニチュア上器の完形で外面はきれいにナデる。7はコップ型とも言えるような底部で内外面とも指頭圧痕が明瞭である。このような手捏土器は上馬とセットで出土する例が多く見られる。

上馬を含めいずれも上層流入土中からの検出であるが、斐伊川沿いの本遺跡付近に奈良期には水辺の祭祀遺構があったのではないかと推察できる。近隣の類例では、上方林遺跡（横田町下横田）の陶馬・芝原遺跡（仁多町郡村）の陶馬・家の上遺跡（本次町尾原）の上馬がある。このうち上方林遺跡・家の上遺跡は斐伊川に臨む遺跡であり、当遺跡と立地も似通っている。

これら上師器・須恵器は平面的には調査区の下手寄りに出土する傾向であった。このことはVI章の小結でも述べているが、弥生時代後期後半以降奈良期においても、調査区下手の暮地谷部に生活拠点が想定されよう。ところで縄文の上器溜りは奈良期には川砂に埋没しており、土馬は出土しているが、ちょうどこの場の土器溜りを意識して祭祀を行なったとは考えづらい。奈良期の集落付近の川辺がこのあたりであったということであろう。

（野津）

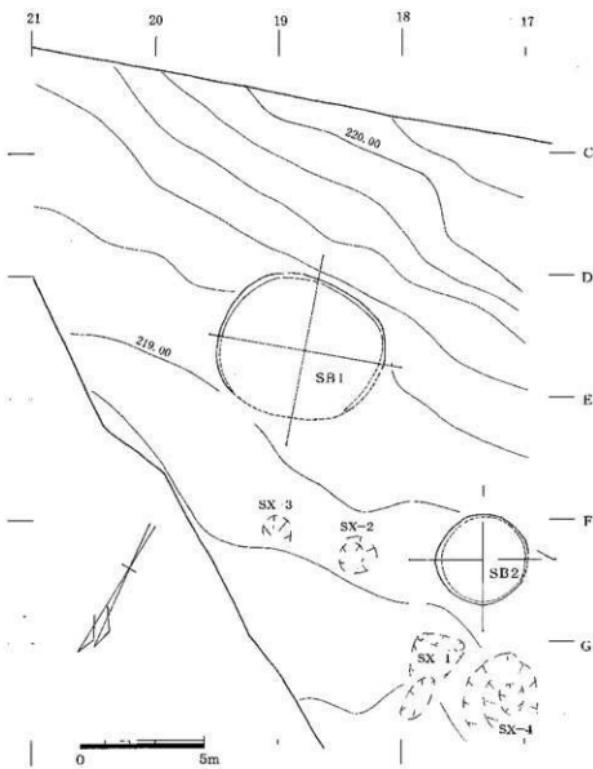
#### 参考文献

- 仁多町教育委員会：『殿ヶ迫横穴墓群 西尾社遺跡 亀ヶ谷遺跡 シベ石遺跡 時仏遺跡 時仏山横穴墓』2001  
大谷晃一：『出雲地域の須恵器の編年と地域色』『島根考古学会誌第11集』 島根考古学会 1994  
中村 浩：『考古学ライブリー5 須恵器』 ニュー・サイエンス社 昭和65  
本次町教育委員会：『家の上遺跡・石塚遺跡』 1998  
仁多町教育委員会：『日ヤケたら跡 芝原遺跡』 1994  
杉原清一：『横山・上方林遺跡』『島根県埋蔵文化財調査報告第11集』 島根県教育委員会 昭和61  
松江市教育委員会：『萬沢A遺跡 他 発掘調査概報』 1984

## VI 弥生時代の遺構と遺物

### 1. 概要 (図VI-1)

IV章に述べたよう  
に第6層下にあたる  
第6'層をベースに  
して、調査区東寄り  
の低位平坦面に弥生  
時代の竪穴住居址2  
棟が検出された。い  
ずれもその後に流水  
をかぶり、1号住居  
址(SB-1)は床  
面まで、2号住居  
址(SB-2)は床面  
上20~30cmあたりま  
で流失し、これより  
川寄りはところどこ  
ろSX-1・-2など  
の深まりをつくり  
ながら下って浸食さ  
れていた。そしてこ  
の上には同時に流れ  
て堆積した6'層が  
遺物を含んでいる。



図VI-1 1、2号住居址 付近地形図

### 2. 遺構

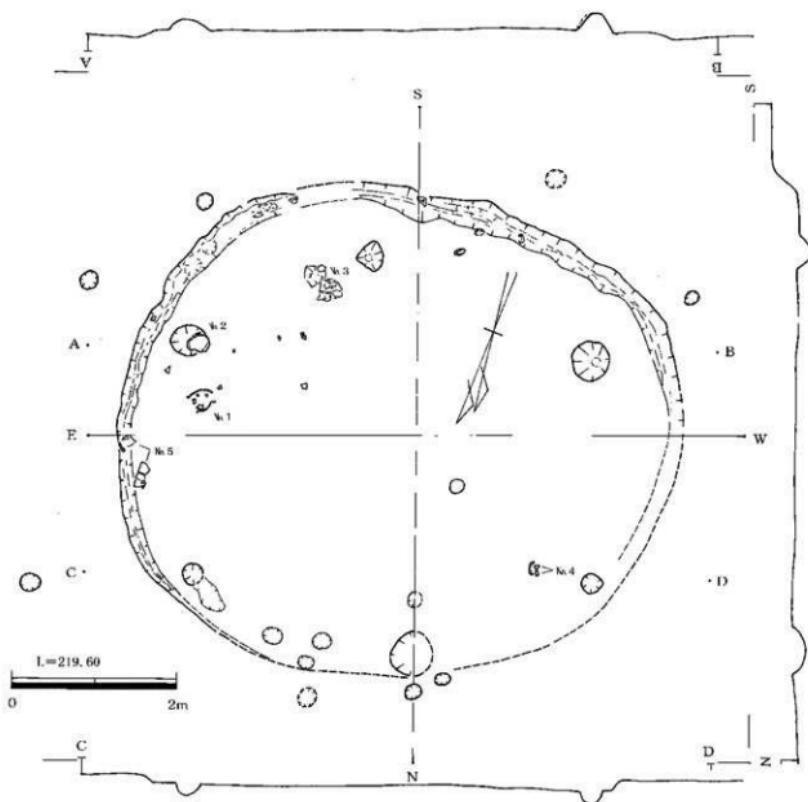
#### 1) 1号住居址 (SB-1) (図VI-2)

この住居址は床面で東西6.52m南北5.80mのやや横長の円形プランで、床面中央付近は灰白色  
火山灰土のやや深い固い面で床面積は29.8m<sup>2</sup>である。この住居は床面まで洗い流されているが、  
東から南にかけては掘り込んだ側壁面が高さ20~15cmほど残っていた。

側壁下端には幅12~15cmほどの浅い側溝が巡り、この溝中に30~50cmの不揃い間隔で杭穴状の  
浅い落込みが認められる。しかしこの溝も北~西方向では床面まで流失していて明確ではない。

床面に認められるピットは大小各3穴で、その大小は交互に配置されている。これは柱穴とみられ、底はいずれも床からの深さ15~17cmで掘っており、底面は椀形をなして柱根の太さは明瞭ではない。

大きい柱穴の上端径は約44cm、小さい柱穴では24~28cmを測る。またこれら柱穴の配置は、大径のものを結んだ三角形の内角は52°~66°、辺長は4.3~4.9mで正三角に近く、これらの間に位置する小径の柱穴を結んだ三角形も内角は56°~62°、辺長は4.5~4.8mで、より正三角形に近いものである。即ち三角形を二つ組合せた配置の伏屋とみられる。このほかには明瞭な掘り込み等ではなく、また炭片等も検出されなかった。これによって通例のように床面中央に掘り込んだ



圖VI-2 1號住居址 實測圖

炉状の構造はないことが分った。

床面に残された遺物についてみると、およそ中心より東半分にかろうじて流亡をまぬがれ床に密着して潰れた弥生中期の上器や破片が残っていたが、西半分域では床面も洗われて唯一つの破片が床に半ばめり込んで検出されたのみであった。また東側の側壁残存部上端付近にも破片があり、この住居址に伴うのか判断しかねるものも2点あった。

残っている側壁面についてみると必ずしも平滑な削り面ではなく、外堤へ少し削り込み状をなす箇所が不等間隔ながら続き、外堤端部に杭状のものがあったことによる杭穴下部と思われた。しかし、その位置は壁下端の溝中の小杭穴状ピットとは必ずしも対応していない。

出入口については確たる手がかりはないが、通例のように地形の地下り方向である北方向かと思われ、このようにみると北側外堤部に不明瞭ながら小柱穴状ピットが多数あることから、ここに出入口の庇がつくられていたとみられる。

## 2) 2号住居址 (S B-2) (図VI-3・4)

この2号住居址は1号よりかなり小規模で、1号住居址の北西約10m隔てたわずかに北に下る勾配地に位置する焼失した竪穴住居である。床面での規模は東西3.50m南北3.45mでほとんど正円形で床面積9.4m<sup>2</sup>である。上記した1号住居址と同様、水流によって外堤上は洗われているが住居址内は厚さ15~32cmで周囲外壁寄りに厚く中央部はやや薄く廃絶時の堆積物が残っていた。

堆積物は焼上塊や炭化木材片等がやや放射状かと思われるよう散乱積み重なった状況である。最上面に見える状況では流れの上流にあたる南東側半分が概ね厚くよく残っていた。

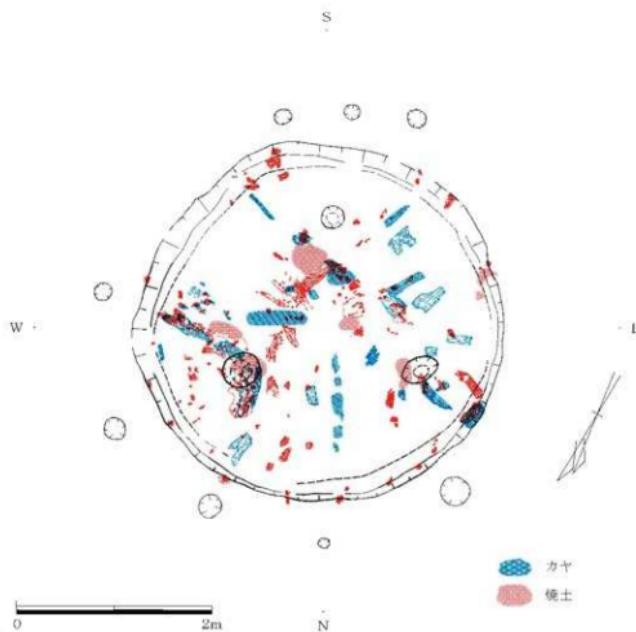
先ず、やや中央寄りに40×25cm厚さ8~10cmほどの焼上塊が2か所と碎けたものが5か所ほど若干外方へ傾斜している。この焼土は概して下面がより強く熱変色している。この下には炭化したカヤ材が厚さ約3cmほど認められた。炭化木材片はさらにその下にあって床面に接するものが多く検出された。このとき、カヤの方向は中央から放射状になっているとみられた。外堤上の掘り方肩部には、部分的ながら40~50cm間隔に断面6×8cm程度の割り杭が地面に刺っているまま炭化していた。

床面には炭化木材片のほかには南と北の壁下に平らな台状の石2個があり、床面には小さい小握斧形の川縁13個や磨石1個などが散在したが、土器は唯一つ胸部以下の破片が南隅近くにあつただけである。住居廃絶後に土器は持ち出してしまったのであろうか。中央には炭灰の詰った直径約50cmのやや歪な円形で、深さ床面から13cmの掘り込みがあり、炉と判断される。柱穴は直径25~30cm深さ20~23cmで3穴の構成である。

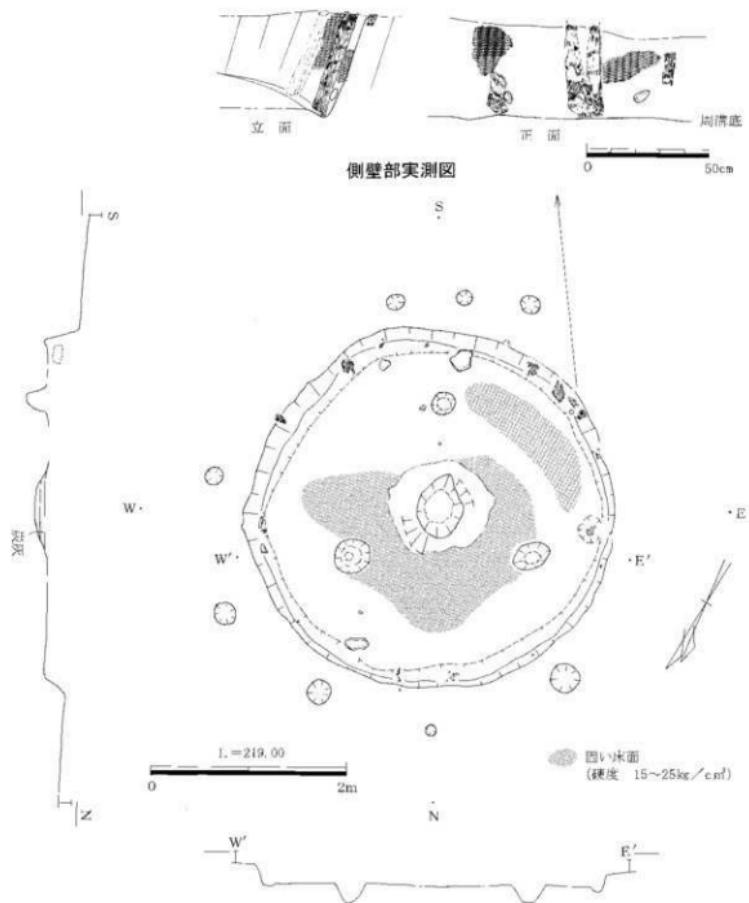
炭化材の配列方向については、北側半分の場合二つの柱穴位置から外方へ八字状に太材の配列がみられ、南側の柱穴からも同様と思われるが、残存不良もありあまりはつきりしなかった。中心の炉周辺も東側ではこれを囲むかのように認められた。このほか割板状の短い破片も散在した。これらの状況から、長尾垂木が外堤に達していて伏屋造りとみられた。

また西壁沿いに12×15cmの浅いピットがあり、中に折れた磁石が1個入っていた。側壁部についてみると、壁面下端には幅7～12cm深さ5～6cmの断面ややV字形に近い周溝を巡らせている。溝内には30～40cm間隔とみられる杭根或は小穴が断続して認められ、そのうちには壁にそって割り杭が残っているのが認められる。壁面の削り出し傾斜は75°前後で、残存する最高壁高は南側で40cm、最低は北側で17cmであり、壁上の肩部にもやや不揃いな間隔で小杭根が残っていて一巡するが、南の一隅のみには見当らない。そして壁面と内側杭との間には厚さ4～5cmほどのカヤが横に詰めてあり、堤上に刺した杭との間に挟んでカヤ壁をつくっていたことが分る。そしてこのカヤ壁の裏には握斧形の小さな川石や東壁面には磁石が挿し込んで、収納したかのような状態で検出された。

床面を清掃してその地面の硬度も測定した。測定には中山式土壤硬度計を用い、kg/cm<sup>2</sup>値によった。その結果南東区画と北東部及び北西部の壁沿いは軟地盤であり、南を除く他の周辺と南西壁沿いは硬い結果となった。床面の上質に差異はなくこの硬さは概ね踏圧によるものとすると、磁



図VI-3 2号住居址 検出状況



図VI-4 2号住居址 完掘

石などの遺物の配置などと総合すれば住居内での人の動きや部位の機能をも暗に示すことにもなる。

そして住居址については1号住居の方向とは逆に北側に出入口を想定すると、壁に接して一段高く平らな台状石が1個あることから踏み台用としていた可能性もあり、さらにこの位置の床面が最も硬くなっていることも符合しているといえよう。

以上の状況から、焼失していること、床面には生活用具である土器類がほとんど無くなっている

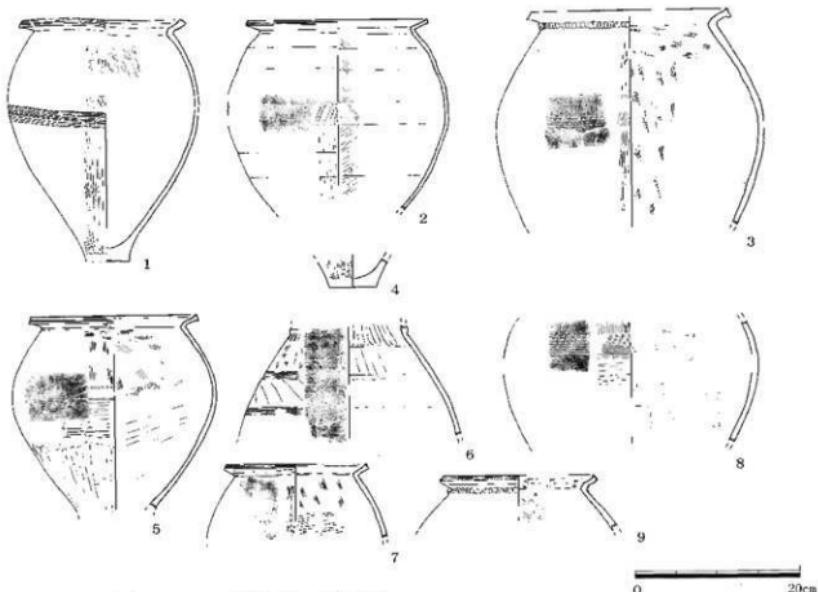
ること、建物規模が小さいこと、1号住居とともに主柱が3本、又はそれを基本としていることなど疑問点や特異性が目立つものである。

### 3. 出土遺物

#### 1) 1号住居址内出土の土器 (図VI-5)

住居の床面に密着していた土器(1~4)とやや浮いた位置のもの(5~9)があった。上器以外には小さい川礫が数点採取されたが、波食の際に付近から流入したもの可能性が高く、ここには採らなかった。

1~3・5、及び7~9の器形はほとんど同様で、胎土には砂粒を含み、にぶい橙色を呈している。口径11~16cm最大胴径15~23cmで高い。口縁は強く短く外反し、口縁端はやや厚く幅(4~8mm)をつくり、ナデによる2条の堅叩線を巡らせ、上端をわずかに繰り上げ気味としている。頸部に刻目の凸帯を貼り付けるもの(9)もあるが、これより上は外面ナデ、内面ナデ又は横ハケ目、下方は内面ナデ、外側はナデ又はヘラミガキで薄く均整な仕上げである。施文は胴最大径部位に6又は8条の列点文或は条線文を巡らせている。口縁の欠けている6は壺型かと思われ、頸部との間にもう一段条線帯を巡らせている。



図VI-5 1号住居址 出土遺物

底部はきちんとした平底（1・4）で、底径3～4cmで外面下端までミガキである。

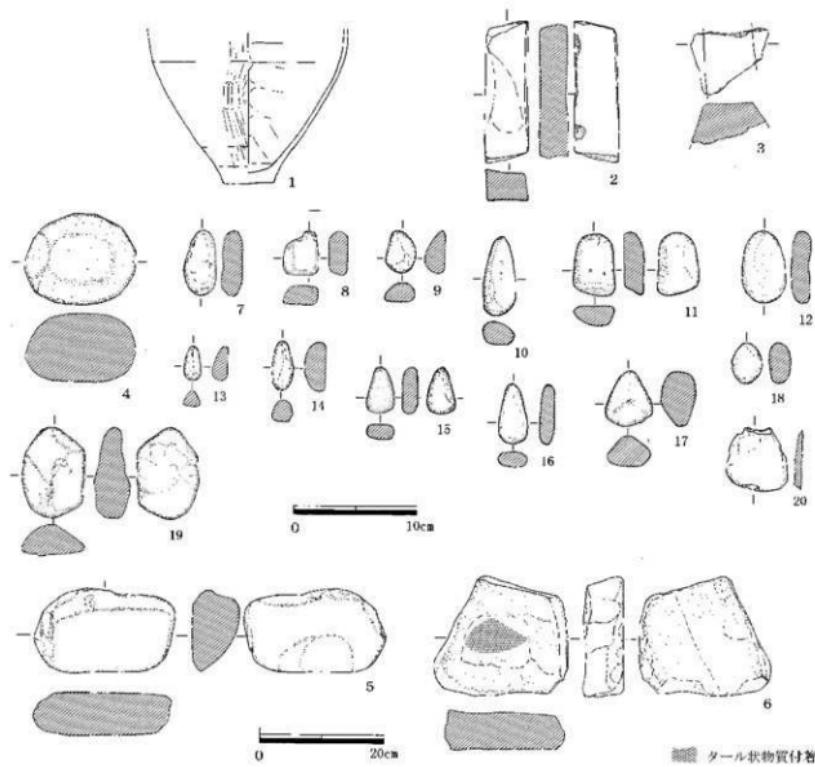
このように内面下半に全く削りが認められないがこれらはすべて出雲でのIII-2～IV-1様式<sup>※3</sup>の範囲とみられる。

なお、これらは煮焚きに用いたとみられ煤の付着するものが多い。

## 2) 2号住居址内出土の土器と石器類（図VI-6）

この住居には土器は1点のみであり、石器は砥石2点のほかは機器類である。

1は床面に接して出土したもので胴以下の部分である。器形は1号住居址出土の品とほとんど同様である。最大胴径推定約17cm、底面径4.1cmで、外面は煤が付着しているが縦にミガキがみえる。内面は底から斜めに、胴部は横に削ったのち入念にナデを行っている。器壁は均一で薄い。



概ねIII-2～IV-1様式で1号住居のそれと差はないと思われる。

砥石は2点である。2は断面長方形柱状200g、淡い灰白色の泥岩で、粒子の細かい仕上げ砥用である。長さは11cmで小口2面は節理にそって剥離した素材のままの面である。使用は表裏両側の4面すべて用いており、広い面である表及裏面は砥面中央が長円形にやや窪むように使用されていて、研磨した利器の刃の形状を知る手がかりとなりそうである。研磨の方向は擦痕からするとわずかに右に振る長軸方向に直線的な動きであることが分かる。軟質な砥石材であることからすると鉄器用であった可能性が高い。

3の砥石は断面台形とみられるものの破片である。石材は細粒で硬質の砂岩で、上及び両側面が使用されているが下面は破損していて不明である。砥面に研磨条痕は判別出来ないが、上面はやや中凹みであるのに対し、両側面は逆に甲丸気味である。これを用いたのは石器であるのか鉄器なのかは判断出来ないが、硬質の中砥程度の粒度の砥石である。

4は花崗閃緑岩で11×13cm、590gの丸餅状の円礫である。全面にやや半滑さを欠くが上面中央部約6×9cmほどの範囲がやや粗面であり、窪みにはなっていないが敲打した面とみると出来る。用途については木の皮を材料に繊維つくりであったのか、堅果や動物の調理などであったのかなど具体的には分らない。

5・6は床面に置かれていた台状の石である。

5は一面がほぼ平坦な23×13cm厚さ7cmほどの川石で全面滑面の穂岩の川原石である。表面には打痕などの人為的な痕跡は認められない。熱によるのか全面が淡赤褐色を呈している。

6は19×19cm厚さ6cmの略方形厚板状の閃緑岩で、棱や角は若干摩耗していてやはり川原石であろう。平坦な上面のわずかに凹む中央部分と側面のうち1面の下端はタール又は煤に汚染している敲打痕等は認められない。出入口推定位置にやや浮いて置かれていたことから踏み台として用いたのであろうか。

7～18はすべて床面に散在した川原の小石で長さ3～6cm握斧形で20～60gほどであり加工痕などは見当たらない。7・8・12・13・18は灰白色砂質の凝灰岩、9・10・11・16は黄白色軟質の泥岩、14・15・17は青灰色で硬質の凝灰岩である。

19は5×7.5cm偏平氣味の穂岩であるが、これも加工痕などの認められない自然の川穂である。

これら的小穂は床面に密着していたことから、住居に伴うものではあるが、その使途については全く見当もつかない。

似し20は板状の穂を用いた両端打欠きの石錘で、縄文遺跡に検出される品と相異しない品であった。これも床面密着の出土であることから、弥生期にも用いられていたのであろうか。

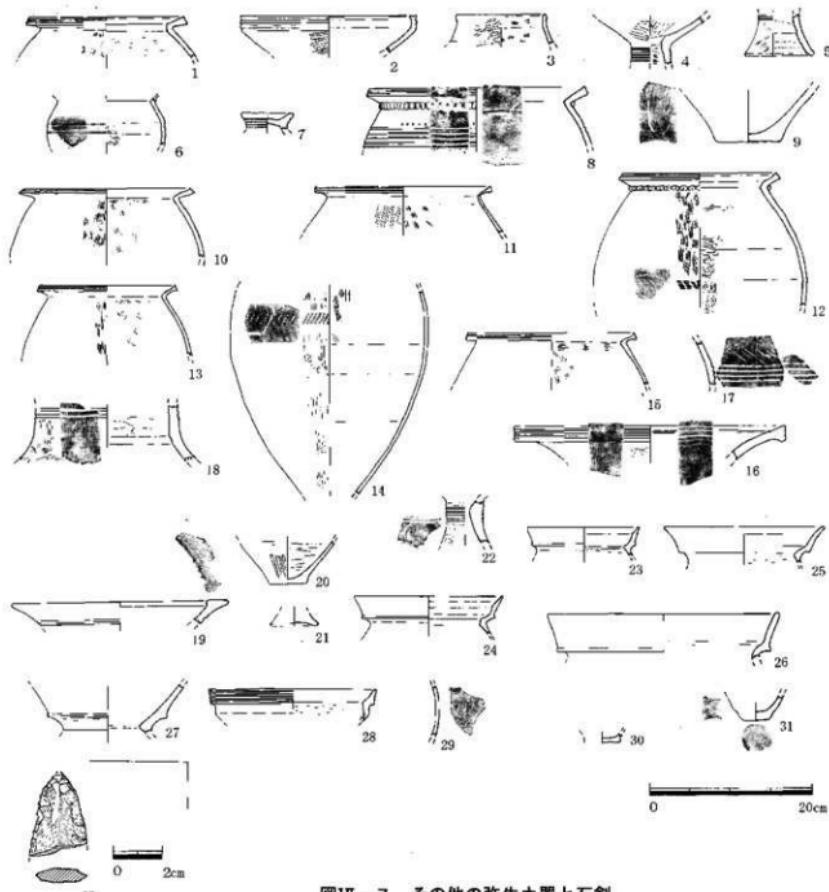
### 3) 遺構に伴わない遺物 (図VI-7)

第6及び6'層とした暗色流人土中に広く混入している土器についてみる。

調査区中央の高まり地形から下手で検出したのは1～6で比較的少數である。

1・6は甕で、強く角かく外反する口縁でその端部をやや厚くし、にぶい凹線3条を巡らせる。胴内部はナデ（1）、又はミガキ気味（6）のもので、6の胴最大径部外面に櫛状用具の押ししきによるややラフな列点文を巡らせてている。このとき器内壁面にはこの押圧を支えるヘラ状工具を当てた押圧痕が認められる。器壁は薄く均一である。

2は口縁をほぼ直立させ外面にしっかりとした凹線3条を巡らせる壺形の破片で口縁上端は内側へやや張り出すナデの平坦面としている。内面はナデ、外面はミガキ調整である。高壺の壺部とみられる。



図VI-7 その他の弥生土器と石剣

4・5は高坏の脚部と坏底部分で、復元的にサイズはほとんど同じであるが、別個体である。脚筒上部に6条の細いがしっかりした凹線を1周させ、内面には強く絞った縦じわが認められる。脚端はあまり開かず外面ミガキ、内面横ケズリである。

7は手捏ね様の蓋つまみかとみられるもの。上面と内面は粗ナデ、くびれ部に雑な凹線を巡らせてている。

8～20は調査区中央より上手で検出した。特にSB-1・SB-2を埋めつくし、川辺に下障する第6層土中において特に多く採取した。

8・10～15は壺体の口縁や脚部で、口縁の形態は1にほとんど同様であるが、15の口縁端は上下に若干拡張している。10・12は頭部にキザミ目の凸帶を巡らせ、12・14は胴最大径部付近に櫛状工具による列点文を巡らせていている。

16～19は口縁が朝顔形に拡張する壺型土器の破片である。

16は強く外反して口縁端はほとんど垂直に幅2cm近い面とし、太い3条の凹線を巡らせる。内面はヘラで回転ミガキ気味、外面は継ハケ目に調整している。17・18はそれに続く頸部から肩部にあたるが別個体である。頭部や肩部に太い凹線を多重に巡らせ18は肩部上端に櫛描の鉈齒状の文様を巡らせてている。この内面はケズリののちナデしている。19は同様に朝顔形に聞く壺の口縁の破片であるが、口縁端は水平に幅広くしてラフな櫛描波文を一巡させて施文帶とし、頸部へ移るあたりから凹線文帯としている。

20は壺と思われる底部で、平坦な底面には板目の圧痕がみられ、内外面ともミガキである。煤の付着が著しい。

21は細片であり、明確ではないが脚付壺の脚端部とみられる。

22は高坏の脚で筒部にシャープな櫛による凹線を7条以上巡らせ、その下方はミガキ、内面はナデ仕上げとしている。

以上の1～22は21を除きほとんど同時期に属するものでIV-1様式のうちとみられる。

23～31は調査区の下手に偏って検出された。

口径14～20cm(22～24)の小径と、29cm(26)の大径の二種の複合口縁の壺の口縁部である。かなり外反する口縁に、施文はなく、口縁下端の稜は繰り上げて横に突出するもの(23・24・26)と、繰り下げて下垂するもの(25)があり、内面頸部以下はケズリである。

27は器台の筒部から受け部にかかるあたりの部分で、筒部は極く短く、稜は横に尖る。施文はない。内面は受部ではナデ、台部ではケズリ放しである。口径は25cm以上になるであろうが器高は低いとみられる。

これら23～27は弥生終末に近いものでV-4様式である。

28は高坏の坏部片とみられるもので、口縁外面は1.8cmの広く垂直に近い口縁帶に1mmの細い凹線を櫛状工具で全面巡らせ、体部へは強くナデケズリで幅広い凹線によって区画している。年代は後期(第V様式)である。

細片の29は壺胴部片で櫛の刺突文の巡るもので内面はナデが認められ、30・31は平底の器底部で、30は端正な平底で弥生中期の可能性が高いが、31は指頭圧痕があり弥生期以降の可能性もある。

石器は1点（32）上記上器片等と同じ出土状況である。折れた破片であるが、石剣の鋒部であろう。サヌカイトを用いたものでこの部分破片でみる限り、厚さ6mmほどの板状で、刃部調整は細かく剥ぎながら整えている。注目すべきは腹面を研磨しており、意図的に綾杉文に砥ぎ分けを行っている。銅剣のそれを模した製作と思われる。

#### 4. 焼失住居の上屋使用木材について

2号住居出土の炭化木材は床面では直径15~20cm（推定）の丸木や幅10~12cm厚さ2~3cm程度の割り板状のものの二種があり、側溝や周堤に打ち込まれた杭材は割り材が主であった。

これらの樹種についてはその判別を試み、別項の結果<sup>51</sup>を得た。即ち、クヌギ、アベマキ、クリ、ノグロミなど現在も通常に生育している種類であるが、これらの樹種に共通する性質として曲げにやや強く、乾材の重さは軽く、そして直材を得やすく、開裂の良い（割り易い）ことが挙げられよう。つまり割り易く、特にノグロミは直ぐな材が得易いことであると言えよう。

#### 5. 小結

暮地遺跡の弥生時代については、主として斐伊川本流によって大部分被食・流失し、さらにその上に流入堆積した土層中に遺物が混入している状況であった。

遺構としては流水にさらされながらわずかに残った竪穴住居址2棟のみであり、上器を主とする遺物はその上に堆積した上層中から採取した。住居址内の土器と、堆積土中からのそれとの間には様式的な差異はなく、中期前半でIV-1様式を中心とすることから、この川辺にはさらに広く同時期の生活があったと思われた。

土器はすべて近隣地域に一般的な様式である。この時期の近隣の地域の遺跡<sup>52</sup>では山陽の塩町様式<sup>53</sup>の山越えでの流入が認められるとしているが、当該遺跡においては認められなかった。

この弥生中期土器の検出は概ね調査区上手半分の域で、川辺に緩斜する堆積土中であることから、この上手で現在河川敷になっているあたりも往時は生活の場であったのではなかろうか。

これに対し、数は少ないが弥生後期後半（第V-2様式）に属する上器は、中央部の微高地形を越した下手の暮地谷川沿い合流地点に近い緩斜堆積土中からの検出であり、明らかに中期の由来地点とは異なっていて暮地谷部に後期の生活の場を想定することができよう。

2棟の住居址は流水によってかなり失われた部分が多いが、特に焼失した2号住居址の場合は竪穴掘り方内の残存状況は良く、多くの情報が得られたと共に当地方の通例とは異なる点などもあった。

1号住居は大型で直径約6m併んだ円形で床面積約30m<sup>2</sup>であり、2号住居は小型で直径約3.5

mほぼ正円で床面積は約9.5m<sup>2</sup>である。いずれも掘り込み壁の下端には小溝を巡らせ、その溝中に小杭穴が、壁上端にも同様の杭穴があり、この杭に挟まれたカヤ材の内壁構造があったことが2号住居において確認できる。

主柱穴プランは1号住居では6穴であるが柱穴の大小が交互の順になっている。深さは全体に浅い。特に小さい3穴はさらに浅い。これは主と継各3穴のプランを補間に重ねたものとみられる。2号住居は3穴のプランで、1号の主プランと同じ発想だと思われる。

古代又はそれ以前の竪穴住居で主柱3穴を基本とするプランは管見の域内には希である。円形プランでは2又は4穴、或は5・6穴であり方形プランは4穴が知られている。これに対して3穴を基本とする場合、上屋の骨組みに独自の木組みであったことが想像される。またカヤ葺き屋根の上には土を置いていた可能性が高い。この上屋の骨組みについては別途に復元を試みその結果は次項に記すこととする。

このほかにこの時期、当地では床面の中央に掘り込みの炉をつくるのが通例であるが、1号住居においてはこれがつくられていない。石組みの炉であったことも考えられるが、床面に焼熱の痕跡は見当たらず、疑問の残るところである。

さらに床面の付近の保存の良好な2号住居についてみると、東西に小ピットがあり西ピットには破損した砥石があり、東ピットに近い側壁の壁材の隙間には完形の砥石が挿入してあり、金属製利器の使用を示唆している。床面積の小さいことと併せてみると、居住的性格ではなく何らかの工房かとも思うことができよう。

そして、最も特異なことは、床面に土器が残されていないことである。これは居住ではなく丁寧的な場であり、火災となったのか或は廃絶後屋内の道具等を搬出したのち、何らかの意味をもつて故意に焼却したのであろうか。このように2号住居に関しては疑問が多く、後考にまつものである。

1号住居及び付近採取の土器は中期前半に限定されるものであり、2号住居も同様とみられ、また2号住居の炭化木材による<sup>14</sup>C年代<sup>\*4</sup>はこれを支持するBC60～AD30年（較正歴年代）を得た。しかし床焼上面の地磁気年代<sup>\*5</sup>はAD320±50年の値となっていて、これは火災の年代を示すのではないかと調査の報告がなされた。これについても一考を要する。

## 6. 1号・2号住居上屋復元の試み

### 1) 1号住居について

柱穴を手がかりに上屋の骨組み構造の机上復元を試みた。

既に述べたように、主柱の配量は大小交互に6本が配置されていること、及び柱穴の深さが浅いことから、従来各地で試みられている隣接柱を結んで巡る桁の場合と異なるものではないかと考えた。

先ず大主柱を結ぶ三角形の桁組み上に小柱穴を結ぶ逆三角形の桁を載せる形態であり、又首柱

上と各桁の交点を繫縛固定することにより浅い柱穴に建てた主柱も、横方向からの荷重に対しても強固に対応出来ることになる。またこの桁の三角形の中央下に炉を想定することもできよう。

柱の高さについては明確ではないが、人が屋内で自由に動くことが出来るため身長- $\alpha$ で仮に1.6mとして、柱位置に対応する外堤上のピットから長尾垂木を桁交点である柱上に斜架すると、屋根勾配は概ね45°弱になる。このとき各垂木は床面中央約4mの1点に集束することになり、各垂木長は6m余りである。但し出入り部に接するものはこれより短い。このように垂木を設置すると、接地する下端での間隔は概ね4mとなり、この間を補う副垂木とも言うべき垂木を補間する必要があり、仮に、各間に1本ずつとすると、間隔は約2mとなる。

出入りは地形地下り方向（北）で、床の端に近い位置に間隔2.1mのピットがあり、戸外へ1.6mには小ピットがそれぞれ対応していることから、これを出入口部構造とみた。平坦な屋根で正面からは方形となるのであろうか。

床中央上にあたる各長尾垂木の集結部には、カヤ葺きを行わずその上に短い横木を1本固定して棟とした煙出しの小屋根を載せることが考えられる。

このように概寸してみると、掘り方側壁に沿わせた腰壁は床面からの高さ80~90cmほどと推定され、周溝と外堤端に立てた間隔15cmほどの杭にカヤ材を挟んだものと推察される。

骨組み用材の樹種については2号住居の状況を参考に次のように考えてみたい。主・副の柱はクリ等の堅木で、しっかりした又首のものを用い、三角形に組む桁材は直幹でやや堅い軽量の材、例えばノグルミ、サワラなど、これが割り材であるとするとノグルミなどが挙げられよう。長尾垂木も若齢のノグルミかスギなどであったと思われる。

## 2) 2号住居について

焼失埋没していたことから炭化木材の配列状況が参考となり、また事例の希な主柱3本の小型プランで、カヤ葺き屋根の上には土を置いていたことなどを考慮して机上での復元を試みた。想定の基準は中央炉上は3m以上、主柱の外側で人の身長を確保し屋根勾配は置き土の可能性にも配慮して45°程度までの3点に留意した。

骨組みは主柱3本とも又首で、これに割り材の桁を三角形に架構固定する。この桁交点即ち主柱の又首部に外堤上地面から長尾垂木を斜架する。但し出入りに想定される南側のものは地面までは達せず主柱上から頂部のみとする。

桁の上にはさらに同寸の逆三角形の桁を載せて固定し、この交点にもたれかけてそれぞれ外堤地面に突き挿した長尾垂木を配備し、床面中央上約3mで集束する。

このようにするとき各垂木の接地部間隔は2.0~2.5mとなる。そして炭化材の配置状況からしてこの間隔中間点からであり、これは短く副えの長尾垂木で柱上を通過する主垂木に寄せ架するものである。これで上層の骨格が出来上がる。

出入口部については外堤上に3穴の柱穴が対応するものとして、中央が棟持ち、両側は短い側

柱とこれを梁で結ぶ、棟持ち柱から垂木の中ほどへは短い棟木を通すこととする。これで骨組みは終わり、垂木上に横巻きのちカヤ屋根を葺くがその上にさらに土を載せるとすると屋根表面上にも横材を間配することが必要であろう。つまり最も普通に得られる上は“粘土混じりの妙”であるとその安息角は約37°<sup>※6</sup>とされているからである。

採取した炭化木材の樹種<sup>※7</sup>についてみるとノグミ、クリ、クヌギなどである。これらはすべて環孔材であり乾重量はやや軽いか中庸程度で割り易く、曲げには概して強い特性のものもある。特にノグミは直材が得易い。針葉樹の例えスギなども用いた可能性もあるが、これは焼けることにより粉末状になり易いことから、原形が残り難く確認出来なかったのかもしれない。

(杉原)

## 註

※1 付録「樹種の判定」参照

※2 雲南地方弥生・古墳時代堅穴住居事例（円形プランを主とし比較的全容の分るものに限った）

町村	遺跡名	遺構No.	床面プラン	床面積m <sup>2</sup>	土柱数 <sup>†</sup>	その他	年 代	報告書年(調査)	参考文献等
仁多	須坂	1号	方形	4.7×9	4	外壁にテラスを設けず	古・前	1996	①
		2号	偶丸方形	4.4×(4)	3	土柱多し	古・前		
横田	渓谷	A 3号	偶丸方形	3.5×3.5	2	外壁に垂木底、出入口幅40cm 3段ステップ	古・中	1981	②
	日燃田	2号	偶丸方形	4.6×4.5	?	焼失後土盛りの二次床面あり	弥・後	1979	③
同様	1号	円形	4.5	?	外壁に垂木底、出入口部小柱穴、後宮に排水小管	(弥・前)	1987～88		④
	2号	偶丸方形	3.6×3.55	2	5号を改修拡大したもの、外壁に垂木底	(古・中)			
	3号	円形	6.3	6		(弥・後)			
	4号	円形	4.5	2		(古・後)			
	5号	偶丸方形	4.0×(1)	1		(古・前)			
	6号	方形	3.6×(3.6)	6	主柱壁際に2列、炉不存	(古・中)			
	7号	円形	4.3×3.8	5		(古・前)			
昭原	的場尻	S I -01	円形	6.3×6.0 6.6×6.2=12 <sup>2</sup> 12穴室例が7腰溝に杭柱あり、出入口・2段ステップ			1998	⑤	
森V	S I -02	円形	2.6×?	2		弥・後	2001		⑥
	S I -03	円形	約4.0	不明	焼失？	弥・後			
	S I -04	円形	約3.7	不明	中央ピットあり	弥・後			
	S I -05	円形	約6.4	?	焼失？	弥・後			
	S I -06	円形	5.2×4.9	並列?	他に6穴あるもプラン不明、焼失？	弥・後			
	S I -07	円形	3.3×3.2	不明		弥・後			
小丸	S I -08	円形	(約6)	4?	(1／2残存)	弥・後			
	S I -09	方形	3.2×(2.3)	?		弥・山	2002	⑦	
	S I -07	円形	3.1	?		弥・山			
本次	S I -12	円形	3.7	2	焼失	弥・山			
		円形	8.8	6	小腰片嵌合	弥・後	2000	⑧	
	S I -01	偶丸方形?	4.5×4.5	2	改修一重	弥・後	2001	⑨	
細ノ内	S I -07	偶丸方形	8.6×6?	5?	改修二重	弥・後	1		
	S I -03	円形	約5	4~5	残存不良、時期不明	?			
	S I -01~12 (円?)	未詳	未詳	未詳	未詳	弥・山	2002	⑩	
北原本郷	家ノ郷B-2	円	4.5	不明		弥・中?	2002	⑪	

参考文献等

- ①仁多町教育委員会：『伊坂遺跡・他』 1997
- ②横田町教育委員会：『掛谷遺跡・他』 1982
- ③杉京・東森：「II飛田遺跡の概要」 『季刊文化財』36号 島根県文化財愛護協会 1979
- ④横田町教育委員会：現地説明会資料 「国竹遺跡」 1988
- ⑤頴原町教育委員会：『的場民遺跡』 1998
- ⑥頴原町教育委員会：『森V遺跡』 2001
- ⑦島根県教育委員会：『小丸遺跡』 2002
- ⑧本次町教育委員会：『宇田遺跡』 2000
- ⑨島根県埋蔵文化財調査センター：現地説明会資料 「道ノ内遺跡」 2001
- ⑩島根県埋蔵文化財調査センター：現地説明会資料 「七原本郷遺跡」 2002
- ⑪島根県埋蔵文化財調査センター：現地説明会資料 「家ノ後II遺跡」 2002

※3 正岡・松本編：『弥生土器の様式と編年 一山陽・山陰偏一』 木耳社 1992

※4 付編「<sup>14</sup>C年代測定報告」

※5 付編「地磁気年代測定報告」

※6 日本土木学会：『土木工学便覧』 共立出版 昭和28

※7 付編『炭化木材の樹種判定』

## VII 繩文時代の遺構と遺物

### 1. 遺構（図VII-1～4）

調査範囲はほとんど全面にわたって斐伊川の流れによって度々、浸食と堆積を繰り返したところであり、縄文時代の遺構は全く残っていないかった。

遺物は夥しい数の破損した土器片と剥片石器や礫器が自然堤防の川礫群近くで集中して出土した。これら遺物の堆積部位のレベルは現在河川の水位と約3mの高差であり、今でも数年ごとの増水時には冠水するレベルである。

斐伊川はこの付近に始まって西へ約5kmの間は地質の関係であろうか特に蛇行が著しく、流路の高差も約60mあり、河床には亘岩や流れに削られた母岩などが多い。しかし、その間には短いながらも淀むところがあって岸辺には湿地のところも在る。検出した土器溜り遺構はこのような場所で、流れの屈曲点内側にあたる。その後も緩やかな流れで運ばれ堆積した砂土によって被われていた。

川に沿って長い調査区の中ほどは南後背の尾根の張り出し延長上にあたり、礫石が堆積し突出した自然堤防となっていて川の屈折点となっている。土器溜りはこの突出部の上流側と下流側の両脇湾入部に限られている。そして遺物は細砂混じりの暗色土中にあった。

この土器溜りは3か所であり、これを調査作業順に下流側（西）からI～III群と呼ぶこととした。I群とII群は隣接しており、本来は連なっていたものが、その後の水流によって中間部分が流失したため、結果として河岸上面あたりのII群と、諸部の急斜面のI群に分断されたものようである（図IV-1参照）。

このII群には2号七偶と土製の块状耳飾りや葺形耳栓なども混入していた（図VII-2）。

III群は突出地形の上流側（東）でわずかに湾入する地形のあたり、淀み或は小さな後背湿地状の深まりに面した斜面と、その深まり部に集中するもので、土器は概して大破片が多く、1号及び3号の十偶もここから出土した（図VII-4）。

石器数についてみると打欠き石錘はII群とIII群で、打製石斧や石鎌などの剥片石器はII群がやや多く、次いでIII群で多く出土した。

また、これら土器溜りの面を辿ると、調査区のほぼ全面は粘質土の地山面であり、そこには上流部（東）から下流部へと幾条もの小さな流路溝がところどころに鷦鷯穴をつくりながら断続していた。この溝の深まるところや、小鷦鷯穴状の窪みにも縄文土器片が嵌り込んでいた。この状況から墓地遺跡の大部分にあたる調査区の範囲は、ほとんどが一時期滯水面下に没して波食を受け、縄文時代の地表面はすべてが失われたものとみられる。

このように縄文の生活面はほとんど失われていたが、唯一遺構とみられるものは土器溜りIII群域に近く、石積みの列が地下り方向に約2.5mほど認められた。右列下端は淀みに向うようであるが、中途から失われたものともみられる。この性格については何らの手がかりも無いが、水場

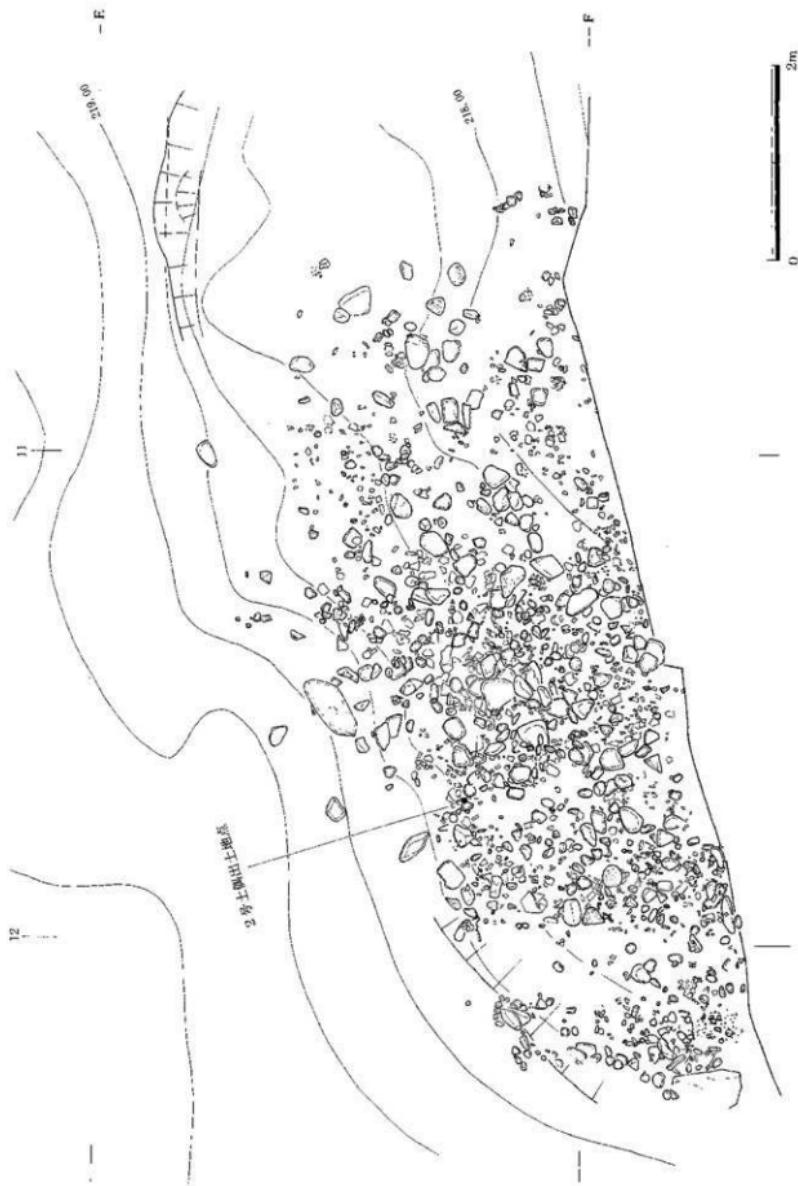
図VII-1 土器埋りⅡ 遺物散布状況（1次・2次）



遺構の一部端であるのかもしれない。

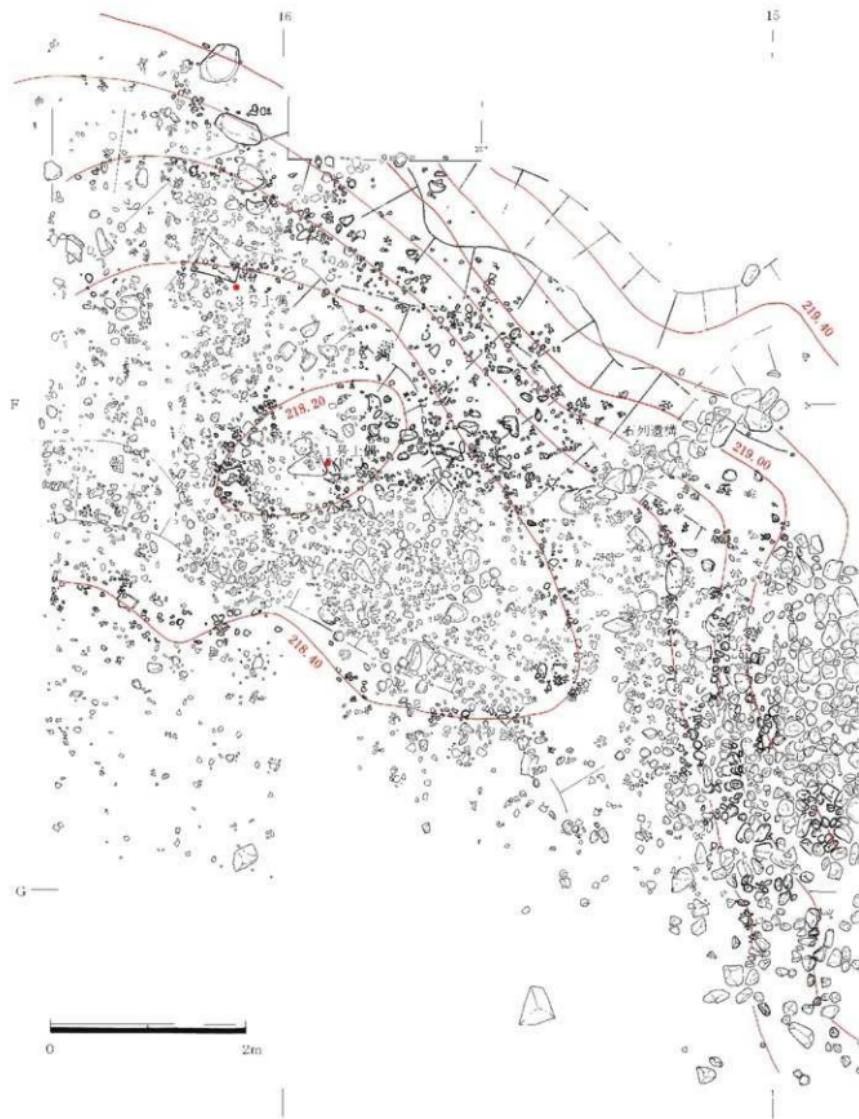
(杉原)

図VII-2 土器割りⅡ 遺物散布状況（3次・4次）





図VII-3 土器溜りIII 遺物散布状況（1次・2次）



図VII-4 土器溜りIII 遺物散布状況（3次・4次）

## 2. 土器

I～III群の土器溜りにおける土器堆積をみると時代順に層をなして堆積したものではなく、また各土器溜りの内容をみてもほとんど同じような性格であったため、一括して扱うこととする。ただ詳細に見ていくと中期の土器片はII群から、後期は中葉以降になるとIII群からの出土が若干多い傾向が見られる。これは調査区内を何度も洗った流水の流路が異なるためではないだろうか。

### 1) 繩文時代中期土器 (図VII-5・6)

1～4は口縁付近の外面に、繩文地の上に円形の刺突文を巡らせるものである。円形刺突文も施文工具が竹管のもの（1・2）と棒状工具のもの（3・4）がある。5は波状口縁をもつ土器片で外面に繩文を施した後、薄い粘土帯を貼付けその上にC爪型文を施している。内面は波状の最下端部を結ぶラインより上は繩文地、下はナデ消している。口唇には細かい爪型文が巡る。

6・7・9・10は繩文地に僅かな隆起帶をもうけ、それに細かい爪型文を施すものである。8はベースは繩文地でつまみ出した隆起帶に半裁竹管による刺突がみられるものである。これらはいずれも概ね太く擦りの強い繩文を施している。船元I式に併行するものと思われる。

12は口縁内外面に繩文を施し、外面には貼付け突帯をもつ。13は外面は繩文地で口縁に沿って刺突文が並ぶ。内面はきれいになでている。14・15は折返し口縁の土器片で内外面とも繩文地である。16～22は繩文地をもつ胴片で、16は貼付け突帯に爪型文を施し、22は繩文に深浅があり、棒状工具による押引文を施す。

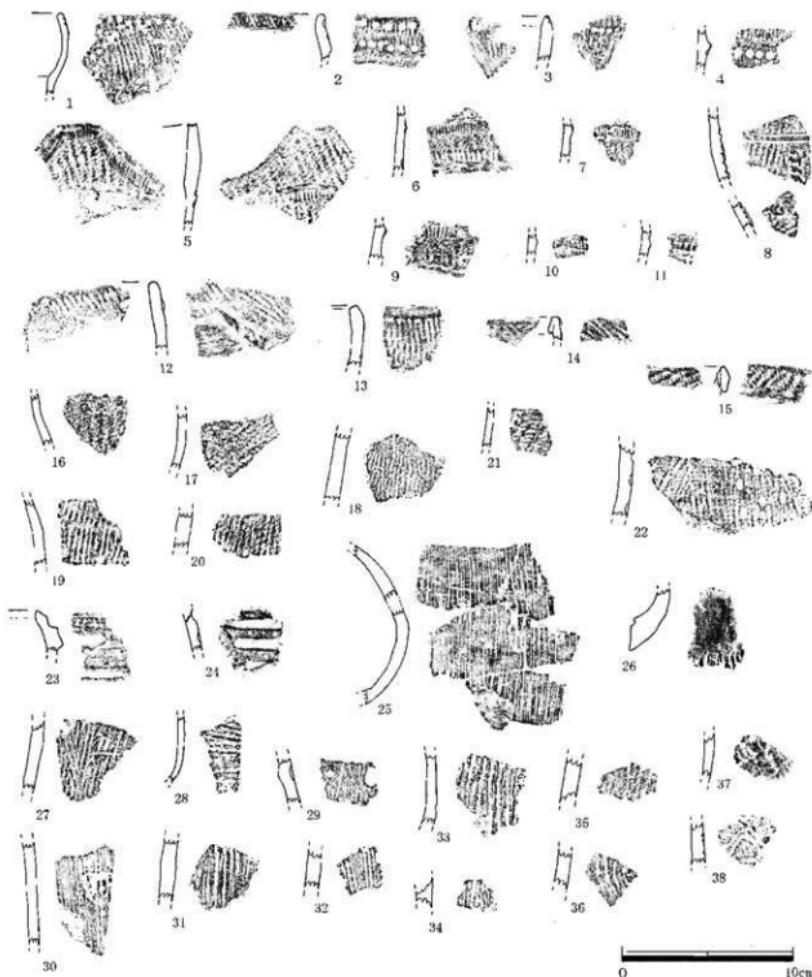
12～22は船元期のもので、14・15は波子式併行とみられる。

23・24は凹線文をもつものである。23は器壁は厚く、外面に太く深い凹線を施し、尖り気味の口縁には刻みをもつ。24は器壁は薄く、太く浅い凹線をもつ。25～32は縦位横位に条線文をもつものである。26はキャリバー型の25と同一個体とみられ、把手状の土器片である。37は繩文地に貼付け突帯し爪型文を施し、38は繩文地の上に半裁竹管による平行線を施す。これらは船元III式に併行するものと思われる。

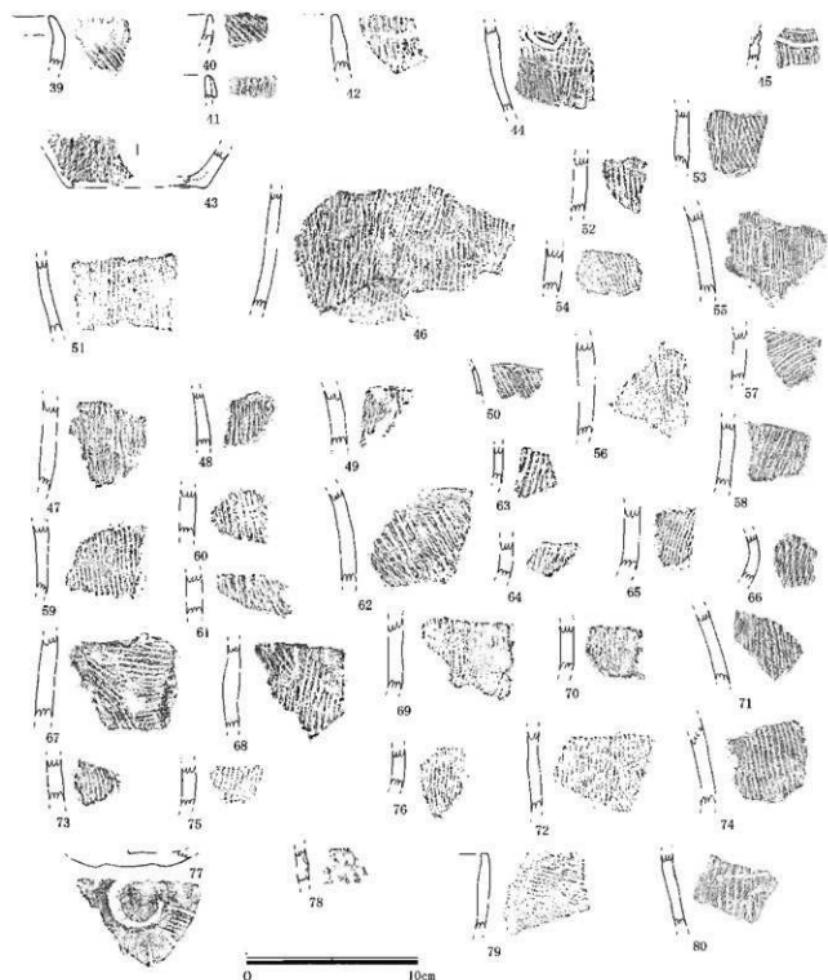
船元期のこれらの土器のうち、繩の擦り方向はZ擦りが9割であった。

39～77・79・80は撚糸文土器である。口縁部分は尖り気味におさめるものが多く、撚糸が縦走するもの（41・42）、斜走するもの（39・40・79）がある。43は僅かに中央に向かって凹入する底部である。77は外面に撚糸と沈線が施され、底面周に沿うようにくぼみが巡る。77は後期の磨消繩文の可能性もある。44～76はキャリバー型深鉢の胴片である。いずれの外面は撚りの強さ、大きさの様々な撚糸文を施す。撚りの強いもの（56・69・71・72・75）、撚りの弱いもの（52・60・62・63）、撚りの粗いもの（66・80）などがあり、その上に凹線文をつけるもの（41・45）がある。78は先尖りの施文具で押引文を施す。

これらは出木II式に併行するものであろう。



図VII-5 縄文中期土器（1）



図VII-6 縄文中期土器（2）

## 2) 縄文時代後期精製土器<sup>註1</sup> (図VII-7~27)

### a 中津式土器 (図VII-7)

ここに採りあげたものは磨消縄文土器である。小片の為全体像は捉えにくいが、断片的に特徴を見ていく。1は振幅の小さい波状口縁で、外傾しながら立ち上がり内湾気味に短く丸くおさめる。波頂部の下方に「J」字文を配している。沈線は幅広で深く、曲線的な文様をもつ深鉢である(1・2)。

3・4は強く内湾する口縁で、沈線が広く深いものである。口縁端に竹管文が並ぶもの(3)、口唇を平坦にし縄文を施すもの(4)がある。

6・11・14は口縁上のモチーフを持つものである。6は満巻状の突起の下方に逆「J」字文を配する深鉢で、沈線は途切れている。11は突起部のみの小片のため上下左右も不明である。14は突起上下面を円形、平坦にし縄文を区画するために沈線で下書きし、刺突をおこなっている。

波状口縁のもののうち波の振れの大きいもの(5・7・9・12・18・23・28・33・34・40)と振れの小さいもの(8・13・17・20・22・25・26・30・31・35・38)があり、口縁端はほとんどが内側に肥厚するものか、そのまま丸くおさめるものである。8は沈線を押引きにより施している。31は内湾する波状口縁の波頂部下方に孔をもうけ周りを縄文帶で囲んでいる。

水平口縁のものの中では口縁端をフラットにしあげるもの(16・24・27・39)、肥厚帯をもつもの(10)、尖り気味におさめるもの(15)、丸くなるもの(19・21・29・32・36・37・52)がある。小片の為器種不明のものが多いが、ポール型浅鉢状を呈すもの(36・37)もみられる。これらは内面が比較的きれいに磨かれている。

この時期の浅鉢は内外面を磨くものが多いのが特徴であるが、そうすると3・4・31・37は浅鉢の可能性が高い。

つぎに胴片を見していくと、直線的に沈線に囲まれた縄文帶がみられるもの(41~44・47~49)、横位の縄文帶から垂れ下がる溝巻文をつけるもの(45・46・50・51)がある。

53は壺型もしくは小ぶりの鉢で、口縁外にのみ5mm程の幅で縄文帶を施し、外面はきれいにミガキ、内面は粗くナデている。縄文帶には微かに赤色顔料が塗布された痕跡が見られる。55は壺で内外面ともきれいにナデ、ている。溝巻状の縄文帶が施されている。

54・56・57は耳付壺の突起片である。いずれも内外面をきれいにナデるが、溝巻部に縄文を施すもの(56)と溝巻きのみのもの(54・57)がある。

これらの土器は中津III式の範囲内におさまるものであろう。中津式と見られる土器片の8割がZ撚りの縄文であった。1と2については中津I・II式に遡る可能性もある。

### b 福田K II式土器 (図VII-8~14)

図VII-8の58~69は浅鉢である。いずれも外縁は磨消縄文が施され、内面は磨いている。外面を見てみると溝巻文が見られるもの(58・61・62)、上向きの溝巻きと下向きの溝巻きが組み合



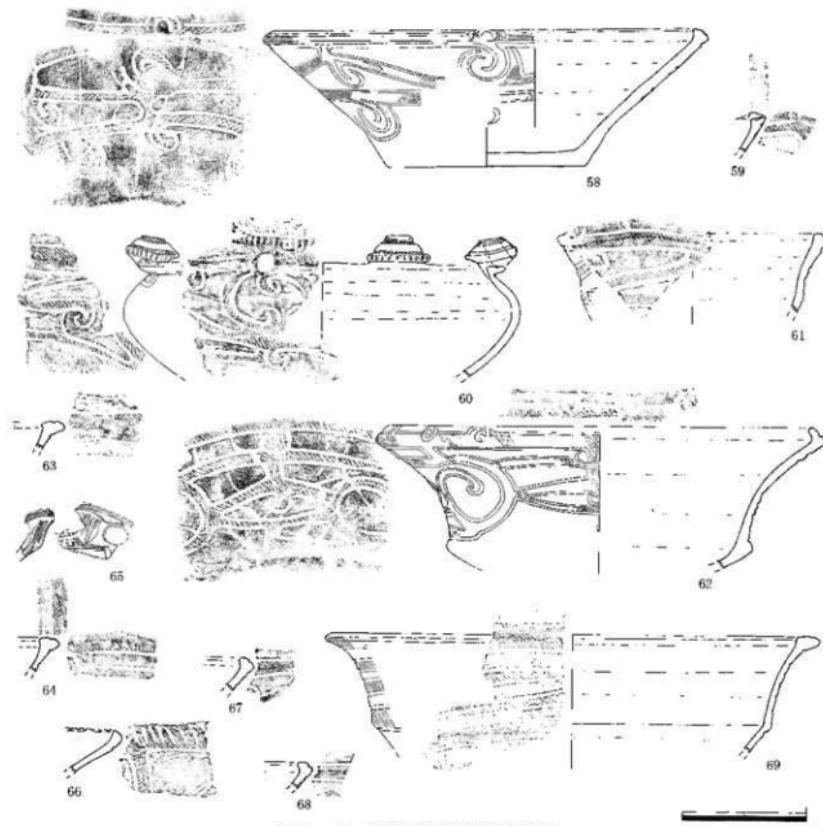
図VII-7 純文後期精製土器（1）

わさっているもの（60）、数本の縄文帯を横方向に直線的につけるもの（64・69）等がある。58は沈線が途切れている。口縁上の突起は60・65でみられ、60は満巻状の突起で65は小片のため定かではない。

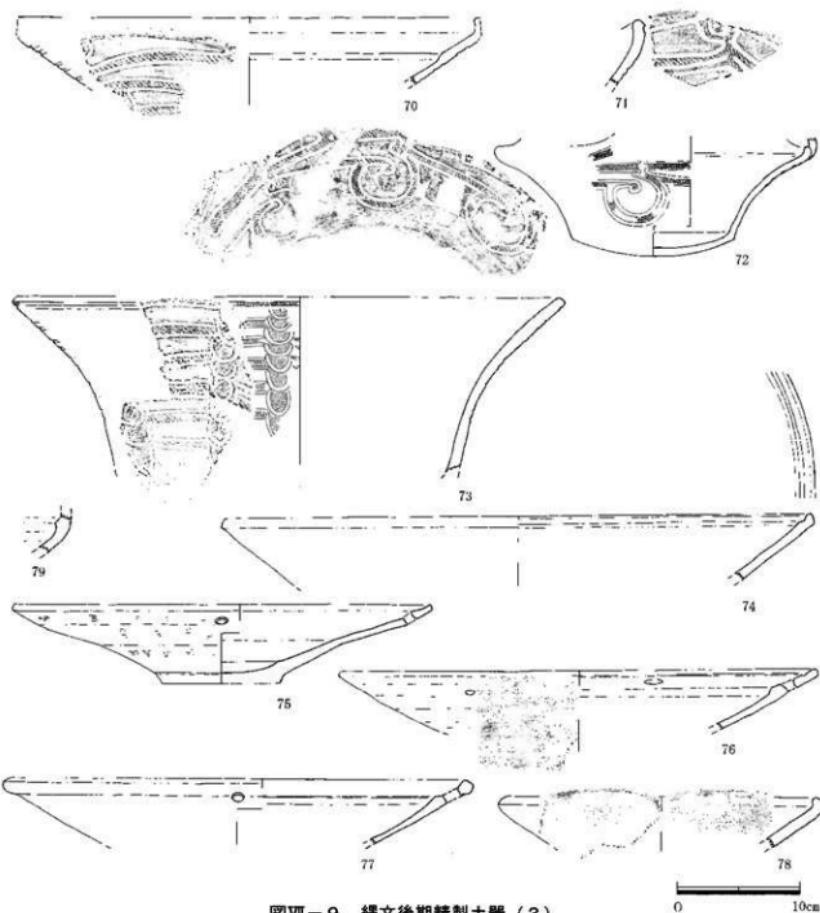
63・64・67・68はいずれも口唇に1条の沈線を周囲させ、59は僅かな波状口縁で波頂部にキザミを施す。66以外は口唇を肥厚させ1条の沈線を巡らせていているが、66はほとんど肥厚せず口唇にはキザミが施され周回する。

58・62・67・68の縄文帯部分には赤色顔料が塗布させた痕跡が認められる。

図VII-9・10も浅鉢である。有文で水平口縁のもの（70・73）、波状口縁のもの（71・72）、無文で水平口縁のもの（74～78）がある。



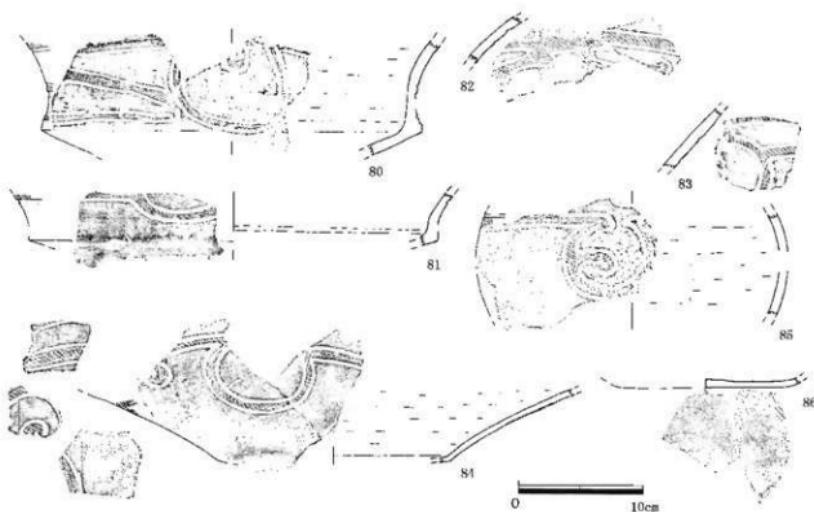
図VII-8 縄文後期精製土器（2）



図VII-9 繩文後期精製土器（3）

0 10cm

70は器形が外傾しながら伸び口縁近くで垂直方向に屈曲しておさめる。71は幕地遺跡では唯一の3本一組の沈線に囲まれた繩文帯をもつものである。72は丸底で外反し、口縁近くで垂直におさめる。73は口縁から数本の鎖状の繩文帯が垂下し、それらをつなぐ直線的な繩文帯が梯子状に施される。繩文帯には赤色顔料が施されている。75は7ヵ所穿孔されているが焼成前穿孔が4つ、補修孔として焼成後穿孔が3つであるようだ。76・77は内外面ともきれいにミガキ、口縁部には焼成前穿孔がなされている（76は90°間隔で4孔か）。78はやや小型の浅鉢で外傾し口縁で短く内湾しあさめる。79は外面はナデ、内面はミガキ調整で浅鉢であろう。80～82は腰部で強く屈曲



図VII-10 縄文後期精製土器（4）

し外反するタイプの浅鉢で、83・84・86は底部から直線的に広がるタイプである。

文様を見ると80・81・83～85は退化した渦巻文を幅狭な縄文帯が結ぶ構成である。85はポール型浅鉢で「J」字文が横を向いている。底部を見ると、丸底になるもの（80・81・84）平底のもの（86）がある。83・84は同一個体であろう。80には赤色顔料が塗布された痕跡が認められる。

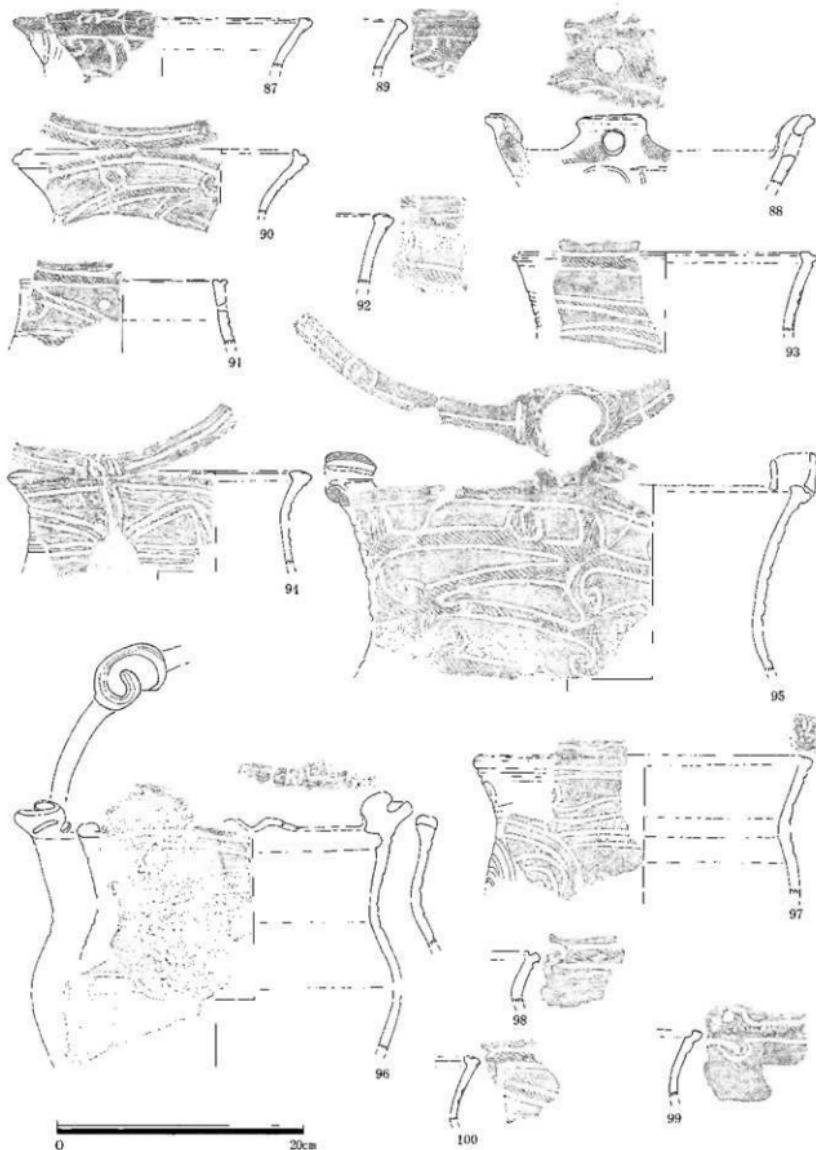
図VII-11は深鉢である。突起を持つもの（88・95・96）を除くと水平口縁である。いずれも口縁部を肥厚させ1条の沈線を巡らせてている。

器形は縫れた頸部から外反するもの（87・89・90・92・94・97～100）、内傾するもの（91）がある。

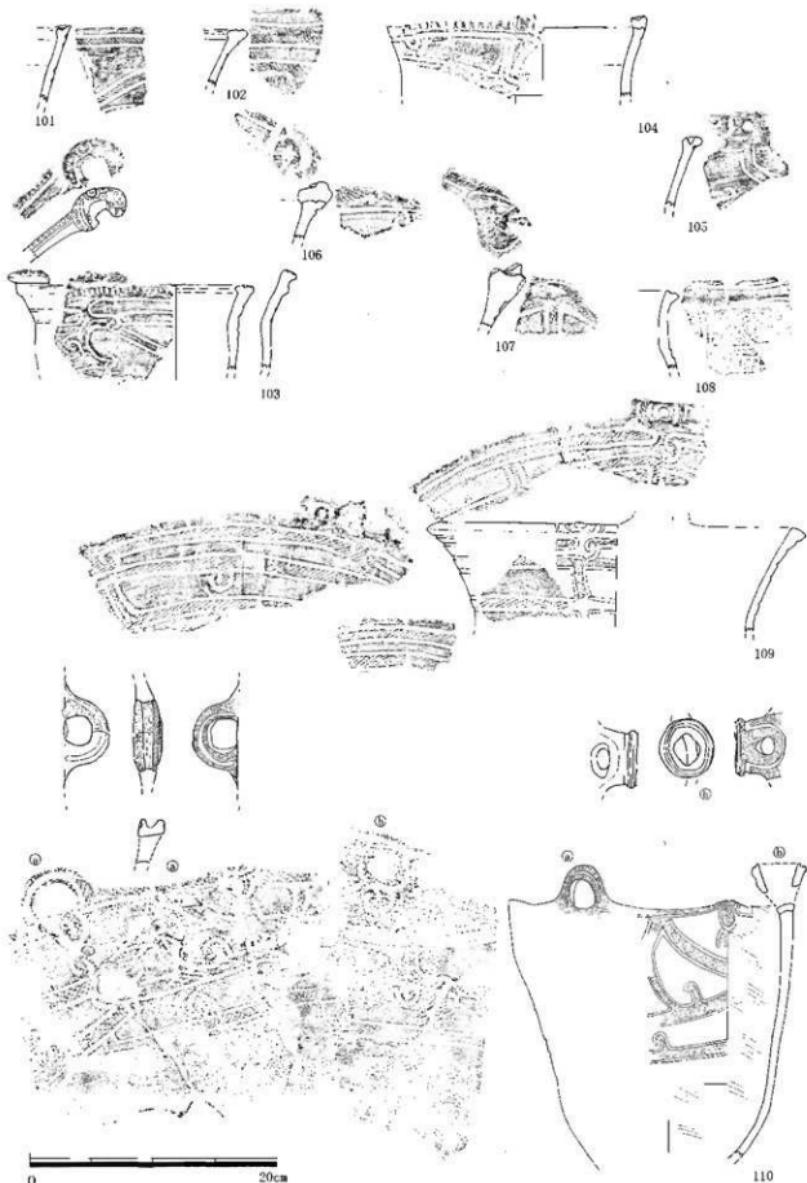
縄文帯は中津期のものと比べると総じて狭くなる。87・93は狭い縄文帯の割には沈線が太い。88は口縁上に筒状の突起を持つ。突起には $2 \times 2.2\text{mm}$ の吊手孔を穿ち。沈線は途切れながら施され、二度引きした形跡も見られる。94は太めの沈線をもつが沈線間の縄目は見られない。外面頸部には沈線により三角文を周回させるようだ。95は穿孔された筒状突起を持つ大型の深鉢で、異なる向きの複数の渦巻文を有するが、同一文様が器体を巡るものではない。

96は渦巻状突起と低い山形突起がそれぞれ対になっていて、4つの突起が口縁上に巡るものと思われる。渦巻状突起の内面には小指大の窪みが見られる。それぞれの突起の下に渦巻きが退化したような鎖状の太めの沈線が垂下する。沈線間の縄文は見られない。

97は文様は96と類似しているが水平口縁土器である。



図VII-11 繩文後期精製土器（5）



圖VII-12 繩文後期精製土器 (6)

図VII-12は深鉢である。器壁に磨消繩文を施すもの（101・102・106・107・109・110）、沈線のみで繩文を持たないもの（103～105）がある。

101は僅かに波をうつ口縁で口唇は尖り狭い繩文帯をもつ。106・107は口縁上に渦巻状突起をもつものである。

沈線のみで繩文をもたないものの中でも口唇を巡る沈線の外側にキザミを施すもの（103・104）が見られるようになる。103は繩文の有無の違いはあるが文様構成は95と似通っている。109は直線的な細い繩文帯が横位に施され、口縁部には103と同様な半円状の突起がつくものとみられる。外反しながら肥厚した口唇部にはこの時期に一般的に見られるような沈線が巡らない。

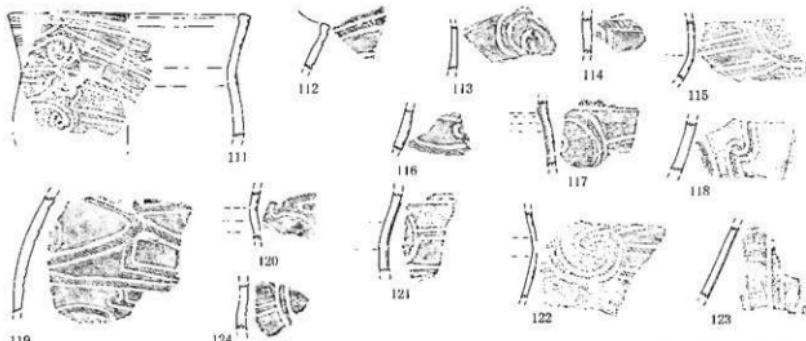
110は突起の下方には渦巻文が見られるが、その他は不規則な文様が全体的に左下がりに施される（脇部の渦巻文も不規則）。口縁部の突起は2つ（突起a・b）残っているが配置を考えると $120^{\circ}$ の位置に存在する3単位土器であるようだ。またその単位の中間に小型の突起があり緩やかな波状口縁を呈している。突起aは口縁上でアーチを描く吊り手状のもので、突起bはアーチ状につけた上面をさらに垂直方向にラッパ状にするものである。いずれの突起にも沈線と繩文が見られる。

図VII-13の111・112は深鉢の口縁片、113～123は深鉢の脇部片である。

111は水平口縁でやや肥厚させた口唇を持ち、幅広の沈線は途切れがちで渦巻きも退化した印象を受ける。繩文帯は幅狭で文様は粗雑な手法である。112はやや内側へ肥厚させた口唇を持ち、波状口縁で繩文帯は幅狭である。

脇部片は幅狭な繩文帯をもつもの（114～118・120・122・123）と沈線のみで繩文を持たないもの（113・121・124）がある。

118は脇下部片で繩文帯、渦巻文が紙位に施されている。119は補修孔が認められ繩文帯には赤色顔料が付着している。器形、内面のミガキ調整等を勘案すると62のような浅鉢であるかもしれない。



図VII-13 繩文後期精制土器（7）

0 10cm

図VII-14は壺型土器と突起片である。125～127は口縁片でいずれも磨消繩文である。125は内傾する口縁をフラットにし沈線を巡らせ、その外側に繩文を施す。126は内外ともきれいに磨いた表面に幅狭の繩文帯を施し、赤色顔料を塗布している。127は内済しアクセントをつけやや肥厚させた口縁を尖り気味におさめる。沈線は太く深い。

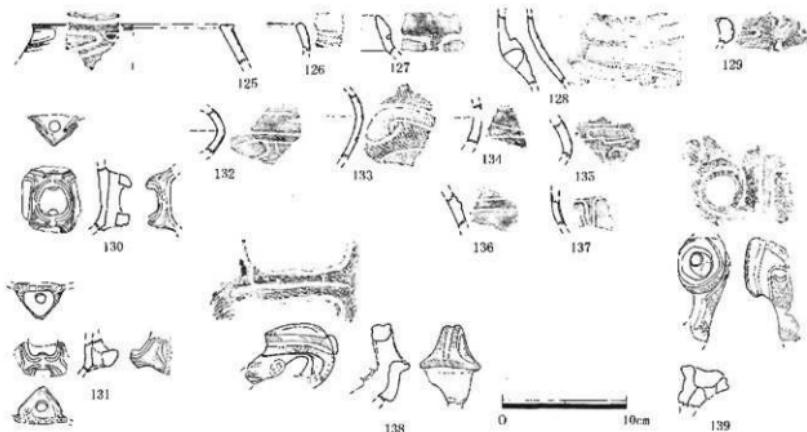
128は注口上器の口部である。その口部へ繩文帯が集約するようだ。繩文帯のうちの上方のものは粘土紐を貼付け両端に沈線を引き、降起帯に繩文を施している。外面の区画外は「寧にミガキ、内面はナデ仕上げである。

129～131は耳付壺の耳部である。129は器壁に粘土を貼付け、沈線・繩口を施し天地へ穿孔する。残存部を見るとこの耳部がほぼ口縁近くであるようだ。130・131は鳥の嘴が嘴を開けたような形状を呈しており、外面は磨消繩文、内面はナデで粘土紐積上げ痕が確認できる。また130では沈線で区画された繩文帯に赤色顔料の痕跡が認められる。

132～137は壺型土器の胴部片である。132・134・135は細く直線的な沈線に挟まれた細い繩文帯をもつ、胴最大径部の破片である。133は太い沈線、幅広の繩文帯をもち、137は「J」字文を押引きによる沈線でおこなっているがしっかりした「J」字文であることからやや古い様相を呈すものと見られる。

138・139は鉢の口縁上突起片で溝巻状のもの（139）、ラッパ状に開いた突起にさらにアーチをかけたもの（138）である。139は残存する外周全体に赤色顔料が塗布されている。

ここにあげた上器は島2式（福田K II新式併行）と呼ばれる一群のうちであろう。この時期の繩文の撚り方向を見ると9割がZ撚りであった。



図VII-14 繩文後期精製土器（8）

c 緑帶文系上器 (VII-15~25)

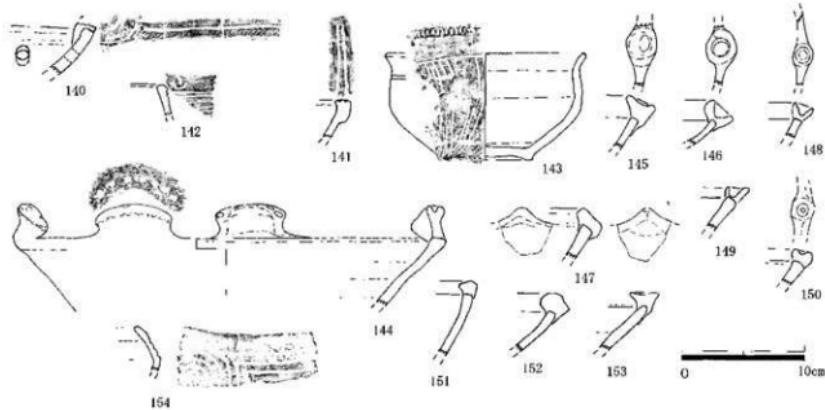
縄帶文土器の浅鉢である。140は口唇に太い沈線を巡らせその外側に縄文を施し、渦巻状突起をつけるものである。外面は粗くナデ、内面はミガキ調整である。突起の下方には焼成前穿孔がなされるが、補修孔と考えられる焼成後穿孔も見られる。

141は口縁を外側に広く肥厚させ、内面側にもアクセントをつける。口唇は2条の沈線が口縁を巡り、山形口縁を呈する。142は内傾し口唇を丸くおさめるものでその口唇には沈線による渦巻文が、外面には沈線が横位に施される。内面はきれいに磨く。

143は低い台をもつ底部を有し、胴を張り頸部がやや縁れ口縁は外反気味に短くおさめる。口唇には細かいキザミが巡り外面は頸部を巡る1条の沈線から4本一単位の櫛描沈線がアーチを描きながら底部に達する。

145・146・148~150・153は口縁上に渦巻形、もしくは円形の突起片で147・151・152は瘤状の山形突起をもつものである。突起部分以外の口縁部は肥厚していない。144は外傾気味に伸びて口唇部で上面を水平に仕上げる。その口縁部に半円状突起がやや内側に傾いてつく。突起の上面には円形の刺突文が並ぶ。

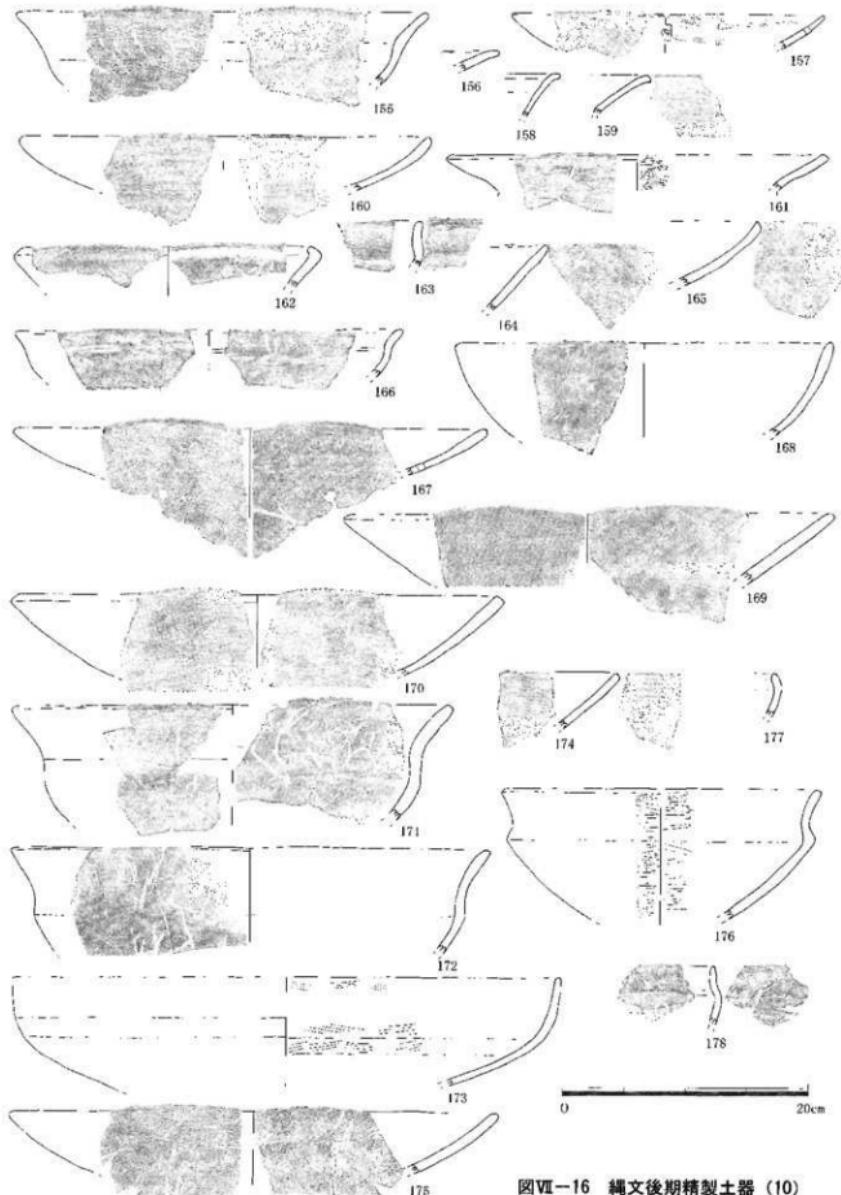
154は口縁直下の最張部から弧く内湾するもので内外面は磨いている。外面は円形とその円形から横位に繋がる太めの沈線文が施されている。文様、器形等は高知県の松ノ木式に非常に似た<sup>※2</sup>印象を受けるものである。



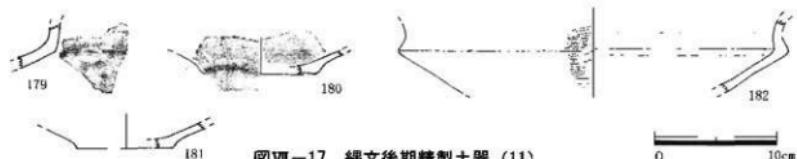
図VII-15 縄文後期精製土器 (9)

図VII-16・17は無文精製浅鉢である。

器形は口縁から下がった位置の内面にアクセントがありやや深めのタイプ (155・166・171・172・176・178)、胴部から口縁にかけて内湾気味に立ち上がるもの (157・160・165・167・168・170・



図VII-16 繩文後期精製土器 (10)



図VII-17 縄文後期精製土器 (11)

173・175・177)、直立、もしくは外反味に立ち上がるもの (156・158・159・161・164・169・174)、外開きの口線を強く内湾し短くおさめるもの (162) がある。157と167には補修孔と見られる焼成後穿孔が認められる。

179・182は腰部で強く屈曲する部分で内外面ともきれいに磨く。図VII-16のアクセントをもつタイプの著しいものである。180・181は底部であり、180は底面円周僅かに内側が凹入し、181は平底である。181は接地面の底部面が擦れている。

図VII-18は有文精製深鉢である。

183・185～187は沈線のみで縄文をもたないもので184・188は磨消縄文をもつものである。183は縫れた頸部から外反し肥厚した口線をもち、口唇には2条の沈線とその外周にキザミ目を施す。頸部には1条の沈線を廻しその下へ弧の大きい渦巻文を施す。器表の沈線は太く深い。185は縫れが緩く口線に向けて外傾する。口唇は内側へ肥厚し口唇には1条の沈線と渦巻文を施す。その渦巻文から垂下する3本一組の沈線が、縫れ部で土器を巡る2本の沈線でとまる。186は頸部から直線的に立ち上がり、口唇は外に肥厚する。口唇には1条の沈線を廻らせ、僅かに山形口線になる箇所は外面がさらに肥厚し、外向きに円形の窪みがあり沈線を半分廻す。その山形口線の下方に太めの沈線が縱方向に施され、頸部を巡る沈線でとまる見られる。内面はきれいにナデしている。187は外反し外側に肥厚する口線をもち、山形になる口線部分では突起がつくのであろうが破損していて詳細はわからない。外面には縦方向に太く深い沈線が施される。

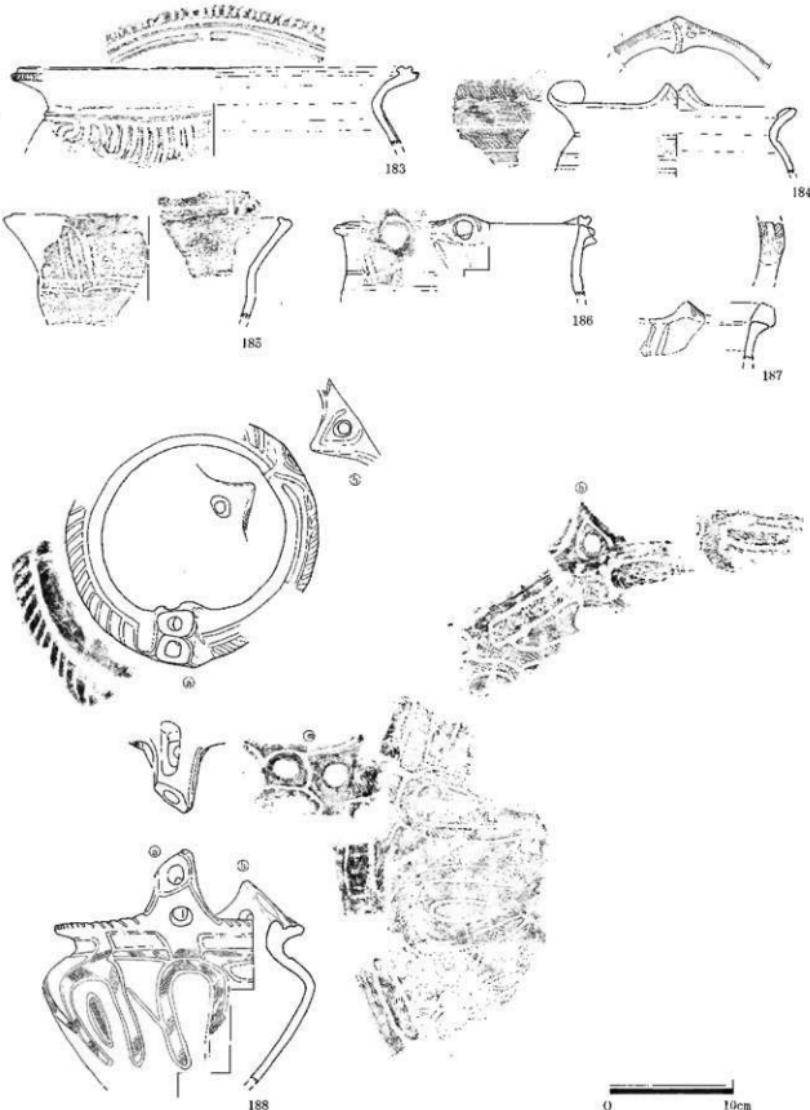
184は口線を内側に肥厚させる山形口線である。口線外側に縄文を施し巡らせるが沈線は見られない。外面文様は頸部より下方に磨消縄文が施される。

188は3単位突起をもつ磨消縄文深鉢である。突起は山形のものとアーチをかけた数箇所に複数の孔をもつものがある。3単位のうちの2単位が違う形状を呈していることから残りの1単位も形が違うものと考えられる。口唇は外側に肥厚させ1条の太く深い沈線を廻らせ、その外側にはキザミ目をもつ。突起の下・中間から縄文帯が垂下し馬蹄状文様に繋がる。馬蹄状文様は6個で器表を巡る。この文様は同一パターンの繰り返しではない。頸部の文様区画を見ても縄目の有無が区々である。馬蹄状文様の中に梢円形の縄文帯が見られる箇所もある。

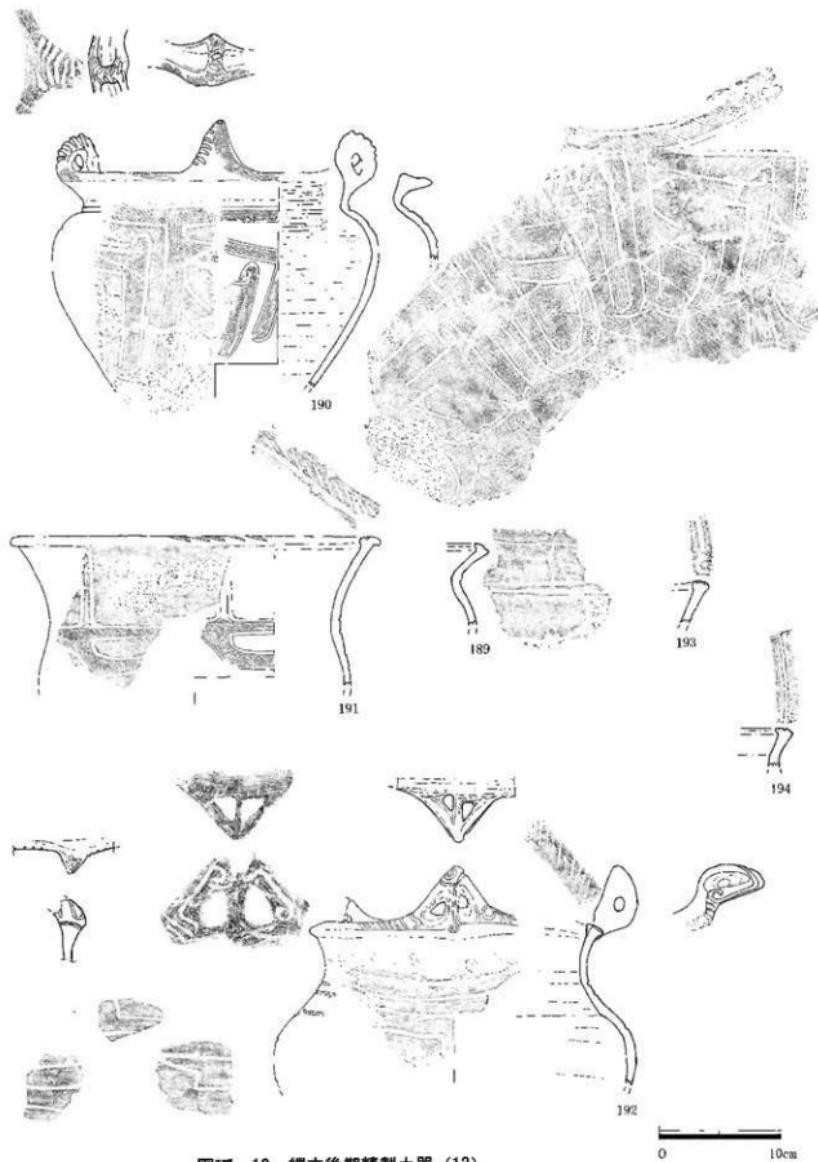
図VII-19も深鉢である。

口縁部に注目してみると口唇を肥厚させ沈線を廻らせるもの (189・191・193・194)、肥厚させた口唇で沈線をもたず突起をもつもの (190・192) がある。

190は口線部は中心部がやや窪み、その外側に縄目を施し口線上突起につながる。突起は残存



図VII-18 縄文後期精製土器 (12)



図VII-19 繩文後期精製土器 (13)

する2つの突起の配置から3単位かと思われるが、残存する2つについても口縁上でアーチをかけるのは同様であるが、大きさ、綱目とキザミ目の手法は異なったものである。口縁文様帶とは独立した頭部以下の文様は逆さまになったJ字文が特徴的で同一文様が右下がりに流れようであるが細部に注目すると完全な同一文様とは言い切れない。

191は外側に肥厚した口縁に太い沈線が巡り、その外側にキザミを作う。口縁部から垂直方向に2本の沈線が施され、頭部以下に施される文様帶に繋がる。綱文帶は狭い。189は頭部で強く屈曲し外傾しながら伸び口縁は内側に肥厚しおさめる。文様は口唇に1本、頭部に2本器表を巡る沈線のみである。内外ともナデ調整である。193・194とも頭部の盛れ部まで残存しておらず、口唇を巡る沈線とその外側に綱文、渦巻きの退化したような半円文が見られるもの（193）と沈線のみのもの（194）である。

192はやはり口縁部の文様帶と頭部以下のそれが独立したもので、口縁部はキザミ目をもち山形突起には穿孔され嘴のようにも鼻のようにも見える形状を呈し、接合はしないが同一個体の口縁で前述の突起より低い山形突起もある。突起と口縁の残り具合を見ると3単位または2単位であるようだ。頭部以下は綱文は見られず直線的な細めの沈線が横位に施される。内外面とも粗く磨かれている。

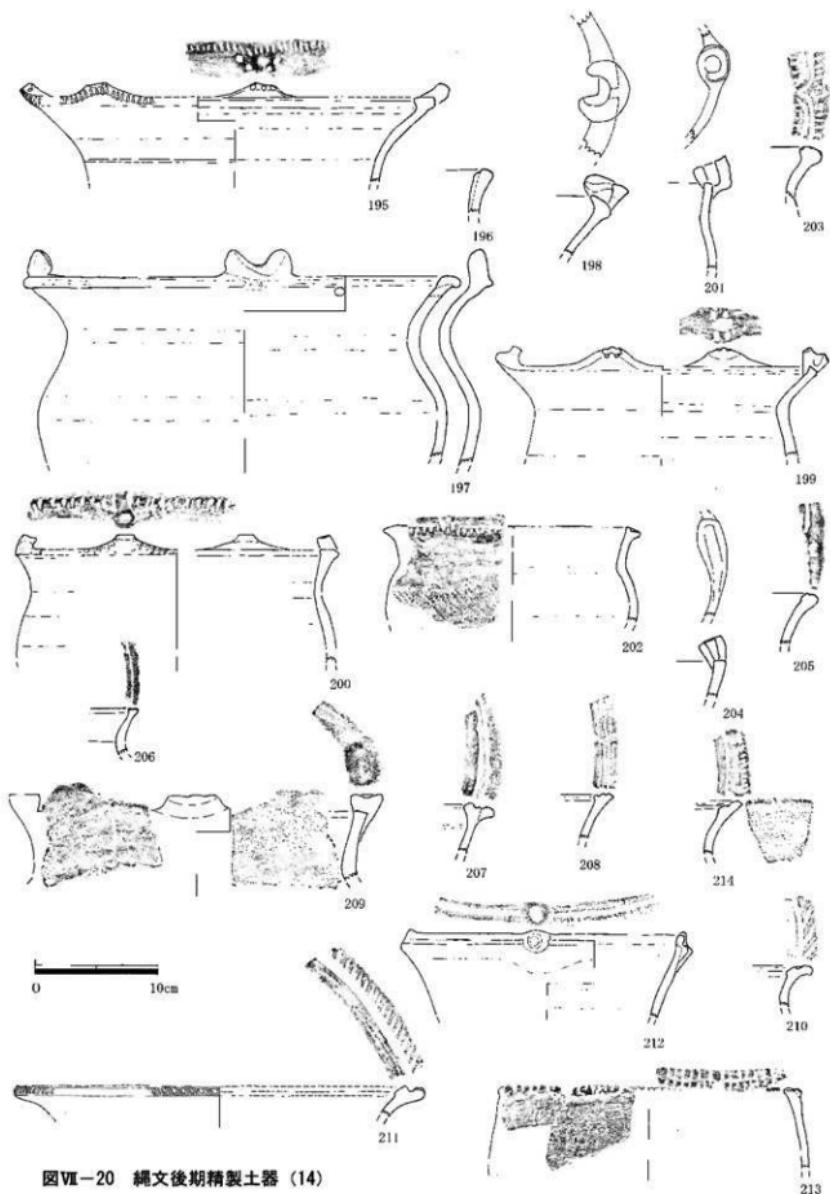
図VII-20も深鉢の口縁部である。

基本的にはすべて水平口縁で突起のあるところで少し波を打つ。196・202・203・205～208・210・211・213・214は突起をもたず肥厚した口縁を有するものである。そのなかには沈線のみをもつもの（196・205・207・208）、沈線にキザミをもつもの（202・203・206・210・211・214）、キザミのみをもつもの（213）があり、沈線にキザミをもつものの中にはキザミ部に綱文を施すもの（211・210）がある。205は破損していて沈線のみであるかどうか判断しづらい。

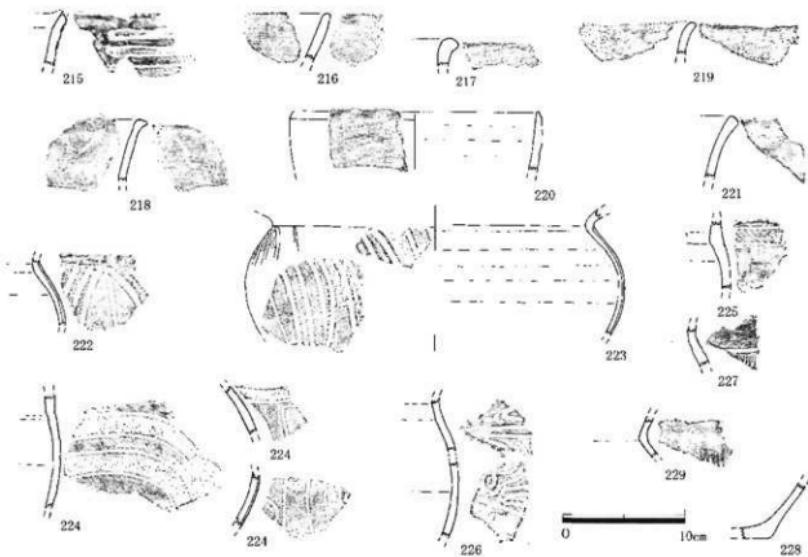
195・200は口唇にキザミを有し突起が低く、上方から見るとボタン状突起である。195はボタン状突起の内面側に円形刺突文が施される。198は半円状突起に孔をもち、201は渦巻状突起がつく。197は大型で残りの良いもので、突起は二股で太く短くおさめる。口縁部直下には補修孔と見られる焼成後穿孔がある。199は丸く肥厚させた突起に橢円形の縫みを施し、内外側にそれぞれ二つのキザミをつける。204はラッパ状に開く突起の片側が口縁に吸収された形のもので、中心に溝状の縫みをもつが突起が口縁に吸収されるあたりで溝も消滅する。209は丸く肥厚させた突起で上面はやや痩んでいるがフラットな印象を受ける。212は外傾気味に直線的にのびる口縁外側に、粘土紐を貼付け肥厚させ太く深い沈線を巡らせ、さらにその上に貼付けボタン状のアクセントをつける。

図VII-21も深鉢で口縁部（215～221）、胴部（222～227・229）、底部（228）である。

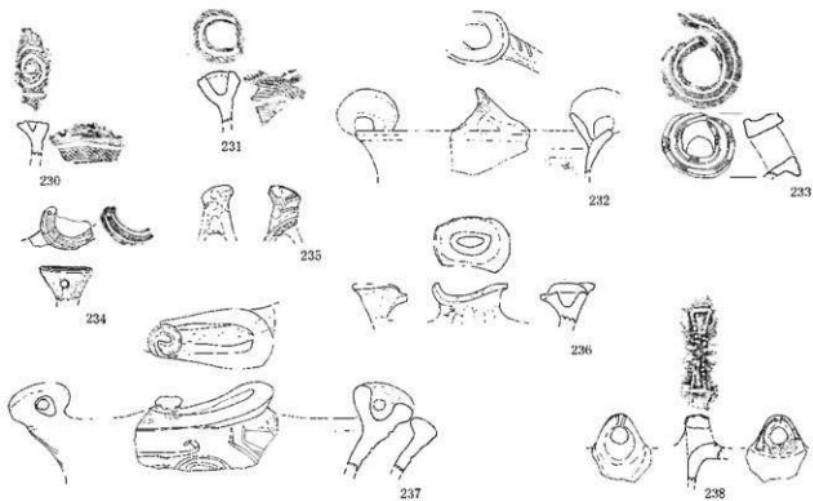
215は磨消綱文の口縁部で綱文帶が横位に施される。内外面ともミガキ調整である。216～221は無文の精製深鉢の口縁である。口唇を肥厚させるもの（217・218）、外傾して端部を丸くおさめるもの（216・221）、僅かに波状口縁をなすもの（219）、直立気味に立上がり口唇を尖り気味



図VII-20 縄文後期精製土器 (14)



図VII-21 繩文後期精製土器 (15)



図VII-22 繩文後期精製土器 (16)

におさめるもの（220）がある。

222は縫れる頸部を巡る沈線直下で縦位に施される繩文帯は幅狭であるが、沈線は太く深い。223は222同様の文様構成であるがかなり大型品である。225外側の繩文帯は沈線が細く縄目は粗い。227は頸部にやや太めの沈線を1本巡らせ、そこから縦位に細めの沈線を施す。224はやや広い繩文帯をもち、大きな弧を描く文様構成である。226は渦巻文と見られる文様やそこへ繋がる沈線が見られるが繩文はない。229は226とは逆に頸部以下に繩文は見られるが沈線はない。228は精製深鉢の底部と見られる。器壁は薄手作りで平底の様相を呈する。

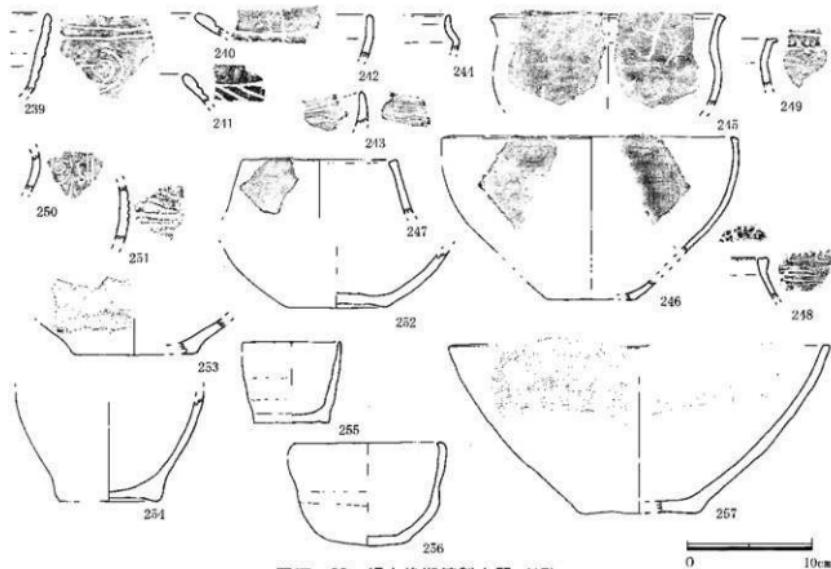
図VII-22は口線上の突起類である。

230は沈線で渦巻文を表わし、沈線間に繩文を施す。突起自体は著しく凹凸のあるものではなく、緩やかな山形を呈す。231の渦巻文は沈線の外側に繩文を施し、その縄目が外側の文様に繋がる。230・231は縁帶文土器でとりあげたがやや古いものであるかもしれない。232は外反する口縁端部内側直下に斜めにラッパ状突起を貼付けたもので内外面とも風化のため摩滅している。233は大型の渦巻突起で2本の沈線の外側に繩文を施し、内側は磨消す。縄目、沈線部に微かに赤色顔料の痕跡が見られる。234は半円状の突起である。端部に円形刺突をし、そこから2本の沈線が始まる。沈線間のみ繩文が見られる。口縁に沿う位置に焼成前穿孔が見られる。破損して不明であるが反対側にも対をなす位置に穿孔されているようだ。236はラッパ状に天に向いて開く形の突起で歪な形である。235は小指ほどの大きさで渦を卷いていて沈線、キザミが見られる突起であるが部位・角度とも不明である。237は口縁上に渦巻文とアーチが横に倒れたような突起がつく。外面文様は途切れる沈線で繩文は見られない。238は口縁上にアーチをかける突起である。アーチ部には沈線を引き、その後円形刺突文を施すものである。ただ破損して小片であるため詳細は不明である。

図VII-23は鉢または壺型土器である。239～241・248～251は有文の精製土器で、242～247・252～257は無文の精製土器である。

239は鉢の口縁部かと思われる。細い沈線で口縁付近2本の沈線が巡り、その下方に円形の沈線文が二重に施される。内外面とも粗いナデ調整である。240・241は無頸壺型土器で内傾し端部を橢円に肥厚させおさめる。横位に沈線を巡らせその下には斜位に沈線が流れる。249は口縁を外側に短く折り曲げ端部を水平にし沈線を施し、口唇外側にキザミをもつ。

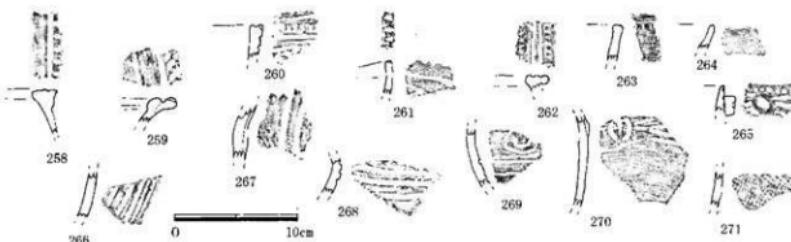
250・251は胴部である。250は円形と直線の沈線が縦位に施される。251は太めの沈線が放射状に施されるものと見られる。248は内傾し端部が直立気味に短くおさめる口縁をもち、口唇にはキザミを施す。242は内外をミガキ、直立気味に口唇を丸くおさめるもので、243はやや波を打つ口縁で口唇はやや尖り気味である。247は内傾する器形で、口唇はやや肥厚し水平気味におさめる。外面は丁寧にミガキ、内面はナデる。244は胴部に稜をなすなどのアクセントを有し、内外面ともミガキ仕上げである。245は緩やかに張出す胴部から微かに頸部が縫れ、口縁端部は僅かに肥厚し上面は平坦に仕上げる。全面磨いている。246は塊型の浅鉢で内外面とも磨く。257は



図VII-23 縄文後期精製土器 (17)

現存部の推定復元で口径30.8cm、器高13.8cm、底径9.8cmを測り、底部から外傾しながら直線的に伸びて端部は丸くなれる。この土器はもともと大型の深鉢で、その胴部以下を利用して浅鉢としている。口唇は緩やかに波打っていて二次加工を施し使用していたものと考えられる。

252・253は底部で252は僅かに凹入する底部で、253は平底である。254～256は小型の塊型の上器で、254はやや凹入する底部で器壁は薄い。内外面ともナデている。255はコップ型の上器で底部は平底、そこから端部まで直線的に伸びて尖り気味におさめる。内外面とも指痕が認められる。256はやや歪な印象を受ける塊型の土器で内外面ともミガキ仕上げである。



図VII-24 縄文後期精製土器 (18)

図VII-24は器種が不明なくらい小片であるが特徴あるものを載せてみた。258～265は口縁片、266～271は胴片である。

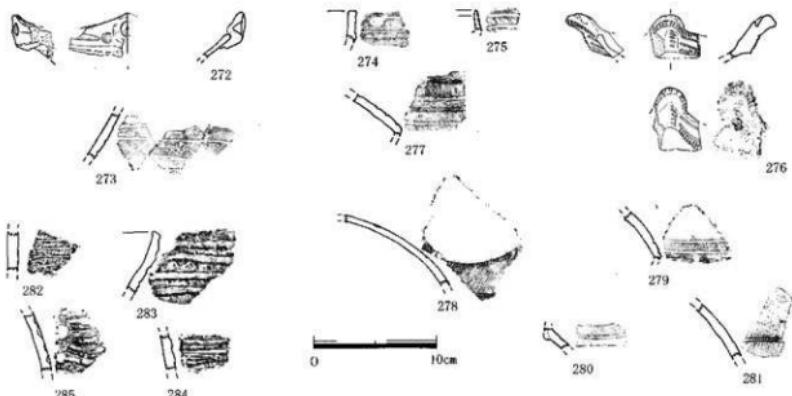
258・259は肥厚した口縁上に深めの沈線を一条巡らせ、その外側にキザミを施す。260は口縁端の文様は258・259と同様であるが端部は肥厚せず、外面にも沈線を施す。261は僅かに波打つ口縁で口唇にキザミをもち、外面は磨消繩文、内面はミガキである。262は肥厚する口縁上面に2本の沈線を巡らせ、その外側にキザミを施す。263は肥厚しない口縁で細い沈線の外側に細かいキザミをもつ。264は無文精製土器の口縁片で内外ともきれいに磨く。265は端部が尖る口唇で外面は端部直下に円形刺突文が並び、その下にボタン状突起が付き突起からの粗い沈線が見られる。内面は粗くナデる。266・268は太く深い沈線が施され内面はナデる。267は鉢の縁れてアクセントのある部位で、外面は太く深い沈線が縦位に施され粗い縄口の磨消繩文で内面はナデる。269・270は外面は沈線による文様のみで直線文と渦巻文が見られる。269は図VII-23の239と同様な文様構成であるようだ。271は外面は粒の大きな撚りの強い繩文で内面はミガキ仕上げである。

以上の十器は口縁部、頸部、胴部の文様が分離・独立する縁帶文土器の成立期である布勢式併行のものであろう。この時期の繩文の撚り方向をみると7割強がZ撚りであった。

図VII-25の272は口縁部外面に断面三角形の肥厚帯を貼付けている。肥厚帯の外面は円形の刺突文と沈線を施す。内面は粗くナデる。これは崎ヶ鼻式併行であろう。

273は細く浅い沈線間に結節繩文が施されるもので内面はきれいにナデる。彦崎K II式の範囲内であろうがその中でも古相の様相を呈す。

274は口縁端部を水平にナデ、外面には2本の細めの沈線を施す。器形が屈曲する部位以下は



図VII-25 繩文後期精製土器 (19)

破損の為不明である。鉢であろうか。275は器暈が3mm程で薄く先尖り気味の口端にはキザミを施し、外面には幅2.5mmの深い2本の沈線間に棒状工具による押引文を施すものである。残存する下端で強く屈曲するようであるがそれ以下は不明である。

276は浅鉢の口縁部である。波状に盛り上げ肥厚させた端部を僅かに外反させている。肥厚させた舌状突起部上面には棒状工具による刺突が見られる。突起を含む口唇外周と外面の稜をもつ部位にはキザミ目文を巡らす。口唇部と下方のキザミ目文間には刺突から始まる平行沈線を施す。<sup>中</sup>これに類似するものが下鴨倉遺跡から出土している。

277~281は壺型土器の細片である。277は刺突のある沈線と沈線のみの一組の平行する区間に摩滅していく判断しづらいが擦りの極く小さい繩文、若しくは巻き貝による擬似繩文を施すものである。278・280・281は刺突する沈線間に極く細い工具で同じ間隔、同じ角度で細線を施す。279は平行する刺突をもたない沈線間に細い条線が間隔・角度ともランダムに施される。

271~281は彦崎K II式の中でも新しいものであろう。

282~285は深鉢の口縁（283・285）と胴部（282・284）である。283・285はヘナリ属の巻貝によるかとみられる凹線文が施され、285は扇状压痕文も見られる。283は外傾する口縁が端部で内湾し先尖りにおさまる。285は口縁端部が欠損しているが、下端部の破面から強く屈曲する部位であり、口縁は内傾するものである。284は凹線が広いが282は細い沈線で沈線間にキザミ状の沈線を施す。

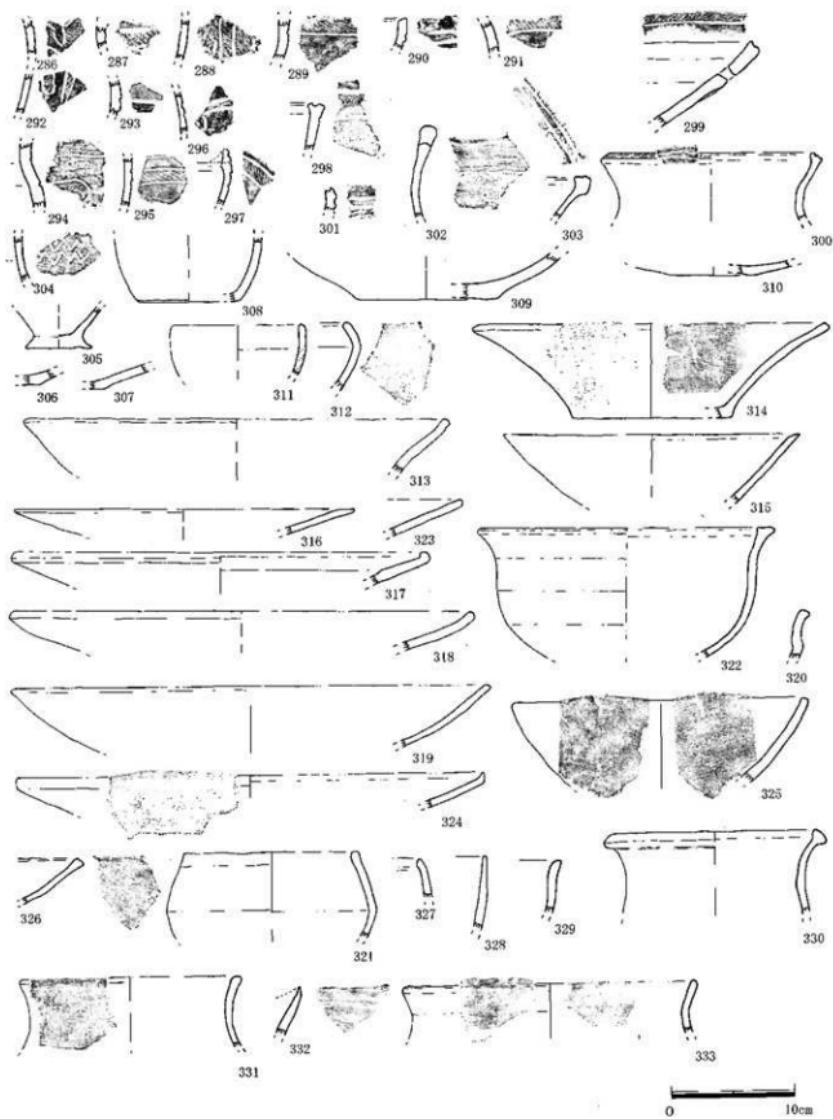
これらは巻貝による扇状压痕文と凹線文を特徴とする宮窓式である。ただ282については細い沈線が施文されていて、はたして宮窓式と捉えて良いのか判然としない。

#### d その他繩文後期精製土器 (VII-26・27)

繩文後期精製土器であるが時期を特定しがたいものである。

図VII-26の286~298・301・304は有文の精製土器片である。

286には沈線が途切れながらやや歪な菱形文が施され繩目は細かい。287は幅4.5mmで深めの沈線に粒の大きい繩文を施す。288は風化のため摩耗が激しいが細めの沈線に擦りの弱い繩文を縦位に施す。289は破片からそれほど大きくない鉢の胴が張る箇所かとみられる。沈線・繩の擦りとも弱く細かい。290は口縁片で太めの2本の沈線とその間に繩目をもつ。291は細目の沈線と細かい擦りの繩文を施すもので内面はきれいに磨く。浅鉢であるかもしれない。292は沈線、繩文とも浅く施している。293は深い沈線と細かい擦りの繩文をもつ。296の太めの沈線に囲まれる繩文帯は幅狭で磨消部分にも繩文がはみ出ている。298は口縁片で僅かに肥厚した口唇上面に1条の太く深い沈線を巡らせ、その外面に粒の大きな繩文を施す。口縁下にも沈線を施すが繩文は見られない。内面はきれいにナデる。294は磨消繩文であるが沈線を引いた後に繩文をつけた様子が癒え、磨消部にも繩文がはみ出す。所謂光埴繩文である。295は沈線が細め、繩文の擦りは強い。内外向ともミガキ付上げである。浅鉢であるかもしれない。297は波状口縁片で直線的な沈



図VII-26 繩文後期精製土器 (20)

線と強く細かい撚りの縄文を施す。301は口縁片であるが、上面には竹管による刺突文、外面には沈線を横位に施す。304は櫛状工具による山形文を施すものである。器のどの部位であるかも時期も不明である。

以上は後期前葉（中津～福田K II）の範囲内であろう。

299・300・302・303はいずれも口縁片で口縁部にのみ文様、特徴を持つものである。299は浅鉢で内面を磨く。僅かに肥厚した端部に沈線とその外周に縄文を施す。縄文には赤色顔料の痕跡が見られ、補修孔と思われる焼成後穿孔がある。300は縦れる頸部から外傾し端部はやや内面を肥厚させる口縁部で、上面には幅1mm程の2本の沈線を巡らせる。内面は丁寧にナデる。302は外反し肥厚した端部を丸くおさめるもので、波状口縁の様相を呈す。303は外傾し端部で内湾しておさめる口縁外面に太めの粘土紐を貼付け肥厚させ、上面に2本の沈線を巡らせる。

305～310は無文精製土器の底部片である。このうち浅鉢で内外面とも磨くもの（306・309・310）、外面は磨き内面はナデ仕上げのもの（307）、塊型で外面はミガキ、内面はナデるもの（308）、小型の、例えばコップ型土器の底部であろうか、高台と言えども低脚と言うべきかというような底部（305）がある。305はここで採り挙げたが晩期まで下るものかもしれない。

311～333は磨研、半磨研の土器片である。

311・312は小型の塊型土器で、311は直立気味に立ち上がる口縁で、312は外傾し端部近くで強く屈曲し内傾しておさまる口縁である。313～319・323～326は浅鉢、320～322・327～333は鉢である。

浅鉢の中でも外反し口縁端部を丸くおさめるもの（311・323）、外傾するが内湾気味にやや立ち上がり端部を丸くおさめるもの（313・318・319・325・326）、外傾し直線的に伸びて端部では尖り気味におさめるもの（315・316）、外傾する器形で口縁端部付近で短く内湾しおさめるもの（317・324）がある。

317の端部は丸くナデ、内面の口縁下方には稜を一段もち、324の口縁端部は先尖りにおさめる。鉢では322は頸部でやや窪み外開きの口縁端部は外側に肥厚する。320は肩部で稜をなすほどに頸著なアクセントを有し、そこから外反して端部を丸くおさめる。321・327は内傾する口縁をもち、327の口縁は内面に三角な稜をもつ。328・329は直線的に立ち上がる器形で前者は尖り気味に、後者は平坦にナデる。330・331・333は頸部でやや縦れ、外反する口縁である。330は端部が丸く肥厚し、331・333はナデておさめる。332は口縁を尖り気味におさめ、内面調整痕から波状口縁ではないだろうか。

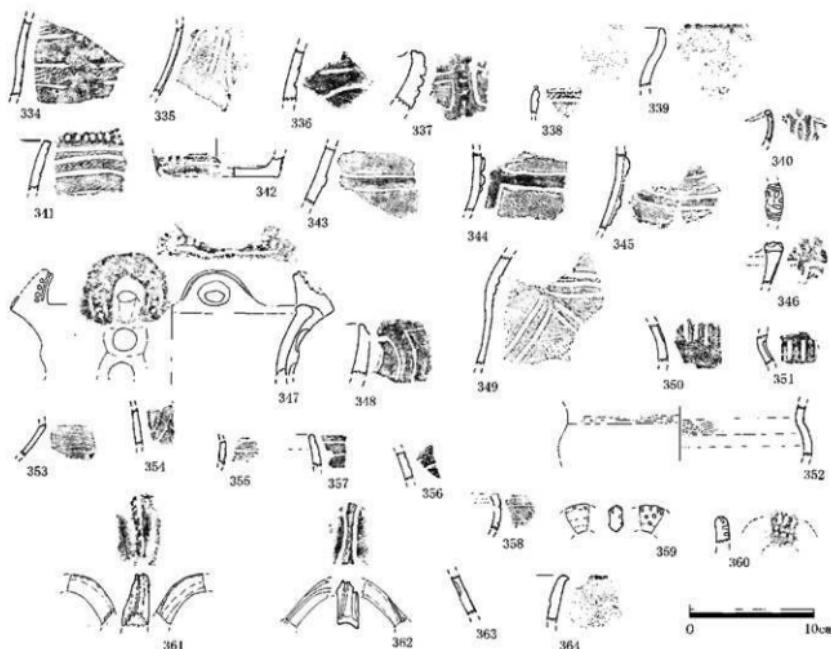
これらの土器も後期前葉におさまるものと思われる。

図VII-27の334～336は胴片で途切れる太い平行沈線とその間に粒の粗い縄文を施す。335は底部付近の胴片で太く曲線的な沈線、縄文は縦位に施される。336は5mm程の非常に幅広で浅い沈線を施す。337は深鉢の波状口縁で波頂部外面には縦位に粘土紐を貼付け隆起帯を作り、竹管による円形刺突文を施す。外面の沈線は細く、磨消縄文で内面は丁寧にナデる。これらは中津～福田K IIのうちであろう。

338は幅狭の縄文帯をもち、他は磨消す。339は頸部から外傾しながら端部近くで垂直に立ち上がり丸くななる口縁で胎土、作りを見ると粗製土器に入れても良いものかもしれないが、外面の口縁付近に風化していて判りづらいが縄文が認められる為、一応精製土器として採り挙げた。340は波状口縁の波頂部の細片で沈線が交差しながら沈線間に縄文を施す。これも中津～福田K IIであろう。

341は水平口縁の深鉢で縄文帯と比して沈線が4.5mmと幅広で縄文は粒が大きく擦りが弱い。肥厚しない口唇にはキザミを施す。中津期の所産であろう。

342は有文精製浅鉢の底部で外面は磨消縄文、底部・内面は磨く。外面施文部には赤色顔料が



図VII-27 縄文後期精製土器 (21)

塗布された痕跡が見られる。343～345は同タイプの文様構成で縄文区画は広く、2本の平行沈線間に粘土紐を貼付け隆起帯を作り、内面はいずれもミガキ仕上げである。343・344の外面の縄文には赤色顔料が塗布された痕跡が見られる。これらは同一個体である可能性もある。346は水平口縁につく突起部の破片で外面には沈線のみ見られ、突起部にはキザミ、沈線が施される。347は水平口縁にアーチ状の突起とそれから垂下する鎖状文様が貼り付けられる深鉢である。アーチ状突起上面には1本の沈線とキザミを施し、外面側には2本の沈線とその間にキザミを施す。そこから下方へ厚めの鎖状の粘土紐を貼付けている。これは貼付粘土紐と磨消縄文との違いはあるが、図VII-9の73と文様構成が似ている。福岡K II期のものであろうか。

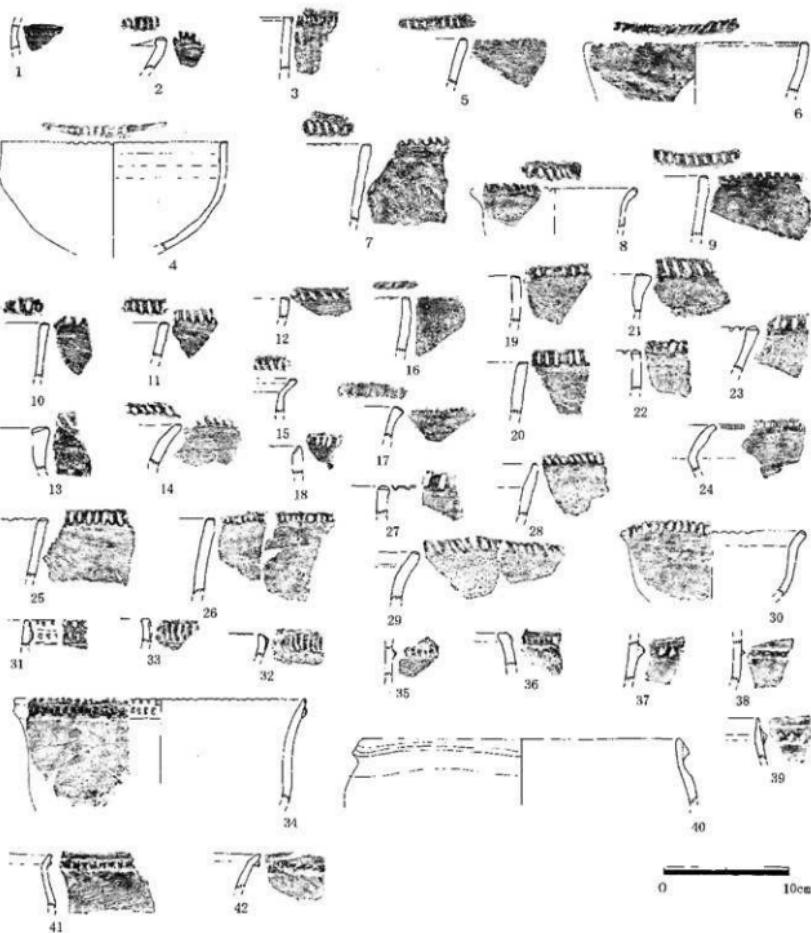
348は山形口縁を有する深鉢の口縁片であろう。外面は2本の沈線間が僅かに隆起し細かい縄文を施し、それ以外は磨消す。内面はきれいにナデる。349は深鉢の頭部で器形が縦れる箇所に3本の太めの平行沈線を施し下方には2本の沈線が斜位に施され、5～7条一組の櫛状工具による凹形文も見られる。これは頭部の沈線で区画された下方に文様があるものと見られることから布勢式のものではないだろうか。

350・351は同一個体である可能性もあるが頭部以下の外面に角張った箸状工具による沈線を施すものである。353は器種不明であるが破面の状況を見ると上端は強く屈曲する部位のようである。その屈曲する部位に細かい擦りの縄文が見られる。他は内外面ともナデる。354の器表には沈線内刺突が見られる。355・357の器壁は3mmと薄手で細い2本の沈線間に擬似縄文がみられる。357には補修孔も穿つ。356は細片で文様構成が判りかねるが2本の沈線のうちの1本に沈線内刺突をおこなっており、沈線間の幅狭の区画には擦りの弱い縄文が見られる。その他の部分はきれいに磨く。施文のある箇所には赤色顔料の痕跡が認められる。358は表面の沈線部にはすべて刺突を施し、沈線間には非常に擦りの強く細かい縄文を施す。353～358は彦崎K II期におさまるものであろうか。352は頭部が縦れる鉢で内外面とも粗く磨いている。

359～362は口縁上の突起の部分であるかどうか判然としないが、361は1本の沈線とその片側にキザミを施し、体部との接合面にもキザミをついている。362は2本の沈線がややひねりながら施されている。361・362は施文は違うが胎土、焼成、色調、破面の様子等から同一個体である可能性もある。359・360は上面に刺突とキザミ、外面に刺突文を施すものでこれらも同一個体であろう。363は内面に非常に特徴的な小指大の指頭圧痕があるためここに採りあげたが外面は粗面であり、粗製土器として採りあげた方が良かったかもしれない。時期は不明である。364は表面に5条の櫛描文を施すものである。

### 3) 縄文時代晚期土器 (図VII-28)

1の器壁は薄く頭部の縁部に細かいキザミを施す。2は僅かに口縁が山形を呈し、頂部では口縁がやや肥厚し上面にキザミを施す。外面は風化の為かざらざらし、内面はきれいに磨く。このことからも浅鉢であるかもしない。3は直線的に伸びて端部は平坦にナデ、口唇外面にはキザミを施す。内外面ともナデする。4は塊型の浅鉢で口唇にはキザミが所々に施される。内外面と



図VII-28 縄文晩期土器

もミガキ仕上げである。これらは晩期前葉の黒土B I式の範囲内におさまるものであろう。

5～30は口縁の器形は直立するもの、外傾するもの、頸部で強く屈曲するもの、内傾気味のもの等様々であるが、いずれにしても口唇にキザミを有し内外面ともナデ調整である。28と29は同一個体であるかもしれない。31は口縁直下と下方の突帯に2列にキザミ口を施すものである。突帯直下には1.5mm程の沈線を施す。晩期中葉の前池式の所産であると思われる。

32・33はいずれも口縁部で口縁直下にC爪型文を施す。32は口唇を水平にナデるが、33は口唇にキザミを有す。これらは晩期後葉の黒土B II式ないしはやや遅るものであろう。

34～40は表面に貼付け突帯を有するものである。34～39は突帯にキザミを施す。34は口唇と突帯に半裁竹管による押引文が施され、内面はナデる。40は内傾する口縁を有し、口縁直下に突帯を貼付ける。キザミは見られない。これらは黒土B II式併行のものであろう。

41・42は口縁片である。いずれも口縁直下に細めの突帯を貼り付け、細かなキザミを施す。41は外面が煤付着の為か黒褐色を呈す。内面は淡黄褐色である。42は外傾し端部さらに外に開きおさめる。これらは晩期末葉の沢田式であると思われる。

#### 4) 繩文時代後晩期粗製土器 (図VII-29～35)

口縁部・底部の形状・二枚貝条痕等の調整により大まかに分類した。

図VII-29は口縁部が内傾するものである。

1～4・7・10・20・21は内傾する口唇が先尖りにおさまるもので3・4・10には補修孔と思われる焼成後穿孔が見られる。20は尖る口縁部の内面直下に稜をもつものである。5・6・8・9・11～14・22・23は内傾する器形で口唇を丸くナデたものである。6は内面に僅かに炭化物が付着していた。15～18・19は内傾する器形で口唇を平坦にナデたものである。平坦な口唇でも内側にやや短く屈曲しておさまるもの(15・16)と直線的に伸びた器形がそのまま平坦におさまるもの(17～19)とがある。

図VII-30～32は器形がほぼ直立のものである。

24～28・32・38は器形がほぼ直立で口唇が先尖りであるもので、26は外面上に煤が付着していて煮炊きの痕跡を窺わせる。38の破面からは粘土紐積上げ痕が明瞭に判る。

29～31・33～37・39～53は器形が直立で口唇を丸くナデているものである。このなかで29・39・48は外面上に煤の付着が顕著に見られるものである。35・42は補修孔であろう焼成後穿孔が見られる。44は破面を見ると外面上から内面へ下がるような粘土紐の積上げ痕が明瞭なものである。47は直立で丸くナデるが僅かに山形口縁になるものである。

54～64は器形が直立で口唇を丸くナデるもので、58は外面上に煤が付着していて、61はやや小型の塊型の粗製土器で内面に僅かに炭化物が付着している。

65～78は器体が直立し口縁部を平坦にナデるものである。65は有文の粗製土器で外面上は端部から下方へ刺突文を施し、内面はナデる。67・68・71は塊型の小型粗製土器で、67は外面上に煤が付

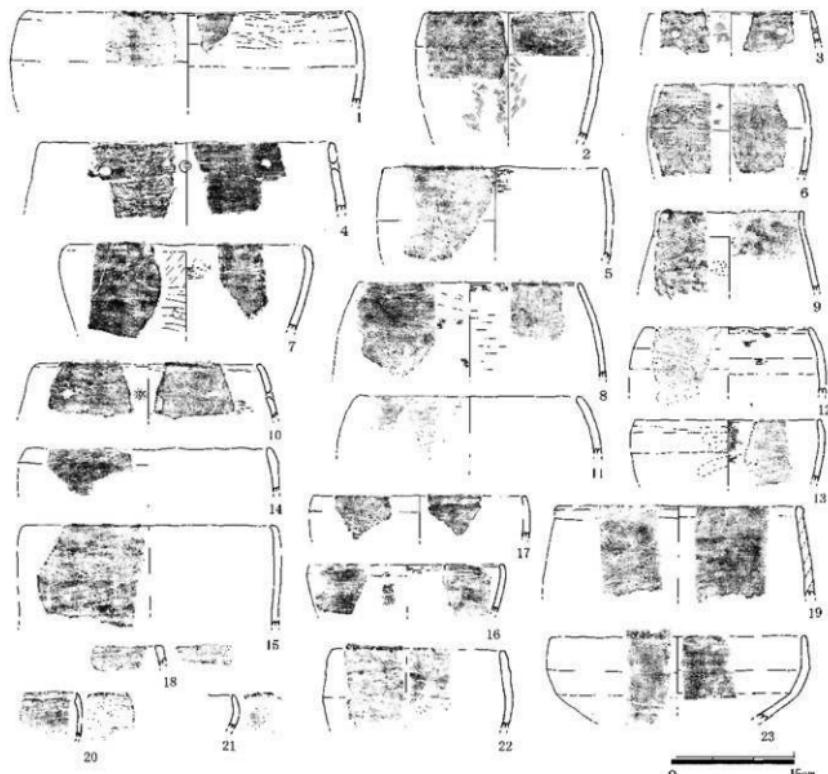
着していて、68の口縁直下の外面には指頭圧痕が並ぶ。73は内外両面に炭化物が付着した状態で出土した。75は口縁部外面にのみ煤が付着していた。

図VII-32の79・84・87・88は直立する器形で口唇が尖るタイプのものである。

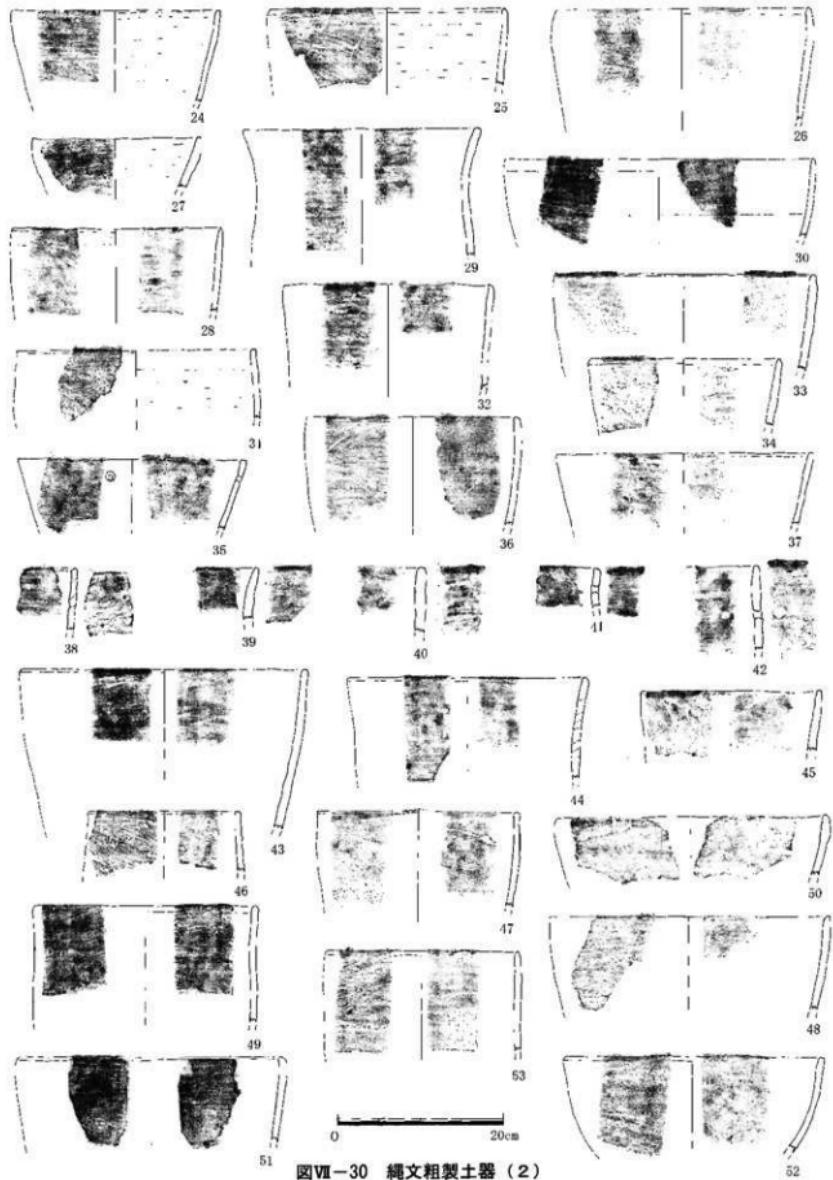
88は口縁直下に補修孔と見られる焼成後穿孔を施す。80～82は直立する器形で口唇部を丸くナデるものである。80は小型のコップ型土器である。上器の人気さと比して器壁は厚手で、破面を見ると製作時の粘土糰積上げ痕が明瞭である。83・85・86は直立する器形で口唇部を平坦にナデるタイプのものである。85は外面に煤が付着している。

図VII-33・34は器形が外傾、若しくは頸部でアクセントを有するものである。

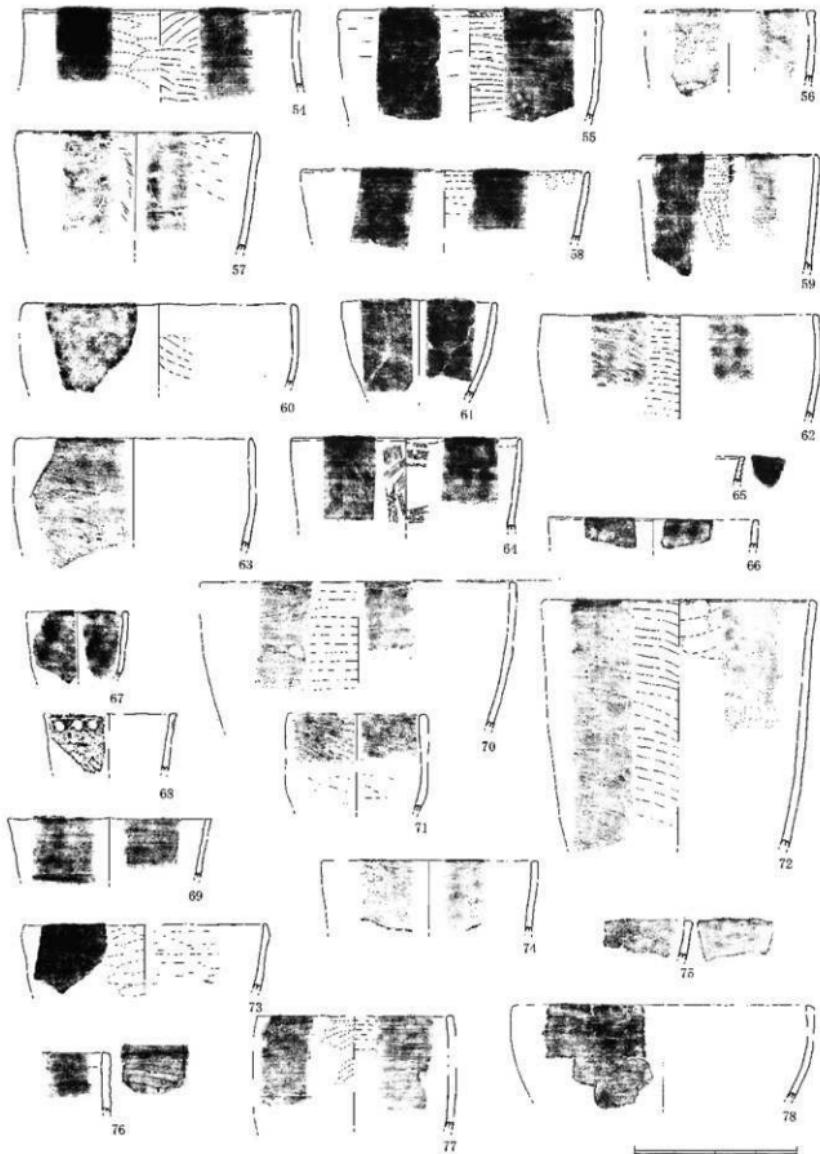
図VII-33の89・93・94・96・99～103・105・106・108～113・115・119は器形が外傾、もしくはアクセントを有するもののうち口唇を丸くナデるものである。



図VII-29 繩文粗製土器（1）

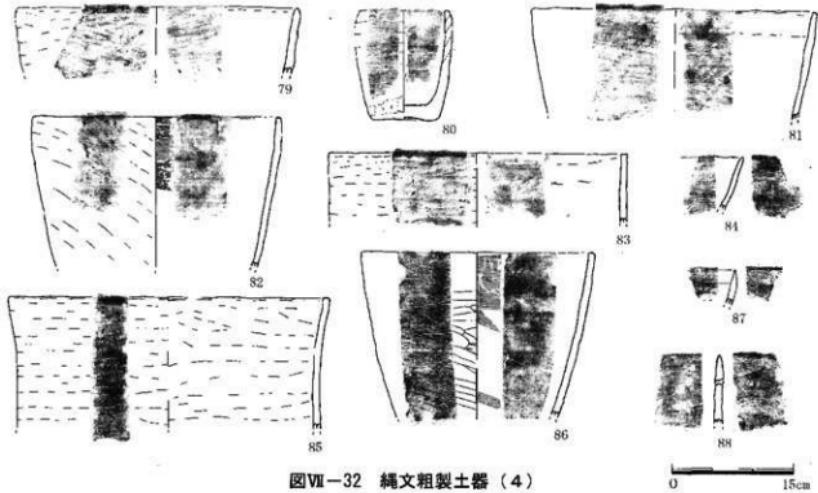


図VII-30 繩文粗製土器 (2)



図VII-31 縄文粗製土器（3）

0 20cm



図VII-32 縄文粗製土器 (4)

0 15cm

このうち94は頸部で屈曲し、外傾し短くおさまり、口縁は僅かに山形である。96・108・119は外面に煮炊きをした痕跡、煤が付着している。99は口唇外面に成形したときについたのであろう指頭圧痕が認められる。103は直線的にきた頸部から強く外傾し端部は内側に短く折り曲げるよう丸くナデるものである。106は補修孔と見られる焼成後穿孔を施す。

90～92・95・97・104・121は器形が外傾若しくはアクセントを有するもののうち、口唇が尖るタイプのものである。91・104・121は上器外面に煤が付着しているものである。

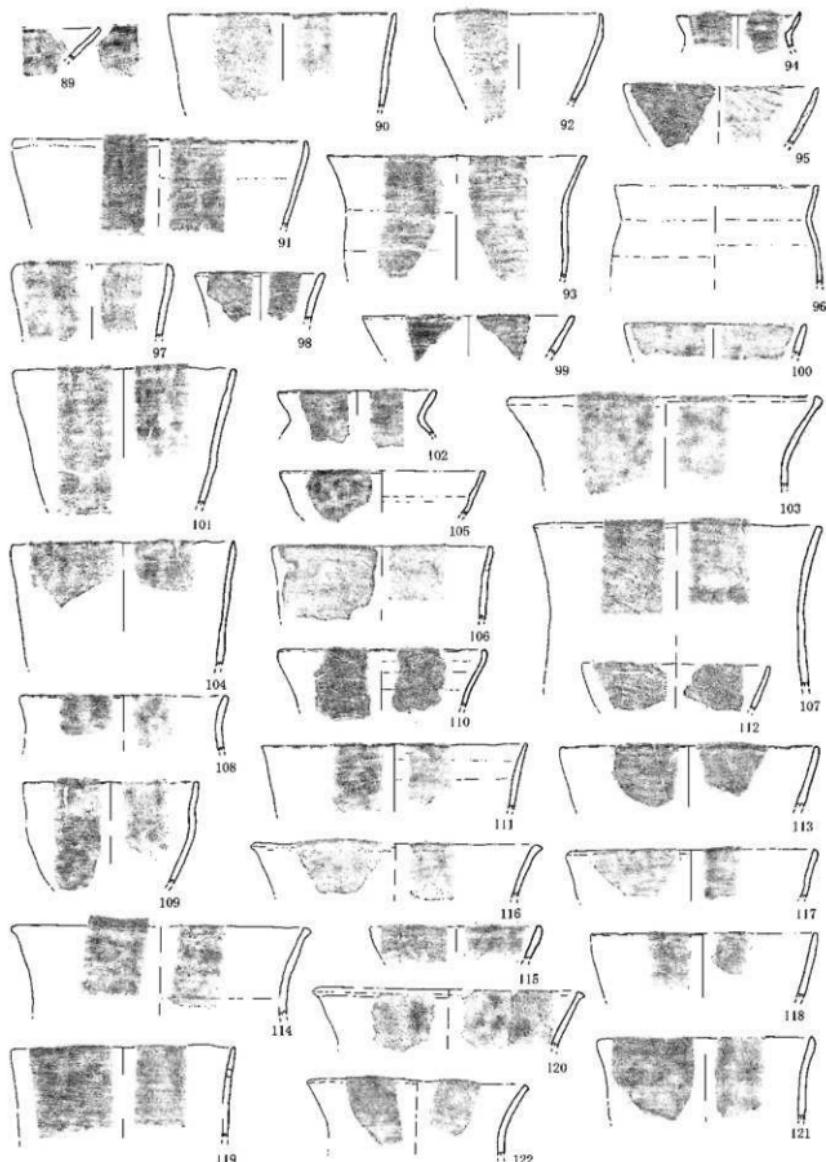
98・107・114・116～118・120・122は器形は外傾若しくはアクセントを有し、口唇は平坦にナデたものである。116は口唇が外面に僅かに肥厚し上面を平坦にナデる。

図VII-34の126・128・131・134・135・138は器形が外傾若しくはアクセントを有するもののうち、口唇が丸くナデておさめるものである。126・131・135・138は外面に煤が付着している。132は頸部で僅かなアクセントをもち短く外傾する口縁端部は先尖りである。口縁内面には指頭で土器を成形した痕跡が認められる。

123～125・127・129・130・133・136・137は器形が外傾若しくはアクセントを有するもののうち、口唇を平坦にナデているものである。123・129・137は外面に煤が付着している。127は口唇を内外面側に丸く肥厚させ、上面は平坦にナデるものである。130は頸部で屈曲し、外傾しながら口唇を平坦にナデるものであるが破面を見ると外面から内面へドがるような粘土紐の積上げ痕が認められる。

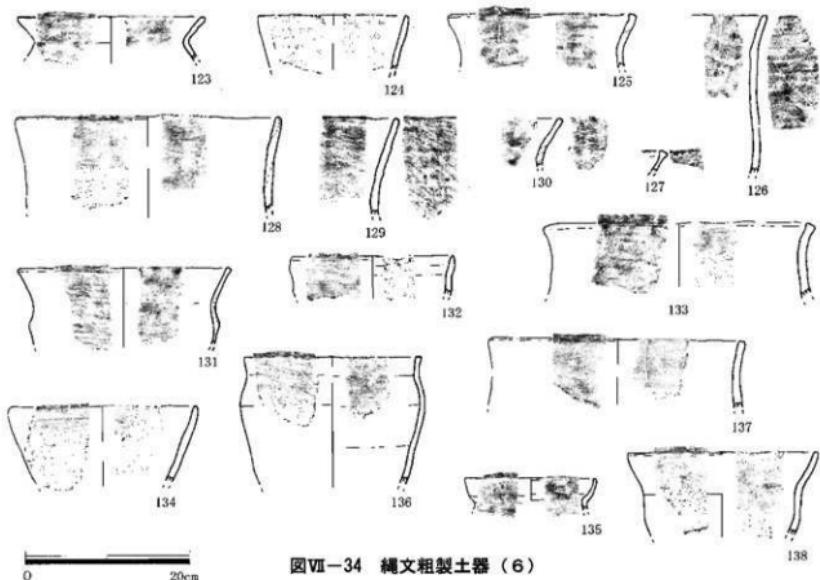
図VII-35は貝殻条痕の認められる粗製土器である。

139・140は外傾する器形で端部は丸くナデおさめる。いずれも内面は一枚貝殻条痕が見られ、外

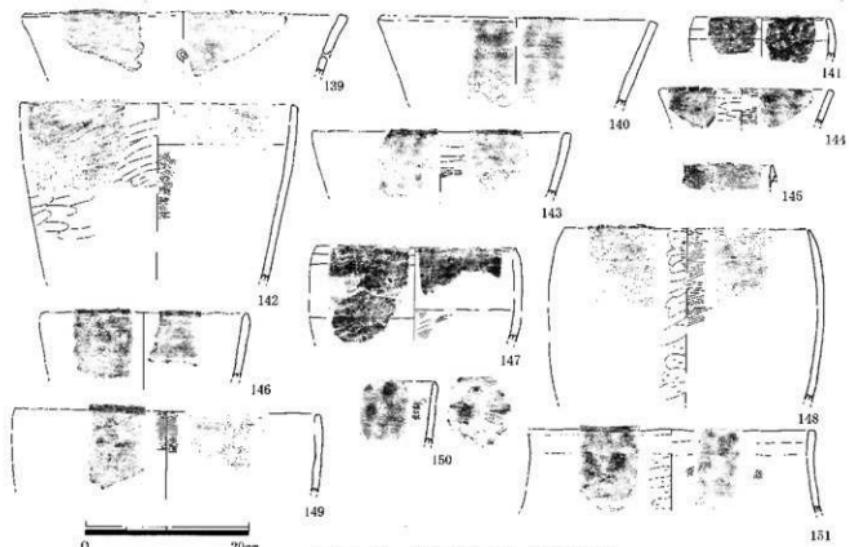


図VII-33 縄文粗製土器（5）

0 20cm



図VII-34 縄文粗製土器（6）



図VII-35 縄文粗製土器（貝殻条痕）

面は擦痕である。139は補修孔と思われる焼成後穿孔が施される。141は内傾する小型の鉢で内外面とも二枚貝条痕で外面には煤が付着している。142の器形は直立気味で口唇は平坦にナデている。内面のみ二枚貝条痕が見られる。143は外傾し口縁端部は平坦にナデる。内面の残存する下端部付近に二枚貝条痕が見られる。断面からは粘土紐積上げ痕が明瞭に見られる。144も143同様外傾し、口唇は平坦にナデる。内面全体に二枚貝条痕が施される。145は直立する器形で口唇は先尖りにおさめる。外面は擦痕、内面は一枚貝条痕である。146は外傾し口唇は尖り、外面は擦痕、内面は一枚貝調整で外面には煤が付着している。147は直立する器形で口唇は尖る。内面のみ二枚貝条痕が見られる。148は内傾する器形で口唇は尖り、外面は調整工具による擦痕、内面には一枚貝条痕が見られる。149は直立する器形で口唇は平坦にナデ、内外面とも二枚貝条痕が見られる。150は直立する器形で口唇は先尖りである。外面は擦痕、内面は一枚貝条痕である。151は直立する器形で口唇は平坦にナデる。外面調整は擦痕、内面は一枚貝条痕とナデである。

### 5) 繩文土器底部 (図VII-36~38)

i 類は磨研土器、ii 類～v 類は粗製土器の底部である。粗製土器は大まかに形態によって次のように分ける。

i 類：磨研、半磨研土器の底部

ii 類：横方向にはみ出するもの

iii 類：上げ底のもの

iv 類：へこみ底のもの

v 類：平底のもの

#### i 類

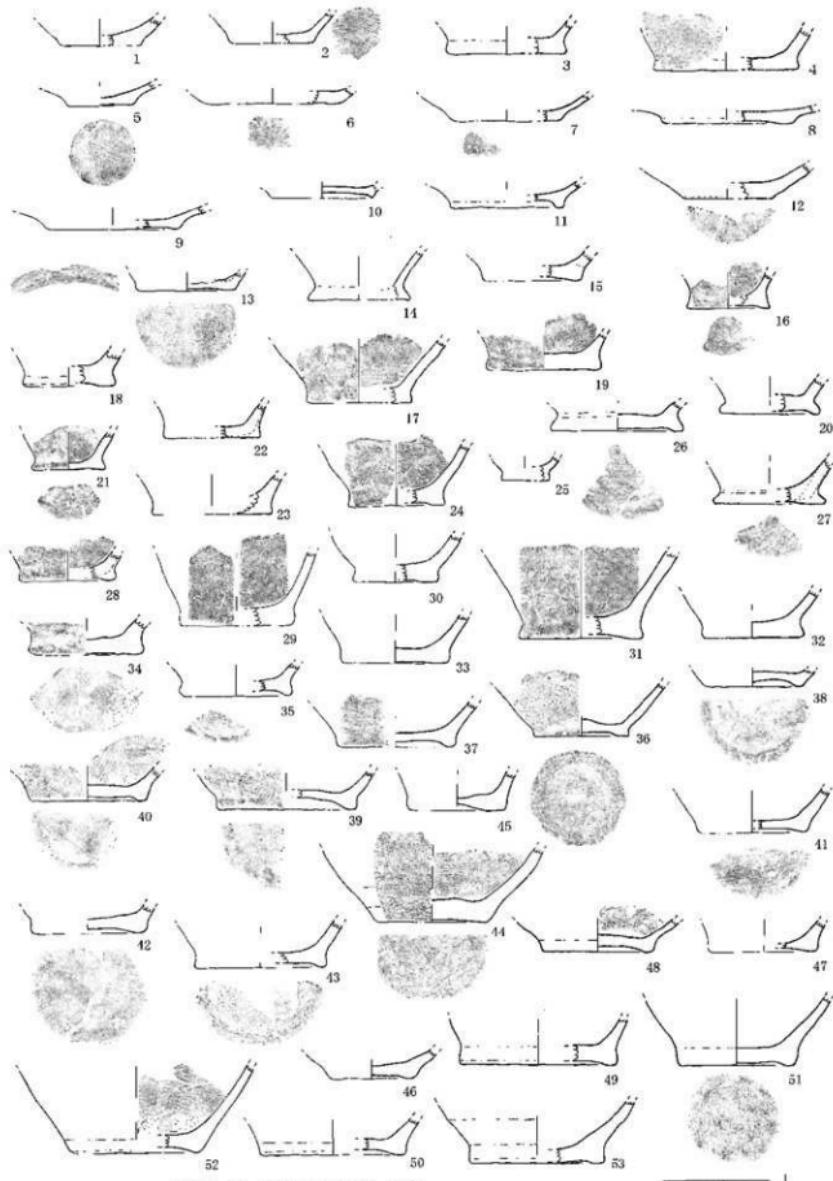
図VII-36の1～13である。1・2・3・4・12は器壁が10～14mmと厚手のつくりである。10・11は高台がつき、上げ底のものである。8・9・13は底部中央部が僅かに凹む形状のものでいずれもやや薄手の作りのものである。これらは後期のものであろう。

#### ii 類

図VII-36の14～34である。内外面とも粗面で小型のものの中にはあるがいずれも深鉢型の底部で、摘み出して横方向に広がるものである。17・19・25には製作時につけた指頭圧痕が明瞭に残る。いずれも底部から体部に立ち上がる縫れの部分に認められる。

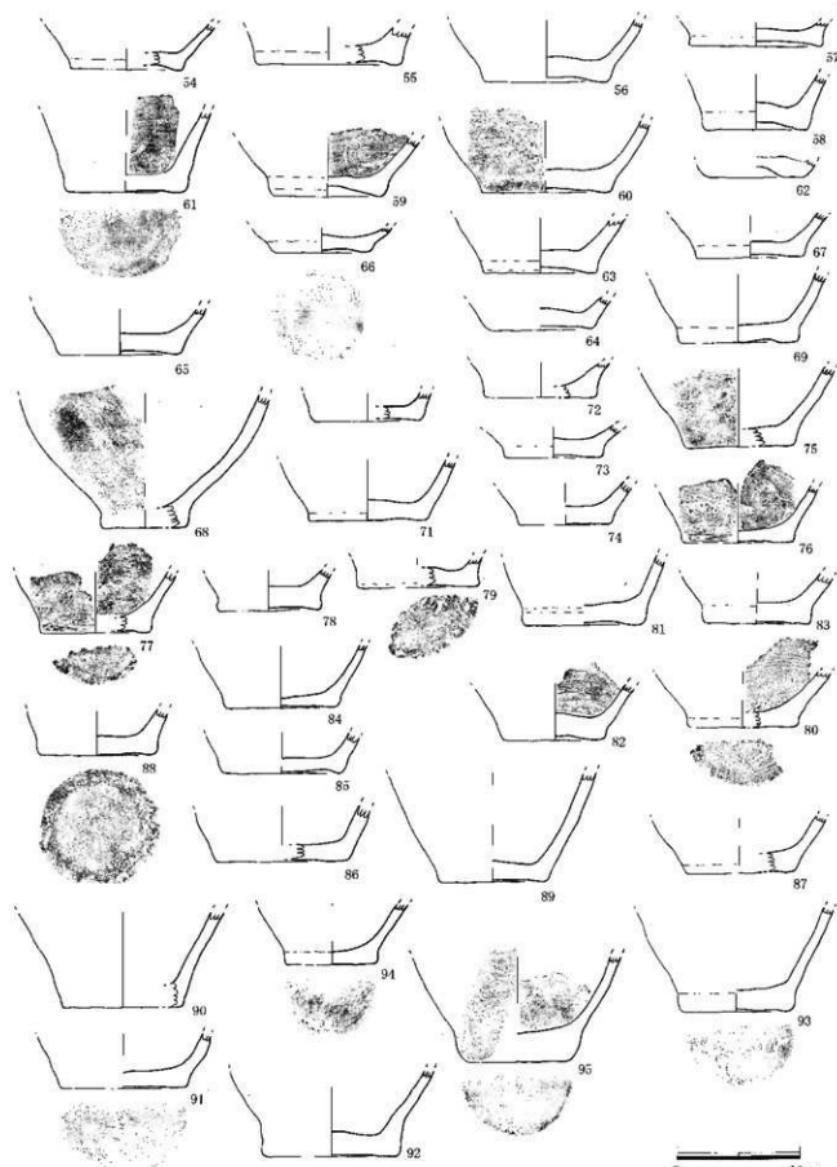
#### iii 類

図VII-36の35～40である。底部円周上に高台状に粘土を重ね、あるいは摘み出して上げ底にしたものである。底径8～12cm弱と中型～大型深鉢の底部であろうが、器表についてみると擦痕のもの(35～38)、粗くケズリ状のもの(39・40)がある。また、40の内面には二枚貝による条痕が認められる。

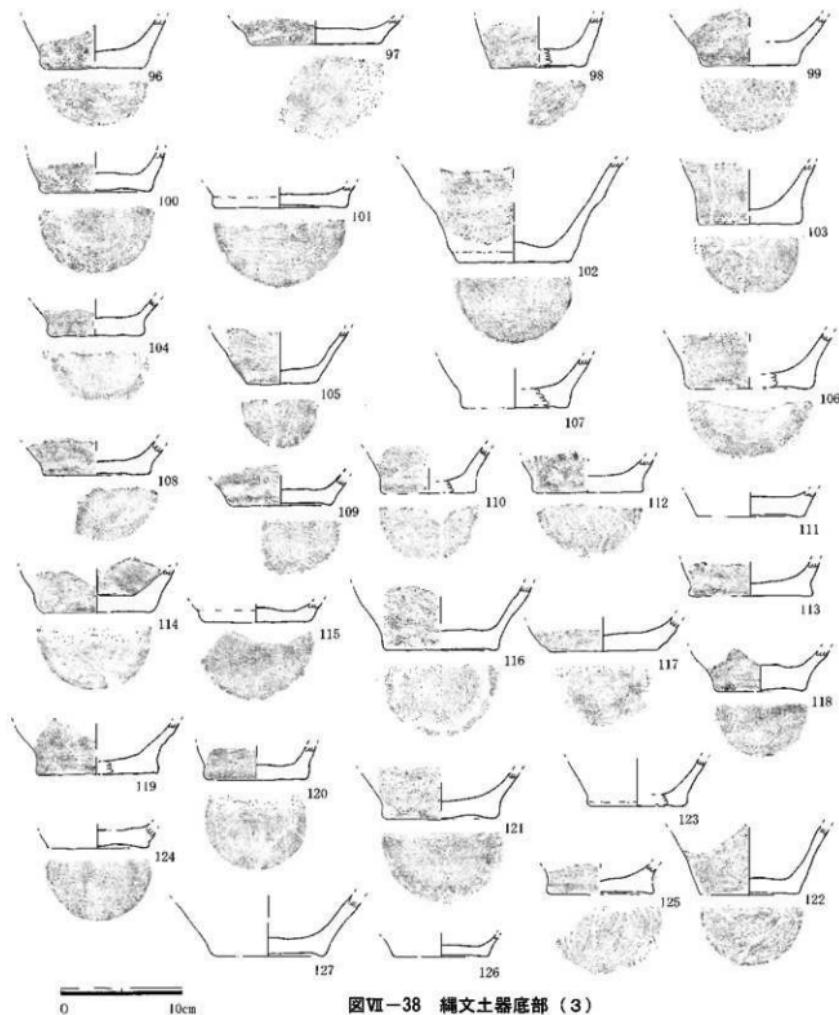


図VII-36 縄文土器底部 (1)

0 10cm



図VII-37 縄文土器底部 (2)



図VII-38 縄文土器底部 (3)

#### IV類

図VII-36の41~53、図VII-37の54~66である。底面が凹入するタイプのものである。器種は底部からの立上がりが少なく判然としないが46・48・66は浅鉢状に開くものではないだろうか。その他は深鉢であろう。43・48・50・53・62には指頭圧痕が顕著で、44・52は底径9.4cm、10.0cm

を測る大型品で外面はいずれも粗くケズリ、内面は二枚貝条痕が認められる。46・47・62・66のような底径が小さく器自体も小型であろうと思われるものは粗製ではあるが丁寧にナデるものが多いうだ。

#### v類

図VII-37の67~95、図VII-38の全部である。ほとんどは深鉢の底部であろうが底部からの立上がりが僅かで判然としないものも多い。

器形、調整から73・97・124は浅鉢の可能性もある。68は器体に比して7.0cmと非常に小さい底部を有し、内外面ともナデ調整である。79は器壁が9~15mmで内外面ともナデ仕上げである。底面には製作時に何かの上で作ったためであろう深さ5mmの格子状の圧痕が底面中央付近に、周辺部には僅かに繩文が残っている箇所がある。これは土器製作時の下敷きかと思われる。内面は底部中央で盛り上がる。

80は厚さ10~14mmで外面には擦痕が、内面には二枚貝条痕が残る。94は底径7.4cmを測る深鉢型土器で外面はケズリ、内面は二枚貝による条痕が認められる。底面にも貝条痕と思われる痕跡がうっすら見られるが使用することで擦れていて判然としない。

73・92・96・104・109・111には土器を成形する際に指頭圧痕が認められる。103は内外面ともナデ調整で内面に僅かに炭化物が認められる。83・100は風化による摩耗が激しく内外面とも詳しい調整は不明である。

以上 i類は後期であろうが、ii類~v類は粗製底部で形状によりグルーピングしたが、この形状により時期差があるのか、用途の違いによるものなのか、二枚貝条痕のものは二枚貝条痕のないものに後続するのか、同時期にあってよいのか判然としない。後晩期とだけしておく。

(野津)

#### 註

※1 繩文時代後期精製土器の様式、編年については島根県埋蔵文化財調査センター 柳浦俊一氏の御教示による。

※2 島根大学 山田康弘先生の御教示による。

※3 仁多町教育委員会:『下鴨倉遺跡』 1990

表VII-1 繩文時代中期土器観察表

図 No	出土地名	調査年	件数/3本	基 葉	胎	色 調	備考
VII-5	12E	7	外-Z縄文、竹青文	密		2.5Y 5/2 ~ 4/2 (暗灰)	
-1							
-2 不明		6	外-Z縄文、爪彫文、竹青文	やや密		10YR 7/4 (にぶい黄緑)	
-3 10E			外-Z縄文、円形刺突文 内-Z縄文 (口縁付近)	1mm程の砂粒を含む		外-10YR 3/1 (黒褐) 内-10YR 6/3 (にぶい黄緑)	
-4 11E			外-Z縄文、円形刺突文	1mm程の砂粒を多く含む		外-7.SR 4/2 (灰褐) ~ 7/3 (にぶい緑) 内-7.SR 7/6 (緑) 心-10W 4/1	
5 14F		13	外-Z縄文、C字彫型文 内-Z縄文 (口縁付近)	2mm程の砂粒を含む		2.5Y 5/2 (灰褐) ~ 4/1 (暗灰) 内-7.SR 7/4 (にぶい緑)	
6 11F		6	外-Z縄文、爪彫文	1mmほどの砂粒を含む		10YR 6/4 (にぶい黄緑)	
11E		8	外-Z縄文、爪彫文	1mmほどの砂粒を含む		外-2.5Y 5/2 (緑) 内-7.SR 7/4 (にぶい緑)	
7 15F		10	外-Z縄文、半抜竹青文	1.5mmほどの砂粒を含む		外-10YR 5/2 (灰黄緑) 内-10YR 6/2 (灰黄緑)	
-9 11F		5	外-Z縄文、爪彫文	1mm程の砂粒を含む		外-5YR 6/6 (緑) 内-10YR 7/4 (にぶい緑)	
10 16F			外-Z爪彫文	1mm程の砂粒を含む		7.SR 7/4 (にぶい緑)	
-11 14F			外-C字爪彫文	密		外-10YR 6/3 (にぶい黄緑) 内-7.SR 7/6 (緑) 心-7.SR 4/1 (暗灰)	
-12 11E		7.5	外-Z縄文、突帯 内-Z縄文 (口縁付近)	1.5mm径の長石、石英を含む		10YR 6/3 (にぶい黄緑)	
-13 15F		10	外-Z縄文、円形刺突文	4mm以下の砂粒を含む		10YR 7/3 (にぶい黄緑)	
14 14F		8	外-Z縄文 内-Z縄文	やや密		7.SR 7/4 (にぶい緑)	折り返し口縁
-15 11F		13	外-Z縄文 内-Z縄文	やや密		7.SR 6/6 (緑)	折り返し口縁
-16 11F		14	外-Z縄文、爪彫文	0.5~2mmの砂粒を含む		外-10YR 7/4 (にぶい黄緑) 内-10YR 6/3 (にぶい黄緑)	
-17 不明		11	外-Z縄文	1~2mmの砂粒を含む		10YR 6/3 (にぶい黄緑)	
-18 9E		7.5	外-S縄文	1mm以下の長石等を含む		10YR 7/4 (にぶい黄緑)	
-19 15F		10	外-Z縄文	2~5mmの砂粒を多く含む		5YR 6/6 (緑)	
20 15E		8	外-Z縄文	2mm以下の長石等を少量含む		外-7.SR 7/6 (緑) 内-5YR 7/6 (緑)	
21 15E		18	外-Z縄文	密		外-5YR 7/4 (にぶい緑) 内-心-5YR 4/1 (暗灰)	
-22 15E		9	外-Z縄文、櫛目押引文	0.5~3mmの長石、石英を多く含む		7.5YR 6/4 (にぶい緑) 内-10YR 6/3 (にぶい黄緑) 心-10YR 4/1 (暗灰)	縄文深溝あり
23 16F			外-凹彫文	0.5mmほどの砂粒を少々含む		7.SR 6/4 (にぶい緑)	口唇に 縦かんキザミあり
24 11E			外-凹彫文	1~1.5mmの砂粒を多く含む		10YR 8/4 (淡黄緑)	
25 11E			外-条彫文	密		7.SR 6/4 (にぶい緑)	
26 11E			外-条彫文	W.		7.SR 6/4 (にぶい緑)	把手
-27 12E			外-条彫文	1~2mmの砂粒を多く含む		10YR 6/4 (にぶい黄緑)	
-28 9E			外-条彫文	1mm以下の長石等を多く含む		2.5Y 5/2 (暗灰黄)	
29 11E			外-条彫文、横凹文	1~2mmの砂粒を少量含む		外-7.5YR 6/2 (灰褐) 内-7.SR 6/3 (にぶい緑)	
-30 11E			外-条彫文	1mm程の砂粒を少量含む		10YR 6/4 (にぶい黄緑)	
31 15E			外-条彫文	1mm以下の長石等を多く含む		10W 5/3 (にぶい黄緑)	
32 11E			外-条彫文	1mm程の砂粒を少々含む		7.SR 5/3 (にぶい緑)	
-33 10E		12	外-S縄文	1~2mmの砂粒を多く含む		10YR 5/3 (にぶい黄緑)	
-34 9E		12	外-Z縄文	1mm程の砂粒を多く含む		外-5YR 5/4 (にぶい赤褐) 内-5YR 4/2 (灰褐)	
-35 11E		13	外-Z縄文	1.5mm程の長石、石英等を含む		7.SR 5/4 (にぶい緑)	
-36 11E		11.5	外-Z縄文	2.5mm以下の長石、石英等を含む		7.SR 7/4 (にぶい緑)	
-37 15F			外-馬起帶に示型文	2mm以下の砂粒を多く含む		外-7.SR 8/6 (淡黄緑) 内-7.SR 7/8 (緑)	
38 11E		7	外-Z縄文、半抜竹青文	0.5~1.5mmの砂粒を含む		10YR 6/4 (にぶい黄緑)	

区 No	出土地点	測量標 mm/3本	器 表	形 状	上	色 調	備考
W-6 -39	15F	8	外 強いヨリ系	1~2mm径の長石、石英を含む	5YR 6/6 (暗)	白緑部	
-40	11E	9	外一強いヨリ系	1.5mm程の砂粒を多く含む	外-7.5YR 6/4 (にぶい暗)	白緑部	
-41	15F		外 強いヨリ系	0.5mm以下の砂粒を含む	7.5YR 7/6 (暗)	白緑部	
42	15F	7.5	外一弱いヨリ系	密	外-7.5YR 7/6 (暗) 内-7.5YR 7/6 (暗) ~ 6/1 (灰暗)	白緑部	
-43	8E ~ 9E	9	外 ヨリ系	1mm程の砂粒を含む	10YR 6/3 (にぶい黄暗)	底部	
-44	11E	8	外一ヨリ系、凹線文	2mm以上の砂粒を多く含む	5YR 6/6 (暗)	粘土堆積上部明瞭	
-45	15F		外 ヨリ系、凹線文	密	7.5YR 7/6 (暗)		
-46	11E	7	外一ヨリ系、凹線文	1~1.5mm程の長石、石英等を多く含む	外-7.5YR 4/2 (灰暗) 内-7.5YR 5/3 (にぶい暗)		
-47	11E	6	外一ヨリ系、凹線文	1.5mm程の砂粒を多く含む	外-7.5YR 5/4 (にぶい暗) 内-7.5YR 5/3 (黒)		
-48	11E		外一ヨリ系、凹線文	1mm程の砂粒を多く含む	7.5YR 5/3 (にぶい暗)		
49	9E		外一ヨリ系、凹線文	1.5~2mm程の砂粒を多く含む	外-7.5YR 6/6 (暗) 内-7.5YR 6/3 (にぶい暗)		
-50	11E	9	外 ヨリ系、凹線文	1mm程の砂粒を含む	7.5YR 6/4 (にぶい暗)		
-51	11F	7	外一ヨリ系、凹線文	1.5mm程の砂粒を多く含む	10YR 6/4 (にぶい黄暗)		
-52	11E	8	外一弱いヨリ系	1mm以下の長石、石英等を含む	外-10YR 3/2 (黒褐) 内-10YR 3/4 (暗褐) 心-7.5YR 5/4 (にぶい暗)		
-53	11E	5	外一ヨリ系	1~1.5mm程の砂粒を多く含む	外-7.5YR 5/3 (にぶい暗)		
54	10E	4.5	外一細かいヨリ系	2mm以下の長石等を多く含む	外-7.5YR 5/2 (灰暗) 内-7.5YR 6/3 (にぶい暗)		
-55	9E		外 ヨリ系	1mm程の砂粒を多く含む	外-7.5YR 4/2 (灰暗) 内-7.5YR 4/1 (暗灰)		
-56	10E	10	外一強いヨリ系	0.5~1mm程の砂粒を多く含む	外-7.5YR 5/4 (にぶい暗) 内-7.5YR 6/4 (にぶい暗)		
-57	11E	5	外一ヨリ系	2mm以下の長石、石英等を含む	10YR 7/4 (にぶい黄暗)		
-58	11E		外一ヨリ系	0.5mm程の砂粒を多く含む	外-7.5YR 7/6 (暗) 内-7.5YR 7/4 (にぶい暗)		
-59	11E	7	外一ヨリ系	1~2mm程の砂粒を多く含む	5YR 7/8 (暗)		
60	9E	4	外一弱いヨリ系	1.5mm以下の砂粒を多く含む	外-10YR 3/2 (黒褐) ~ 2/1 (黒) 内-外-7.5YR 6/4 (にぶい暗) 心-7.5YR 4/1 (暗灰)		
-61	15G		外 ヨリ系	1mm程の砂粒を含む	10YR 7/3 (にぶい黄暗)		
-62	15F ~ G	8	外一弱いヨリ系	2~3mm程の砂粒を少し含む	10YR 8/2 (灰暗) ~ 6/2 (灰黄暗)		
-63	10E	11	外 一ヨリ系	0.5mm程の砂粒を多く含む	7.5YR 6/3 (にぶい黄暗)		
-64	11E	6	外一ヨリ系	0.5mm程の砂粒を多く含む	7.5YR 7/4 (にぶい暗)		
-65	10E	4	外一細かいヨリ系	1~2mm程の砂粒を多く含む	外-7.5YR 7/4 (にぶい暗) 内-7.5YR 6/3 (にぶい暗) 外-5YR 6/6 (暗)		
66	15F		外一細かいヨリ系	2mm程の砂粒を含む	内-心-7.5YR 5/1 (暗灰)		
-67	9E	8	外一ヨリ系	0.5~3mm程の長石、石英等を含む	10YR 7/3 (にぶい黄暗)		
-68	11E	9	外一ヨリ系	0.5~1mm程の砂粒を多く含む	10YR 6/4 (にぶい黄暗)		
-69	11E	8	外 強いヨリ系	0.5~1.5mm程の砂粒を多く含む	5YR 6/6 (暗)		
-70	11E	7	外一ヨリ系	1mm程の砂粒を少し含む	7.5YR 7/6 (暗)		
71	16F	11	外一強いヨリ系	1mm程の砂粒を多く含む	5YR 4/6 (赤褐)		
-72	11E	9	外一細かく強いヨリ系	1~1.5mm程の砂粒を多く含む	外-7.5YR 5/3 (にぶい暗) 内-7.5YR 4/2 (灰暗)		
-73	11F	7	外一細かく強いヨリ系	1~2mm程の砂粒を多く含む	外-7.5YR 4/2 (灰暗) 内-7.5YR 6/6 (暗)		
-74	16E	8.5	外一ヨリ系	2~3mm程の砂粒を多く含む	外-7.5YR 6/6 (暗)		
75	11E	6	外 一細かく強いヨリ系	1mm程の砂粒を多く含む	7.5YR 7/4 (にぶい暗)		
-76	11E	5	外一ヨリ系	1.5~2mm程の砂粒を多く含む	10YR 6/3 (にぶい黄暗)	施文貝の巣がしあり	
77	11E	6	外一ヨリ系、沈礁	2mm程の砂粒を含む	7.5YR 7/4 (にぶい暗)	底部	
78	16F		外 一層上工具に上る神号	1.5mm以下の砂粒を少し含む	7.5YR 6/3 (にぶい暗)		
-79	11E	6	外一細かく強いヨリ系	1mm程の長石、石英を含む	外-5YR 6/6 (暗) 内-7.5YR 6/6 (暗)		
-80	15F		外一弱いヨリ系	1.5mm程の砂粒を多く含む	外-7.5YR 6/4 (にぶい暗) 内-7.5YR 4/1 (暗灰)		

表VII-2

## 縄文時代後期精製土器観察表(中津系)

No.	発生地	器種	剖面部	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	調査	色	形	特征	備考	
									横	直		
VA-2	福井	深鉢	口縁片	26.0			S	3mm	浅曲	1~2mmの跡線を多く含む	外-10YR 4/4 (赤黄褐) ~ 7-10YR 7/4 (赤, 黒)	直筒文
-1							S	4mm	浅曲	2mm以下の跡線を少しある	外-10YR 7/4 (赤, 黑)	直筒文
-2	福井	深鉢	断片				S	5mm	浅曲	2~3mmの跡線を少し含む	外-10YR 4/4 (赤, 黑)	直筒文
-3	福井	深鉢	1.縦片				S	5mm	浅曲	2~3mmの跡線を少し含む	10YR 7/3 (にじ, 黑)	直筒文
-4	福井	深鉢	1.縦片				S	5mm	浅曲	2mm以下の跡線を少し含む	10YR 7/3 (にじ, 黑)	直筒文
-5	福井	深鉢	1.縦片				S	4mm	浅曲	1mm以下の跡線を少し含む	外-10YR 5/4 (にじ, 黑)	直筒文
-6	11E	深鉢	口縁片	35.0			Z	4mm	深曲	0.5~2mm程の黄色, 石英等を含む	外-10YR 4/4 (赤黄褐) ~ 7-10YR 7/4 (赤, 黑)	直筒文
-7	15E	深鉢	口縁片				Z	4mm	深曲	黄色を多く含む	外-10YR 4/4 (赤黄褐) ~ 7-10YR 7/4 (赤, 黑)	走り文
-8	15E	口縫片					S	3mm	浅曲	1~1.5mm程の跡線を含む	外-10YR 4/3 (赤黄褐) ~ 7-10YR 5/3 (赤, 黑)	直筒文
-9	15E	口縫片					Z	4mm	深曲	0.5~2mm程の跡線を多く含む	外-10YR 4/3 (赤黄褐) ~ 7-10YR 5/3 (赤, 黑)	直筒文
-10	121.T	口縫片					Z	3mm	浅曲	1mm程の跡線を少し含む	外-10YR 4/2 (赤黄褐) ~ 7-10YR 5/2 (赤, 黑)	直筒文
-11	35F	突起片					Z	2mm	浅曲	1mm程の跡線を少し含む	外-10YR 4/3 (赤黄褐) ~ 7-10YR 5/3 (赤, 黑)	直筒文
-12	16F	口縫片					Z	3mm	浅曲	2mm以下の跡線を少し含む	外-10YR 4/3 (赤黄褐) ~ 7-10YR 5/3 (赤, 黑)	直筒文
-13	14F	口縫片					Z	2.5mm	浅曲	大半の跡線を含む	10YR 7/4 (にじ, 黑)	直筒文
-14	10E	突起片					Z	2.5mm	深曲	0.5mm程の跡線を僅かに含む	外-10YR 7/3 (にじ, 黑)	直筒文
-15	10F	口縫片					Z	2mm	深曲	0.5mm程の跡線を多く含む	外-10YR 4/1 (赤黄褐) ~ 7-10YR 7/1 (赤, 黑)	直筒文
-16	122E	口縫片					Z	2.5mm	深曲	1mm程の跡線を含む	外-10YR 4/2 (赤黄褐) ~ 7-10YR 5/2 (赤, 黑)	直筒文
-17	9F	口縫片					Z	3.5mm	深曲	1~1.5mm程の跡線を含む	外-10YR 7/3 (赤, 黑)	直筒文
-18	13F	口縫片					S	3mm	浅曲	0.5mm程の跡線を含む	外-10YR 6/4 (赤, 黑)	直筒文
-19	10E	13縫片					Z	3mm	浅曲	0.5~1.5mm程の跡線を含む	外-10YR 4/4 (赤, 黑) ~ 7-10YR 5/4 (赤, 黑)	水平目線 売筒文
-20	10E	13縫片					Z	3mm	深曲	1mm程の跡線を含む	外-10YR 7/4 (にじ, 黑)	直筒文
-21	15E	13縫片					Z	2.5mm	深曲	1mm程の跡線を少し含む	外-10YR 6/4 (にじ, 黑)	直筒文
-22	15E (6F)	13縫片					Z	3mm	深曲	2mm程の跡線を多く含む	外-10YR 6/4 (にじ, 黑)	直筒文
-23	16F	口縫片					S	2.5mm	浅曲	2mm程の跡線を多く含む	外-10YR 6/4 (明赤)	直筒文
-24	15F	口縫片					Z	3mm	浅曲	1mm程の跡線を含む	外-10YR 7/3 (にじ, 黑)	直筒文
-25	15F	口縫片					Z	3mm	浅曲	1mm程の跡線を含む	外-10YR 4/1 (赤, 黑)	直筒文
-26	15F	口縫片					Z	4.5mm	深	1~1.5mm程の跡線を含む	外-10YR 5/3 (にじ, 黑)	直筒文
-27	16F	口縫片					Z	5.5mm	深	2mm以下程の跡線を多く含む	外-10YR 6/2 (赤, 黑)	直筒文
-28	14F	口縫片					S	3mm	浅曲	2mm程の跡線を多く含む	外-10YR 6/2 (にじ, 黑)	直筒文
-29	14F	口縫片					Z	3mm	浅曲	2mm程の跡線を多く含む	外-10YR 6/2 (にじ, 黑)	直筒文
-30	10F	口縫片					Z	2.5mm	浅曲	1.5mm程の跡線を多く含む	外-10YR 7/3 (にじ, 黑)	直筒文
-31	15F	浅鉢	口縫片				Z	3mm	浅曲	1mm程の跡線を少し含む	外-10YR 6/4 (赤, 黑)	直筒文
-32	16F	口縫片					Z	2.5mm	浅曲	半空曲	外-10YR 6/1 (赤, 黑)	直筒文
-33	16F	口縫片					Z	3mm	浅曲	3mm程の跡線を多く含む	外-10YR 6/2 (赤, 黑)	直筒文
-34	15G	口縫片					Z	2mm	浅曲	0.5~2mm程の跡線を多く含む	外-10YR 6/4 (にじ, 黑)	直筒文
-35	15F	口縫片					Z	3mm	浅曲	1mm程の跡線を少し含む	外-10YR 4/2 (にじ, 黑)	直筒文
-36	16F	口縫片					Z	4.5mm	深	1~1.5mm程の跡線を含む	外-10YR 5/3 (にじ, 黑)	直筒文
-37	16F	口縫片					Z	5.5mm	深	2mm以下程の跡線を多く含む	外-10YR 6/2 (にじ, 黑)	直筒文
-38	8E	口縫片					S	3mm	浅曲	2mm程の跡線を多く含む	外-10YR 7/3 (にじ, 黑)	直筒文
-39	10E	口縫片					Z	2.5mm	浅曲	1mm程の跡線を含む	外-10YR 6/3 (にじ, 黑)	直筒文
-40	15E	口縫片					Z	3mm	浅曲	3mm程の跡線を多く含む	外-10YR 6/2 (赤, 黑)	直筒文
-41	11E	断片					Z	4mm	浅曲	0.5~2mm程の跡線を含む	外-10YR 7/4 (にじ, 黑)	直筒文
-42	11E	断片					Z	4mm	深曲	1mm程の跡線を多く含む	外-10YR 7/4 (赤, 黑)	直筒文
-43	11E	断片					Z	4.5mm	深曲	1mm程の跡線を含む	外-10YR 7/4 (にじ, 黑)	直筒文
-44	11E	断片					Z	5mm	深曲	1mm程の跡線を含む	外-10YR 7/4 (赤, 黑)	直筒文
-45	10E	断片					Z	4mm	浅曲	2~3mm程の跡線を多く含む	外-10YR 7/4 (にじ, 黑)	直筒文
-46	12F	断片					Z	3.5mm	浅曲	0.5~1.5mm程の跡線を含む	外-10YR 7/4 (にじ, 黑)	直筒文
-47	13E	断片					Z	3mm	浅曲	0.5mm程の跡線を含む	外-10YR 6/3 (にじ, 黑)	直筒文
-48	11E	断片					Z	2.5mm	浅曲	2~3mm程の跡線を含む	外-10YR 7/2 (にじ, 黑)	直筒文
-49	11E	断片					Z	2.5mm	深曲	2~3mm程の跡線を含む	外-10YR 7/2 (にじ, 黑)	直筒文
-50	11E	断片					Z	3mm	浅曲	0.5mm以下程の跡線を含む	外-10YR 6/3 (にじ, 黑)	直筒文
-51	15E	鉢	口縫片				S	2.5mm	浅曲	0.5~1.5mm程の跡線を含む	外-10YR 7/2 (赤, 黑)	直筒文
-52	16F	口縫片					Z	3mm	浅曲	1mm程の跡線を含む	外-10YR 6/2 (赤, 黑)	直筒文
-53	11E	小鉢	口縫片	13.2			Z	-	深	-	外-10YR 7/4 (赤, 黑)	直筒文
-54	11E	双耳壺	底部				Z	2mm	浅曲	0.5~1.5mm程の跡線を含む	外-10YR 7/4 (赤, 黑) ~ 7-10YR 7/3 (にじ, 黑)	直筒文
-55	10E	双耳壺	底部	11.2			Z	2.5mm	浅曲	2mm以上の跡線を含む	外-10YR 7/4 (赤, 黑) ~ 7-10YR 7/3 (にじ, 黑)	直筒文
-56	10E	双耳壺	底部	12.0			Z	2.5mm	浅曲	2mm以上の跡線を含む	外-2.5YR 6/6 (赤黄)	直筒文
-57	12F	双耳壺	底部				Z	-	深	-	外-10YR 7/4 (赤, 黑)	直筒文

回数	出土地点	形態	保存部位	口径	深さ	底質	特徴	基盤	上		色調	備考
									(cm)	(cm)		
VII-8	15E 15F	浅鉢	口縁片 (1/2)	34.0	11.3	16.0	S	3.5cm 深部	0.5~1.5cmの砂粒を含む	外-7.5W4/2 (灰)~5W3/3 (灰褐色)	暗褐色	東北地方
-55	16E 16F	浅鉢					Z	4cm 深	2mmの砂粒を少し含む	内-5W6/6 (灰)	赤色顔料付	
-59	15F	浅鉢	口縁片				Z	4cm 深	1mmの砂粒を多く含む	外-7.5W5/6 (灰褐色)~2/1 (灰)	暗褐色	
-60	11F 12F	浅鉢	口縁片 (1/2)	34.0			Z	4cm 深	1mmの砂粒を多く含む	内-2.5W5/2 (灰褐色)~2/1 (灰)	暗褐色	
-61	10E	鉢	口縁片 (1/3)	20.0			Z	4cm 深	0.5~2.5mmの砂粒を少し含む	外-7.5W4/2 (灰褐色)~3W5/6 (灰褐色)	暗褐色	
-62	12F	浅鉢	口縁片 (1/3)	34.5			Z	3cm 深	0.5~2.5mmの砂粒を多く含む	内-7.5W4/4 (灰)~3W5/2 (灰褐色)	暗褐色	
-63	13E	浅鉢	口縁片				Z	2.5cm 深	0.5~2.5mmの砂粒を多く含む	外-7.5W6/6 (灰)~1/2 (灰褐色)	暗褐色	
-64	11E	浅鉢	口縁片				Z	2.5cm 深	0.5~2.5mmの砂粒を多く含む	内-5W6/6 (灰)	赤色顔料付	
-65	15F	浅鉢	口縁片				Z	3.5cm 深	2mmの砂粒を多く含む	外-7.5W7/6 (灰)~5/3 (灰褐色)	暗褐色	
-66	16E	浅鉢	口縁片				Z	2.5cm 深	1~2mmの砂粒を多く含む	外-7.5W7/4 (灰)~5/2 (灰褐色)	暗褐色	
-67	11E	浅鉢	口縁片				Z	3cm 深	0.5~1.5mmの砂粒を多く含む	外-10W5/1 (灰褐色)~10W4/1 (灰褐色)	暗褐色	
-68	15F	浅鉢	口縁片				Z	3cm 深	1mmの砂粒を多く含む	外-10W4/1 (灰褐色)~10W5/2 (灰褐色)	暗褐色	
-69	15E 16F	浅鉢	口縁片 (1/2)	40.0			Z	2.5cm 深	1mmの砂粒を少し含む (最大の砂粒の直徑もあらわす)	外-7.5W6/6 (灰)~5W5/4 (灰褐色)	暗褐色	
VII-70	15F	浅鉢	口縁片	37.2			Z	3cm 深	0.5~1.5mmの砂粒を含む	内-5W5/4 (灰)~5/2 (灰褐色)	暗褐色	
-71	11E	浅鉢	口縁片				Z	3~4cm の砂粒を少し含む	外-10W4/1 (灰褐色)~6/3 (灰褐色)	暗褐色		
-72	11F	浅鉢	口縁片 (1/2)	26.1			Z	1~1.5cmの石英等を含む	内-5W5/4 (灰)~5/1 (灰)	赤色顔料付		
-73	16E 16F	浅鉢	口縁片 (1/3)	42.8			Z	0.5~1.5mmの砂粒を多く含む	外-5W3/1 (灰)~10W7/4 (灰褐色)	暗褐色		
-74	11F	浅鉢	口縁片全周	48.6			Z	2mmの砂粒を多く含む	内-5W7/4 (灰)~5/1 (灰)	赤色顔料付		
-75	11E	浅鉢	口縁片	35.9			Z	3~5mmの砂粒を含む	外-10W7/4 (灰)~6/3 (灰褐色)	暗褐色		
-76	3F	浅鉢	口縁片 (1/4)	35.9			Z	やや薄	外-10W8/4 (灰褐色)~5/1 (灰)	暗褐色		
-77	13F	浅鉢	口縁片	36.8			Z	やや薄	外-10W8/4 (灰褐色)~5/1 (灰)	暗褐色		
-78	11E	浅鉢	口縁片	24.5			Z	やや薄	外-5W5/2 (灰)~4/2 (灰褐色)	暗褐色		
-79	16E	浅鉢	口縁片				Z	0.5mmの砂粒を少し含む	外-2.5W7/6 (灰)~5/1 (灰)	暗褐色		
VII-80	不規	浅鉢	口縁片	31.0			Z	3cm 深	1mmの砂粒を少し含む	内-10W6/4 (灰)~5/1 (灰)	赤色顔料付	
-81	16E	浅鉢	口縁片	壓痕部付-20.0			Z	3cm 深	0.5~3mmの砂粒を少し含む	外-10W5/2 (灰)~5/1 (灰)	暗褐色	
-82	15E	浅鉢	口縁片				Z	3cm 深直	0	外-5W5/2 (灰)~4/2 (灰)	暗褐色	
83	12F	浅鉢	口縁片				Z	3cm 深	0.5mmの砂粒を少し含む	外-10W5/4 (灰)~4/4 (灰)	暗褐色	
-84	15E 15F	浅鉢	口縁片-底部	19.0			Z	3.5cm 深	1mm以下の砂粒を多く含む	外-10W7/4 (灰)~5/1 (灰)	暗褐色	
85	11F	浅鉢	口縁片	19.0			Z	3.5cm 深	1mm以下の砂粒を多く含む	外-10W7/4 (灰)~5/1 (灰)	暗褐色	
-86	15F	浅鉢	口縁片				Z	2cm 深	1mm以下の砂粒を多く含む	外-7.5W5/7 (灰)~4/1 (灰)	暗褐色	
VII-87	11E	浅鉢	口縁片	24.2			Z	4.5cm 深	1mm以下の砂粒を少し含む	7.5W4/2 (灰褐色)	水平口縫	
88	11E	深鉢	口縁片	27.0			Z	3.5cm 深	1~2mmの砂粒を含む	7.5W6/6 (灰)	突起あり	
-89	11E	深鉢	口縁片				Z	4cm 深	1mm以下の砂粒を少し含む	内-7.5W4/3 (灰)~5/2 (灰)	底付型	
-90	12E	深鉢	口縁片全周	24.0			Z	3.5cm 深	2mmの砂粒を多く含む	外-10W7/4 (灰)~6/3 (灰褐色)	暗褐色	
91	11E	深鉢	口縁片	19.0			Z	4cm 深	3mmの砂粒を含む	内-7.5W7/4 (灰)~5/2 (灰)	底付型	
-92	10E	深鉢	口縁片				Z	4cm 深	2mmの砂粒を含む	外-7.5W7/4 (灰)~5/1 (灰)	暗褐色	
93	10E	深鉢	口縁片				Z	4.5cm 深	3mmの砂粒を少し含む	外-10W5/4 (灰)~4/4 (灰)	暗褐色	
-94	15E 15F	深鉢	口縁片-底部	19.0			Z	3.5cm 深	1mm以下の砂粒を多く含む	外-10W7/4 (灰)~5/1 (灰)	暗褐色	
95	11F	深鉢	口縁片	25.4			Z	3.5cm 深	1mm以下の砂粒を多く含む	外-10W7/4 (灰)~5/1 (灰)	暗褐色	
-96	15F	深鉢	口縁片				Z	2cm 深	1mm以下の砂粒を多く含む	外-7.5W5/7 (灰)~4/1 (灰)	暗褐色	
VII-97	11E	深鉢	口縁片	24.2			Z	4.5cm 深	1mm以下の砂粒を少し含む	7.5W4/2 (灰褐色)	水平口縫	
98	11E	深鉢	口縁片	27.0			Z	3.5cm 深	1~2mmの砂粒を含む	7.5W6/6 (灰)	突起あり	
-99	11E	深鉢	口縁片				Z	4cm 深	1mm以下の砂粒を少し含む	内-7.5W4/3 (灰)~5/2 (灰)	底付型	
100	11E	深鉢	口縁片	25.8			Z	4.5cm 深	0.5~2mmの砂粒を含む	外-7.5W7/6 (灰)~10W4/2 (灰褐色)	暗褐色	
91	11E	深鉢	口縁片	23.0			Z	4cm 深	0.5~2mmの砂粒を含む	内-7.5W6/6 (灰)~7.5W5/3 (灰)	本平口縫	
-102	11E	深鉢	口縁片				Z	4cm 深	0.5~2mmの砂粒を含む	外-7.5W5/3 (灰)~5/2 (灰)	暗褐色	
103	11E	深鉢	口縁片	39.0			Z	4cm 深	1mmの砂粒を少し含む	7.5W5/4 (灰)~7.5W6/6 (灰)	本平口縫	
95	15E	深鉢	口縁片 (1/3)	27.0			Z	3cm 深	1mm以下の砂粒を多く含む (個人的の砂粒をあらわす)	7.5W7/6 (灰)~10W4/2 (灰褐色)	暗褐色	
-97	15E	深鉢	口縁片	27.5			Z	3.5cm 深	0.5~2mmの砂粒を多く含む	外-7.5W5/2 (灰)~10W4/2 (灰褐色)	暗褐色	
98	10F	深鉢	口縁片				Z	4cm 深	1~2mmの砂粒を含む	内-10W4/2 (灰)~5/2 (灰)	本平口縫	
-99	15E 15F	深鉢	口縁片				Z	4cm 深	0.5~1.5mmの砂粒を含む	(W4/3)~4/2 (灰褐色)	本平口縫	
100	15E	深鉢	口縁片				Z	5cm 深	0.5~2mmの砂粒を多く含む	外-2.5W6/6 (灰)	水立口縫	
VII-101	11F	深鉢	口縁片				Z	3cm 深	1mm以下の砂粒を少し含む	外-7.5W7/3 (灰)~5/2 (灰)	底付型	
-102	12.1T	深鉢	口縁片				Z	3cm 深	0.5~2mmの砂粒を多く含む	外-7.5W6/6 (灰)~7.5W5/2 (灰)	本平口縫	
103	11E	深鉢	口縁片	20.0			Z	3.5cm 深	0.5~2mmの砂粒を少し含む	内-10W7/3 (灰)~5/2 (灰)	突起あり	
-104	11E	深鉢	口縁片	21.5			Z	4cm 深	1.5~3mmの砂粒を多く含む	外-7.5W7/4 (灰)~5/2 (灰)	水立口縫	
-105	9E	深鉢	口縁片				Z	2.5cm 深	3mmの砂粒を含む	内-7.5W7/4 (灰)~5/2 (灰)	底付型	
106	10E	深鉢	口縁片				Z	3cm 深	0.5~1.5mmの砂粒を含む	外-5W8/6 (灰)~5/2 (灰)	水立口縫	
-107	10E	深鉢	口縁片				Z	3.5cm 深	1.5~2mmの砂粒を含む	外-5.5W7/4 (灰)~5/2 (灰)	底付型	
108	15G	深鉢	口縁片				I	3cm 深	やや薄	外-5.5W5/3 (灰)~5/2 (灰)	水立口縫	
-109	11E	深鉢	口縁片 (1/4)	38.8			S	3.5cm 深	深部	0.4~1mmの砂粒を多く含む	内-7.5W7/4 (灰)~5/2 (灰)	突起あり

区 No.	出土地名	器種	既存352	I (cm)	II (cm)	III (cm)	底盤	測定	地 調		備考
									測定	底盤	
110	11E	深鉢	(1/3)	25.4			Z	3.5cm 深 底	2mm程の砂粒を多く含む	内 - 3.5V6/6 (底) / 6 (底) ~ 1/2 (底) / 6 (底)	3段位実測 層消滅
111	10E, 11E	深鉢	口縁片	19.8			Z	4 cm 深	2mm程の砂粒を含む	外 - 3.5V6/6 (底) ~ 1/2 (底) / 1 (底)	水平口縫 層消滅
-112	11E	深鉢	口縁片				Z	3 cm 深	0.5~1.5mm程の砂粒を含む	外 - 5V5/5 (底) / 1 (底)	蓋状口縫 層消滅
-113	11E	深鉢	調片					3.5cm 深	0.3~2mm程の砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 3 (底)	沈積
-114	12E	深鉢	調片				Z	4 cm 深	0.5mm程の砂粒を少し含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-115	12E	深鉢	調片				Z	4.5cm 深	砂	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-116	11F	深鉢	底盤				Z	3.5cm 深	1mm前後の砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 2 (底)	層消滅
-117	11E	深鉢	調片				Z	3 cm 深	2mm程の砂粒を含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 2 (底)	層消滅
-118	15F	深鉢	調片				Z	4 cm 深	0.5mm以下の砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-119	14E, 15F	深鉢	調片				Z	3 cm 深	0.5~1.5mm程の砂粒を含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-120	11E	深鉢	調片				Z	3 cm 深	2mm程の砂粒を少し含む	内 - 5V5/5 (底) / 2 (底)	層消滅
-121	16F	深鉢	調片				Z	3 cm 深	1mm前後の砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-122	15E	深鉢	調片				Z	3 cm 深	0.5mm程の砂粒を含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-123	15F	深鉢	調片				S	3.5cm 深	0.5mm程の砂粒を多く含む	外 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
VII-14	11E	深鉢	調片				Z	3 cm 深	1mm前後の砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-124	無地	口縁片		16.8			Z	3.5cm 深	0.5mm程の砂粒を多く含む	内 - 6/4 (底) / 6 (底) ~ 4/1 (底)	水平口縫 層消滅
-125	15E	壺型	口縁片				Z	2.5cm 深	2mm程の砂粒を含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-126	12E, T	壺型	口縁片				Z	3 cm 深	0.5mm程の砂粒を含む	内 - 5V5/5 (底) / 2 (底)	水水平口縫 層消滅
-127	15F	壺型	口縁片				Z	3 cm 深	1~2mm程の砂粒を少く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-128	15F	口口土器	口縁片				Z	3 cm 深	1~2mm程の砂粒を少く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-129	9E	耳付壺	耳部				Z	2 cm 深	0.5mm程の砂粒を少し含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-130	15F	耳付壺	耳部				Z	2 cm 深	1mm程の砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-131	耳付壺	耳部					Z	2 cm 深	1mm程の砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-132	11E	壺型	調部				Z	2 cm 深	0.5mm程の砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-133	11E	壺型	調部				Z	2 cm 深	0.5mm程の砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-134	11E	壺型	調片				S	1.5cm 深	1~1.5mm程の砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-135	11F	壺型	調片				Z	1.5cm 深	0.5mm以下程の砂粒を少し含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-136	15F	壺型	調片				Z	2 cm 深	1mm程の砂粒を含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-137	16F	壺型	調片				Z	2 cm 深	1mm程の砂粒を含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-138	11F	壺型	調片				Z	3 cm 深	0.5mm程の砂粒を含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅
-139	15F	突起片					S	3 cm 深	1~2mm程の砂粒を少しある	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 2 (底)	層消滅

表VI-3 後期精製土器観察表(緑帯系)

区 No.	出土地点	器種	既存351	I (cm)	II (cm)	III (cm)	底盤	測定	地 調		備考	
									測定	底盤		
VII-15	11E	深鉢	口縁片	45.0			S	0.5~2mm程の砂粒を含む	内 - 10V7/7 (2 (底) / 6 (底) / 6 (底)) ~ 3/1 (底)	調査未実験 既往報告の底盤から		
-140	11E	深鉢	口縁片	16.0	8.9	7.4	Z	2 cm 深	2mm程の砂粒を多く含む	内 - 10V8/8 (底) / 3 (底)	既往報告、後に削除	
141	11E	深鉢	口縁片	29.0				1.5cm 深	0.5mm以下程の砂粒を少し含む	内 - 10V8/8 (底) / 4 (底)	山形山跡	
142	16L	鉢	口縁片					1.5cm 深	0.5mm以下程の砂粒を少し含む	内 - 10V8/8 (2 (底) / 4 (底)) ~ 5/2 (底)	山形山跡	
143	11E	深鉢	口縁片	16.0	8.9	7.4	Z	2 cm 深	0.5~2mm程の砂粒を含む	内 - 10V8/8 (2 (底) / 4 (底) / 4 (底)) ~ 5/2 (底)	山形山跡	
144	11E	深鉢	口縁片	33.0				1.5cm 深	1~1.5mm程の砂粒を含む	内 - 10V8/8 (底) / 4 (底)	半円状実配	
145	11E	深鉢	口縁片					1 cm	砂粒を含む	内 - 10V8/8 (2 (底) / 4 (底) / 4 (底)) ~ 7/1 (底)	山形山跡	
-146	11F	深鉢	口縁片					1 cm	砂粒を多く含む	内 - 5V5/5 (底) / 4 (底)	山形山跡	
-147	16F	深鉢	口縁片					2 mm	2mm程の砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底)	山形山跡	
-148	15F	深鉢	口縁片					1 cm	1~1.5mm程の砂粒を含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底)	山形山跡	
-149	11E	深鉢	口縁片					1 cm	砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底)	山形山跡	
-150	16F	深鉢	口縁片					1 cm	砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底)	山形山跡	
-151	12L, T	深鉢	口縁片					1 cm	砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底)	山形山跡	
-152	14F	深鉢	口縁片					1 cm	砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底)	山形山跡	
-153	15F	深鉢	口縁片					1 cm	砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底)	山形山跡	
-154	15F	深鉢	口縁片	36.0				2 cm 深	2mm程の砂粒を含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 6 (底)	山形山跡	
-155	15E	15F	深鉢	口縁片	33.5				2 cm 深	2mm程の砂粒を含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 6 (底)	山形山跡
VII-16	9E	深鉢	口縁片	33.0				2 cm 深	砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 6 (底)	山形山跡	
-156	11E	深鉢	口縁片	26.0				3 cm	砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 6 (底)	山形山跡	
-157	11E	9F	深鉢	口縁片					3 cm	砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 6 (底)	山形山跡
-158	9F	深鉢	口縁片					2 cm	砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 6 (底)	山形山跡	
-159	11E	深鉢	口縁片					2 cm	砂粒を少し含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 6 (底)	山形山跡	
-160	11E	深鉢	口縁片	34.0				1 cm	砂粒を多く含む	内 - 5.5V6/6 (底) / 4 (底) / 6 (底)	山形山跡	

回	通	上位性	種	複数形	1個	頭部	前脚	後脚	尾	足	物		主	副
											(cm)	(cm)	(cm)	(cm)
36	161	13F	深脚	口鱗片	30.0						0.5~1mmの砂粒を少し含む		外-10VR 6/3 (に(は)-無頭)~3/2 (無頭)	
	162	11F	深脚	口鱗片	23.0						1~2mm程の砂粒を少し含む		外-7.5VR 7/6 (無)	
	163	11F	深脚	C鱗片							1mm程の砂粒を多く含む		外-7.5VR 7/4 (無)	
	164	13F	深脚	U鱗片	22.8						2mm程の砂粒を多く含む		内-5VR 6/6 (無)	
	165	11E	深脚	U鱗片							1mm程の砂粒を含む		外-3VR 4/4 (に(は)-無頭)~7.5VR 2/1 (無)	
	166	9E	浅脚	U鱗片	30.8						1mm程の砂粒を含む		外-7.5VR 5/3 (に(は)-無頭)~4/2 (無頭)	
	167	8F	深脚	口鱗片	37.6						1mm程の砂粒を多く含む		外-7.5VR 5/4 (無)	
	168	11F	深脚	口鱗片	30.0						1mm程の砂粒を多く含む		外-7.5VR 4/4 (に(は)-無頭)~3/2 (無頭)	細角あり
	169	12E	西脚	口鱗片	39.0						1mm程の砂粒を含む		外-7.5VR 4/4 (に(は)-無頭)~7.5VR 2/1 (無)	
	170	11E	深脚	口鱗片	38.6						1mm程の砂粒を含む		外-7.5VR 4/4 (に(は)-無頭)~4/2 (無頭)	
	171	11F	深脚	口鱗片	35.0						1mm程の砂粒を多く含む		外-10VR 6/4 (に(は)-無頭)~7/1 (無)	
	172	9E	深脚	口鱗片	38.2						1mm程の砂粒を多く含む		外-7.5VR 4/4 (に(は)-無頭)~3/2 (無頭)	黒色跡跡
	173	11E	深脚	口鱗片	42.0						3~5mmの砂粒を含む		外-7.5VR 7/8 (無)	
	174	10E	深脚	口鱗片							3~5mmの砂粒を含む		外-10VR 6/4 (に(は)-無頭)~4/1 (無頭)	
	175	9E	深脚	口鱗片	29.0						3mm程の砂粒を含む		外-7.5VR 6/4 (に(は)-無頭)~4/2 (無頭)	
	176	8E	深脚	口鱗片~脚	26.0	26.0	26.0	26.0	26.0		1mm程の砂粒を多く含む		外-7.5VR 4/4 (に(は)-無頭)~4/2 (無頭)	
	177	16~16 第十脚	深脚	U鱗片							0.5~1mmの砂粒を多く含む		外-7.5VR 5/3 (に(は)-無頭)	
	178	9H	深脚	口鱗片							1mm程の砂粒を多く含む		外-7.5VR 4/2 (無)	
VII-17	11E	深脚	脚								3~5mmの砂粒を含む		外-7.5VR 7/8 (無)	
-179											3~5mmの砂粒を含む		外-10VR 6/4 (に(は)-無頭)~4/1 (無頭)	
	180	10F	深脚	底鱗片	8.8						3mm程の砂粒を含む		外-7.5VR 6/4 (に(は)-無頭)~4/2 (無頭)	
	181	11F	14H	底鱗片		8.0					1mm程の砂粒を多く含む		外-10VR 7/4 (に(は)-無頭)~4/2 (無頭)	
	182	15L	深脚	腹鱗片		32.0					0.5~1mmの砂粒を多く含む		外-10VR 7/3 (に(は)-無頭)~5/2 (無頭)	
VIII	183	11E	深脚	口鱗片	33.0						1mm程の砂粒を含む		外-7.5VR 5/4 (に(は)-無頭)	
	184	16F	深脚	口鱗片	18.0						2mm程後の砂粒を多く含む		外-10VR 7/4 (に(は)-無頭)~4/1 (無頭)	
	185	15F	深脚	口鱗片~脚	21.0						0.5~1mmの砂粒を多く含む		外-10VR 7/3 (に(は)-無頭)~4/2 (無頭)	
	186	15G	深脚	口鱗片	18.8						1~2mm程の砂粒を含む		外-10VR 7/3 (に(は)-無頭)~5/2 (無頭)	
	187	12F	深脚	口鱗片							3~5mmの砂粒を含む		外-7.5VR 7/6 (無)	山野に沈没。ヤギ
	188	16P	深脚	口鱗片~脚	19.2						3~5mmの砂粒を含む		外-7.5VR 7/4 (に(は)-無頭)~4/1 (無頭)	山野に沈没
VII-19	11E	深脚	口鱗片		22.0						3mm程の砂粒を含む		外-7.5VR 7/4 (に(は)-無頭)~4/2 (無頭)	山野に沈没
-190											3mm程の砂粒を含む		外-10VR 7/3 (に(は)-無頭)~4/2 (無頭)	山野に沈没
	191	11F	深脚	口鱗片	21.0		21.0	21.0	21.0		3mm程の砂粒を含む		外-7.5VR 7/4 (に(は)-無頭)~4/2 (無頭)	山野に沈没
	192	9E	深脚	口鱗片	26.6						3mm程の砂粒を含む		外-7.5VR 7/4 (に(は)-無頭)~4/2 (無頭)	山野に沈没
	193	8F	9E	深脚	口鱗片	21.6					3mm程の砂粒を含む		外-7.5VR 7/4 (に(は)-無頭)~4/2 (無頭)	山野に沈没
	194	12F	深脚	口鱗片	18.0						0.5~1mmの砂粒を多く含む		外-7.5VR 7/4 (に(は)-無頭)~4/2 (無頭)	山野に沈没
VII-20	195	8E	深脚	口鱗片	32.4						1mm程の砂粒を多く含む		外-10VR 8/2 (無)	山野に沈没
	196	11E	深脚	口鱗片							2mm以上の砂粒を多く含む		外-7.5VR 7/7 (無)	山野に沈没
	197	11F	深脚	口鱗片	31.0						1~2mm程の砂粒を少し含む		外-7.5VR 7/4 (に(は)-無頭)~6/3 (に(は)-無頭)	二段状突起
	198	8E	9E	深脚	口鱗片						1mm程の砂粒を含む		外-7.5VR 6/4 (に(は)-無頭)~6/3 (に(は)-無頭)	半端状突起 乳頭あり
	199	12F	深脚	口鱗片	24.6						2mm程の砂粒を少し含む		外-10VR 8/4 (に(は)-無頭)~5/2 (に(は)-無頭)	半端状突起 キヤギ
	200	9E	深脚	口鱗片~脚	23.2						2mm程の砂粒を含む		外-10VR 8/4 (に(は)-無頭)~5/2 (に(は)-無頭)	半端状突起 キヤギ
	201	11E	深脚	口鱗片	23.0						1mm程の砂粒を多く含む		外-10VR 8/4 (に(は)-無頭)~6/0 (無)	半端状突起 乳頭あり
	202	9E	深脚	口鱗片	18.6						1~2mm程の砂粒を含む		外-7.5VR 7/4 (に(は)-無頭)~6/0 (無)	半端状突起 乳頭あり
	203	1116	深脚	口鱗片							1mm程の砂粒を少し含む		外-7.5VR 7/4 (に(は)-無頭)~6/0 (無)	半端状突起 乳頭あり
	204	11E	深脚	口鱗片	24.0						1mm程の砂粒を多く含む		外-10VR 8/4 (に(は)-無頭)~6/1 (に(は)-無頭)	突起あり
	205	11E	深脚	口鱗片							0.5~3mm程の砂粒を多く含む		外-7.5VR 4/2 (無)	口部部-沈没
	206	14F	深脚	口鱗片	19.4						2mm程の砂粒を少し含む		外-7.5VR 5/3 (に(は)-無頭)~5/2 (無)	口部部-沈没 キヤギ
	207	15F	深脚	口鱗片							2mm程の砂粒を含む		外-7.5VR 4/1 (無)	口部部-沈没
	208	16F	深脚	口鱗片	25.6						2mm以上の砂粒を含む		外-10VR 8/2 (に(は)-無頭)~3/1 (無頭)	口部部-沈没 キヤギ
	209	15~15F	深脚	口鱗片	14.0						3~5mmの砂粒を多く含む		外-10VR 8/6 (に(は)-無頭)~3/1 (無頭)	口部部-沈没 キヤギ
	210	13F	深脚	口鱗片							1mm程の砂粒を少し含む		外-10VR 8/4 (に(は)-無頭)	口部部-沈没
	211	13F	深脚	口鱗片	33.2						1mm程の砂粒を多く含む		外-10VR 8/1 (に(は)-無頭)	口部部-沈没 キヤギ
	212	15F	深脚	口鱗片	21.6						1~2mmの砂粒を多く含む		外-10VR 6/4 (に(は)-無頭)~4/2 (無頭)	口部部-沈没 キヤギ

回数	出土地点	品種	保存状況	寸法 (cm)	基準 (cm)	成形 度	風文	物上	参考		
									測定	測定	
-213	1. E.	深鉢	白鐵片	30.4			やや薄	1~1.5mmの砂粒を多く含む	109.8/4/1(古鉢)~4/1(鉢) 日付鉢-キザミ	日付鉢-キザミ	
-214	1. E.	深鉢	白鐵片	30.4			やや薄	2mm以上の砂粒を多く含む	2.5W8/3/1(古鉢)~4/1(鉢) 日付鉢-古鉢, キザミ	日付鉢-古鉢, キザミ	
-215	10. E.	深鉢	白鐵片	26.0	S	1.5mm	深V	2mm以上の砂粒を多く含む	7.5W8/3/1(古鉢) 新鉢	新鉢	
-216	11. E.	深鉢	白鐵片					2mm以上の砂粒を多く含む	7.5W8/6/1(古鉢)~4/2(鉢)		
-217	12. F.	深鉢	白鐵片					1mm以下の砂粒を含む	7.5W8/3/1(古鉢)~5/2(鉢)		
-218	11. F.	深鉢	白鐵片					やや薄	7.5W8/6/1(古鉢)		
-219	9. E.	深鉢	白鐵片					2mm以上の砂粒を含む	7.5W8/4/1(古鉢)~4/1(鉢)		
-220	8E 9F	深鉢	白鐵片	25.6				2mm以上の砂粒を多く含む	7.5W8/6/1(古鉢)~4/2(鉢)		
-221	11. E.	深鉢	白鐵片					1mm以下の砂粒を少し含む	7.5W8/6/1(古鉢)~4/2(鉢)		
-222	16. F.	深鉢	白鐵片					2mm以上の砂粒を多く含む	7.5W8/6/1(古鉢)~4/2(鉢)		
-223	16. F.	深鉢	白鐵片	26.2	S	4mm	深V	1mm以下の砂粒を多く含む	5W8/6/1(古鉢) 新鉢	新鉢	
-224	9. E.	深鉢	銀鉢		Z	2.5mm	深V	1mm以下の砂粒を多く含む	109.8/4/1(古鉢)~6/3(古鉢)	新鉢	
-225	11. E.	深鉢	銀鉢		Z	1.5mm	浅V	1~2mmの砂粒を多く含む	109.8/3/1(古鉢)~5/2(古鉢)	新鉢	
-226	16. F.	深鉢	銀鉢		Z	3mm	深V	2~3mmの砂粒を多く含む	7.5W8/6/1(古鉢)~4/2(鉢)		
-227	11. E.	深鉢	銀鉢		Z	1.5mm	浅V	1~3mm程度の砂粒を多く含む	7.5W8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)		
-228	11. E.	深鉢	銀鉢		Z			1mm以下の砂粒を多く含む	7.5W8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)		
-229	15. F.	深鉢	銀鉢		Z			3~5mmの砂粒を含む	7.5W8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)		
VI-2	12. F.	深鉢	銀鉢		Z	3mm	深V	1mm以下の砂粒を含む	109.8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)	新鉢	
-231	11. E.	深鉢	銀鉢		Z	3mm	浅V	0.5~2mmの砂粒を少し含む	7.5W8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)		
-232	10. E.	深鉢	銀鉢		Z	2mm	深V	3mm以下の砂粒を含む	109.8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)	アーチ状突起	
-233	9. E.	深鉢	銀鉢		Z	2mm	深V	やや薄	109.8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)	銀鉢	
-234	9. E.	深鉢	銀鉢		Z	2mm	深V	1~1.5mmの砂粒を含む	5W8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)	半平底鉢	
-235	15. F.	深鉢	銀鉢		Z	2mm	深V	2mm以下の砂粒を含む	109.8/3/1(古鉢)~5/1(鉢)	銀鉢	
-236	10. E.	深鉢	銀鉢					1mm以下の砂粒を多く含む	7.5W8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)	チューリップ状突起	
-237	9. E.	深鉢	銀鉢			3.5mm	深V	0.5~4mmの砂粒を多く含む	7.5W8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)	満音状突起, みみ	
-238	10. F.	深鉢	銀鉢					3mm以下の砂粒を多く含む	7.5W8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)	アーチ状突起, 前高後低	
VI-3	11. E.	深鉢	白鐵片	18.2			3mm	深V	1mm以下の砂粒を含む	109.8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)	満音状突起, 前高後低
-240	11. E.	無鉢	白鐵片			2.5mm	深V	0.5~3mmの砂粒を含む	7.5W8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)		
-241	11. E.	無鉢	白鐵片			2mm	深V	0.5~1mmの砂粒を含む	109.8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)		
-242	11. E.	18	白鐵片					3mm以下の砂粒を含む	109.8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)		
-243	10. E.	18	白鐵片					3mm以下の砂粒を含む	109.8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)	満音状突起	
-244	11. E. 1F	18	白鐵片	22.0				3mm以下の砂粒を含む	109.8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)	満音状突起	
-245	9. E.	18	白鐵片	15.0				0.5~1.5mmの砂粒を含む	109.8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)		
-246	10. E. 1F	18	白鐵片	22.9	7.2			0.5~1.5mmの砂粒を含む	109.8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)		
-247	14. F.	無鉢	白鐵片	12.2				0.5mm以下の砂粒を含む	109.8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)		
-248	10. F.	18	白鐵片					2mm以下の砂粒を含む	109.8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)		
-249	11. F.	鉢	白鐵片					1mm以下の砂粒を含む	109.8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)	日付鉢-深鉢, キザミ	
-250	11. E.	深鉢	銀鉢			2mm	深V	0.5~1mmの砂粒を含む	109.8/6/1(古鉢)~4/1(鉢)	日付鉢-深鉢, キザミ	
-251	12. F.	深鉢	銀鉢			3mm	深V	1mm以下の砂粒を含む	7.5W8/7.4/1(古鉢)~4/1(鉢)	圓底, 下の瓶口合わせ	
-252	9. E.	鉢	此鉢片		8.0			1~2mmの砂粒を多く含む	109.8/7.4/1(古鉢)~4/1(鉢)	日付鉢-深鉢, キザミ	
-253	10. E.	鉢	此鉢片	1	0.0			0.5mm以下の砂粒を含む, 石, 砂, 粘土等を含む	109.8/7.4/1(古鉢)~4/1(鉢)	手爪	
-254	10. E.	鉢	鉢-泥			9.0		1mm以下の砂粒を少し含む	109.8/7.4/1(古鉢)~4/1(鉢)	手爪泥入泥	
-255	11. E.	ニッフ	2/2	7.5	6.7	6.0		3mm以下の砂粒を含む	109.8/6/6/6(鉢)~5/4(2.5mmの砂)		
-256	9. E.	鉢	此鉢片	12.2	6.5	6.8		1~2mmの砂粒を多く含む	109.8/4/2(古鉢)~4/1(鉢)		
-257	9. E.	鉢	此鉢片	10.8	13.8	9.8		1~2mmの砂粒を多く含む	109.8/4/2(古鉢)~4/1(鉢)	二回は第二次加工	
VI-4	1. E.	18	25	白鐵片			1~3mmの砂粒を多く含む	109.8/4/1(古鉢)~4/1(鉢)	日付鉢-深鉢, キザミ		
-259	1. S.F.	14	白鐵片					1~2mmの砂粒を含む	109.8/7.4/1(古鉢)~5/2(2.5mmの砂)	コ錫鉢-深鉢, キザミ	
-260	1. S.E.	14	白鐵片			3mm	深V	1mm以下の砂粒を少し含む	109.8/4/1(古鉢)~4/1(鉢)	日付鉢-深鉢, キザミ	
-261	1. O.E.	14	白鐵片			8.2	2.5mm	深V	1mm以下の砂粒を多く含む	109.8/7.4/1(古鉢)~5/2(2.5mmの砂)	日付鉢-深鉢, キザミ
-262	1. I.E.	14	白鐵片			0.5~1.5mm	深V	0.5mm以下の砂粒を含む	109.8/7.4/1(古鉢)~4/1(鉢)	日付鉢-深鉢, キザミ	
-263	1. O.E.	14	白鐵片					1mm以下の砂粒を少し含む	109.8/7.4/1(古鉢)~4/1(鉢)	日付鉢-深鉢, キザミ	
-264	1. O.E.	14	白鐵片					1mm以下の砂粒を多く含む	109.8/7.4/1(古鉢)~4/1(鉢)	日付鉢-深鉢, キザミ	
-265	1. I.R.	14	白鐵片					1mm以下の砂粒を多く含む	109.8/7.4/1(古鉢)~4/1(鉢)	日付鉢-深鉢, キザミ	
-266	1. S.P.	14	白鐵片			3.5mm	深V	0.5mm以下の砂粒を多く含む	109.8/7.4/1(古鉢)~4/1(鉢)	日付鉢-深鉢, キザミ	

回 No	出土地点	種類	我存部位	(口) 径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	断面		断面	土色	直	備考
							横目	次				
267	9 E	鋸片		Z	4	4	深底	2mmの砂粒を少しあげ	外 - 7.5VR6/7.2 (灰黒)	-	-	削削開文
-268	10 E	鋸片					深底	1mmの砂粒を少し含む	内 - 7.5VR6/7.4 (灰・灰黒)	-	-	削削開文
-269	9 C	鋸片					深底	2mmの砂粒を含む	外 - 7.5VR6/6.4 (灰)	-	-	削削文 内灰文
270	11 C	鋸片	鋸片				深底	1~2mmの砂粒を多く含む	内 - 7.5VR6/6.4 (灰)	-	-	直
-271	11 F	鋸片		Z			深		外 - 7.5VR6/6.4 (灰・灰黒)	-	-	-
-272	16 E	鋸片	口鋸片				深	1~2mmの砂粒を多く含む	内 - 7.5VR6/7.3 (灰・灰黒)	-	-	削削開文
273	7 L T	鋸型	鋸片				底筋	2	浅	灰	-	削削開文 刻剥文
-274	9 B	鋸片	口鋸片				深	1.5mm	外 - 7.5VR6/7.4 (灰・灰黒)	-	-	-
275	15 P	鋸片	口鋸片				深	0.5~1mmほどの砂粒を含む	内 - 7.5VR6/7.4 (灰・灰黒)	-	-	削削開文
-276	8 E	鋸片	口鋸片				深	2.5mm	外 - 7.5VR6/6.4 (灰・灰黒)	-	-	削削文
-277	15 G	鋸型	鋸片				深筋	2	浅	0.5~2mmの砂粒を含む	外 - 7.5VR6/6.4 (灰・灰黒)	削削開文 壁面に刻剥
-278	SB-2	鋸型	鋸片				深筋	2	浅	2mm以上の砂粒を多く含む	内 - 7.5VR6/7.4 (灰・灰黒)	削削開文
-279	5X-3	鋸型	鋸片				深筋	1.5mm	外 - 7.5VR6/7.4 (灰・灰黒)	-	-	-
280	SB-3	鋸型	頭部片				深筋	1.5mm	内 - 7.5VR6/7.3 (灰・灰黒)	-	-	削削開文 刻剥文
281	SB-2	鋸型	鋸片				深筋	2	浅	1.5~2mmの砂粒を含む	外 - 7.5VR6/7.3 (灰・灰黒)	削削開文
-282	14 P	鋸片					深	1	深	1~2mmの砂粒を少し含む	内 - 7.5VR6/6.4 (灰・灰黒)	削削開文 壁面に刻剥
283	11 E	深鋸	口鋸片				深	5mm (深) (中筋)	1mm程の砂粒を含む	外 - 7.5VR6/7.4 (灰・灰黒)	内灰文 (骨材によると)	壁面に骨材
-284	11 E	鋸片					深	1.5~2mmの砂粒を多く含む	内 - 7.5VR6/7.6 (灰)	-	-	削削開文 (骨材によると)
285	10 R	浅鋸	口鋸片				深	5mm (深) (中筋)	1.5~2mmの砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/7.6 (灰)	-	削削開文 (骨材によると)
286	11 F	鋸片		Z			深	1.7mm	3mm程の砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/7.6 (灰)	-	削削開文
-287	不取	鋸片		Z	4.5mm	深	1mm程の砂粒を少し含む	外 - 7.5VR6/7.4 (灰・灰黒)	-	-	削削開文	
-288	10 E	1. 鋸片		Z	2.5mm		深	0.5mmの砂粒を少し含む	外 - 7.5VR6/7.2 (灰黒)	-	-	削削開文
289	10 E	鋸片		Z	2mm	深	直	2mm程の砂粒を含む	外 - 7.5VR6/7.3 (灰・灰黒)	-	-	削削開文
-290	10 E	口鋸片		Z	3mm	深	直	1mm前後の砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/7.4 (灰・灰黒)	-	-	削削開文
291	11 E	鋸片		Z	1.5mm	深	直	0.5mmの砂粒を少し含む	外 - 7.5VR6/7.3 (灰・灰黒)	-	-	削削開文
-292	12 F	鋸片		S	2mm	深	直	0.5mmの砂粒を少し含む	外 - 7.5VR6/7.3 (灰・灰黒)	-	-	削削開文
293	12 R	鋸片		S	2.5mm	深	直	1~2mmの砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/7.4 (灰・灰黒)	-	-	削削開文
-294	11 F	鋸片		S	2.5mm	深	直	2mm程の砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/7.4 (灰・灰黒)	-	-	削削開文
295	13 F	浅鋸	頭部片	Z	2mm	深	直	1~3mmの砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/7.3 (灰・灰黒)	-	-	削削開文
-296	11 R	鋸片		Z	3mm	深	直	2mm程の砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/7.3 (灰・灰黒)	-	-	削削開文
-297	10 F	口鋸片		Z	2.5mm	深	直	2mm前後の砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/7.4 (灰・灰黒)	-	-	削削開文
298	15 F	口鋸片		Z	2.5mm	深	直	2mm程の砂粒を含む	外 - 7.5VR6/7.6 (灰)	-	-	削削開文
-299	14 E	浅鋸	口鋸片	S	4.6	深	直	2~3mmの砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/7.3 (灰・灰黒)	-	-	削削開文
-300	9 E	深鋸	口鋸片		16.4	傾傾	-15.0	1mm 深	1~2.5mmの砂粒を多く含む	内 - 7.5VR6/6 (灰)	口唇に2条の状模	-
-301	16 F	口鋸片					深	3mm	2mm程の砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/6 (灰)	口唇に骨材	骨材文
302	15F-16P	鋸片	口鋸片				深	3mm	3mm程の砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/6 (灰)	口唇に骨材	骨材文
-303	11 C	口鋸片					深	2.5mm	1~3mmの砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/7.3 (灰・灰黒)	口唇に縫	口唇に2条の状模
304	15 F	鋸片					深	2mm	1.5~2mmの砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/7.4 (灰・灰黒)	口唇に縫	口唇に2条の状模
-305	12 F	コブ型	底部片		5.6		深	1.5~2mmの砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/5.2 (灰)	-	-	山形文
-306	15 F	浅鋸	頭部片				深	3mm	3mm程の砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/6 (灰)	-	-
-307	15 F	浅鋸	底部片				深	0.5mmの砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/6 (灰)	-	-	山形文
-308	15 L	底型	頭部片		8.3		深	0.5~1mmの砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/5.2 (灰)	-	-	-
-309	13 E	浅鋸	頭部片		11.8		深	0.8~1mmの砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/5.2 (灰)	-	-	山形文
-310	15 F	浅鋸	底部片		7.2		深	0.8~1mmの砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/5.2 (灰)	-	-	山形文
-311	16 G	底型	口鋸片		10.2		深	0.5mmの砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/4.1 (灰)	-	-	-
-312	9 E	底型	口鋸片		11.6		深	0.5~2mmの砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/7.6 (灰)	-	-	-
-313	9 E	浅鋸	口鋸片		34.6		深	1mm程の砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/7.6 (灰)	-	-	山形文
314	11 E	浅鋸	口鋸片		28.6	6.0	12.8	0.5~2mmの砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/7.6 (灰)	~ 10VR6/2 (灰)	-	-
-315	15 E	浅鋸	口鋸片		24.0			2~3mmの砂粒を多く含む	外 - 7.5VR6/7.6 (灰)	~ 10VR6/2 (灰)	-	-
-316	15 E	浅鋸	口鋸片		27.6			2mm程の砂粒を含む	外 - 7.5VR6/7.4 (灰・灰黒)	~ 10VR6/2 (灰)	-	-

試験番号	生土地点	露地	既存湿度	pH	透水性	含水率	成形	施用方法	耕土	地盤	備考
-317	15P 15W 深耕	口緑片	35.5	—	—	—	—	1~2mm程の砂粒を多く含む 0.5~1mm程の砂粒を含む	7.5W4/2 (未熟)	—	—
-318	15W	口緑片	31.0	—	—	—	—	2mm程の砂粒を含む	2.5W2/2 (未熟)	—	—
-319	15P	深耕	—	—	—	—	—	2mm程の砂粒を少しあむ	外-2.5W6/6 (未熟) ~ 3/1 (未熟)	内-7.5W8/3/1 (未熟) ~ 6/4 (未熟)	—
-320	15P	耕	口緑片	—	—	—	—	0.5~1.5mm程の砂粒を含む	外-10W8/4/1 (未熟)	内-10W8/3 (未熟)	—
-321	15P	耕	—	—	—	—	—	1mm前後の砂粒を多く含む	外-5W8/6/6 (未熟)	内-5W8/6/6 (未熟)	—
-322	15E 15P	深耕	20~30cm	13.4	—	—	—	2mm程の砂粒を少し含む	7.5W6/6/4 (未熟) ~ 4/2 (未熟)	—	—
-323	15E 15P	深耕	12/2.5	24.0	—	—	—	0.5~2mm程の砂粒を含む	外-10W6/4 (未熟) ~ 10W5/2 (未熟)	内-10W5/2 (未熟)	—
-324	15E	深耕	口緑片	—	—	—	—	1mm程の砂粒を多く含む	外-10W5/2 (未熟) ~ 10W7/3 (未熟)	内-10W7/3 (未熟)	—
-325	8 E	耕	口緑片	23.0	—	—	—	1~1.5mm程の砂粒を含む	外-10W6/4 (未熟) ~ 10W5/2 (未熟)	内-10W6/4 (未熟) ~ 5/3 (未熟)	—
-326	11 E	深耕	口緑片	—	—	—	—	2mm前後の砂粒を多く含む	外-10W3/2 (未熟)	内-10W3/2 (未熟) ~ 5/3 (未熟)	—
-327	15P	—	1 緑片	—	—	—	—	0.3~2mm程の砂粒を含む	外-10W8/3 (未熟)	内-10W6/2 (未熟)	—
-328	16 P	—	1 緑片	—	—	—	—	0.5~2mm程の砂粒を含む	外-10W7/2 (未熟) ~ 10W7/1 (未熟)	内-10W7/1 (未熟) ~ 10W7/0 (未熟)	—
-329	15P	—	1 緑片	—	—	—	—	0.5~1mm程の砂粒を含む	外-10W7/4 (未熟)	内-10W7/4 (未熟)	—
-330	11 P	深耕	口緑片	16.4	—	—	—	1~2mm程の砂粒を含む	外-5W6/6/4 (未熟) ~ 5W7/0 (未熟)	内-10W7/7 (未熟) ~ 5/3 (未熟)	—
-331	9 E	深耕	口緑片	17.2	—	—	—	0.5~2.5mm程の砂粒を含む	外-5W6/7/6 (未熟) ~ 6/6 (未熟)	内-5W6/7/6 (未熟) ~ 6/6 (未熟)	—
-332	15 P	—	口緑片	—	—	—	—	1mm前後の砂粒を多く含む	外-10W5/2 (未熟)	内-10W5/2 (未熟) ~ 6/3 (未熟)	圃場に隣
-333	14 E	—	口緑片	—	—	—	—	2mm程の砂粒を多く含む	外-10W6/4 (未熟) ~ 10W5/2 (未熟)	内-10W6/4 (未熟) ~ 6/3 (未熟)	圃場に隣
27	15G	深耕	—	—	—	—	—	3~5mmの砂粒を多く含む	外-10W5/3 (未熟) ~ 10W5/4 (未熟)	内-10W5/3 (未熟) ~ 10W5/4 (未熟)	—
334	15P	—	—	—	—	—	—	2.5mm	外-10W7/4 (未熟) ~ 10W7/5 (未熟)	内-10W7/4 (未熟) ~ 10W7/5 (未熟)	—
-335	15 P	耕	耕片	—	—	—	—	1mm程の砂粒を多く含む	外-10W6/4 (未熟)	内-10W6/3 (未熟)	香波園文 竹波文
-336	15 E	耕	耕片	—	—	—	—	2mm程の砂粒を少し含む	外-10W7/7 (未熟)	内-10W7/7 (未熟)	香波園文 竹波文
-337	16 P	—	口緑片	S	2.5mm	—	—	1mm程の砂粒を多く含む	外-10W6/8/8 (未熟)	内-10W6/8/8 (未熟)	香波園文 竹波文
-338	15 P	—	耕片	—	S	—	—	1mm程の砂粒を多く含む	外-10W6/3 (未熟)	内-10W6/3 (未熟)	香波園文 竹波文
-339	15 P	—	耕片	—	S	—	—	1mm程の砂粒を多く含む	外-10W6/3 (未熟)	内-10W6/3 (未熟)	香波園文 竹波文
-340	11 P	—	口緑片	(Z)	—	—	—	1~3mm程の砂粒を多く含む	外-10W7/4 (未熟) ~ 10W7/5 (未熟)	内-10W7/4 (未熟) ~ 10W7/5 (未熟)	香波園文 竹波文
-341	15 P	—	口緑片	Z	2.5mm	浅	—	2mm程の砂粒を多く含む	外-10W7/3 (未熟) ~ 10W7/4 (未熟)	内-10W7/3 (未熟) ~ 10W7/4 (未熟)	香波園文 竹波文
-342	14 P	深耕	口緑片	S	4.5mm	浅	—	3mm前後の砂粒を多く含む	外-10W7/3 (未熟) ~ 10W7/4 (未熟)	内-10W7/3 (未熟) ~ 10W7/4 (未熟)	香波園文 竹波文
-343	12 P	—	耕片	—	Z	2.5mm	浅	1~2mm前後の砂粒を多く含む	外-10W8/3 (未熟)	内-10W8/3 (未熟)	香波園文 竹波文
-344	15 P	—	耕片	—	Z	2.5mm	浅	3mm以上の砂粒を多く含む	外-10W8/4 (未熟)	内-10W8/4 (未熟)	香波園文 竹波文
-345	15 P	深耕	口緑片	—	Z	2.5mm	浅	3~5mmの砂粒を多く含む	外-10W8/5/3 (未熟)	内-10W8/5/3 (未熟)	香波園文 竹波文
-346	15 E	耕	口緑片	—	Z	3mm	浅	3mm程の砂粒を多く含む	外-10W8/6/4 (未熟)	内-10W8/6/4 (未熟)	香波園文 竹波文
-347	9 E 15P	深耕	口緑片	—	Z	2mm	浅	2mm前後の砂粒を多く含む	外-10W8/7/6 (未熟)	内-10W8/7/6 (未熟)	香波園文 竹波文
-348	10 E	—	口緑片	X	2mm	浅	0.5~1mmの砂粒を含む	外-10W8/3/3 (未熟) ~ 10W8/4 (未熟)	内-10W8/3/4 (未熟)	香波園文 竹波文	
-349	15 E	—	耕片	—	4mm	浅	—	2~3mmの砂粒を多く含む	外-10W8/4 (未熟)	内-10W8/4 (未熟)	香波園文 竹波文
-350	11 E	耕	耕片	—	4mm	浅	—	2~3mmの砂粒を多く含む	外-10W8/6/2 (未熟)	内-10W8/6/2 (未熟)	香波園文 竹波文
-351	11 E	耕	耕片	—	3mm	浅	—	1~3mm程の砂粒を少し含む	外-10W8/7/2 (未熟)	内-10W8/7/2 (未熟)	香波園文 竹波文
-352	15P 16P	耕	耕片	—	2mm	浅	0.5~1mmの砂粒を含む	外-10W8/3/3 (未熟) ~ 10W8/4 (未熟)	内-10W8/3/4 (未熟)	香波園文 竹波文	
-353	18 E	—	耕片	—	—	—	—	2mm程の砂粒を含む	外-10W7/4 (未熟) ~ 10W7/5 (未熟)	内-10W7/4 (未熟) ~ 10W7/5 (未熟)	—
-354	S X 3	耕片	—	—	—	—	—	1mm程の砂粒を多く含む	外-10W8/4/1 (未熟)	内-10W8/4/1 (未熟)	—
-355	15 P	耕	耕片	—	—	—	—	3mm程の砂粒を少しきむ	外-10W8/5/2 (未熟)	内-10W8/5/2 (未熟)	沈浪内利突 丁子文
-356	14 G	耕	耕片	—	3mm	浅	—	1mm程の砂粒を多く含む	外-10W8/5/3 (未熟)	内-10W8/5/3 (未熟)	春色細井行若 道場内利突
-357	17 T-T	C 緑片	I	高級	1.5mm	—	—	1mm程の砂粒を多く含む	外-2.5W4/2 (未熟)	内-2.5W4/2 (未熟)	補修コ
-358	16 G	口緑片	I	高級	1.5mm	—	1mm程の砂粒を多く含む	外-2.5W4/2 (未熟)	内-2.5W4/2 (未熟)	補修コ	
-359	14 T-T	空気片	I	高級	2mm	浅	—	1mm前後の砂粒を多く含む	外-2.5W6/6 (未熟)	内-2.5W6/6 (未熟)	キザミ 利突文
-360	14 F	空気片	I	高級	—	—	—	0.5mm程の砂粒を多く含む	外-2.5W7/7 (未熟)	内-2.5W7/7 (未熟)	キザミ 利突文
-361	15 P	空気片	I	高級	—	—	—	2mm以上の砂粒を多く含む	外-2.5W8/6 (未熟) ~ 2.5W8/7 (未熟)	内-2.5W8/6 (未熟) ~ 2.5W8/7 (未熟)	キザミ 利突文
-362	15 E	空気片	I	高級	—	—	—	空気片	2.5W8/6 (未熟) ~ 2.5W8/7 (未熟)	2.5W8/6 (未熟) ~ 2.5W8/7 (未熟)	キザミ 利突文
-363	16 P	空気片	I	高級	—	—	—	2mm以上の砂粒を多く含む	2.5W8/6 (未熟) ~ 2.5W8/7 (未熟)	2.5W8/6 (未熟) ~ 2.5W8/7 (未熟)	キザミ 利突文
-364	16 E	空気片	I	高級	—	—	—	2mm以上の砂粒を多く含む	2.5W8/6 (未熟) ~ 2.5W8/7 (未熟)	2.5W8/6 (未熟) ~ 2.5W8/7 (未熟)	キザミ 利突文

表VII-4 繩文時代晚期土器観察表

国 No.	出土地名	器種	既存部位	II 径 I 部 高さ	底 I 部 高さ	底 I 部 厚さ	測 定		施 工		目 次	備考
							外径	内径	ナガ	ナガ		
18-25	9 E	口縁片					ナガ		1mm以下の砂粒を多く含む		7.5W8.3/2(黒褐)	
2	15 F	口縁片					ナガ		1~2mmの砂粒を多く含む		外 7.5W8.3/2(灰褐色)	
-3	16 F	口縁片					ナガ		1~3mmの砂粒を多く含む		外 2.5W8.4/1(灰褐色)	
-4	15 F	浅鉢	3/4	19.3			ナガ		2~3mmの砂粒を多く含む		内 2.5W8.7/2(灰褐色)	
-5	11 F	口縁片					ナガ		粗い砂粒を多く含む		2.5W7.3(浅褐色)~10W7.3(3寸鉢)黄褐色	
-6	12 F	口縁片	18.1				ナガ		0.5~1.5mmの石英等を含む		外 5.5W7.7/6(褐)	
-7	11 E	口縁片					ナガ		3mm以上の砂粒を多く含む		外 10W7.4/4(灰褐色)	
-8	不明	浅鉢	18.0	13.3			ナガ		1~1.5mmの石英等を含む		7.5W8.0/4(淡褐色)	
9	11 E	コロ片		27.2			ナガ		4mmの砂粒を少し含む		外 7.5W7.7/6(褐)	
-10	12 E	口縁片					ナガ		1mm以下の砂粒を多く含む		7.5W8.7/6(褐)	
-11	12 F	口縁片					ナガ		1mm以下の砂粒を含む		6.5W6.6(褐)	
12	10 E	口縁片					ナガ		2mm以下の砂粒を含む		外 10W8.3/3(1寸鉢)黄褐色	
-13	11 E	口縁片					ナガ		1~1.5mmの砂粒を多く含む		外 7.5W8.6/3(灰褐色)	
-14	11 F	口縁片					ナガ		1~2mmの砂粒を含む		7.5W8.4/2(灰褐色)	
-15	9 E	口縁片					ナガ		2~3mmの砂粒を多く含む		5.5W6.0/6(褐)	
16	12 F	口縁片					ナガ		1mm以下の砂粒を含む		7.5W8.7/6(褐)	
17	12 E	口縁片					ナガ		1mm以下の砂粒を含む		10W8.7/6(灰褐色)	
-18	11 E	口縁片					ナガ		1~2mmの砂粒を含む		7.5W8.7/4(灰褐色)	
-19	11 E	口縁片					ナガ		2mm以下の砂粒を含む		6.5W6.7/6(褐)	
20	11 E	口縁片					ナガ		1~3mmの砂粒を含む		7.5W8.6/6(褐)	
-21	1 E	口縁片					ナガ		1~1.5mmの砂粒を含む		10W8.7/3(3寸鉢)黄褐色	
-22	9 E	口縁片					ナガ		1~2mmの砂粒を少し含む		5.5W8.1/2(灰褐色)	
23	13 F	口縁片					ナガ		1~4mmの砂粒を多く含む		外 5.5W8.4/3(1寸鉢)灰褐色	
-24	5 E	口縁片					ナガ		0.5mmの砂粒を少し含む		内 5.5W8.4/1(褐)	
25	12 L.T	口縁片					ナガ		1~2mmの砂粒を含む		7.5W8.6/4(灰褐色)	
26	15 F	口縁片		21.1			ナガ		3mm以上の砂粒を多く含む		10W8.6/3(灰褐色)	
27	15 F	口縁片					ナガ		1~4mmの砂粒を少し含む		5.5W8.4/1(褐)	
28	16 F	口縁片					ナガ		3mm以下の砂粒を多く含む		10W8.8/3(浅褐色)	H.一整体化
29	15 F	口縁片		8.6			ナガ		1mm以下の砂粒を多く含む		10W8.6/3(2寸鉢)黄褐色	
30	10 F	浅鉢	(1/2)	14.4			ナガ		0.5~1.5mmの砂粒を少し含む		7.5W8.6/4(灰褐色)~4/2(灰褐色)	
31	10 E	口縁片					ナガ		0.5~1.5mmの砂粒を少し含む		10W8.5/3(2寸鉢)灰褐色	
-32	15 F	口縁片					ナガ		2~3mmの砂粒を多く含む		10W8.6/3(2寸鉢)灰褐色	
-33	15 F	口縁片					ナガ		2~3mmの砂粒を多く含む		外 6.5W8.7/1(3寸鉢)黄褐色	
-34	9 E	浅鉢	23.4				ナガ		~3mmの砂粒を含む		7.5W8.8/4(灰褐色)	
-35	10 E	突堤部片					ナガ		1~2mmの砂粒を含む		10W8.6/3(2寸鉢)灰褐色	
-36	11 E	口縁片					ナガ		0.5~1.5mmの砂粒を多く含む		7.5W8.7/6(褐)	
-37	12 L.T	口縁片					ナガ		1~2mmの砂粒を含む		外 5.5W8.7/6(褐)	
38	17 C	口縁片					ナガ		1mm以下の砂粒を多く含む		外 7.5W8.7/4(3寸鉢)灰褐色	
-39	9 E	口縁片					ナガ		1mm以下の砂粒を多く含む		外 10W8.8/3(浅褐色)	
40	17 G	深鉢	26.0				ナガ	突堤	7mm以下の石英等を少し含む		7.5W8.6/6(褐)~6/4(3寸鉢)黄褐色	
-41	D 1. T	口縁片	16.6				ナガ	ナガ(口突堤)	1.5mm以下の砂粒を多く含む		外 10W8.7/1(褐)	
-42	17 L.T	口縁片	19.2				ナガ	ナガ(口突堤)	1.5~2mmの砂粒を含む		外 7.5W8.5/2(灰褐色)	
							ナガ		1.5~2mmの砂粒を含む		外 7.5W8.7/6(褐)	

表VII-5 縄文時代後晩期 粗製土器 観察表(概ね深鉢)

No	出土地點	保存状態	寸法 (cm)	基準 (cm)	目録	調査	場所	色	備考
内側	外一側面	ナゲ	5mm程の砂粒を含む						
-1	10E 11E	口縁+側部	29.6						
-2	9E	口縁+側部	20.4						
-3	11E	口縁	20.0						
-4	11E	口縁	35.2						
-5	8E	口縁+側部	20.8						
-6	9E	口縁+側部	18.9						
-7	16E	口縁+側部	29.2						
-8	9E	口縁	27.0						
9	9E 9E	口縁+側部	17.6						
-10	9E	口縁	27.0						
-11	9E	口縁	26.8						
-12	9E	口縁	20.5						
-13	11E	口縁	22.6						
-14	10E 11E	口縁	20.4						
-15	10E 11E 11E	口縁+側部	20.5						
-16	9E	口縁	24.0						
-17	9E	口縁	26.0						
-18	11E	口縁							
-19	9E	口縁	30.0						
-20	10E	口縁							
-21	13F	口縁							
-22	15E	口縁+側部	23.8						
-23	15E	口縁	30.8						
-24	11F	口縁+側部	26.2						
-25	8E	口縁	28.4						
-26	9E	口縁+側部	30.8						
-27	10E	口縁	20.0						
-28	不明	口縁	22.6						
-29	11E	口縁+側部	26.0						
-30	10E	口縁	37.8						
-31	9E 10E	口縁	29.6						
-32	9E	口縁+側部	24.4						
-33	11E	口縁	31.4						
-34	11E	口縁	32.0						
-35	9E	口縁	27.0						
-36	10F	口縁+側部	25.2						
-37	9E	口縁	30.5						
-38	11E	口縁							
-39	14F	口縁							

区 No	出土地点	sondage	口 深 (cm)	距 高 (cm)	埋 定 (cm)	地 帯	調 査	埋 土	色 調	備考
40	10F	口縫片	-	-	直立	丸	外一側面 内一側面 ナダ	2m以上の砂粒を含む	外・心 7.5W4/3(黄) 内 7.5W6/6(緑)	
41	12F	口縫片	-	-	直立	丸	外一側面 内一側面 指標層	1やや密	10W6/4(にぶい黄緑)	
42	11E	口縫片	-	-	直立	丸	外一側面 外一側面 ナダ	2m以上の砂粒を含む	10W7/4(にぶい黄緑)	褐色より
43	9E 1C縫~鋼部	35.9	1	直立	丸	外一側面 内一側面 ナダ	2~3mmほどの砂粒を少 々含む	外 7.5W3/3(にぶい褐)~6/6(緑) 内 10W8/4(浅黄緑)~6/6(緑)	風化が著しい	
44	8E 9E	口縫片	28.4	-	直立	丸	外一側面 内一側面	1~2mmほどの砂粒を含む	外 5W5/6(緑)~3/2(青緑) 内 7.5W6/6(緑)	粘土堆土上げ痕 明瞭
45	11E	口縫片	21.6	-	直立	丸	外一側面 内一側面 ナダ	2~3mmほどの砂粒を含む	外 2.5W6/8(緑) 内 5W3/1(黒緑)	
46	9E	11縫片	18.6	-	直立	丸	外一側面 内一側面	0.5~2.5mmの砂粒を多く 含む	外 5W6/6(緑) 内 5W6/6(緑)	
47	11E	口縫片	14.0	-	直立	丸	外一側面 内一側面 ナダ	1~3.5mmほどの砂粒を多 く含む	外 10W4/2(浅黄緑)~6/3(はい黄) 内 10W7/3(にぶい黄緑)	僅かに成打 跡見
48	11E	口縫片	33.8	-	直立	丸	外一側面 内一側面 ナダ	0.5~1.5mmの砂粒を多く 含む	外 10W4/4(浅黄緑)~9/1(黒褐) 内 10W4/4(11月)~6/2(はい黄)	外面に煤化帯
49	10E	1縫~鋼部	27.2	-	直立	丸	外一側面 内一側面 ナダ	3mm以上の砂粒を多く含む	外 2.5W6/8(緑) 内 2.5W5/6(明赤緑)~6/8(緑)	
50	11E	口縫片	32.0	-	直立	丸	外一側面 内一側面 ナダ	2mm以上の砂粒を含む	7.5W7/4(にぶい緑)~5/2(灰緑)	
51	9E	口縫片	32.6	-	直立	丸	外一側面 内一側面	1~3mmほどの砂粒を含む	外 10W4/2(はい黄) 内 10W7/4(にぶい黄緑)	
52	11E	口縫片~鋼部	30.8	-	直立	丸	外一側面 内一側面	1~5mmほどの砂粒を多く 含む	外 10W4/1(9月)~6/3(12月) 内 7.5W6/3(2月~5月)~6/1(1月)	
53	11E	口縫片	25.0	-	直立	丸	外一側面 内一側面	1~2mmほどの砂粒を含む	外 10W7/4(にぶい褐)~6/3 内 10W7/4(12月)~5/6(3月)	
54	9E	11縫片	33.4	-	直立	丸	外一側面 内一側面 ナダ	3mmほどの砂粒を多く含む	外 10W6/3(3月~4月)~5/6(6月) 内 10W7/4(4月~6月)~5/6(6月)	
55	11E	1縫~鋼部	30.2	-	直立	丸	外一側面 内一側面	今や密	外 10W5/2(灰緑)	
56	9E	1縫片	20.0	-	直立	丸	外一側面 内一側面	1mmほどの砂粒を多く含む 4mmほどの砂粒をほとんど含む	外 7.5W6/6(緑)~3/1(灰) 内 5W3/6(6月赤緑)~4/4(にぶい黄)	
57	11E	口縫片	29.2	-	直立	丸	外一側面 内一側面	0.5~1.5mmの砂粒の量が、 葉、茎等の砂粒を含む	外 7.5W6/3(4月~5月) 内 10W7/4(にぶい黄緑)~4/1(褐)	
58	11E	口縫片	34.4	-	直立	丸	外一側面 内一側面 ナダ	2mmほどの砂粒を多く含む	外 2.5W7/4(にぶい黄緑) 内 7.5W7/6(6月)	
59	10E	口縫片~鋼部	21.4	-	直立	丸	外一側面 内一側面	3mmほどの砂粒を多く含む	外 2.5W5/8(7月赤緑)~5/7(7月) 内 2.5W5/6(6月赤緑)	
60	12F	口縫片	32.6	-	直立	丸	外一側面 内一側面 ナダ	0.5~1.5mmの砂粒を多く含む	5W6/6(8月)	風化が著しい
61	11E	1縫片~12縫片	18.6	-	直立	丸	外一側面 内一側面 ナダ	1~3mmほどの砂粒を多く含む	外 7.5W6/6(6月)~7.5W6/3(にぶい黄) 内 7.5W4/2(灰緑)	前面に削落付着
62	8E 9E	1縫片	34.0	-	直立	丸	外一側面 内一側面	2.5mm以上の砂粒を多く含む	外 10W6/3(6月~5月) 内 7.5W6/6(6月)	
63	9E	1縫片	28.5	-	直立	丸	外一側面 内一側面	今や密	10W7/4(にぶい黄緑)	
64	9E	1縫片	28.0	-	直立	丸	外一側面 内一側面	今や密	外 7.5W5/3(にぶい黄) 内 7.5W6/4(にぶい黄)	
65	11F	口縫片	-	-	直立	丸	外一側面 内一側面	岩突文	外 10W7/2(にぶい黄緑) 内 10W7/1(1月)	剥離あり
66	12E	1縫片	26.4	-	直立	丸	外一側面 内一側面 ナダ	今や密	外 7.5W3/1(1月) 内 7.5W4/3(3月) 心 5W6/6(6月)	
67	3F	1縫片	12.0	-	直立	丸	外一側面 内一側面	今や密	外 7.5W5/2(6月黄) 内 7.5W5/3(にぶい黄)	隔壁
68	9E	1縫片	15.8	-	直立	丸	外一側面 内一側面 ナダ	1~2mmほどの砂粒を含む	10W5/2(6月黄) 内 7.5W5/3(にぶい黄)	
69	9E	1縫片	24.2	-	直立	丸	外一側面 内一側面 ナダ	1~2mmほどの砂粒を多く含む	外 2.5W6/6(6月) 内 2.5W6/6(6月)	
70	10E	1縫片~鋼部	37.8	-	直立	丸	外一側面 内一側面	0.5mmほどの砂粒を少し含む	外 7.5W7/4(にぶい黄)~3/1(3月)	
71	8E 9E	1縫片~鋼部	16.0	-	直立	丸	外一側面 内一側面 ナダ	3mmほどの砂粒を含む	外 6W6/6(6月)~5/4(にぶい黄) 内 6W5/3(にぶい黄)	
72	11E	口縫片~鋼部	34.0	-	直立	丸	外一側面 内一側面	2~5mmほどの砂粒を多く含む	外 10W8/2(6月黄) 内 7.5W7/3(にぶい黄)	
73	10E	口縫片	30.6	-	直立	丸	外一側面 内一側面 ナダ	今や密	外 10W7/3(にぶい黄) 内 10W7/3(にぶい黄)	全面に煤化帯
74	12E	1縫片	26.6	-	直立	丸	外一側面 内一側面 ナダ	今や密	外 7.5W7/4(にぶい黄) 内 7.5W7/3(にぶい黄)	
75	10E	1縫片	-	-	直立	丸	外一側面 内一側面	1~3mmほどの砂粒を含む	10W5/2(6月黄)	山積部前面に 煤化帯
76	9E	口縫片	-	-	直立	丸	外一側面 内一側面	今や密	外 7.5W6/4(にぶい黄)~3/1(黒) 内 7.5W6/4(1月~2月)	
77	11E	口縫片	23.8	-	直立	丸	外一側面 内一側面	今や密	外 7.5W6/6(6月) 内 5W7/6(6月)	
78	11E	口縫片	35.2	-	直立	丸	外一側面 内一側面	密	外 5W5/5(6月赤緑)~4/1(黒) 内 7.5W5/5(3月)	

No	土地点	残存部位	日 残 (cm)	高さ (cm)	葉様	口 細	潤 滑	基 土	色 調	備考
VI-32 -79	1SF 10F	口縁片	34.0		直立 素り	内-一部 外-一部	バ-部底 ナダ	1mm程の砂粒を多く含む	外-7.3W4/2(黄緑)～3/1(黒緑)	
-80	1.5F	14縫～底部 (1.0)	11.2		直立 手	内-一部 外-ナダ	3mm前後の砂粒を少し含む	内-7.3W7/0(緑)		植生地植付後
-81	1.5E	口縁片	34.4		直立 手	内-一部	外-粗面	1～2mm程の砂粒を多く含む	外-10W7/3(にぶい黄緑)～3/2(黒緑)	
-82	8E	14縫～底部	29.8		直立 手	内-ナダ	外-ナダ	1～5mm程の砂粒を多く含む	内-10W7/4(にぶい黄緑)	
-83	1SF 16F	口縁片	35.2		直立 手	内-一部	外-粗面	1～2mm程の砂粒を含む	外-7.3W4/2(黒緑)	
-84	15F	口縫片			直立 素り	内-ナダ 外-ナダ	外-ナダ	やや密	外-10W7/4(にぶい黄緑)	
-85	3F 16F	口縫～脚部	39.4		直立 手	内-ナダ	外-タケヅリ	2～4mm程の砂粒を多く含む	内-10W7/3(にぶい黄緑)	外側に付着
-86	8E	口縫～脚部	25.4		直立 手	内-一部	外-粗面	1～3mm程の砂粒を含む	外-10W7/4(にぶい黄緑)～4/2(黒緑)	
-87	16F	口縫片			直立 素り	内-一部	外-粗面	3mm程の砂粒を含む	内-10W8/4(黄緑)	
-88	15F	口縫片			直立 手	内-ナダ	外-タケヅリ	1～2mm程の砂粒を含む	外-10W7/3(にぶい黄緑)	植付孔あり
VI-33 -89	11F	11縫片			外-丸	内-ナダ	外-粗面	1～2mm程の砂粒を少し含む	外-10W4/1(黄緑)	
-90	11E	口縫片	27.6		外-丸	内-ナダ	外-粗面	砂粒を多く含む	外-10W6/3(にぶい黄緑)	
91	10E	11縫片	36.0		外-丸	内-ナダ	外-粗面	やや密	外-10W8/4(黄緑)～5Y4/1(黒)	
-92	11E	口縫片	20.0		外-丸	内-ナダ	外-ナダ	2～3mm程の砂粒を多く含む	外-7.3W7/6(黒)～6/4(にぶい緑)	外側に付着
-93	9E	1縫～脚部	31.6		外-丸	内-ナダ	外-ナダ	やや密	外-7.3W8/3(にぶい黒)～5Y4/2(黒緑)	
-94	11F	口縫～脚部	14.0		外-丸	内-一部	外-粗面	3mm前後の砂粒を多く含む	7.3W3/4(にぶい黒)～3/1(黒緑)	屋内に運びつけ
95	9E	口縫片	23.4		外-丸	内-ナダ	外-ナダ	1～2mm程の砂粒を含む	7.3W7/6(緑)	
-96	9E	口縫～脚部	25.0		外-丸	内-タケヅリ	外-タケヅリ	1.5mm前後の砂粒を多く含む	外-7.3W6/8(緑)	外側に付着
-97	10E	口縫片	16.2		外-丸	内-ナダ	外-粗面	1～2mm程の砂粒を多く含む	外-7.3W6/6(黒)～5Y6/8(黒)	
-98	11F	口縫片	15.0		外-丸	内-一部	外-粗面	やや密	外-7.3W5/4(にぶい黒)～3/1(黒緑)	
99	9E	口縫片	25.0		外-丸	内-ナダ	外-タケヅリ	1mm程の砂粒を多く含む	10W4/1(黒)	1机に指摘
-100	11E	口縫片	21.6		外-丸	内-タケヅリ	外-タケヅリ	1mm程の砂粒を含む	7.3W3/1(黒緑)	
-101	10E	11縫～脚部	26.8		外-丸	内-一部	外-粗面	1～2mm程の砂粒を含む	外-7.3W7/6(黒)～3/1(黒緑)	
-102	9E	口縫～脚部	19.0		外-丸	内-一部	外-粗面	1～4mm程の砂粒を少し含む	外-7.3W8/5/3(にぶい黒)～5/4(にぶい黒)	
-103	11E	11縫片	37.0		外-丸	内-ナダ	外-粗面	0.5～1mm程の砂粒を多く含む	外-7.3W6/6(黒)	1机内面が肥厚
-104	11E	口縫片	28.5		外-丸	内-ナダ	外-粗面	2mm程の砂粒を含む	外-10W7/4(にぶい黒)～3/2(黒緑)	
-105	9E	11縫片	25.0		外-丸	内-ナダ	外-粗面	風化力為不明	外-10W7/7/6(黒)	
-106	12F	口縫片	26.4		外-丸	内-一部	外-粗面	1～2mm程の砂粒を含む	外-10W6/4(にぶい黒)～3/1(黒緑)	解説あり
-107	11E	口縫～脚部	34.0		外-丸	内-一部	外-粗面	1mm程の砂粒を多く含む	外-10W6/6(黒)～3/1(黒緑)	
-108	11E	口縫片	24.6		外-丸	内-一部	外-粗面	1～2mm程の砂粒を多く含む	外-10W7/4(にぶい黒)～4/2(黒緑)	外側に付着
-109	9E	11縫～脚部	21.0		外-丸	内-ナダ	外-タケヅリ	2～5mm程の砂粒を少し含む	外-5Y6/7/8(黒)～7.YR7/8(黒)	
-110	11E	口縫片	24.6		外-丸	内-ナダ	外-粗面	0.5～2mm程の砂粒を多く含む	外-5Y6/7/8(黒)～7.YR7/8(黒)	
-111	13F	口縫片	32.8		外-丸	内-ナダ	外-タケヅリ	2～5mm程の砂粒を含む	外-7.3W5/2(黒)～4/1(黒)	
112	11E	口縫片	22.2		外-丸	内-ナダ	外-タケヅリ	2mm程の砂粒を多く含む	外-7.3W6/7(黒)	
-113	11E	口縫片	32.4		外-丸	内-ナダ	外-粗面	やや密	外-9W7/3(にぶい黒)	
114	11F	口縫片	35.2		外-丸	内-ナダ	外-粗面	2mm程の砂粒を多く含む	外-10W6/3(にぶい黒)	
-115	10E	口縫片	20.4		外-丸	内-ナダ	外-タケヅリ	1～2mm程の砂粒を少し含む	外-7.3W5/4(にぶい黒)	
-116	11F	口縫片	35.8		外-丸	内-ナダ	外-粗面	やや密	外-10W7/4(にぶい黒)	口外外面に転がり
-117	11E	口縫片	30.0		外-丸	内-ナダ	外-粗面	やや密	外-7.3W7/6(黒)	

No	地點	地質剖面	上位 標高 (m)	底 標高 (m)	岩層 名	調査 結果	地 質	色 調	備 考
							外 部	内 部	
118	11E	口縫片	27.8	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	5~7mmの砂粒を含む 1mmの砂粒を含む	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	2.3W5/7/8 (明赤鉄)	—
-119	12E	口縫片	27.6	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	外-10W4/7/2 (灰赤鉄)~3/1 (赤鉄) 内-10W6/3 (赤鉄・黄鉄)	外面に煤付着
120	11E	口縫片	31.8	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	7.5W4/2 (灰鉄)	—
-121	11E	口縫片	25.6	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	1~2mmの砂粒を含む 3mm	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	外-10W4/7/2 (灰赤鉄)~3/1 (赤鉄) 内-7.3W6/6 (灰鉄)~4/3 (赤鉄)	外面に煤付着
-122	11E	口縫片	26.9	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	1~2mmの砂粒を含む 3mm	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	外-10W6/4 (灰・黒鉄) 内-10W6/3 (灰・黒鉄)~5/2 (灰鉄)	—
W-34	9E	口縫・頭部	22.1	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	0.5~1mmの砂粒を含む 3mm	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	外-2.3W5/7/8 (明赤鉄) 内-7.3W6/6 (灰鉄)	外面に煤付着
-123	11E	口縫片	17.6	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	1mmの砂粒を含む 3mm	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	外-7.3W6/6 (灰鉄) 内-7.3W3/2 (灰鉄)	—
-124	11E	口縫片	21.6	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	1~2mmの砂粒を含む 3mm	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	外-10W7/4 (灰・黒鉄)~4/2 (灰鉄) 内-7.3W3/2 (灰鉄)	—
-125	11E	口縫・頭部	21.6	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	1~2mmの砂粒を含む 3mm	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	外-10W7/4 (灰・黒鉄)~3/1 (黒鉄) 内-7.3W7/4 (灰・黒鉄)	—
-126	11E	口縫片	—	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	1~2mmの砂粒を含む 3mm	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	外-5W6/6 (灰鉄)~3/1 (黒鉄) 内-7.3W6/6 (灰鉄)	外面に煤付着
-127	9E	口縫片	—	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	2~3mmの砂粒を含む 3mm	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	外-10W7/2 (灰鉄)~4/1 (灰鉄)	口縫内外に肥厚
128	15F	口縫片	31.2	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	0.5~1mmの砂粒を含む 3mm	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	外-10W4/4 (灰・黒鉄)~4/1 (灰鉄) 内-10W4/4 (灰鉄)	—
-129	9E	口縫片	—	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	1~3mmの砂粒を含む 3mm	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	外-5W8/5 (灰鉄)~2.3W3/3 (11赤鉄)	外面に煤付着
-130	10E	口縫片	—	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	0.5~2mmの砂粒を含む 3mm	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	外-7.3W6/3 (灰・黒鉄) 内-7.3W6/4 (灰鉄)	粘土鉱層上に灰鉄
-131	15F	口縫・頭部	26.2	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	3~5mmの砂粒を含む 3mm	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	外-7.3W6/3 (灰・黒鉄) 内-10W3/2 (灰鉄)	外面に煤付着
-132	15E	口縫片	19.8	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	3~5mmの砂粒を含む 3mm	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	外-7.3W7/6 (灰鉄)~6/6 (灰)	—
-133	16F	口縫片	31.0	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	2mmの砂粒を多く含む 3mm	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	10W3/3 (灰・黒鉄)~5/2 (灰鉄)	—
134	15E	口縫片	22.8	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	外-2.3W5/6 (明赤鉄) 内-2.3W4/2 (灰鉄)	—
-135	16F	口縫・頭部	15.8	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	2~4mmの砂粒を含む 3mm	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	外-7.3W6/3 (灰・黒鉄) 内-7.3W6/4 (灰・黒鉄)	外面に煤付着
-136	15F	口縫・頭部	21.6	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	0.5~2mmの砂粒を含む 3mm	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	外-7.3W3/3 (灰・黒鉄)~7/4 (ぶい鉄)	—
-137	14F 15F	口縫片	30.0	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	1~2mmの砂粒を多く含む 3mm	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	7.3W7/4 (ぶい鉄)	外面に煤付着
-138	15F	口縫・頭部	23.4	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	2mmの砂粒を多く含む 3mm	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	外-7.3W7/3 (ぶい鉄)~5/2 (灰鉄)	外面に煤付着
W-35	12E	口縫片	38.0	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	1~5mmの砂粒を含む 3mm	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	外-7.3W3/1 (灰鉄)~5/4 (ぶい鉄)	—
-139	—	—	—	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	外-7.3W4/2 (灰鉄)~4/2 (灰)	補修孔あり
-140	10E	口縫片	32.6	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	外-7.3W6/4 (ぶい鉄)	—
141	10E	口縫片	18.6	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	外-7.3W6/4 (ぶい鉄)	—
-142	10E	口縫・頭部	32.6	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	2.5~5mmの砂粒を多く含む 3mm	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	外-7.3W6/3 (灰)	—
143	10E	口縫片	31.4	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	外-7.3W6/3 (灰)~2.3W5/2 (灰鉄)	—
-144	12F	口縫片	21.4	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	外-10W3/1 (灰鉄)	—
-145	15F	口縫片	29.4	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	外-10W3/1 (灰鉄)	—
-146	15F	口縫片	24.8	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	3mm以下の砂粒を含む 3mm	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	外-7.3W7/4 (ぶい鉄)~4/1 (灰鉄)	外函に煤付着
-147	10E	口縫片	24.6	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	外-10W3/4 (ぶい鉄)	—
148	15F	口縫・頭部	30.0	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	2.5mm以上の砂粒を多く含む 3mm	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	外-5W8/5 (灰鉄)	—
-149	15F	口縫片	36.4	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	外-7W7/4 (灰)~4/1 (灰鉄)	—
150	15F	口縫片	—	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	—	外 部 丸 内 部 カズリ ナガ	外-10W3/2 (灰鉄)	—
-151	16E	口縫片	35.6	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	—	外 部 半 内 部 カズリ ナガ	外-7.3W6/3 (ぶい鉄)~10W3/2 (灰鉄)	外面に煤付着

表VII-6 繩文土器観察表（底部）

No.	出土場所	発掘深度 (cm)	口径 (cm)	底深 (cm)	底部			基部	側面	縫合部	色調	備考
					外一ミガキ 内一ミガキ 外一ミガキ 内一ミガキ	粗砂少し含む 粗砂多量あり	外-10R6/3 (にぶい黄褐色) 内-10R7/4 (にぶい黄褐色) 外-5YR8/4 (浅褐色) 内-2.5YR7/3 (浅褐色)					
1	9E	底部片	7.0	7.0	粗研	外一ミガキ 内一ミガキ 外一ミガキ 内一ミガキ	粗砂少し含む 粗砂多量あり	外-10R6/3 (にぶい黄褐色) 内-10R7/4 (にぶい黄褐色) 外-5YR8/4 (浅褐色) 内-2.5YR7/3 (浅褐色)				
-2	11F	底部片	7.0	7.0	粗研							
3	8E 9E	底部片	9.8	9.8	磨研	外一ミガキ 内一ミガキ 外一ミガキ 内一ミガキ	微赤	内-2.5YR5.2 (赤褐色)-4/1 (黒褐色)				
4	3F	底部片	1.0	1.0	磨研	外一ミガキ 内一ミガキ 外一ミガキ 内一ミガキ	0.5~2mmの砂粒多く含む 内-1ナラ 外-1ナラ	外-3.5R6/4 (赤褐色)-5/4 (にぶい黒褐色) 内-10R3.5/2 (赤褐色)				
5	9E	底部片	3.4	3.4	磨研	外一ミガキ 内一ミガキ	毛毛赤	外-3.5R7/3 (赤褐色)-6/2 (赤褐色)				
6	10E	底部片	11.0	11.0	磨研	外一ミガキ 内一ミガキ	粗砂少含む	外-3.5R6/0 (赤褐色) 内-5YR3.1 (赤褐色) 内-2.5YR5/3 (にぶい黒褐色)				
7	11E	底部片	9.0	9.0	磨研	外一ミガキ 内一ミガキ	粗砂含む	外-10R8/4 (赤褐色) 内-10R3.1 (赤褐色)				
8	12E	底部片	10.8	10.8	磨研	外一ミガキ 内一ミガキ	粗砂含む	10R8/0 (赤褐色)-4/1 (黒褐色)				
-9	9E	底部片	11.0	11.0	磨研	外一ミガキ 内一ミガキ	毛毛赤	内-10R6/0 (にぶい黒褐色) 内-10R3.1 (にぶい黒褐色)				
-10	10F	底部片	8.8	8.8	磨研	外一ミガキ 内一ミガキ	0.5mm以下の砂粒含む	10R6/3 (にぶい黄褐色)-3/1 (黒褐色)				
-11	11F	底部片	9.0	9.0	磨研	外一ミガキ 内一ミガキ	2mm以上の砂粒含む	外-3.5R6/4 (赤褐色)-6/2 (赤褐色) 内-2.5YR6/4 (にぶい黒褐色)				
-12	10E	底部片	7.0	7.0	磨研	外一ミガキ 内一ミガキ	混合物	外-2.5YR6/6 (赤褐色) 内-5YR5.1 (にぶい黒褐色)				
-13	11F	底部片	8.0	8.0	磨研	外一ミガキ 内一ミガキ	粗砂少、細多く含む	外-2.5YR7/2 (赤褐色) 内-2.5YR4.1 (赤褐色) 内-2.5Y6/2 (赤褐色)				
14	11E	底部片	8.1	8.1	はみ出し	外一ミガキ 内一層風化	やや赤	10R7/3 (にぶい黄褐色)-4/1 (黒褐色)				
-15	11E	底部片	8.0	8.0	はみ出し	外一ミガキ 内一ナラ	0.5~3mmの砂粒多く含む	10R7/6 (赤褐色)				
-16	10E	底部片	6.5	6.5	はみ出し	外一ミガキ 内一ナラ	はみ出の火灰の砂が付いて くら	外-2.5YR6/0 (赤褐色) 内-2.5YR3/1 (赤褐色)				
-17	2E	胸~底部片	8.1	8.1	はみ出し	外一層風化	4mm程の大粒の砂を含む	外-2.5YR6/4 (赤褐色)-10R8/4 (赤褐色) 内-2.5YR2/1 (黒褐色)				
-18	11E	底部片	7.3	7.3	はみ出し	外一ミガキ 内一ナラ	やや赤	10R7/4 (にぶい黄褐色)-5Y6/2 (赤褐色)				
-19	2E	底部片	8.0	8.0	はみ出し	外一ミガキ 内一層風化	指觸感極度 石英、雲母等砂粒多量含む	外-10R7/4 (にぶい黄褐色) 内-2.5Y6/3 (にぶい黒褐色)				
-20	2F	底部片	7.1	7.1	はみ出し	外一ミガキ 内一ナラ	やや赤	外-2.5YR7/8 (赤褐色)				
-21	2E	底部片	6.8	6.8	はみ出し	外一ミガキ 内一ナラ	1~2mmの砂粒を含む	外-10R7/4 (にぶい黒褐色)-3/2 (赤褐色) 外-10R6/3 (にぶい黑褐色)				
-22	11E	胸~底部片	8.0	8.0	はみ出し	外一ミガキ 内一ナラ	砂粒多く含む	外-2.5YR7/6 (赤褐色) 内-10R7/4 (にぶい黒褐色)				
23	11E	底部片	10.0	10.0	はみ出し	外一ミガキ 内一ナラ	砂粒多く含む	2.6W7/4 (にぶい赤褐色)				
24	9E	底部片	8.0	8.0	はみ出し	外一ミガキ 内一ナラ	やや赤	外-5YR7/6 (赤褐色) 内-2.5YR7/4 (にぶい黒褐色)				
25	11E	底部片	4.0	4.0	はみ出し	外一ミガキ 内一ナラ	粗砂少	2.5YR7/6 (赤褐色)				
26	11E	底部片	11.0	11.0	はみ出し	外一ミガキ 内一層風化	やや赤	外-2.5YR6/6 (赤褐色) 内-2.5Y6/6 (赤褐色)				
27	11E	底部片	9.0	9.0	はみ出し	外一ミガキ 内一ナラ	砂粒を含む	外-5YR7/6 (赤褐色) 内-10R4/1 (赤褐色)				
28	11E	底部片	5.0	5.0	はみ出し	外一ミガキ 内一ナラ	粗砂粒多量含む	外-10R5/3 (にぶい黒褐色) 内-5Y4/1 (赤褐色)				
-29	11E	胸~底部片	9.4	9.4	はみ出し	外一ミガキ 内一ナラ	粗砂粒多量含む	外-10R8/4 (赤褐色) 内-10R8/4 (赤褐色)				
30	11E	胸~底部片	7.0	7.0	はみ出し	外一ミガキ 内一ナラ	粗砂粒多量含む 細砂、雲母に有り	外-10R7/1 (にぶい黄褐色) 内-10R7/4 (にぶい黒褐色)				
-31	9E	胸~底部片	10.4	10.4	はみ出し	外一ミガキ 内一ナラ	粗砂粒多量含む 砂粒中に小孔あり 内-ナラ、雲母のものあり	外-5YR6/3 (赤褐色)-5YR7/6 (赤褐色) 内-10R5/1 (赤褐色)-6/2 (赤褐色)				
-32	11E	底部片	8.0	8.0	はみ出し	外一ミガキ 内一ナラ	1~2mmの砂粒を含む	外-2.5YR6/8 (赤褐色)-10R7/6 (赤褐色) 内-2.5YR6/8 (赤褐色)-2.5Y4/1 (赤褐色)				
-33	11F	底部片	9.0	9.0	はみ出し	外一ミガキ 内一ナラ	7~2mm程の砂粒多量含む	外-10R9/4 (赤褐色)				
-34	15G	底部片	9.6	9.6	はみ出し	外一ミガキ 内一ナラ	やや赤	外-10R7/4 (にぶい黒褐色) 内-2.5Y7/3 (赤褐色)				
-35	11E	底部片	9.0	9.0	上げ底	外一ミガキ 内一ナラ	粗砂粒多量含む	外-2.5YR7/6 (赤褐色)-5YR6/6 (赤褐色) 内-2.5YR6/4 (赤褐色)-5YR6/1 (赤褐色)				
-36	12E	底部片	7.0	7.0	上げ底	外一ミガキ 内一ナラ	1~2mmの砂粒多く含む	外-2.5YR6/8 (赤褐色)-10R7/6 (赤褐色) 内-2.5YR6/8 (赤褐色)-2.5Y4/1 (赤褐色)				
-37	11E	底部片	9.6	9.6	上げ底	外一ミガキ 内一ナラ	砂粒を含む。粗砂にあり	外-10R4/1 (赤褐色) 内-10R5/2 (赤褐色)				
-38	11F	底部片	9.0	9.0	上げ底	外一ミガキ 内一ナラ	砂粒を含む。粗砂にあり	外-10R7/3 (にぶい黒褐色)				

図 No	出土地点	保存部位	口 径 (cm)	深 度 (cm)	底 面 (cm)	底 面 溝 狹		地 士	鳥 谷	備 考
						左	右			
39	15E	底部片		11.6	上げ底	外-ケズリ 内-ナダ	2.5~3mmの溝多く含む		外-10R 5 / 2 (明黄緑)~7 / 6 (暗緑) 内-10R 6 / 2 (明黄緑)~5 / 1 (暗緑)	
40	16E	底部片		9.6	上げ底	外-ナダ 内-ナダ	2.5mmの溝多く含む		外-10R 7 / 4 (明黄緑)~3 / 2 (7.3 (浅緑)) 内-10R 7 / 4 (明黄緑)~3 / 2 (7.3 (浅緑))	
-41	11E	底部片		9.6	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	粗心地。複数にあり		外-25R 4 / (浅緑)~7.9R 7 / 3 (明黄緑)	
-42	11E	底部片		9.4	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	粗砂粒。複数に含む		外-10R 7 / 4 (明黄緑)~4 / 2 (明黄緑) 内-10R 7 / 4 (明黄緑)~3 / 2 (7.3 (浅緑))	
-43	12E	底部片		11.6	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	粗砂粒。複数に含む		外-7.3W 6 / 6 (浅黄緑)~10W 4 / 1 (浅緑) 内-10R 5 / 1 (明黄緑)~6 / 2 (明黄緑)	
-44	9E	軸~底端片		9.4	へこみ	外-ナダ 内-二枚目底端	4~5mmの溝多く含む		外-7.3W 6 / 4 (明黄緑)~2 / 2 (7.4 / 1 (明緑)) 内-7.3W 6 / 4 (明黄緑)	
-45	11E	底部片		8.6	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	粗砂粒。複数に含む		5W 5 / 6 (明黄緑)	
-46	10E	底端片		7.4	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	粗砂粒含む	複数にあり	外-7.3W 7 / 6 (明黄緑)~6 / 4 (明黄緑) 内-10R 7 / 3 (明黄緑)~3 / 2 (明黄緑)	
-47	10E	底端片		9.6	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	複数に含む		外-7.3W 6 / 6 (浅黄緑) 内-10R 7 / 2 (明黄緑)	
-48	9E	底端片		9.6	へこみ	外-ナダ 内-二枚目底端	3~5mmの溝多く含む		外-7.3W 7 / 4 (明黄緑)~4 / 2 (明緑) 内-10R 4 / 1 (明黄緑)~6 / 3 (明黄緑)	
-49	11E	底端片		12.6	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	3~5mmの溝多く含む		外-2.3W 5 / 6 (明黄緑) 内-10R 7 / 2 (明黄緑)	
-50	12E	底端片		11.8	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	3mmの溝多く含む		10W R 8 / 4 (浅黄緑)	
-51	9E	軸~底端片		9.4	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	3mmの溝多く含む		10W R 8 / 4 (明黄緑) 内-10R 8 / 3 (浅黄緑)	
-52	10E	軸~底端片		10.6	へこみ	外-ナダ 内-二枚目底端	3mmの溝多く含む		10W R 8 / 3 (明黄緑)	
-53	11E	底部片		11.0	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	3mmの溝を含む		外-10R 8 / 4 (明黄緑) 内-10R 8 / 1 (明黄緑)~4 / 1 (暗緑)	
補 37	11E	底部片		9.2	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	1~2mmの砂粒含む		外-5W 8 / 8 (暗緑)	
54	11E	底部片		11.4	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	1~2mmの砂粒少含む		外-10R 7 / 4 (明黄緑)~6 / 3 (明黄緑)	
-55	12E	底部片		11.4	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	1~2mmの砂粒少含む		外-10R 8 / 4 (明黄緑) 内-2.5W 8 / 3 (浅緑)~6 / 2 (明緑)	
56	11F	底部片		10.0	へこみ	外-ナダ 内-底端	1mmの砂粒少含む		外-3W 7 / 6 (暗緑)~5W 7 / 4 (明黄緑) 内-7.3W 5 / 1 (明緑)~7 / 4 (明黄緑)	
-57	11F	底部片		11.0	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	複数に含む。複数にあり		外-7.3W 6 / 4 (明黄緑)~5 / 3 (明黄緑) 内-10R 8 / 1 (明黄緑)~5 / 1 (明黄緑)	
-58	11E	底端片		8.4	へこみ	外-ナダ 内-底端	1mm~2mmの砂粒少含む		外-10W R 8 / 4 (明黄緑) 内-10R 7 / 4 (明黄緑)	
-59	11F	底端片		9.6	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	1~2mm程度の無地。不均一。複数に含む		7.3W 7 / 4 (明黄緑)~8 / 4 (明黄緑)	
-60	13E	底端片		10.6	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	2~2.5mmの溝多く含む		2.5W 5 / 8 (明赤緑)	
-61	15F	軸~底端片		9.5	へこみ	外-ケズリ ナダ	粗砂粒。複数に含む		外-7.3W 6 / 6 (暗緑) 内-2.5W 6 / 6 (暗緑)	
62	11~12F	底部片		8.0	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	1mmの砂粒を含む		外-7.3W 7 / 4 (明黄緑)~8 / 4 (明黄緑) 内-7.3W 4 / 1 (明黄緑)	
63	15G	底端片		9.4	へこみ	外-ケズリ ナダ	4~5mmの溝多く含む		外-7.5W 7 / 4 (明黄緑)~8 / 4 (明黄緑)	
-64	15F	底端片		9.0	へこみ	外-ケズリ ナダ	1~2mmの砂粒含む		外-10R 8 / 4 (浅黄緑)	
-65	15F	底端片		10.2	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	複数に含む		外-7.3W 7 / 4 (明黄緑)~8 / 4 (明黄緑) 内-5W 6 / 4 (明黄緑)	
66	16E	底端片		8.0	へこみ	外-ナダ 内-ナダ	粗砂粒。複数に含む		外-10W R 8 / 4 (明黄緑) 内-5W 5 / 4 (明黄緑)	
-67	11E	底端片		9.0	半底	外-ナダ 内-ナダ	複数に含む		外-7.3W 6 / 4 (明黄緑)~5 / 2 (暗緑) 内-10R 8 / 3 (明黄緑)~4 / 1 (暗緑)	
-68	9E	軸~底端片		7.0	半底	外-ケズリ ナダ 内-ナダ	粗砂粒。複数に含む		外-10R 6 / 3 (明黄緑)	
-69	9E	軸~底端片		9.8	半底	外-ナダ 内-ナダ	粗砂粒。複数に含む		外-10R 6 / 3 (明黄緑)~4 / 1 (暗緑)	
-70	10E	底端片		9.0	半底	外-ナダ 内-ナダ	複数に含む		外-10R 5 / 2 (明黄緑)~6 / 6 (暗赤緑)	分化が否い
-71	8E	底端片		9.5	半底	外-ナダ 内-ナダ	0.5mm~1mmの溝多く含む		外-7.3W 5 / 4 (明黄緑)	
-72	11E	底端片		9.0	半底	外-ナダ 内-ナダ	複数に含む		外-7.3W 7 / 8 (暗緑)~2.5W 6 / 3 (明黄緑) 内-7.3W 6 / 6 (暗緑)	
73	11E	底端片		8.9	半底	外-ナダ 内-ナダ	複数に含む		外-2.3W 5 / 2 (明黄緑)~8 / 3 (明黄緑) 内-7.3W 8 / 3 (明黄緑)~2.5W 6 / 2 (明黄緑)	
74	10E	底端片		7.6	半底	外-ナダ 内-ナダ	複数に含む		7.3W 6 / 4 (明黄緑)	
-75	9E	軸~底端片		9.0	半底	外-ケズリ 隆起 内-ナダ	粗砂粒含む		外-7.3W 7 / 6 (暗緑) 内-7.3W 7 / 4 (明黄緑)	
-76	9E	底端片		9.0	半底	外-ナダ 内-ナダ	複数に含む		外-5W 6 / 6 (暗緑) 内-10R 8 / 1 (明黄緑)	

No	試土地点	残存部位	口 深 (cm)	基 高 (cm)	地 部	調 算	I 沟 七		色 調	備 考	
							外一ケズリ ナダ	砂粒を多く含む			
-77	10E	B4～底部片	-	0.6	平底	外一ケズリ ナダ 内一ナダ	砂粒を多く含む	内-5深6/6(切) 内-2.5V6/2(洗削)～5/1(洗)	内-5深6/6(切)		
-78	11E	底部片	-	8.6	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒、砂にあり	内-2.5V6/1(洗削) 内-7.5W6/6(切) 内-10W8/4(洗削)	内-2.5V6/6(切)		
-79	不明	底部片	-	9.8	平底	外一ナダ 内一ナダ	1～2mmの砂粒多く含む	内-3深6/4(洗削) 内-2.5V6/4(洗削)～2.5V4/1(洗)	底部中央に位置		
-80	12E	底部片	-	8.0	平底	外一ナダ 内一ナダ	1～2mmの砂粒多く含む	内-2.5V6/6(切)～10W8/7.5(洗削) 内-2.5V6/5(切)～2.5V4/1(洗)	内-2.5V6/6(切)		
-81	11E	B4～底部片	-	10.0	平底	外一ケズリ 外一削痕 内一ナダ	粗砂粒、砂名古屋	内-7.5W7/4(洗削)～6/3(洗削) 内-10W8/3(洗削)～4/1(洗)	内-7.5W7/4(洗削)～6/3(洗削)		
-82	11E	底部片	-	8.9	平底	外一削痕 内一ナダ	-	外-7.5W7/6(切)～10W8/3(洗削) 内-5W8/5(切)	内-7.5W7/6(切)		
83	9E	底部片	-	8.6	平底	外一削痕 内一ナダ	粗砂粒にあり	10W8/3/3(洗削)～3/1(黑)	内-7.5V6/6(切)		
-84	11E	剥～底部片	-	9.0	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒含む 砂名古屋にあり	外-7.5V6/6(切) 内-2.5V7/4(洗削)～2.5V7/6(切) 外-2.5V6/3(洗削)～7.5V4/3(洗削)	内-2.5V6/6(切)		
85	8E	底部片	-	10.0	平底	外一削痕 内一ナダ	粗砂粒、砂を含む	内-10W8/4(洗削)	内-10W8/4(洗削)		
-86	11E	B4～底部片	-	11.0	平底	外一削痕 内一ナダ	粗砂粒含む	内-7.5W6/4(洗削)～7.5V7/3(洗)	内-7.5W7/6(切)		
-87	12F	底部片	-	9.0	平底	外一ナダ	粗砂粒含む 砂名古屋にあり	内-10W8/3(洗削)～3/1(黑)	内-10W8/3(洗削)～3/1(黑)		
-88	11E	底部片	-	9.6	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒、砂を含む	10W8/7/3(洗削)～5/2(洗)	内-5W8/6(切)～2.5V7/4(洗)		
-89	11E	B4～底部片	-	9.0	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒含む	外-5W8/6(切)～2.5V7/4(洗)	内-10W8/3(洗削)～3/2(洗)		
-90	9E	剥～底部片	-	10.0	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒多く含む	内-7.5W7/6(切) 内-2.5V4/4(洗削)	内-2.5V4/4(洗削)		
-91	11E	底部片	-	10.4	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒含む	内-10W8/2(洗削)～5/2(洗)	内-10W8/3(洗削)		
-92	11E	剥～底部片	-	11.2	平底	外一削痕 内一ナダ	粗砂粒にあり	内-2.5V6/1(洗削)～1/1(洗)	内-7.5W6/4(洗削)～4/1(洗)		
93	11E	剥～底部片	-	9.0	中底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒含む	内-7.5W6/2(洗)	内-7.5W6/2(洗)		
-94	11E	B4～底部片	-	7.4	平底	外一ケズリ 内一ナダ	粗砂粒含む 砂名古屋にあり	内-7.5W7/4(洗削)～2.5V4/1(洗)	内-7.5W7/4(洗削)		
95	15F	剥～底部片	-	9.7	平底	外一削痕 内一ナダ	粗砂粒含む 砂名古屋にあり	内-10W8/4(洗削)～5/2(洗)	内-10W8/4(洗削)		
VII	39	14F	底部片	-	9.0	平底	外一削痕 内一ナダ	粗砂粒含む	内-10W8/3(洗削)～6/6(洗)	内-10W8/3(洗削)	
-96	-	底部片	-	11.0	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒含む	内-7.5W6/1(洗)	内-10W8/1(洗)		
-97	15E	底部片	-	11.0	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒含む	内-7.5W6/6(6)～10W5/3(洗)	内-7.5W6/6(6)		
-98	15F	底部片	-	8.0	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒にあり	内-2.5V6/2(洗)	内-2.5V6/2(洗)		
-99	15F	底部片	-	7.8	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒含む	内-5W8/6(6)～2.5V7/6(2)	内-2.5V7/6(2)		
-100	15F	底部片	-	9.4	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒を多く含む	内-7.5W7/6(6)～10W6/3(洗)	内-10W7/3(洗)		
-101	不明	底部片	-	11.0	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒、砂を多く含む	内-7.5W6/6(6)～10W5/1(洗)	内-10W8/1(洗)		
102	17D	剥～底部片	-	9.6	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒	内-10W8/7/3(洗)	内-2.5V7/2(洗)		
-103	16F	底部片	-	8.4	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒多く含む	10W8/4(洗削)～6/4(洗)	内-10W8/4(洗削)		
-104	15F	底部片	-	8.6	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒にあり	内-10W8/3(洗)～4/1(洗)	内-10W8/2(洗)		
-105	16F	剥～底部片	-	6.2	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒を多く含む	内-7.5W7/4(洗)～2.5V7/4(洗)	内-7.5W7/4(洗)		
-106	15F	底部片	-	10.0	平底	外一削痕 内一ナダ	6.5～1.1mmの砂粒多く含む	内-2.5V6/6(6)～10W6/4(洗)	内-10W6/4(洗)		
-107	15E	底部片	-	9.0	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒、砂名古屋にあり	内-10W7/4(洗)～4/1(洗)	内-7.5W7/4(洗)		
-108	16F	底部片	-	9.0	中底	外一ナダ 内一ナダ	2mm以上の砂を含む	内-10W8/3(洗)～2.5V7/3(洗)	内-2.5V7/3(洗)		
-109	15T	底部片	-	8.5	平底	外一ナダ 内一ナダ	2mmの砂を含む	内-10W8/7/3(洗)～2.5V7/3(洗)	内-10W8/7/3(洗)		
-110	14E	底部片	-	7.4	平底	外一削痕 内一削痕	0.3～1.5mmの砂粒多く含む	10W7/4(洗)～2.5V7/4(洗)	内-10W7/4(洗)		
-111	15F	底部片	-	8.7	平底	外一ナダ 内一ナダ	砂や砂	内-10W6/3(洗)～2.5V7/2(洗)	内-10W6/3(洗)		
-112	15T	底部片	-	9.0	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒	内-7.5W6/6(6)～5/3(洗)	内-10W7/4(洗)		
-113	15F	底部片	-	10.2	平底	外一ナダ 内一ナダ	粗砂粒多い	内-2.5V7/4(洗)	内-10W8/2/4(洗)		

図 No	出土地点	地層位置	高さ (cm)	基高 (cm)	底厚 (cm)	底部	調査結果		色	場所
							外-ナダ	内-ナダ		
-114	15F	底部片		9.6		平底	外-ナダ	—	黄褐色	7.5TR 7/4 (にじい・黄褐色)
-115	16LT	底部片		9.0		平底	外-ナダ	粗砂粒、礫石にあり	内-2.3TR 6/6 (緑褐色)	
-116	15E	脚-底部片		9.6		平底	外-細砂	粗砂粒を含む	外-2.3TR 6/2 (灰褐色)～6/3 (にじい・黄褐色) 内-2.3TR 7/2 (灰褐色)～5/1 (黄褐色)	
-117	15E	底尾片		9.0		平底	外-ナダ	—	外-2.3TR 6/4 (にじい・緑褐色)～4/2 (灰褐色) 内-2.3TR 7/1 (灰褐色)	
-118	14F	底部片		7.6		平底	外-ナダ	—	外-2.3TR 6/6 (緑褐色) 内-2.3TR 7/1 (灰褐色)	
-119	15F	底部片		10.0		平底	外-ナダ	粗砂粒、礫石を多く含む	外-2.3TR 5/3 (にじい・黄褐色)～4/2 (黄褐色)	
-120	15F	底部片		8.4		平底	外-ナダ	粗砂粒を含む	外-10TR 6/4 (にじい・黄褐色) 内-10TR 6/2 (にじい・黄褐色)	
-121	16E	底部片		9.8		平底	外-脚前	ナダ	外-10TR 7/4 (にじい・黄褐色)～8/4 (淡黄褐色) 内-2.3TR 5/1 (灰褐色)	
-122	15T	脚-底部片		8.0		草葉	外-細砂	ナダ	外-2.3TR 7/6 (灰褐色)～6/4 (にじい・緑褐色) 内-2.3TR 5/3 (にじい・黄褐色)～10TR 8/4 (淡黄褐色)	
-123	15T	底部片		8.0		平底	外-ナダ	—	外-2.3TR 6/4 (にじい・黄褐色)	
-124	15T	底部片		8.4		平底	外-ナダ	—	内-2.3TR 7/1 (緑褐色)	
-125	13F	底部片		9.0		平底	外-細砂	ナダ	外-2.3TR 7/6 (灰褐色)～5/2 (緑黄褐色) 内-2.3TR 7/4 (灰褐色)	
-126	9E	底部片		8.0		平底	内-ナダ	—	外-2.3TR 4/1 (緑褐色)	
-127	9E	底尾片		9.0		平底	外-ナダ	1 mm位の砂粒少し含む	外-10TR 7/4 (にじい・黄褐色)	
						内-ナダ	—	内-10TR 8/3 (淡黄褐色)		
						内-ナダ	1 mm位の砂粒少し含む	内-10TR 4/1 (緑褐色)		
						内-ナダ	1～1.5mm位の砂粒少し含む	外-7.5TR 8/6 (淡黄褐色)		
						内-ナダ	—	内-10TR 7/3 (にじい・緑褐色)		

### 3. 石器

#### 1) 剥片石器 (図V-39・40)

##### a. 石鏃

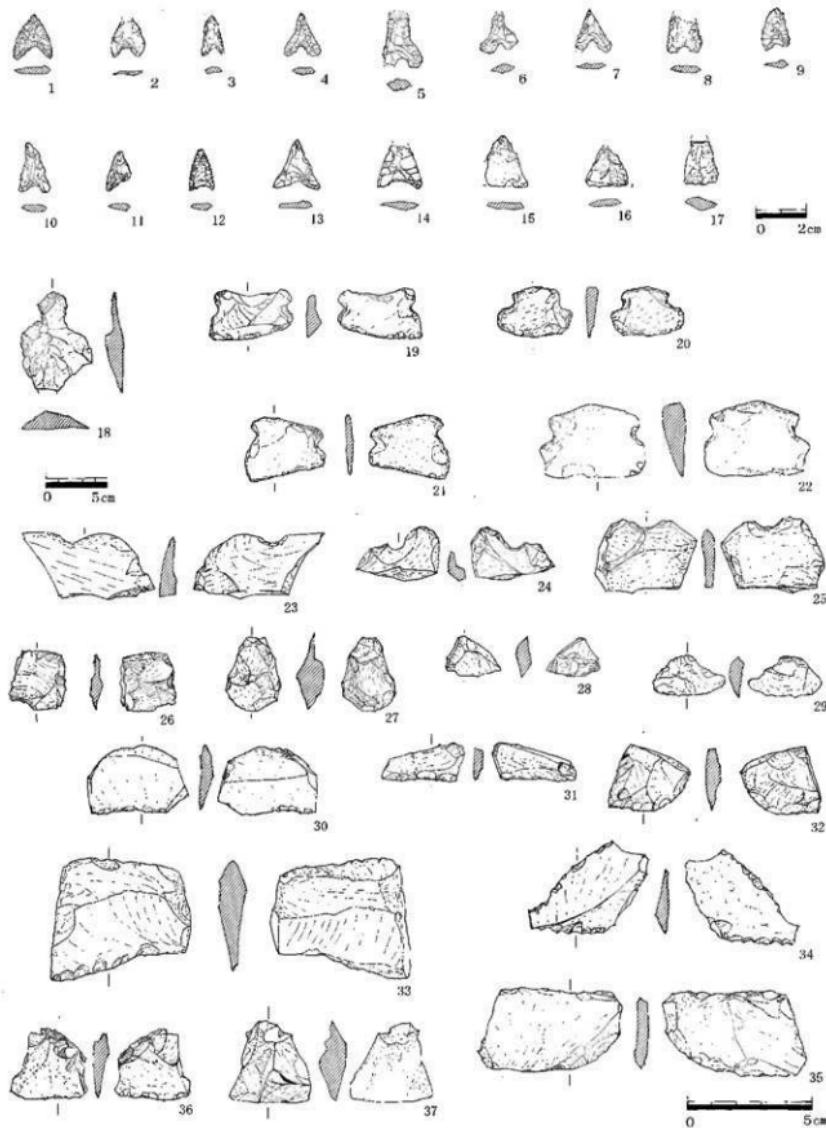
検出した石鏃は17点である。石材は黒曜石3点のほかはサヌカイト質であり、黒曜石の比率が低い。出土位置は15F区が最も多く、大まかに土器溜りⅢ群（上手）の位置である。

表VII-7 石鏃の概要

図No.	出土区	形 状	完・欠	石 材	重量mg	抉りの深浅	精 粗		全長mm(推定)
							中	○	
1	12LT (11F)	抉り入り	完	黒曜石	710	中	○	18	
2	10E	"	先欠	"	(330)	中	○	(17)	
3	11E	"	完	安山石	350	中	○	17	
4	15F	"	完	"	430	中	△	18	
5	10B	"	先欠	"	(1650)	中	×	(27~?)	
6	15F	"	先欠	"	(460)	中	×	(18)	
7	15F	"	翼欠	"	(380)	中	○	19	
8	15F	"	先欠	"	(640)	ヤヤ浅	△	(22?)	
9	15F	"	完	"	450	ヤヤ浅	△	18	
10	15F	"	完	"	720	ヤヤ浅	×	20	
11	9E	"	翼欠	"	(400)	中	△	17	
12	14LT	"	完	"	440	浅	○	17	
13	10E	"	完	"	1060	浅	△	21	
14	17F	"	先欠	"	(1050)	浅	○	(22?)	
15	(排土巾)	三角	翼欠	黒曜石	(980)	無	△	21	
16	8E	"	先欠	サヌカイト	(1170)	無	△	(17)	
17	11F	"	先欠	"	(1170)	無	×	(25?)	

形状はいずれも無茎で抉りのあるものと抉りのない三角形のものがある。さらに抉りも浅いV字形のものと、深いU字形のものに分けることができる。また翼の拡がるもの（5・13）や細身のもの（3・11・12）もある。三角鏃（15～17）は概して粗製である。

鏃身長は17～18mmが多いが、22mm以上と推定されるやや大形品もあり、重さでは500mg未満と1000mgを超えるものの2群がある。このサイズの差異は狩猟対象の相異を示しているのであろうか。



図VII-39 石器 (1)

### b. 石匙類

18はサヌカイト製の縦型石匙である。先端を失っているが、全長約8.2cm幅5.7cmで片面平面のやや大形で刃は鋭角である。先端は尖るものであろう。

19~22は横長型の刃器で、22は細砂質で硬質の凝灰岩であるが、他は安山岩質の石材である。いずれも横両端に抉りをつくり紐掛りとし、幅の広い着柄部としている。概ね裏刃は平面で断面での刃角は大きい。また、着柄に対する刃角は直角に近いもの（20・22）と、やや斜め（10~15°）になるもの（19・21）とがあり、後者は弥生時代の穂摘み包丁にも通ずる形といえよう。

縦型と横型ではその用途が異なるのではないかろうか。例えば、縦型はナイフ的であり、横型はこそげるのに適しているのではないかろうか。

### c. 凹刃の石器

3~5cmほどの剥片の一部分に小半円形の抉り込み状の刃をつくるもので流紋岩（23）と安山岩（24・25）を用いている。

刃部の半円形は、直径10~8mmの円周に相当しており、この程度の円形を整形する削り具と考えられる。例えば、矢柄等の製作用ではなかろうか。

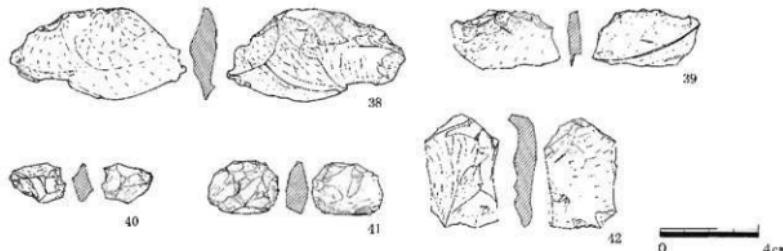
### d. 剥片刃器

26~37は剥片（チップ）の一片のみに細かく剥離した刃部をつくるもので形状は一定しない。黒曜石（26~28）、安山岩（29~35）のほか、鈍い黄橙色のメノウ質材（36）や透明度の低い石英（37）もある。小形で簡易な刃器として用いたもので、製作中途のものではないと思われる。刃は鋭角なもの（26・32・33・36）から、角度の大きいもの（35・27）まで区々である。

### e. 剥片等

38・39はサヌカイト質の剥片で格別の加工は見当たらないからチップとみられる。40・41は黒曜石で、小さいが厚みのある塊状であり、石器製作のあとに残った石核であるとみられる。

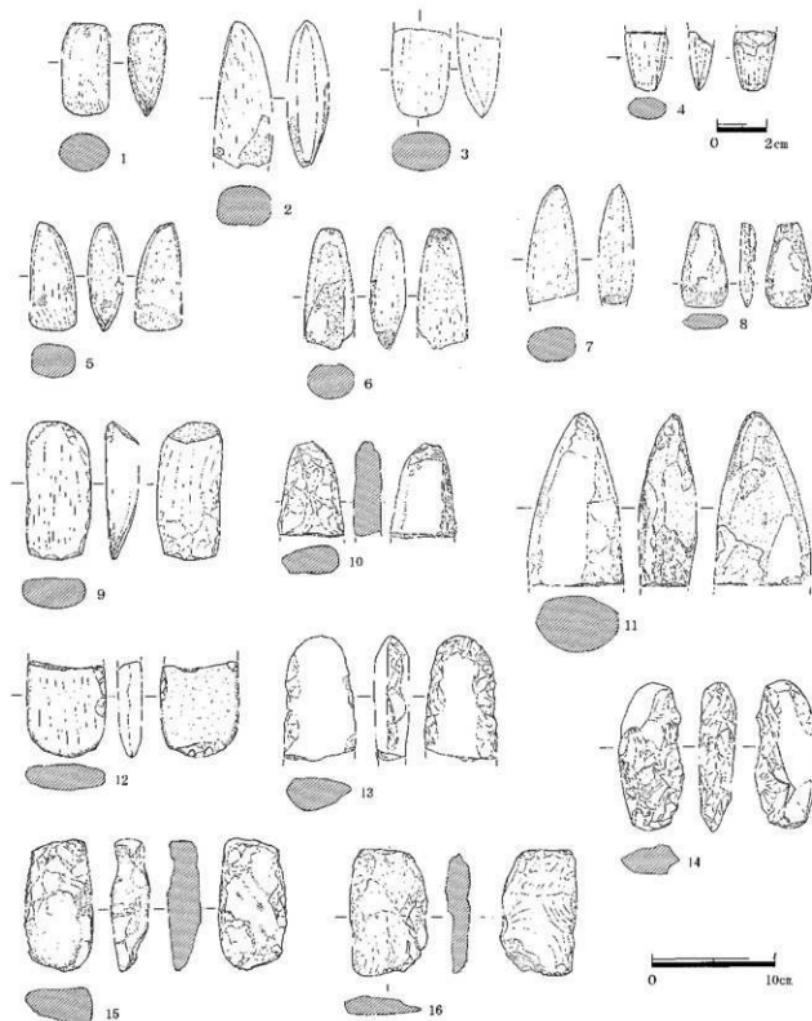
42はメノウ質原石片で上記した36と同じ原石であるとみられる。石器としての加工痕はなく、残余の原石材とみられる。



図VII-40 石器（2）

## 2) 石斧 (図VII-41)

検出した石斧には全面磨製、局部磨製と打製の3種がある。また磨製は破損したものが多く、完形品は2点のみである。



図VII-41 石器（3）石斧

1～4は全面を研磨したものである。1は完形で全長約7.5cmの太短い直刃気味の品で、流紋岩を用いている。基端は敲き調整の凹形平面とし側面上方には敲きの痕跡が残るが刃部へかけて全面を研磨している。刃は両刃で平刃気味とし、刃縁にはやや斜めに砥痕が認められる。基部は直立ではなく、上端がわずかに曲がるが、細くはならない。着柄の抉り込みがなく小形であることから握り使用であろうか。2は粒子の細かい砂岩製で、刃部が欠損している。器表は全面に入念に磨き、基頭部は内側へ傾けて鈍く尖らせ、特に内側面を半らに磨いている。刃は両刃であつたと思われる。基端は手前へ傾斜しており着柄は柄穴の様式であろう。3は刃部の残欠である。やや固い凝灰岩製で、直刃気味、ふくらみのある両刃であるが左右の刃面に差があり刃先が偏っている。これも同様に使用時の内外面を示しているとみられ、斧的ではなく、ノミ状の工具と考えられる。

5～7は全面を敲打整形し、刃部を研磨したものである。但し7は刃部を欠く。5は流紋岩製の小形品で、刃部は直立気味でふくらみがあり、基部は厚く、上端へと細まって端部は手前へ尖る。基部手前及び前方向は強く半らに加工して、横断面は隅丸長方形となっている。刃縁には砥痕がわずかに認められ刃線は中ほどがわずかに左に偏る。着柄は柄穴様式であろう。

6は片麻岩質で、その半ばから刃部が大きく破損している。全面を敲打整形して基端は乳棒状で直立し、基断面は長円形をなす。若干残る刃腹部からすると強く研いで平刃状としたものとみられる。基端が叩き潰れているのは、破損後に例えばクサビ状の使用に転用されたのであろうか。

7はやや軟質の凝灰岩製で2にも近い形姿である。器肌が著しく荒れてはいるが全面敲打整形とみられる。刃部はやや傾斜する正しい平らな面となっていて、折損とばかりは言えない状況である。石材の軟らかさも考慮すると敲き作業に用いたスタンプ形石器の一類である可能性もある。

8は薄い板状の頁岩を用いた小形の局部磨製右斧の完形品である。研磨は幅1cm余りだけを刃に研いだのみで、基部縁端は打欠きのみである。刃縁は直刃で両面ともふくらみのある片刃造り。形態は直角式に近い姿である。

9は片麻岩製で、ほぼ長方形やや円丸状をなし、刃部は打欠き調整の片刃であり基部両側面は粗く、敲打調査とみられる粗面である。ルーペでは使用痕は確認出来ないがシャープな刃である。

10は青灰色の凝灰岩を用いた打製の基部破片である。側面に自然面がある。11は全長20cm以上とみられる品の基部片で、この破片だけでも約600gの大型品である。質の硬い凝灰岩で自然面を残しながら全面が細かく敲打調整されている。重畠で樹木を伐採したのであろう。

12～16は打製石器ではあるが、刃部の様相が上記より大きく異なり、刃部その他面の調整がラフな一群である。

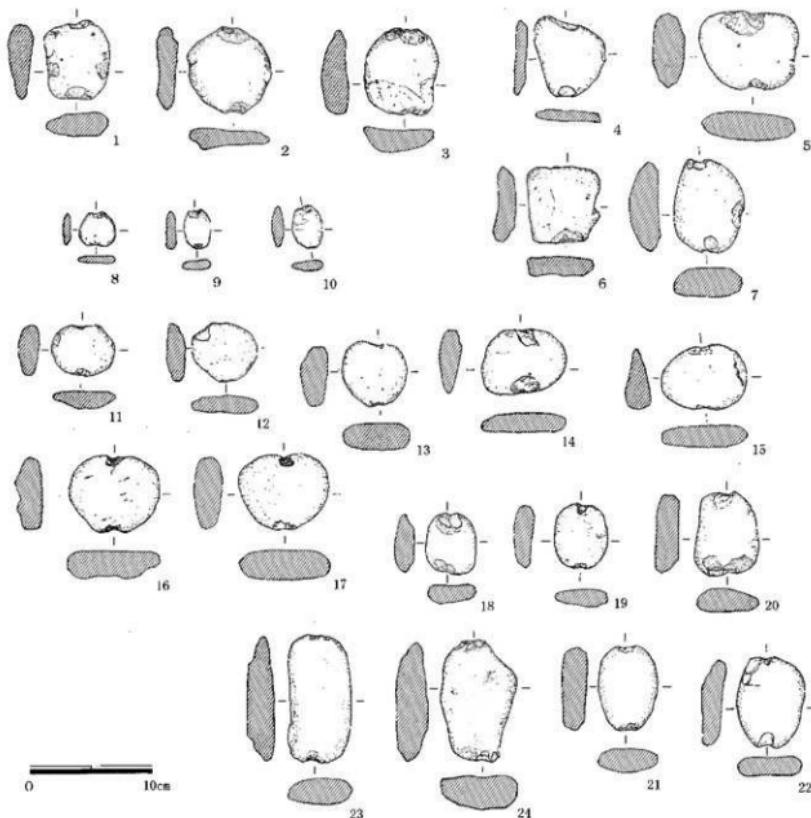
12は刃部とみられる破片ではあるが、薄板状の凝灰岩をわずかに刃端と縁部打欠きを加えただけのものである。13もほぼ同質同様の加工のもので、基部の破片である。刃部も12に近いものと思う。

14・15は流紋岩、16はサスカイトで、粗割り材に若干の打欠きを加えた品である。刃部に擦痕

は認め難いが15・16は片刃状、14はやや片刃状であり、この形態から土掘り具であったと考える。

### 3) 石錐 (図VII-42)

出土した石錐はすべて川礫を用いた打欠き製であり、総数527個もの多数であった。出土はほぼ全域からであるが、土器溜り部で濃密に出土した。

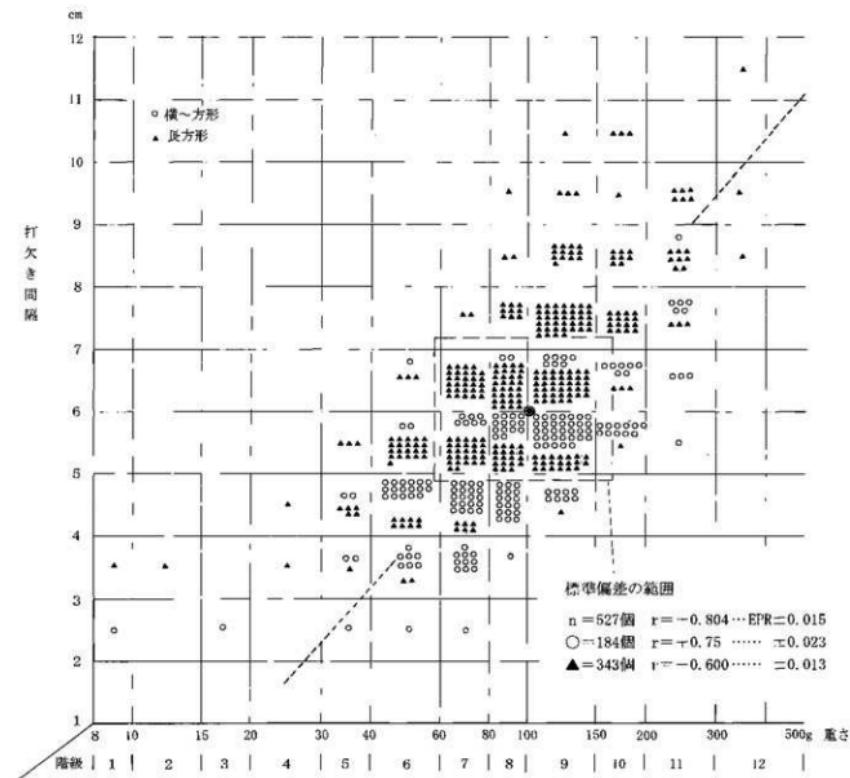


図VII-42 石器 (4) 石錐

打欠きについてみると4方にあるもの3個、3方にあるもの4個のほかはすべて2方のものである。また打欠き部を縦にみて形状で区分すると横長～方形のものが184個、縦長形のものが343個で最も多かった。全個体について打欠き部の間隔と重量によって分布を図にすると次のようにある（図VII-43）。

なお重量はその常用対数値を日安に階級区分した。

図VII-43 打欠き石錘の分布



総平均は6.06cm・96.83gであり、全個数の2/3を含む $1\sigma$ の範囲は4.9～7.2cm・57～160gであり、最小は2.5cmと8g、最大は11.8cmと366gであった。

形態と重量とによって区分して抽出した個体について実測図を示した。

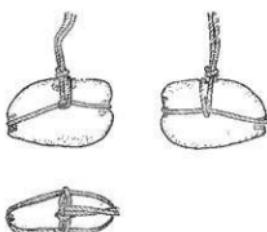
このとき区分の目安は次のようにある。

4方欠き…3個（全個体）	3方欠き…4個（全個体）	極小形…3個（15g以下全個体）
2方欠き…横長形 大形	6～7cm程度で150g程度…2個	
平均的	5cm程度で92g程度…3個	
小形	4～5cm程度で50g程度…2個	
…縦長形 大形	10cm～程度で200g～程度…2個	
平均的	6.6cm程度で100g程度…3個	
小形	5cm程度で50g程度…2個	

石錘は一般に漁網用の重錘と言われているが、極く小形で15g以下の品は漁網用とは考えられない。漁撈用とすれば釣り糸の錘りであろうか。

また250g以上の極く重いものは概して長い形のもので、これは漁具ではなく、糸紐を巻いた編物製作用具とみることもできよう。

使用の際の糸綱の掛け方については例えば擦り切り製右錘などを参考に十字掛けや一字掛けは易しく理解できるが、3方欠きについては管見の限り先例を知らず、一考を要するものである。3方欠きは4個あるが約6cm・100～200gで平均的なサイズであることから一応漁網用として糸の結い方を試みた。種々試みたが、一字掛けにすると打欠きの無い部位で紐が滑脱してしまう。一字掛けにすれば打欠きの一つが無用となる。最も安定して結ぶことができ、しかも荷重が加わるほど締める方法は、別項写真（図版8）のように横一字の中央から折り返して中央打欠き部へ一重に引き締める方法であろうと試考した。はたして当を得ているのであろうか。



図VII-44  
三方欠き石錘の紐くり試案

#### 4) 磨石・敲石等（図VII-45）

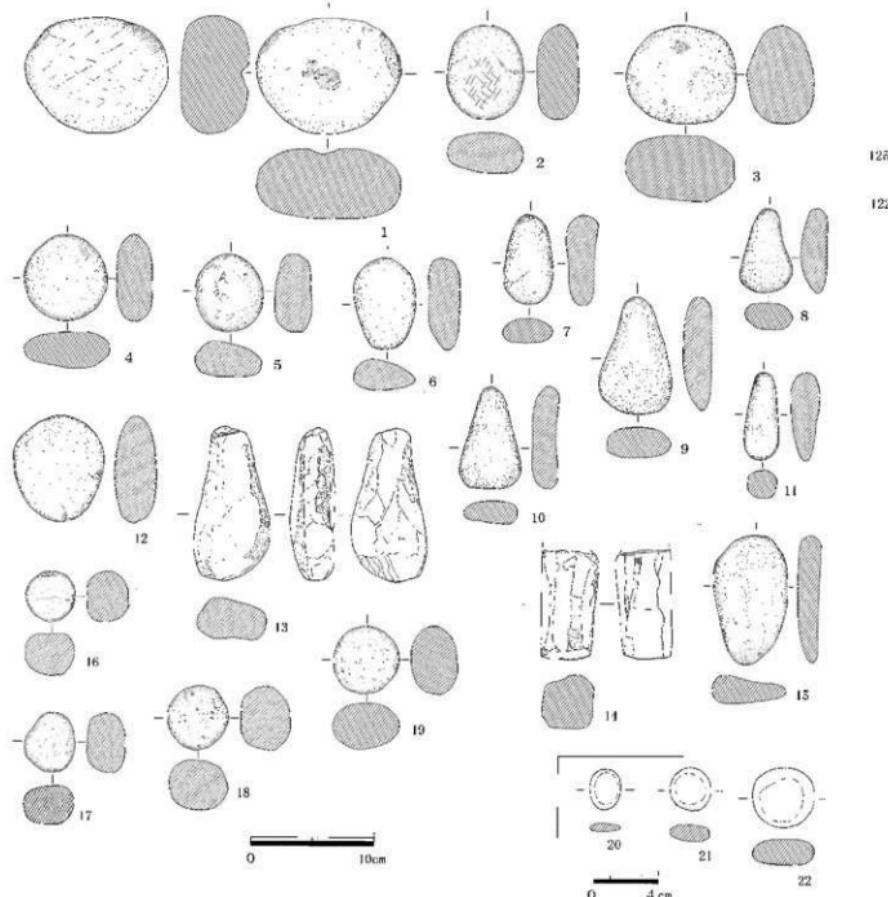
凹石は1の1点のみである。花崗岩系のやや脆い岩質で、川原礫を利用したものとみられる。偏平な面の中央に打漕し状の長円形の凹みをつくっている。裏面は磨り面として用い縁の3か所には叩きによる潰れが認められる。つまり凹石ではあるが叩き・擂りにも用いたものである。

2は砂岩、3は花崗岩質の磨石である。いずれも円磨度は高く、川礫であろう。この偏平な一面に磨耗が認められる。また側面長端部にわずかながら潰れ部があり軽度の叩き使用も認められる。4～6は同様に片面にのみ磨耗面があるが、叩き使用は認められない。岩質は花崗岩（4・5）と凝灰岩（6）であり、これらは小形の磨石である。

7～11は小形の匙状で、ほとんど全面が自然面であるが、幅の広くなつて湾曲する外面下端部にのみ磨耗面が認められる。掌中に握って斜めに立てながら握り使用したものとみられる。

12は軟質の凝灰岩の川礫で、やや尖り気味の下端にわずかな叩き潰れがあることから、軽度な叩き石であると思われる。

13は流紋岩製で形姿は打製石斧様であるが厚さが大きい。外面には自然面を多く残しながら打ち欠きで整形し、下端の先端あたりに打ち潰れが認められる。握り槌のように使用したのである。



図VII-45 石器（5）凹石・その他の石器

14は両端の折損した角柱状で灰白色軟質の凝灰岩である四面とともに自然面であるが、わずかな擦痕が2条ある。人為的なものか否かは判別出来なかった。しかし、稜の一つは叩き潰れていることから、棒状の道具と考えられる。

15は粒度の細かい軟質の凝灰岩で、薄手で反りのある偏半な礫である。反りの内面と外面及び直線的な側面には中軸方向に長く直線的で幅の狭い砥痕が認められる。この石を手に持つての研磨使用が考えられる品である。

16~19はほぼ球形で、いずれも花崗岩を粗く整形したものである。それぞれ79g(16)・95g(17)、150~160g(18~19)である。これらは狩獵用の投弾であろう。

20~22は偏半円形の小さい自然礫で、いずれも土器溜り遺構から採取した。碁石状のこの石は円磨度が特によく、海浜砂利を搬入したものかとも思われる。最も小さい20は黒褐色で光沢のある真岩かと思われるもの、21・22は細砂質凝灰岩でやや大きさ。いずれにも人為的な加工等の痕跡は見当たらない。この品は近隣での事例<sup>4)</sup>もあるが、生活の必須用具とは考え難く、或は呪具の一種であるのかもしれない。

### 5 ) 石皿類 (図VII-46)

土器溜り遺構付近の石礫群から石皿状のものを選んで採取した15点である。洗滌後の観察で使用の痕跡が認められるものは少なく、多くは自然面のままであることが分った。

表VII-8 石皿類観察表

図No.	石 質 等	略 サイズ cm	面 の 状 況	そ の 他
1	安山岩 山石 割整形	18×14×5	自然面 2 磨面 1	
2	安山岩 "	14×12×4	" 1	
3	花崗岩 "	15×13×4	" 2	
4	花崗岩 "	19×11×6	" 2	被熱赤変
5	安山岩 "	20×12×6	" 2	
6	凝灰岩 "	14×13×3	" 2	中央凹痕、縁打欠き
7	安山岩 "	17×17×5	" 1 " 1	
8	安山岩 "	28×20×8	" 2	
9	花崗岩 "	23×19×8	" 2	
10	花崗岩 "	23×16×5	" 2	
11	花崗閃緑岩 "	21×17×8	" 1 " 1	
12	花崗岩 "	(折損) 19×17×6	" 1 " 1	
13	安山岩 "	29×16×7	" 2	
14	花崗岩 "	34×25×7	" 2	
15	安山岩 "	22×21×9	" 2	

各概要は上表のようであり、重量は約1kg～10kgの範囲である。

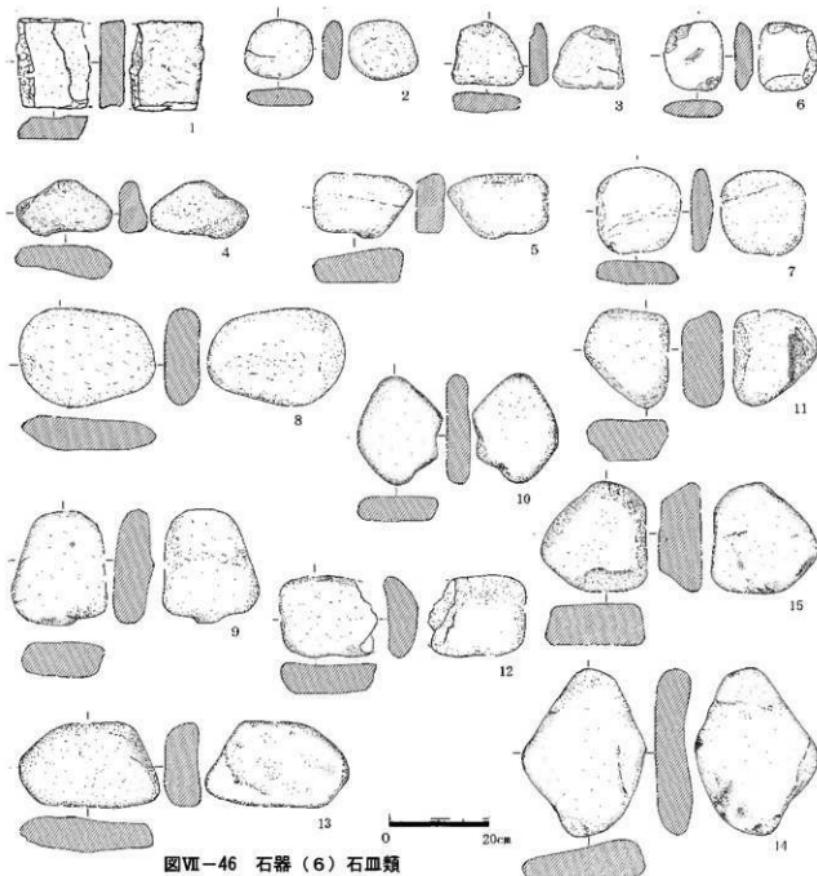
このうち6は面中央に強く打欠いた溝状に近い凹痕をつくり、また石材縁辺部は粗く打欠き加工で刃状をつくっていて、石刀器にもなるものである。

面が磨耗しているとみられるのは2・7・11・12のみで、他は凹磨度の高い川石の自然面のみである。しかしこの自然面も、正しく平坦なものとわずかに皿状をなすものがほとんどであり、石器とは言い難いが、何らかの利用や使用が思われるところから、あえてここに収録する。

(杉原)

注

\*1 仁多町教育委員会：『下鶴倉遺構調査報告書』昭和56



図VII-46 石器(6) 石皿類

#### 4. 特殊遺物 (図VII-47)

土器溜り中出土の特殊遺物である。

##### 1) 土偶

1～3は土偶で法量は表に示したとおりである。

表VII-9 土偶觀察表

出土点	現存長	最大幅	最大高	腹部幅	腹部高	残存部位	時 代	胎 型	色 調	時 期
1号 15F	43	27	13	20	8	胸部～下半部 正中線あり	乳房、 下半部	1～4mm程の長 石、小英等を含む	10YR7/2 (にぶい黄褐色) ～7.5YR7/6 (緑)	いずれも福田K 2～彦崎K
2号 11E	42	39	11	21	9	下半部	無文	1～4mm程の長 石を少し含む	7.5YR7/4 (にぶい緑) ～2.5YR5/6 (灰表皮)	1を中心とする土器溜りよ り出土
3号 16E	92	50	26	48	26	胸部～下半部 正中線あり	乳房痕、 正中線あり	0.5～2.5mm程の 砂粒を多く含む	表面～7.5YR3/1 (黒褐色) ～5/2 (灰褐色) 心～7.5YR6/3 (にぶい緑)	

1は1号土偶である。所謂板状土偶で一枚の板状粘土を貼合せている。正中線、乳房表現も見られる。全面ナデ仕上げである。

2は2号土偶で同じく板状土偶であるが全くの無文土偶である。上端は破損している。全面半滑にナデ仕上げする。

3は3号土偶で1・2号と比べ明らかに大きく、残存長92mmを測る。大型の板状土偶である。やはり破損しているが貼付けた乳房が剥離した痕や正中線が認められる。正中線は二度引きされ、幅2mmである。破損している左脇部には芯棒痕かと思われる痕跡も見られる。正面、側面はミガキ仕上げであるが、背面はナデしている。下端部の破損状況をみると形状は判らないが、やや前方に向かって脚部が付くのではないだろうか。3号土偶は1・2号とは明らかに大きさが異なり、性格、用途も異なることが想像できる。

いずれの土偶とも構造からの出土ではないことから、出土した土器溜り部の主たる土器や土偶の編年を勘案照合すると、後期初頭（中津～福田KⅡ）の所産と考えてよいようだ。<sup>31</sup>

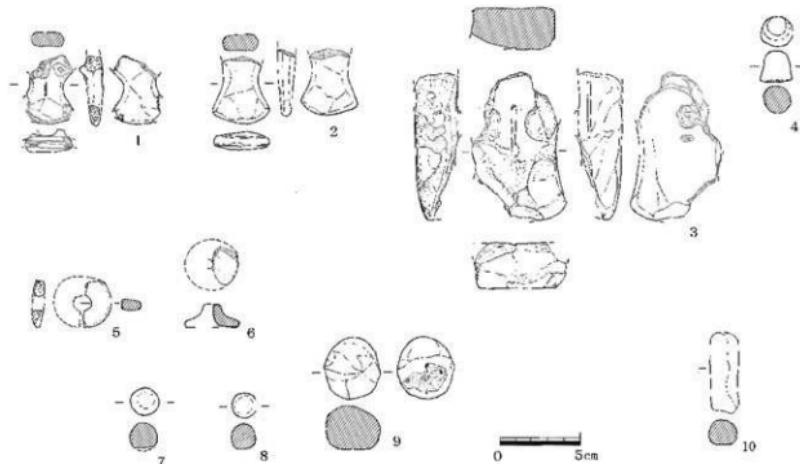
##### 2) 耳飾

5は勾玉状に見えるが、半分に欠損したものであり、本来は円板状で、中孔から一方へ切り欠きの入る玦状耳飾であり、厚さ5mm、推定復元直径30mmを測る。玦部に耳朶をはさんでいたのであろう。完形の半分ほど残存していてナデ仕上げである。

6も欠損しているが、アサガオあるいはラッパ型を呈するもので中心に直径4mmの孔が貫き、葺形耳栓と呼ばれるものである。この類のものは今までのところ近隣の事例に乏しい。

##### 3) 土玉他

7～9は土玉である。7は約18mm径、8は約16mm径を測るほぼ正球体である。丁寧にナデ成形している。9は最大37mm径とやや大きめの土玉である。全面ミガキ仕上げで破面をみると芯棒痕



図VII-47 縄文時代の特殊遺物

とも砂粒の抜け落ち痕とともに回痕が数箇所みられる。この土製品は胎土、色調、調整とも3号土偶に似ているものである。

4は乳棒状の破片で性格不明の品であるが、3号土偶と胎土、色調とも類似しており乳房の破片かとも思われるものであるが判然としない。

10は棒状土製品で残存長50mm、幅18mmを測る。性格は不明であるが試し焼き用の粘土ではないかとも思われる。

(野津)

## 5. 小結

### 1) 遺構について

河川水位に近いこの調査区域については、縄文時代の生活面はすべて水による浸食によって失われ、遺構はほとんど認められないが、移動堆積した土器溜りが3群検出され、夥しい縄文土器片を採取することができた。しかし、この土器溜りの成因が自然の営為であるのか、人為的遺構の一部とみるかは判定することができなかつた。

但し、長さ2mほどの石積み列は人為的である。縄文粗製土器が極めて多数で、しかもその多くには煤が付いていることも併せて考えると、諸部の水場遺構の一部をなしていたのかもしれない。

(杉原)

## 2) 土器について

今回の調査で大小3か所の縄文遺物の上器溜り群を検出したわけであるが縄文上器で特徴的なことを挙げていくとなほのようである。

表VII-10 土器様式一覽表

中 期				後 期				晚 期			
船 元 I	船 元 II	里木 II	中津	福 田 K II	布 勢	彦 崎 K II	福 山 k III	原 下層	黑 土 B I	前 池	泥 田 B II
						崎 ヶ 鼻		宮 滝			
波 子	IV										
墓地遺跡	○	△	○	○		○	◎	○	△	△	△
(比較)	下 鴨 倉 遺 跡	◎	◎	◎	○	△	△	△	△	○	○

表 1 精製土器  
について見  
た場合であ  
る。

○ 出上した  
縄文土器は  
前期のもの  
は見られな  
かったが中  
期から晚期  
にかけての  
様々な様式  
が認められ  
た。表にま  
とめ近隣の  
下野今出崎

のそれと比較すると補完関係になっているように窺える。水辺で自然の恵みの豊かな場所に拠点を移しながら生活していたことが窺えよう。

- 中期～後期の縄目のある土器で掲載したもののうち、8～9割がZ撚りであった。これは右利きの人が縄を撚ると、より容易に撚れるのがZ撚りであると考えられるのであるがこれを反映したものであろうか。
  - 後期の縄文帯に赤色顔料を塗布したものは中津期で3点ほど、福岡KⅡ期では10点以上が見られ、縁帶文期以降の上器片からはほとんど見当たらず、結果として後期前葉の土器にのみ認められた。この赤色顔料は科学分析の結果、報文では「ここでは厳密に細分することは困難ではあるが、少なくとも暮地造跡出土器付着顔料と、小浜洞窟遺跡出土耳飾り付着顔料について、赤みの強い「狹義のベンガラ」（赤鉄鉱を主成分とする）に近い色を示していることになる。」これらの顔料はいずれも、当初は赤みの強い「狹義のベンガラ」であった可能性も一と指摘された。<sup>12</sup>
  - 福岡KⅡ式の特徴とされる3本・組沈線の十器片は僅かに1点であった。
  - 後期精製の口縁上に突起を有する土器は、そのほとんどが3単位または4単位であるが、本遺跡では器形が判るものが数点検出されている。特徴的なのは同一個体の突起であってもそれぞれの大きさ、形が異なることが挙げられる。かなりの突起片が出土しているが、このような特徴をふまえると同一個体上の突起片を別個体として取り扱っているかもしれない。今後の調査に注意する点である。

- 繩文土器片は総数45786点で、うち粗製土器はその95%を占めるものである。精製土器は約5%足らずである。このうち福田KII～縁帶文初期にかけての時期が大半で、中期、晩期は割合からすると僅かな数である。
- 一遺跡から十個が3体出土する例は島根県内では初めてで、林原遺跡の十個を含め仁多町出土の土偶は計4体となった。これは頓原町の4体（門遺跡1体・下山遺跡2体・五明田遺跡1体）と並び、市町村単位では最多である。1号・2号土偶は分型土偶で5cm足らずであるが3号土偶は拳大ほどもあり、大きさもさることながら重量もかなりずつしりしたもので、通常の土偶の用途とは異なることが想像できる。

(野津)

#### 註

※1 島根県埋蔵文化財調査センター 深田 浩氏の御教示による。

※2 島根県埋蔵文化財調査センター 目次謙一氏の担当する横ヶ峰遺跡出土の耳飾りに赤色顔料の付着が認められ、東京文化財研究所に科学分析に出されるに際し、近隣の事例として本遺跡出土の縁帶文後期土器片もあわせて分析が行なわれた。斐伊川・神門川上流域における遺跡の赤色顔料が付着する縩文土器の時期は、以下の表のように、後期初頭～前葉の時期に集中する傾向であるようだ。

#### 近隣での赤塗土器検出事例

遺跡名	仁多町		木次町	頓原町		
	暮地	下鴨倉		平山	五明田	下山
土器様式	中津～福田KII	なし	福田KII	福田KII	中津～縁帶文初期	福山KII

#### 参考文献

- 大川 清 鈴木公雄 上案普通 編：『日本土器事典』 雄山閣 1996
- 仁多町教育委員会：『下鴨倉遺跡緊急発掘調査報告』 昭和56
- 柳浦俊一：『山陰地方縩文時代後期初頭～中葉の七器編年』 『島根考古学会誌』 第17集 2000
- 小林達雄 編：『縩文土器大観4』 小学館 1989
- 木次町教育委員会：『平山遺跡』 1997
- 頓原町教育委員会：『五明田遺跡』 1991
- 島根県教育委員会：『下山遺跡2』 2002
- 頓原町教育委員会：『森V遺跡』 2001
- 深田 浩：『中国・四国地方の後・晩期土偶』 『土偶研究の地平4』 勉誠出版 2000

## VIII 考察

### 1. 焼失住居についての検討

小型プランの2号住居は、主柱3本の弥生時代中期の堅穴式住居で、焼失していたことにより、幾つかの知見と疑問点が生じた。これを列挙すると次のようである。

- ※ 浅い柱穴の主柱3本でこのような事例は希であり、上屋構成の方法に工夫が必要。
  - ※ 屋内には居住生活の土器がほとんど無く、砥石等の検出から居住用以外の建物であった可能性もある。
  - ※ 残っている炭化材から上屋構造の材質・樹種及び丸材か割材か等の判別が出来るものがある。
  - ※ 内壁の構造や材質が判った。
  - ※ 屋根材や置き土の可能性がある。
  - ※ 焼失の原因は火災か焼却か。
  - ※ 1号住居と同時存在だとすれば、その出入口がほぼ対面する位置関係である。
- これらの事項に若干の検討を加えてみる。

1) 炭化木材等から上屋構成材が分った。木材は桁・長尾垂木・柱・側杭等で、丸木のものと割板状、そして半割杭があり、樹種も落葉広葉樹のうち、直幹性で気乾比率も軽く、割り易く、曲げ強度も弱くない樹種が選定されている。

2) 屋根や壁体はカヤ（ススキ）を使用していて、今日に至るまで同様に用いられている材質である。なお発掘所見では焼け落ちたカヤの上に粘質砂土があり、その下面が強く熱せられていることからもともとカヤ葺き屋根の上にさらに置き土があったのではないかろうか。とすればこれは防火の為であるのか又は防寒であるのかは判然としない。

3) 剥り込んだ床面の外周には浅い側溝が一周しているがその溝内と地山を削り出した側壁上端には杭の残欠が刺さったまま炭化して残っていて、その間の壁面には一部ながらカヤを横に用いた壁材があった。このことから内壁であるカヤ壁は材料のカヤを横に積み、その内外を小割した杭木で挟む構造であったことが判った。このとき厚さは約15cmと推定した。しかしその壁体の高さについては直接は不明である。これに関しては上屋復元の試みで、屋根勾配から逆算が可能で、床面からの高さは概ね90cmであると考えた。

4) この2号住居は円形の床面中央に柱があり主柱3本以外には柱穴がない。そして主柱の柱穴も掘り込みが通常よりも浅く、砂質土の床面に深さ約20cmほどであった。柱根は残っていないが直径20cm未満のクリ材とみられ、又首材であったと推定される。しかし、この柱穴からすると屋根荷重のほか横方向の横圧に耐えられるためには上屋骨組み構造にひと工夫が必要と思われた。このためには各七柱を結んだ正三角に近い桁で横～内側への力を分散し、長屋垂木はその

交点で一点にまとめ、下端は外堀上に接地されて、主柱はその中間位置として屋根荷重を分配させることで理解出来よう。さらにこの長尾垂木の横ぶれを防ぐためその中間点あたりから両方へ八字形の短い垂木を削ることにより、より安定するだろう。

この際長尾垂木の勾配、即ち屋根勾配は上げ土を置くとすると $45^{\circ}$ 以下、出来れば $40^{\circ}$ 以下に抑えたいところである。また主柱高はどうしても人の身長より高く、中央の炉上も防火のため出来るだけ高くとりたい。とするとやはりこの場合屋根勾配は $45^{\circ}$ 近くになってしまった。中央炉上は3mである。これらについては別項の復元の試みで既に述べた。なお1号住居の場合、主柱は6本であるが、柱穴の深浅大小が交互であることから、深く大きい3本の組と浅く小さい3本の組が重ね合せたものみられ、2号住居の場合と同様に3本柱単位の構造が基本となるものと考えられる（別項参照）。

5) 2号住居内に残された品は砥石2個と破損した壺底部片1片で、他には出入口（推定）にあたる床面に踏み台と見られる平らな石1個、使用不明の川原石1個があった。また床面の踏圧と思われる硬い床面も限定されている。これらからは居住の気配は見当たらず、むしろ砥石を使用する作業の場の感が強い。

6) また2号住居への出入口は、明確に欠けるが堀上の柱穴からして、通例の地下り方向（ここでは北）ではなく、逆に掘り込みの最も大きい南側と推察される。これから入ると床面にやや浮いて踏み台状の半石が置かれてもいる。そして約7m南東に隣接する1号住居は約2倍の直径のやや大型プランで、出入口は地下り方向である北側となっていることから、この二棟はその出入口がほぼ同じレベルでやや斜交に向き合うこととなる。するとこの二棟は一家族のセツト建物とみることも可能であろう。

7) 2号住居は何故焼失したのか、一般に建物の焼失には次の三つの場合があろう。その一は屋内出火の失火、その二は付近からの延焼、その三は焼却である。この2号住居の場合、明確な答えは把握出来ないが、1号住居とは隣接していることからすると付近の原野火災の延焼は最も想定し難く、失火又は焼却の可能性が高いと考える。なお近接地域での発掘調査でも焼失住居の事例も数例<sup>①</sup>あるが、これらの場合は延焼されたものとするものは少なく特定もされていない。

## 2. 縄文土器の“土器溜り”について

旧川岸の自然堤防部付近でⅠ～Ⅲ群の土器溜り<sup>②</sup>を検出し、縄文土器のほとんどはここにおいて採取したが、この集積状況は自然のなせることか、或は人為的投棄の結果か、判断の難しいところである。20数年以前偶然発見の縄文時代埋甕の状況や位置からすると、それから約50mで約5m低い川岸まで緩やかな斜面のフラットな地形で、クロボク上の地表に縄文の生活が営まれていたと思われる。

墓地遺跡における土器溜りの発生成立について考えられることは二つの場合が考えられる。

その一つは次のようにある。

旧地形をこのようにして仮定すると、<sup>表3</sup> 河流は暮地のすぐ上流部で尾根裾を削りながら直進し、対岸の山塊を攻撃して鋭く折れ曲り流下していたのが、該地のすぐ下流部での攻撃斜面で大規模な崖崩れ等が発生し、一時的にダム湖状態になったとすると、理解しやすくなる。

水かさを増した停滞水によってクロボク土の台地が、波食を受け、漸次崖崩れが進行してクロボク土は洗い失われて土器や石器などが淀み部分に漂着沈積した。やがて流れを塞いだ崩落土が洗い流されるに及んで該地は再び水位に低台地となって現われ、かつての淀み部には流砂が厚く積っていた、と考えることができよう。つまり自然災害によるとみるものである。

その二は人為的な土器片等の堆積場であったと考えた場合である。流路に突出する自然堤防の脇の湾入地形を何らかの理由により選んで祭祀的意味をもって土偶をはじめ土器その他の生活用具等を斎き納めるところであった、とする考え方である。するとⅢ区の斜面に見られる配石列は、その区画を暗に示しているとも云えよう。川辺にはこの土器溜りがあり、約50mの山際の高まる位置には遺跡発見の端緒となった倒立並置壙甕があつて縄文生活の南北両端位置を示しているのではないかろうか。その後度々河川の増水があり、この生活の場であった川岸台地は地山まで浸食されて消滅し、土器溜りも、その上部あたりが失われた。そしてその後に流入砂で漸次埋没していったものではなかろうか。

以上のように二通りの解釈が可能であるが、そのどちらとも判断し難い状況である。

(杉原)

## 註

※1 手元の資料によると雲南3郡域での施主住居（弥生～古墳時代の堅穴式住居）は次のようである。

口焼田1号 1棟 季刊文化財36号 横田町

森V遺跡 3棟 2001 頼原町

垣ノ内遺跡 1棟 現地説明会資料（県埋蔵文化財調査センター）木次町

小丸遺跡 3+2棟？（県埋蔵文化財調査センター）2002 頼原町

※2 出雲南部域においてこれまで縄文時代の上器溜り遺構検出例は次のようである。

1. 宮田遺跡（三刀屋町）（概報）町教育委員会 坑壁に作る

2. 五明田遺跡（頼原町）1991 町教育委員会 ピット群

3. 半田遺跡（木次町）1997 町教育委員会 墓塚群

※3 主として次の文献を参考とした。

『土をどう教えるか』日本土壤肥料学会編 古今書院 1998

『山地の地形工学』日本応用地質学会編 2000

## 3. 主として縁帶文土器について

今回の発掘で出土した精製土器についてみると中心となる時期は、福岡KII～縁帶文成立期である布勢式の頃である。出土した土器で特徴的なのは、口縁上突起3ないしは4単位の土器で、

同一個体でも大きさ・形状が異なるものが数点見られることである。このような上器は、管見の限り近縁には類似例がなく、3単位波状口縁の突起飾りは関東の堀之内式以降全国的に波及するとされることから、当地にもさほど時差なくその影響を受けたものと思われる。東日本の深鉢は絶じてバケツ型、西日本は頸部が縫れる鉢型を呈すとされているが、当遺跡ではその両方がみられた。また、赤色顔料付着の土器がこの時期に集中するのも何を意味するのか判然としない。今後さらに比較検討すべき事項である。

#### 4. 繩文の特殊遺物について

近年増加する上偶の発見により、島根県内の総数は12体（8遺跡）となった。今回出土した3体とも板状の分銅型土偶で繩文後期前葉（福山KII～布勢式）のものである。3号土偶は従来の分銅型上偶とされるものに比べ、著しく大きく、その性格・用途は従来説明されていることと異なることも考えられる。今後の類例の増加を期待したい。また、この地は周知のとおり先年、幼児埋葬かとされた倒立並置埋葬の発見された地でもあり、西日本では希な、地母信仰を示す遺跡としてしられたところである。そして今回の土偶の発見により、当時の人々がいかに誕生、再生、自然の恵みを頼って暮らしていたのか繩文人たちの精神生活の一端を窺い知ることができよう。

（野津）

註

※1 日本第四紀学会／小野 昭／春成秀爾／小田静夫：『理解・日本人の人類遺跡』 東京大学出版会 1992

※2 杉原清一：「1 仁多町・咎地遺跡」『島根県埋蔵文化財調査報告 第Ⅳ集』 島根県教育委員会 昭和56

#### 5. 繩文遺跡の立地について

1990年代から神戸川・斐伊川中～上流域での遺跡調査が急速に進み、繩文遺跡も多数にのぼった。従来知られていた箇所も加えて、当該遺跡と年代観をほぼ同じとするところを挙げてみると次のようである。

神戸川沿いに 五明田 森 下山 門

三刀屋川及びその支流沿いに 横原 宮田 粟谷

斐伊川及びその支流沿いに 平田 川平 下鴨倉 幕地 林原

県境近く脊陵部に 龍ノ駒 上賀

山間深く 六重地内 大原

このように川沿いに多くの地点があり、山深くにも点在している。各遺跡の内容は大まかに川沿いにあるところは規模が大きく、年代幅もあり、拠点的であるのに対し、山間深くの場合はその範囲も狭く、一時的と思われる地点が多い。

ここでは当該地点を含む川沿いの各地点について気付いた点を挙げてみる。

・各地点を地図上にプロットすると、そのほとんどが、河川の屈曲する地点の瀬裏部か、或は

支流の合流点かのいずれかであり、流れの攻撃面の反対側に位置している。

- ・これらの遺跡の多くは厚い川砂層を地山面として営まれている。
- ・出土した土器のうち、磨消縄文には赤色塗彩品を含むところが半数近い地点（半田、五明田、下山、森）で認められている。
- ・所謂第2の道具である土偶（下山・門・五明田・林原・墓地）や埋甕（宮田・暮地）、或は石組み遺構等が検出されている。
- ・石器のうち、特に石錐の多いところが目につく。もっとも川辺であることから漁撈用とすれば当然であるのかも知れない。
- ・これらの地点で水場遺構とされるものは未だ確認されていないが、墓地遺跡の石列が、その一部とするならば、川岸近い選地の一因ともなろう。

このように出雲中～山間地域の後期縄文時代は川沿いにその拠点として最も多彩な展開をなしたものと思われる。

## IX むすび

暮地遺跡は縄文の埋甕遺構発見で周知され、さらにこの度はそれに続く川辺台地の調査である。検出した遺物・遺構から、河川の冠水・堆積を繰り返した大きく分けて3時期が認められた。

上層は流入した遺物で土馬や紡錘車などを含む奈良もしくは平安期の土器製品で、いずれも細片化していた。

中層流入土中には主として弥生中期の土器片を包含しており、竪穴住居2棟が冠水被害を受けながら辛うじて残存した。いずれも3本の土柱を基本とすることで他例とは異なり、うち1棟は焼失したものであったため、伏屋構造について多くの知見を得た。土器等は少数であるが鉄劍を模した石劍の残欠もあった。これらの年代は弥生中期に集中するものである。

下層層は縄文期であり、川辺の限られた部分の土器溜りが主で、流れの淀み状地形に土器片約45000点と石器約1000点が出土した。

特に縄文盛行期に集中し、3単位土器も認められ、また土偶3体や耳飾りなど“第二の道具”が注目される。これらはまた、かつて発見された埋甕とともに奥出雲後期縄文時代を一際鮮明にしてくれる成果といえよう。但し、遺構が川によって洗い去られていて明らかにできなかつたのは残念である。

(杉原・野津)



暮地遺跡の原風景 イメージ図



## 付編

### I 暮地遺跡（焼失住居跡）より出土木炭の<sup>14</sup>C年代測定

大阪府立大学先端科学研究所

イトソープ総合研究センター

川野瑛子・柴田せつ子

### II 暮地遺跡2号住居址の焼土の地磁気年代

島根大学総合理工学部

時枝克安

### III 焼失住居跡（S B II）出土炭化木材の樹種判定

杉原清一

### IV 土層標本の粒度分析

杉原清一



## 付編 I

### 暮地遺跡（焼失住居跡）より出土木炭の<sup>14</sup>C年代測定

大阪府立大学先端科学研究所

イトソープ総合研究センター

川野瑛子・柴田せつ子

#### 1. はじめに

島根県仁多町教育委員会より測定依頼を受けた、暮地遺跡より出土した木炭のメタノール液体シンチレーション法〔1, 2〕による<sup>14</sup>C年代測定結果について報告する。

#### 2. 原理と約束ごと

Libby 〔3〕によって確立されたこの測定法は、生きている生物体の<sup>14</sup>C濃度は大気中の<sup>14</sup>C濃度とほぼ等しく、その死後新たな<sup>14</sup>Cの取り込みは行われないので<sup>14</sup>Cはその半減期で減少する。したがって生物遺体中の<sup>14</sup>C濃度（A）と、その生物が生きていたときの<sup>14</sup>C濃度（A<sub>0</sub>）を測定すれば現代までに経過した年数（t）が次式から計算できる。

$$t = \frac{T_{1/2}}{0.693} \cdot \ln \frac{A_0}{A}$$

大気中<sup>14</sup>C濃度が経年、地域に関係なく一定であると言う仮定のもとに成立しているので、A<sub>0</sub>は、現在の自然界の<sup>14</sup>C濃度を測定すればよいことになる。現在、国際的な標準物質としてアメリカ標準局（NIST）からシウ酸 [SRM4990C] が準備されて、1982年の国際会議でその値の74.59%値をA.D. 1950年の（A<sub>0</sub>）の値に置き換えることが約束された。

#### 3. 測定方法

試料は炭化物とし燃焼させて生じる炭酸ガスをメタノールへ導く。このメタノールの<sup>14</sup>C放射能を液体シンチレーション法により測定し、前項の式より試料の年代を計算する。

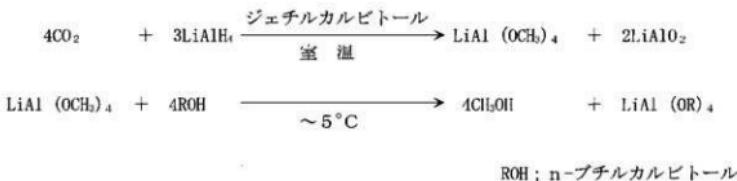
##### 1) 試料の前処理

- ①試料に付着している土などの夾雑物は除去する。試料は、小片に碎く
- ②1 N-塩酸で、数時間加熱処理
- ③マッフル電気炉を用いて、600°C、5時間処理し炭化物とした

## 2) メタノールの合成

炭化物試料を燃焼管中で燃焼させ炭酸ガス ( $\text{CO}_2$ ) とし、 $\text{LiAlH}_4$  と反応させメタノールを合成する。方法としては直接法と分離法がある。通常用いる直接法とは  $\text{CO}_2$  と  $\text{LiAlH}_4$  を直接反応させる方法である。分離法は試料量が少ない場合に適用する。今回は直接法を採用した。

$\text{CO}_2$  からメタノール合成の化学反応式は次のとおりである。合成後、2度蒸留を繰り返し分離精製を行った。



標準シュウ酸からメタノールの合成は、標準シュウ酸に硫酸酸性過マンガン酸カリ水溶液を滴下することにより  $\text{CO}_2$  を発生させ、 $\text{LiAlH}_4$  と反応させて合成した。

精製法は試料メタノールと同様の方法で行った。

## 3) 液シンチレーションカウンターによるメタノールの $^{14}\text{C}$ 放射能測定

パッカード社製のトライカーブ2260XL型を使用、測定領域は18.4~84.0KeVに設定。シンチレーターとしてはButyl-PBDの30g, bis-MSBの0.45gをキシレン1Lに溶かしたもの用いた。測定は試料カクテルとバックグランドカクテルを100分ずつ交互に行い、必要な時間繰り返し測定した。標準シュウ酸から合成したメタノール試料についても同じ方法により液シン測定を行った。

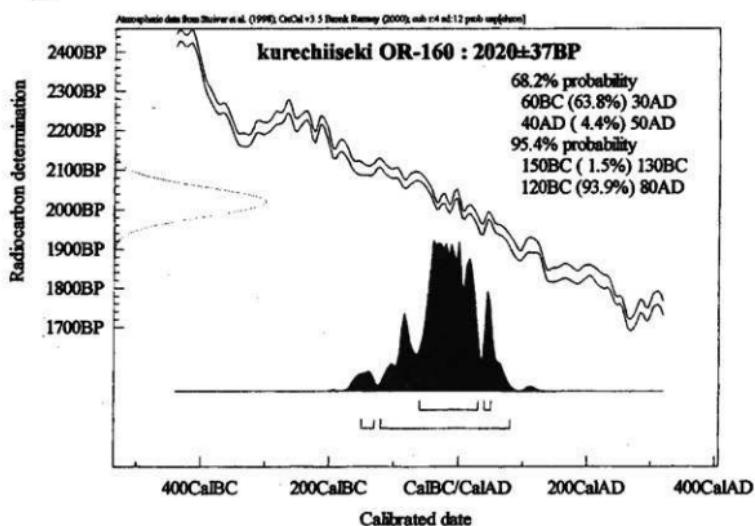
## 4. $^{14}\text{C}$ 年代値の算出と結果

前項の液シン測定で得られた標準シュウ酸、試料及びバックグランドの測定値 (dpm/gC) を用いて前述の式により試料の年代値を計算することができる。ここでNISTシュウ酸値A0は、 $13.576 \pm 0.020 \text{ dpm/gC}$  を用いた。計算に際して $^{14}\text{C}$  の半減期としてはLibbyの提唱している5568年を使用した。また、 $^{14}\text{C}$  年代値の表示法としては、1950年を起点としてこの年より幾年前であるかで示してあり、年代値の後にB.P.を添えるのが慣例である。

$^{14}\text{C}$  年代値には必ず測定誤差が伴い、その相対誤差1%は80年となる。誤差は、通常1標準誤差で表示、これは繰り返し測定を行った場合、測定値が誤差の範囲に入るものが全測定の68%であることを意味する。2標準誤差をとる場合は誤差の範囲は2倍になるが95%がその範囲に入る。

最後に<sup>14</sup>C年代値の結果を示す。また較正曲線（OxCal v3.5, 1998）[4]を用いて<sup>14</sup>C年代から暦年代（範囲と確率）を算出した。（図1）

図1



試料名	当方コード	<sup>14</sup> C年代値 y. BP	較正年代（暦年代）		
			範囲	確率	
暮地遺跡	OR-160	2020 ± 37 BP	60BC ~ 30AD (63.8%)		
			40AD ~ 50AD (4.4%)		

#### 参考文献

- [1] S. Shibata, E. Kawano, T. Nakabayashi, S. Kawamura and O. Yamada, Ann. Rep. Rad. Ctr. Osaka 27, 99 (1986/1987)
- [2] S. Shibata, E. Kawano and T. Nakabayashi, Radiocarbon 39(1) 79-87 (1997)
- [3] W.F. Libby, Radiocarbon Dating, 2nd Ed., the Univ. of Chicago Press, Chicago (1955)
- [4] OxCal v3.5 : Stuiver et al., Radiocarbon 40(3) 1041-1083 (1998)

## 付編Ⅱ

### 暮地遺跡2号住居址の焼土の地磁気年代

鳥根大学総合理工学部

時枝克安

#### 1 地磁気年代測定法の仕組

地磁気には伏角と偏角で決まる方向、および、強度の要素があるが、それらの要素の全てが変動している。この地磁気の変動は変化速度が速いものから遅いものまで様々な成分の和として表すことができるが、これらの成分の中でも、10年以上経過してはじめて変化したことが認識できるような緩慢な変動を地磁気永年変化と呼んでいる。地磁気年代法で時計の働きをするのは、地磁気の方向の永年変化であり、地磁気の方向と年代の関係を表す変動曲線を利用して、焼土の焼けた年代を過去の地磁気の方向から読みとろうとする。しかし、これが実現するためには、焼土が焼けたときの地磁気の方向が何かに記録されており、それを測定できなくては目的を果たせない。焼上の焼けたときの地磁気の方向は焼上の熱残留磁気として記録され保存されている。地磁気年代を求める手順を述べると、まず、焼土の熱残留磁気の測定によって、焼上の被熱時の地磁気の方向を求め、次に、焼土の存在する地域の地磁気永年変化曲線上で、求めた方向に近い点を決定し、その点の年代目盛りを読みとることになる。

地磁気のなかで、土壤、粘土、砂、岩石等が焼けると、これらは熱残留磁気を帯びる。熱残留磁気の扱い手は磁鉄鉱等の磁性粒子であり、熱残留磁気の方向は、焼けたときの地磁気の方向に一致し、しかも、磁性粒子のキュリー温度（磁鉄鉱では575°C）以上に再加熱されないかぎり非常に安定であり、数万年以上時間が経過しても変化しない。焼土がキュリー温度以上に再加熱されたときには、それまで保持されていた残留磁気は完全に消滅し、その代わり、再加熱時の地磁気の方向を向いた新しい残留磁気が獲得される。つまり、焼土は最終焼成時の地磁気の方向を詳しく記憶している。それゆえ、年代既知の焼土の熱残留磁気のデータを蓄積して、あらかじめ、過去の地磁気の方向が時間とともにどのように変化したかを示すグラフを作成しておけば、このグラフを「時計」の目盛りとして、焼土の最終焼成年代を推定できる。地磁気年代法の「時計」では地磁気の方向が「針」に相当し、焼上の熱残留磁気が焼成時の「針」の位置を記憶している。日本では、西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線が広岡によってかなり詳しく測定されているので、ここで説明した方法が焼土の簡便な年代測定法として実用化されている。地磁気年代法の詳細については広岡、および、中島等による解説<sup>1,2)</sup>が参考になる。

## 2 地磁気年代測定法の問題点

第一に、地磁気の方向は時間だけでなく場所によっても変化するので、地域によっては、その場所の標準曲線の形が西南日本のものからかなり相違していることが挙げられる。厳密に言えば、ある焼土の地磁気年代を求めるには、焼土のある地域の標準曲線を使用しなければならない。相違が小さいときには西南日本の標準曲線を代用できるが、相違が大きいときにはその地域特有の標準曲線を決定し、この曲線と焼土の残留磁気の方向を比較する必要がある。

第二に、地磁気年代測定法は地磁気変動という物理現象を利用してるので、地磁気年代は土器編年によらずと思われるがちであるが、これは誤解であり、地磁気年代と土器編年の間に密接な関係がある。すなわち、少數の年代定点をのぞくと、標準曲線上のほとんどの年代目盛りは土器編年体系を参照して決められている。それゆえ、年代定点に近い地磁気年代には問題がないが、年代定点から遠く離れた地磁気年代は土器編年の影響を強く受けしており、もし、土器編年に改訂があれば、地磁気年代も訂正しなければならない。年代定点の数が増加すると、地磁気年代はこのような相互依存から独立できるが、現状では年代定点が少ないのでやむをえない。しかし、地磁気年代測定法は、地磁気を媒介とする対比のおかげで、焼土跡に遺物がない場合でも有効である点、相互に隔絶した土器編年を対比できる点で独自の優れた性格をもっている。

## 3. 遺構と試料

暮地遺跡（島根県仁多町）の2号住居址では、直径約3.6mの円形のプランの中央にある直径約0.45mの円形に近い窪みの周間に焼土が分布しており、この焼土の成因は住居の消失によるものと推定されている。焼土の焼成度は低く、窪みの内部は焼けていない。この住居址の内部から、土器1片と砥石2片が出土しており、土器の年代は弥生時代中期（BCO頃）と推定されている。

窪みの周囲の焼土から、赤変の色合いの濃いところを選んで、25ヶの定方位試料を採取した。試料採取法としては、整形した焼土塊に樹脂製ケース（24x24x24mm）を被せて隙間を石膏で充填し、ケース上面の走行と傾斜をクリノコンパスで測定する仕方をとっている。

## 4. 測定結果

試料の自然残留磁気をスピナー磁力計(Schonstedt社 Model SSM-1A)で測定した。図1に示すように、焼上の低焼成度を反映して、自然残留磁気の強度は $5 \times 10^{-3}$ emu/g以下のものが90%以上を占めている。この強度レベルは一般的に焼上の残留磁気強度としてはかなり弱いレベルに相当する。図2aの自然残留磁気の方向を見ると、全体に分散しており、部分的に揃っているデータは認められない。そこで、残留磁気の方向の集中度を高めるために交流消磁を行った。交流消磁というのは、試料を交流磁場中で回転させながら、磁場強度を適当な設定値から零になるまで滑らかに減少させて、磁場の設定値よりも弱い抗磁力をもつ磁気成分を消去する方法である。残留磁気の強度が弱いので、はじめに、弱い消磁磁場を選んで、全ての試料に対して、交流

消磁(2mT)と交流消磁(4mT)を行い、次に、交流消磁(4mT)の結果の中から残磁気の方向が比較的よく揃つた15ヶの試料を選び交流消磁(10mT)を行った。なお、括弧内の数値は消磁場を示している。この結果、残磁気の強度が消磁をしないときの半分以下に減少し、残磁気の方向がかなりまとまった。強度の半減から2次的磁化による汚染がほとんど除去されたと考えて良い。以上の結果をふまえて、図2dの交流消磁(10mT)の結果から小円内のさらによく揃つているデータのみを選んで、それらを元にして地磁気年代を求めるることにする。小円内のデータから計算した残磁気の平均方向と誤差の目安となる数値は次のようになる。

図1

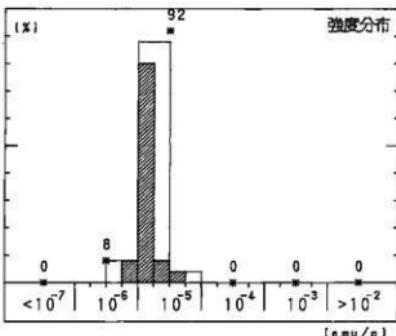


図1 墓地遺跡の2号住居址の焼土面の自然残磁気強度の分布

図2

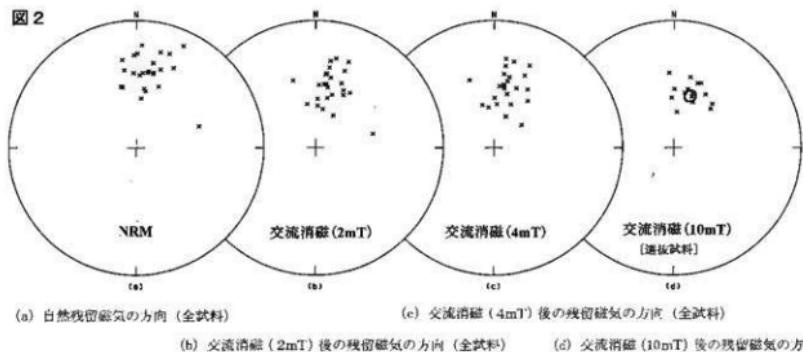


図2 墓地遺跡の2号住居址の焼土面の残磁気の方向

交流消磁(4mT)で残磁気の方向がまとまる15ヶの試料について実施した。小円内のデータを元にして地磁気年代を求める。

墓地遺跡の2号住居址の焼土の残磁気の平均方向と誤差の目安となる数値

平均伏角	平均偏角	Fisherの信頼度係数	95% 誤差角	採用試料数/採取試料数
54.02度	17.11度E	479	3.50	5/15

## 5. 地磁気年代の推定

図3

偏角

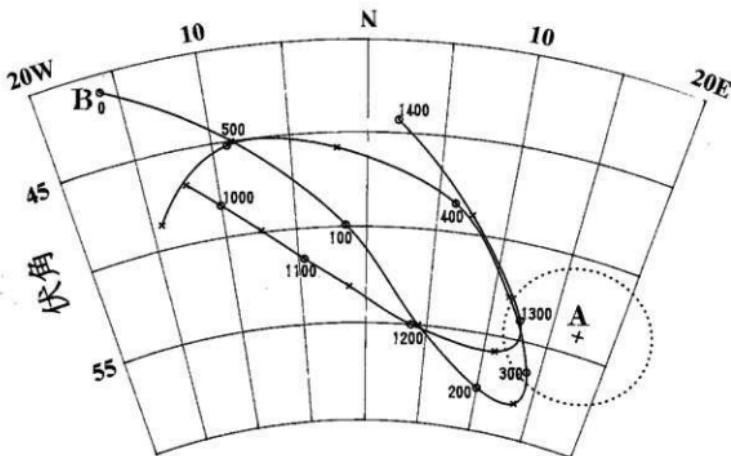


図3 墓地遺跡の2号住居址の焼土面の残留磁気の平均方向（+印）と誤差の範囲

（点線の楕円）、および、広岡による西南日本の地磁気永年変化曲線の一部

A : 2号住居址の焼土面の残留磁気の平均方向

B : BC0年における地磁気の方向

図3は墓地遺跡の2号住居址の焼土面の残留磁気の平均方向（+印）と誤差の範囲（点線の楕円）および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線<sup>37)</sup>である。地磁気年代を求めるには、残留磁気の平均方向に近い点を永年変化曲線上に求めて、その点の年代を読みとる。地磁気永年変化曲線が狭い範囲で重なり合っているために、300年頃と1300頃の複数の地磁気年代が可能となるが、弥生時代の土器が出土しているので、300年頃の年代値を選ぶこととする。このようにして得られた墓地遺跡の2号住居址の焼土面の地磁気年代値はAD320±50となる。

墓地遺跡の2号住居址の焼土面の地磁気年代

AD320±50

## 6. 考察：土器年代と地磁気年代の大きい差

住居址から出土した土器はBC0頃と推定されており、一方、地磁気年代はAD320±50となった。両者の間には約300年という大きい開きがある。図3を見ると、焼土の残留磁気の測定結果(A)はBC0頃の地磁気の方向(B)に比べて、伏角が約13度も浅く、偏角は約33度も西偏しており、AとBの方向は角度にして30度以上も異なっている。

最近、樹木の遺物の年輪年代の成果に基づいて、弥生時代の年代目盛りが約100年古い方へずれることが主張されている。この提案を受け入れると地磁気年代は約100年古くなる。しかし、依然として、両年代には約200年という大きい差が残ることになる。

残留磁気の方向が地磁気の方向から逸れる原因としては、地盤と遺構の傾き、残留磁気の汚染があるが、住居址の地盤は安定しており、また、交流消磁(10mT)によって残留磁気の汚染はほとんど除去されている。以上の考察により、ここで得た地磁気年代は住居址の火災の年代を正しく示しており、住居址から出土した土器の年代との不一致は別に原因があると考えている。

- 註(1)広岡公夫(1995) 「考古資料分析法」、考古学ライブラリー、65、  
川口勇、齊藤努編、ニュー・サイエンス社、100-101
- (2)中島正志、夏原信義 「考古地磁気年代推定法」考古学ライブラリー9  
ニュー・サイエンス社
- (3)広岡公夫(1978) 考古地磁気および第四紀古地磁気の最近の動向  
第4紀研究 15、200-203

### 付編Ⅲ

## 焼失住居跡（S B II）出土炭化木材の樹種判定

杉 原 清 一

### 1. 試料

暮地遺跡のうち弥生時代の焼失住居内に残存していた炭化木材について、その判定を試みた。

観察試料は、図のように堅穴住居内の床面近くに焼け落ちた木材片等20点、側壁面にそってたてられた壁柱片11点、床面ほぼ中央の炉状構造内からの採取品1点の合計32点である。但しそのうちには同一個体から複数を採取したものもある。

### 2. 方法

樹種の判定は一般に、木材の小口断面・柾目・板目及び樹皮によって総合的に判定するものであるが、木炭や炭化材はその観察断面を整えることが容易でないことから、簡易な方法として不完全ではあるが破断小口面の観察のみによることが多い。

今回も炭片であることから、この小口破断面の観察のみによって行った。なお比較には現生の試料を用いた。

### 3. 結果

各試料について小口面の拡大写真は図版のようである。

このうち1点は草本のススキの茎であるが、それ以外はすべて広葉樹材である。

広葉樹はそれぞれ固有の導管配列のパターンを有するもので、観察結果は次表のようである。

出土炭化木材の観察結果

区分		観察	試料No.1~13	①~⑦	K1~12
草木	雄管束の配列と柔細胞で構成する幹と、 その葉鞘	カヤ(ススキ) No.9, 13			K-9
落葉 広葉 樹	孔隙内導管は、放射組織のうち少 なく、孔隙外、數ははなはだ広く、 の導管は放射 状に配列し、 分岐するもの もある。	クヌギ No.3, 10 アベマキ No.4, 6, 8 クリ No.1, 5, 7 ノグルミ (ノブノキ) No.2, 11, 12	No.3, 10 No.4, 6, 8 No.1, 5, 7 No.2, 11, 12	③, ⑤ ④ ① ②, ⑥, ⑦炉内	K-6 K-1, 8 K-3, 4, 5, 7 K-10, 11, 12

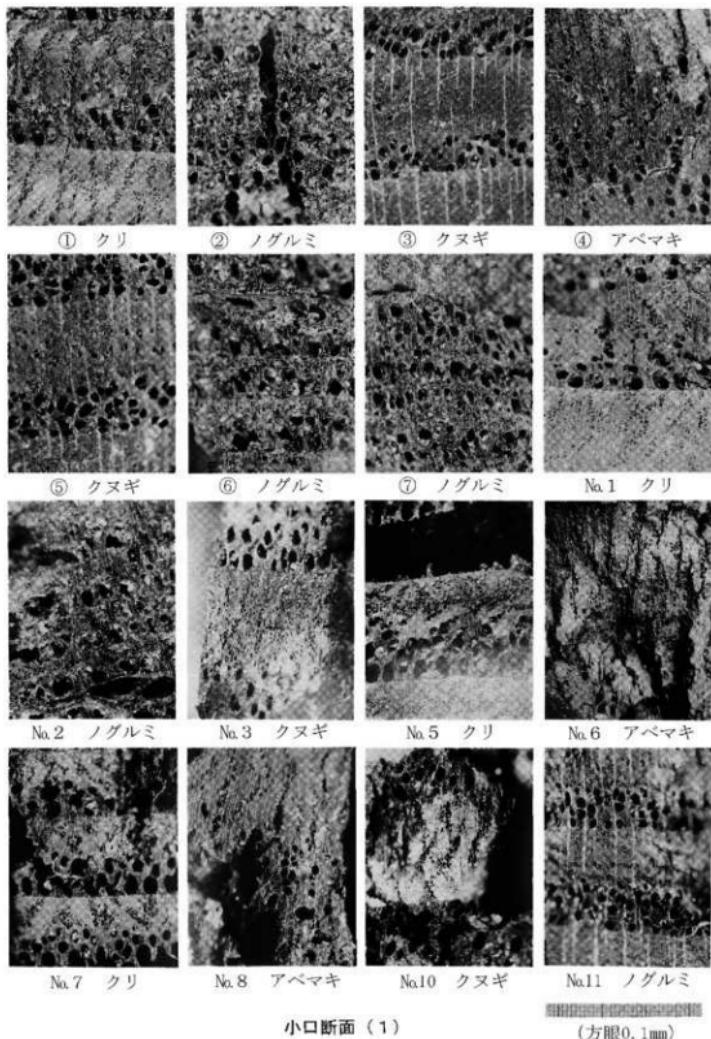
試料番号

No.1~No.13……床面に接した主として太い材

①~⑦……床に接した細片

K1~K12……壁面に沿って立てられた杭材

写真にはNo.9、K9(カヤ)は除いた。



#### 4. むすび

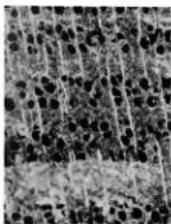
これらはすべて、当該遺跡の付近に現在も普通に見られる樹種や草生である。特にこれらの樹種木材は概ね割り易く、しかも強度のあるもので、今日でも建材や杭材等に利用されている。またススキは近代まで屋根や簡易な屋材として草葺き小屋作りに用いた素材である。



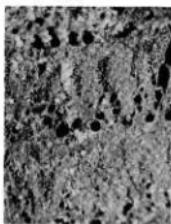
No.13 ススキの茎



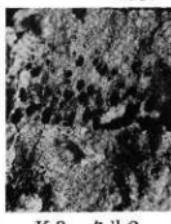
比較 ススキ



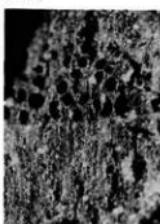
No.12 ノグルミ



SB-2 K1 アベマキ



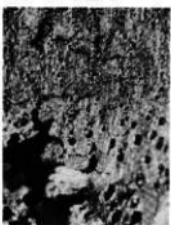
K3 クリ?



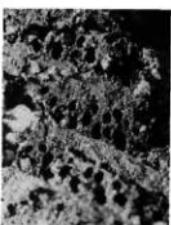
K4 クリ?



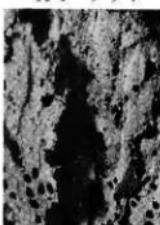
K5 クリ



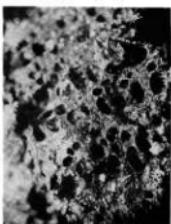
K6 クスギ



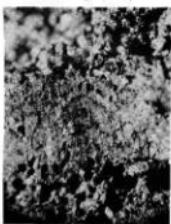
K7 クリ



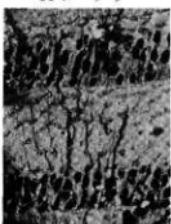
K8 アベマキ



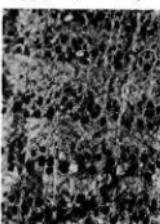
K10 ノグルミ



K11 ノグルミ



中央炉内 ノグルミ



K12 ノグルミ

小口断面（2）

(方眼0.1mm)

参考文献

貴島・他：『原色木材大図鑑』 保育社 1980

林・他：『原色樹木大図鑑』 北隆館 1999

印東弘玄：『植物の実験』 岩崎書店1962

## 付編IV

## 土層標本の粒度分析

杉原清一

暮地遺跡の標準断面として採取した第1～11第層の土壤試料について、その成因解明の一助とすべく、簡易な粒度分析を行い土性判定を試みた。

## 1. 試料：現水田面から順次下って、発掘調査の最下面で地山とした上層まで、試料1～10として用いた。(セクション図・参照)

## 2. 方法：採取した試料を風乾し、6mm以上の細礫を除いて供試土とし、ふるいと水中沈降法によって仮りに次の区分とし、風乾後秤量して比を求めた。なお、クロボク質などの腐殖量はH2O2処理による損失量とした。

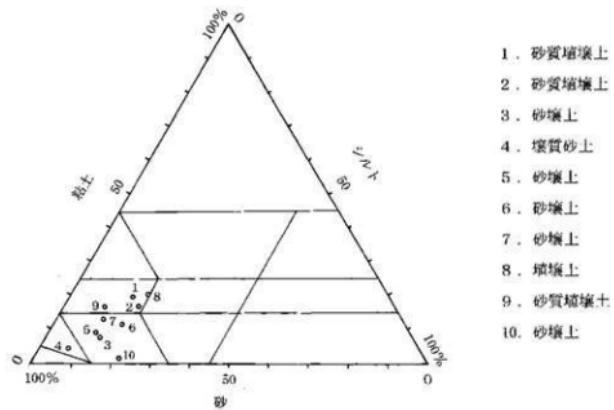
	ふるい					沈降法	差計算	H2O2	
粒径 <sup>1)</sup>	6.0	4.0	1.7	0.85	0.425	0.18	0.04(42")	0.01(26")	以下
区 分	細礫	粗砂	中～細砂	シルト	粘土				腐殖

## 3. 結果：結果は重量比(%)で示し、その土性区分名を記す

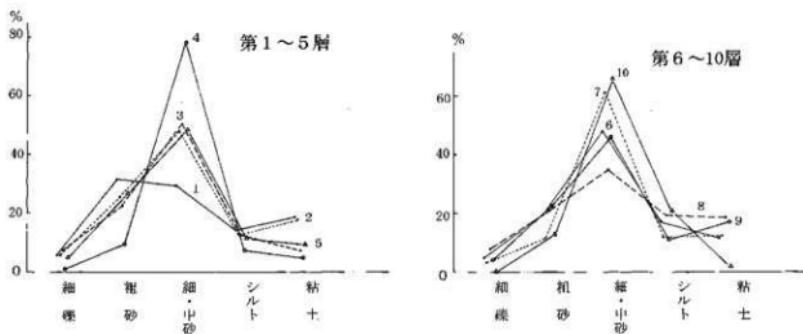
粒径 mm 試料No.	~4.0	~1.7	~0.85 ~0.425	~0.18	~0.04	~0.01	0.01~	上性
1	0.5	5.3	13.9	17.7	13.0	16.3	14.1	18.4 砂質埴壌土
2	0	5.9	6.5	9.1	19.2	28.8	12.5	18.0 //
3	0.3	6.8	9.1	13.6	24.3	26.0	12.8	7.1 砂壌土
4	0	0.7	2.5	6.7	33.5	44.5	7.3	4.8 壤質砂土
5	0.7	4.0	10.3	16.2	24.7	23.9	11.3	8.9 砂壌土
6	0.6	4.2	6.4	12.9	27.5	20.3	16.8	11.3 //
7	0	3.0	4.7	6.7	25.5	35.7	11.8	12.6 //
8	0	7.4	9.4	11.4	15.6	18.8	19.0	18.4 塘壌土
9	0	3.4	5.8	17.0	34.9	11.0	11.1	16.8 砂質埴壌土
10	0	0.1	3.8	8.9	16.7	48.6	20.3	1.6 砂壌土

## 4. 所見：a. 試料1・2・3は水田耕作に関与する土層で攪乱を受けたもの

- b. 試料4は河川により淘汰された微細砂の流入
- c. 試料6・7・8は極く緩やかな水流により堆積したクロボク質土
- d. 試料5は試料4と試料6との中間的なもの



付図 IV-1 土の三相図



付図 IV-2 土層別の構成



仁多・くれ暮ち地遺跡

島根県埋蔵文化財調査報告書

第Ⅷ集

昭和56年3月

島根県教育委員会



# 1 仁多・暮地遺跡

## I 位置と環境

この遺跡は斐伊川上流の島根県仁多郡仁多町三成字墓地にあり、三成の町並みから斐伊川に沿った国道314号を下った地点で、南の山塊から突出した尾根の裾にあり、それを迂回して流れる斐伊川との間の狭い段丘状地形に拓かれた耕地の山寄りの部分にあたり、川からの比高約10mの耕土層の下に遺存した。標高は224mである。

この附近には縄文時代以降の遺跡が知られており、特に仁多郡は縄文時代中～後期の遺跡が中国地方山間部としては密に分布している地帯である。特に本遺跡から西方約4kmの地点では、縄文時代前期～後期の下鳴倉遺跡が知られ、北西約10kmには昨年発掘調査で倒立状埋甕2体を検出した宮田遺跡（三刀屋町）がある。宮田遺跡は本遺跡との類似性が強いのが特徴的である。また南15kmの広島県境近くには縄文時代後期の玉貫遺跡があり、東方17～18kmの鳥取県境近く横田町の竹崎遺跡や竜の駒遺跡も縄文時代後期のものとして知られているところである。

このように比較的縄文時代遺跡の少ない島根県下にあって、山間の縄文遺跡が濃密に分布している地帯であると云える。



第1図 墓地遺跡と周辺の主要遺跡 1. 墓地遺跡 2. 下鳴倉遺跡 3. 三沢城跡

## II 調査に至った経緯

昭和55年5月15日夕刻、農家の主婦恩出クニエ氏が国道沿いの畑で作業中に土器を発見、統いて同家族よりほぼ完形の大型土器2体が検出されたので、町教育委員会へ届出があった。同21口町教育委員会教育長藤原成章氏、町立仁多中学校教諭松浦昇氏らが現地を下見し、翌22日島根県埋蔵文化財調査員杉原清一が連絡により現地にて縄文時代の倒立状體であることを確認した。

町教育委員会は直ちに島根県教育委員会へ電話連絡するとともに現場は埋め戻して一時保存を行った。

これにより町教育委員会は、現場が当面開発工事等の計画もないことから発見した土器を取り上げることを中心とした局部的な発掘調査を行うこととし、町教育委員会が主体となり杉原清一が調査を担当し、島根県埋蔵文化財調査員蓮岡法暉氏、島根県教育委員会文化課埋蔵文化財係長勝部昭氏、同主事西尾克己氏、同村尾秀信氏のほか、町立仁多中学校教諭松浦昇氏、同町文化財専門委員藤原実氏らの協力を得て昭和55年5月31日及び6月1日の2日間に発掘調査を実施した。

またこの間、仁多町教育委員会、耕作者の恩田清男氏、倉内勝氏等から格別の援助を受けた。

出土遺物は仁多町中央公民館に搬入し、処理作業を行った。この間7月12日は広島大学文学部潮見浩教授の来訪御指導を得ることができた。

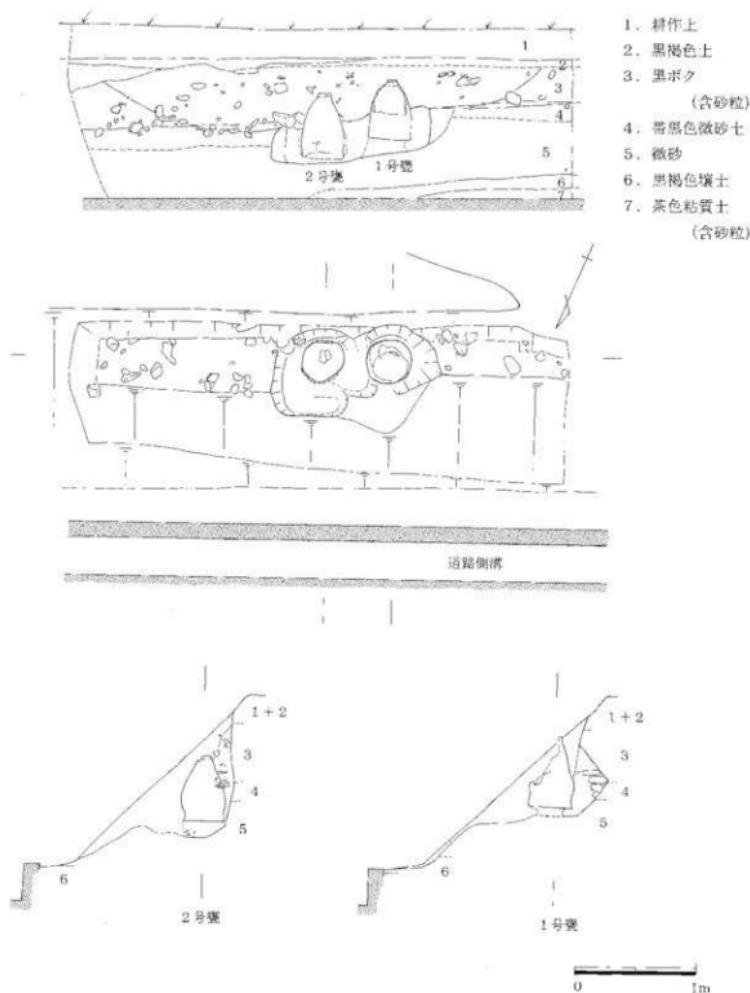
## III 遺 構

本調査は局部的なもので、発見された埋設體を中心に4m×1mの範囲で行った。

この部分の土層層序は、耕作土の下に石礫と砂粒を含む火山灰質土40~50cmがあり、その下は河川による微砂質土の単純層が約60cmである。

遺構の掘り方は二段に掘り込まれ、先ず火山灰質黒色土層黒墨土に、上巾3.5m下巾2.4m深さ40cmで下層の微砂層に達する掘り込みが推定され全体に土層は黒色であるため明瞭ではない。

この掘り込みの中央からやや西寄りの部分で微砂質土に直径約50cm深さ40cmと30cmのほど東西に並ぶ埋設用ピットを掘り込み、それぞれ東側に1号體、西側に2号體を倒立埋設している。黒墨層への掘り込み部には石礫が認められ、また各體の周囲にも石礫や土器片を検出した。



埋 葬 出 土 状 況

かっての地表面は、この部分では耕地が拓れていたため確認出来なかったが、掘り込み部で検出した土器は、かって営まれていた住居跡等に伴うものではないと思われる。

1号壺体は2号壺体より口縁部で15cm、底部で10cm浅い位置にあり、両者の間隔は中心距離54cmで器壁間が17cmで並置されていた。

伏せられた壺の口縁は掘り方底から1号壺で6～7cm 2号壺で12cm上方の位置にあり、これらピット直下の地山と同じ微砂質土であるが黒ずんでおり、特に2号壺直下のピット底面近くには土器片が投入されていた。

1号壺は底部を破碎し、その破片は一部壺体に、あとは壺体周辺の埋め戻し土中に混在した。壺体内には口縁から11cm上は地山と同じ微砂質土で黒ずんでおり、花崗岩の玉状石と土器片が混入していた。その上方は黒色火山灰質土が流入充満しており、石礫や1号壺を破碎した底部破片を含む土器片はその下面に混在していた。

2号壺は底部に直径1.6cmの外面から打ち欠いた穿孔が施されており、口縁下12cmのピット底に3片の土器片の混入を認め、口縁から17cm上の肩部あたりまでは地山土と同じ微砂土でかなり黒ずんでおり、土器のほかに微量の木炭末と安山岩質の剝片1個が混在した。その上には、わずかな黒色土が流入し、そこに2号壺体の底部破片等が落下していた。口縁から20cmの胴部以上は空洞であり、器壁内面は有機物状の汚泥が付着していた。

#### IV 遺 物

1号及び2号壺体のほかに、この壺体周辺の埋め戻し土中に混在した土器片と壺体内に存在した土器片があり、また壺体の土については標本採取し、分析結果については横田高等学校教諭岩田整氏から寄稿いただいた。

##### 1) 1号壺

頭部がわずかにくびれて口縁がやゝ開き気味に立ち上る平底大型の深鉢形で、粗面無文の粗製土器である。口径36.8cm～37.7cmとやゝいびつで器高47.7cm、頭部径33.6cm、最大胴径35.9cmでやゝ高く、底部へゆるやかにカーブし、平底直径は11.4cmと推定される。器壁は0.7～1.0cmの厚さで比較的均質で、胎土には砂粒を含むがよく締り、茶褐色の基調で焼成は良い。また5段に輪積みの手法が認められる。

内面は横方向にヘラで調整したのち入念に横撫でして仕上げてあり、外表面は全面にわたってヘラ削りの粗面で、横またはやゝ斜行し、腹部、胴部、頭部で区分される。

また内面下腹部と外表面～口縁部にそれぞれ煤状の付着物が認められる。

底部は1.5～1.2cmの厚さの平底で、底面から1.0～1.5cmあたりは指圧してアクセントが

あり、底央部はわずかに凹入り、底面には粗砂粒が付着し、また圧痕も残っていて製作方法がうかがわれる。

なお、この甕体は近時の国道拡幅工事により下腹部から底部の半分を欠失しているが、そのほかは完形である。

## 2) 2号甕

やゝ粗製無文の平底大型深鉢形で頭部は強く締り短く開く口縁で、口径37.0～34.5cmと歪みがあり、口縁も平らでない。

器高53.2cm、頭部径32.2cm、底部径10.2cmで直径1.6cmの打ち欠きによる穿孔が施されており、最大胴径35.8cmの頭部の直下に位置し腹部のふくらみはほとんどなく、ゆるくカーブして底部に至る。

器壁は、口縁部が1.0～1.1cmでやゝ厚目で、肩～胴部が0.6～0.7cmで最も薄く、腹部の0.8～0.9cmへとわずかに厚くなるが極めて均質であり、底部は1.4cm厚さの平板状で、腹部との界に指圧して横撫したアクセントがある。また5段の輪積み手法がうかがわれる。

胎土には砂粒を多く含む、やゝ脂く黄褐色を呈している。

器壁内面は、胴部以下は横方向のヘラ調整のち横撫で仕上げ、内傾する肩部では横方向のヘラ調整のまま、口縁部は入念な横撫で仕上げとなっている。

外面は、頭部以下は斜行するヘラ調整のちさらにもう一度ヘラ調整で仕上げてあり、口縁部は横方向にヘラ調整で入念に仕上げている。

また、下腹部内面と胴～口縁部外間に多量の煤が付着している。

## 3) 粗面無文土器片

採取した土器片は遺跡発見時に搅乱された部分に多くあり、その大部分は埋設された甕体の胴部あたりのレベルで、特に2号甕体をとり囲む部分に集中していたとの事である。

この搅乱土中の繩文土器155片中、磨研無文土器3片の外はすべて粗面無文土器片であり、調査時採取の33片と2つの甕体内出土片33片も、磨研土器片1つを除いて他はすべて粗面無文片であり、これらの多くは底部穿孔された部分からの流入と見られる。

これらの粗面無文土器片は胎土や焼成から複数の甕形土器の破片と思われるが、極めて類似している。外面は荒いタッチの横方向ヘラ調整痕、内面は指頭、掌等による横撫で仕上げで、直立気味の口縁はその端部を平頭に仕上げ、口縁部分には特に煤の付着が目立つ。底部片は1個であるが、直径9.0cmの平底で底面に粗砂粒が付着し、またその圧痕もあり、底面から1cmあたりの部位は指頭等で押圧して腹部との間にアクセントがあり、1号及び2号甕体のそれに類似するものである。

## 4) 磨形無文土器片

上記擾乱土中から採取した浅鉢形土器の胴部分と思われる3片と、2号甕体内で口縁から2cmの部位にあった口縁小片1個である。腹部破片3片は同一個体のものと見られ、内面赤橙色で横撫で仕上げ、外面は黄赤色で黒ずんだ部分のあるヘラ磨き仕上げで厚さは0.5cmである。2号甕内出土の口縁片は赤褐色の細片であり、器形は不明であるがおそらく浅鉢状のものであろう。内面は横撫で仕上げ、外面はヘラ磨き痕があり、口唇は平らに押しつぶされた上に丸味のある刻み目を付けている。

## 5) 刻 片

安山岩質で1.2cmの細刻片で、1号甕体内から出土した。

## V 小 結

局部的な発掘調査ではあるが、次の諸点を指摘し得る。

- 1) 山裾に位置し、北前方に河川があり、それによる微砂質の堆積層とその上に火山灰質黒色土を置くところで、微砂質土に掘り込まれたピットに倒立状の埋設甕2体が並置されている。甕体は粗製無文の大型品である。
- 2) 埋設された甕2体は正しく倒立しており底部破碎或は穿孔がなされている。
- 3) 埋設ピットは住居跡等に伴うものではなく、河川へ向って緩斜する自然地形に位置するものようで、独立の遺構とみられる。
- 4) この埋設には破碎した土器片と自然礫を主体周囲に配置して埋め戻しており、その破碎又は穿孔した底部は旧地表に近い深さに設置している。
- 5) 2つの甕体内には玉状石と土器片が少数あり、当初封入された11~17cm厚の土中に混在する。
- 6) 遺構のこれら諸状況は呪術を伴う幼児埋葬か、或はそれに近似する様相を示すもので、関東を中心とする住居跡内の埋甕風習に近く、また九州の繩文晩期に見られる甕棺にも通ずる面もあるが、2体並置、倒立状、底部穿孔等、或は単立遺構と見られること、そのほか立地から遺構状況のすべてが飯石郡三刀屋町の宮田遺跡に酷似するものである。
- 7) 出土土器の多くは粗製の粗面無文土器で精製品が極めて少なくまた細片である特徴を示し、編年上のランク付けに弱いが、褐色磨研の破片と粗製品に二枚貝調整が見当らないこと及び甕体の様相などから繩文時代後期末葉のころと判定したい。
- 8) 三刀屋町宮田遺跡の中国地方初見から一年ならずしての本例の発見は、今後この地方の山地沿いに類例を加えることの可能性を強く示すもので、西日本における繩文時代の特異な精神文化の様相を知る貴重な遺跡であり未調査部分を含めてその取扱いには慎重な配慮が必要である。

(杉原清一)

## 特別寄稿

## 甕体内及び甕体外採取土のリン分濃度比較

島根県立横田高等学校教諭 岩 田 整

墓地遺跡で検出された倒立埋甕及び甕体外で採取された土中のリン分析結果は下記のとおりである。

## 試 料

甕体外資料は、甕体後方の黒ボク及び帶黑色微砂土層から採取し、上層からB<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、B<sub>3</sub>と称した。

甕体内資料は次のとおりである。

資料番号	1	2	3	4	5	6
1号甕体	口縁より下 -4~0cm	口縁より上 0~+4cm	口縁より上 2~6cm	口縁より上 6~8cm	口縁より上 9~11cm	口縁より上 14~17cm
2号甕体	口縁より下 -6~-8cm	頭部より下 -1~-8cm	頭部より上 -7~+2cm			

## 分析方法

試料4gをとり6[N]HCl 30mlと濃硝酸40mlを加え30分間加熱をし、リン酸分を遊離した後濾過し濾液を100mlに希釈した。

この希釈した液を5mlを取りアンモニア水で弱アルカリ性としたのち、濃硝酸15ml水30ml硝酸アンモニウム5gモリブデン酸アンモニウム溶液30mlを加え湯浴土で60°C、1時間放置し沈でんを濾別する。

この沈でんを、アンモニア水で溶解し2[N]HClで中和し、塩化スズ溶液を1ml加え全容を100mlにして30分後に色の比較を行った。

## 結果

本校には適当な比色の器具がなかったこと、また灰色の沈でん物が共存したこともあり、肉眼で比較をしてみた。

資料	甕体外			1号甕体						2号甕体		
	B <sub>1</sub>	B <sub>2</sub>	B <sub>3</sub>	1	2	3	4	5	6	1	2	3
色の濃さ	10	9	10	6	3	2	0	4	4	4	8	10

リン分の含有量はB<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、B<sub>3</sub>が特に多い。1号甕体のリン分は、1が特に多いが他は少ない。2号甕のリン分は、2・3が多く、B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、B<sub>3</sub>とあまり変りがない。

## 考察

2号かめは外部からの土の流入があったと思われる、酸処理残渣はほとんど砂であった。処理液は赤褐色をしていたが何を含むかは検討していない。

昭和五十五年発見時の暮地遺跡



遠景



埋納状況



2号壺



1号壺

# 図 版



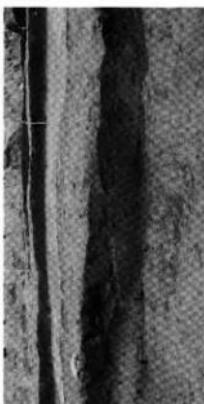
調査前全景と土層



調査前全景 (南山手から)



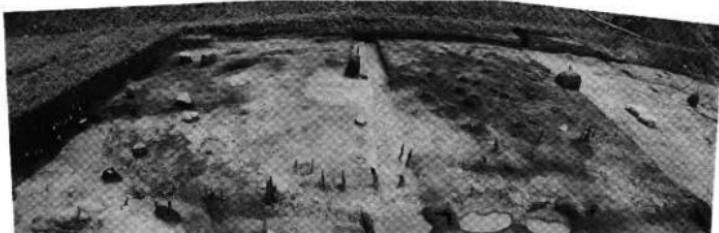
12ライン標準土層



SB2の切り込み (17ライン)

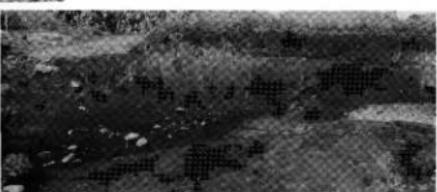


16ライン火山灰層



2次調査区

→  
12ライン土層

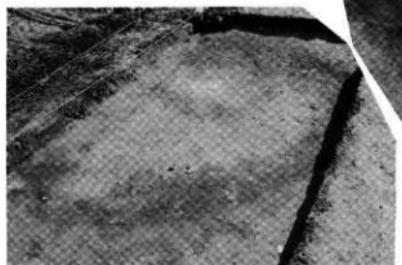


1次・2次調査区

1号住居址



作業状況（東から）



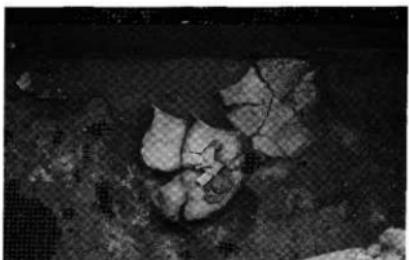
プラン検出時（北から）



床面の土器検出（南東部分）



完掘状況（南東から）



床面に転がる甕





掘り方プラン検出（北から）



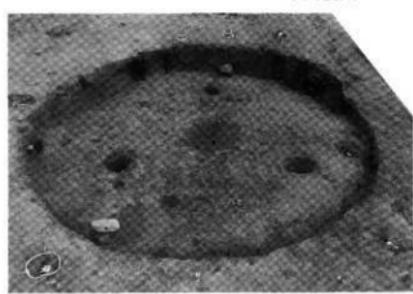
焼失状況検出  
(東から)



床面検出



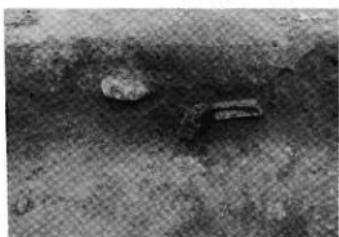
土器と板材検出



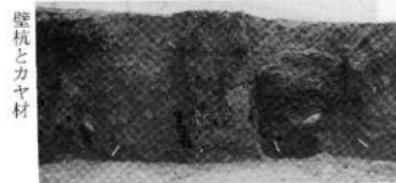
完堀状況（北から）



側壁杭の状況  
(南西壁面)



と石検出



壁杭とカヤ材

2号住居址



10E・11E



10E



12E F



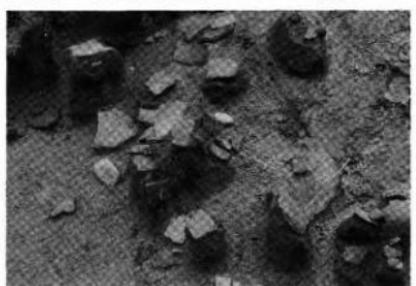
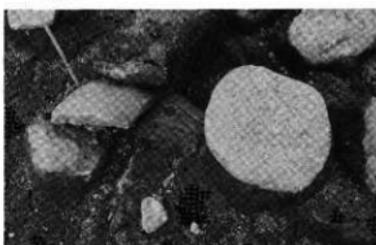
11E



11E



11E



16E



9E

遺物の出土状況